
あたしの中の ア・イ・ツ

和貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あたしの中の ア・イ・ツ

【Zコード】

N4764I

【作者名】

和 貴

【あらすじ】

隣に住む同級生の秋庭慶は、あたしの幼馴染。ずっと一緒にいたからか、お互いに『異性』を意識した事が無かつた。だけど、慶を意識している女の子達の出現で、あたしは慶と少し距離を置いてしまふようになった。そんなある日、慶のお母さんが入院してしまい、あたしは放つて置けなくなつて……

第1話 誤解からのお盆ごい（前書き）

他サイトで公開中の『STEP-1』（完結済）の彼女視点版です。

第1話 課解からの出発

> . 2 5 6 0 — 3 1 6 <

小学生最後のクラス替えが行われて、まだ日が浅かつた二組の教室。クラス全員の顔と名前が一致していなかつたあたしは、一人の女の子から声を掛けられた。

「ねえ、あんたさあ『アキバ系』ん家の隣に住んでいるの？」

「え？」

五時限目の授業が終わつて、国語の教科書とノートを赤いランドセルへ片付けていると、クラスの女子二人が遣つて来て、あたしに向かつてそう言つたのだ。

「あんたさあ、いつもそいつと一緒に帰つてんの？ つーか、付き合つてるとか？」

「はあ？」

初対面いきなりの失礼極まりない暴言に、かちんと来る。

『付き合つてる』……つて、なに？

知らない女の子達から、あたしはそんな眼で見られていたの？

思いもよらなかつたその言葉に、あたしはカツと身体が熱くなる。彼女の失礼な言葉は聞き捨てならないけれども、それよりもなによ

りも……『恥ずかしさ』が先行してしまった。

彼女から『アキバ系』と呼ばれた人物は、あたしの隣に住んでいるクラスメイトの秋庭慶の事。「あきにわ けい」が本当の名前なのに、みんなは面白がって『アキバケイ』だなんて慶の事を呼ぶ。

慶も面倒がつて一々訂正しないから、いつの間にかみんなから『アキバケイ』が本名だと勘違いされているみたい。『アキニワ』と慶の名字を正確に読める人は、一部の限られた先生や、慶の身近な友達くらいしか居ない。だけどその事を知っていても、わざと『アキバ』と呼ぶ慶の親しい友達も居る。本人が気にならなくて良いのなら問題は無さそうだし、そこはあたしがとやかく言つものでも無いと思つている。

慶とは家が隣同士だけじゃなくて、クラスでも部活でも一緒なのだ。部活は男子と女子で別れてしまふけれど、あたしは女子軟式テニス部の部長だし、慶は男子軟式テニス部の主将を遣つている。同じ顧問の先生だから、練習カリキュラムも殆ど同じ。だから帰宅時間も殆ど一緒。

別に時間を示し合わせて帰つてている訳じゃない。単に『偶然』が重なつただけ。

それに『一人つきり』で帰宅しているのじゃないわ。

いつも途中までは、慶やあたしの友達と四、五人のグループで帰つてゐるけれど、途中でみんな家が違うからそれぞれが分かれての帰宅になり、最後はあたしと慶の一人つきりになつてしまふだけの事なのに。

大体、慶の家とは昔から家族ぐるみの付き合いだし、もの心つい
た頃からずつと一緒だつたから『好き』とか『嫌い』とか言つ恋愛
対象ではあり得ない……と思うのだけれど?

「…………と言つか、あなた達誰？」

「あたし、川村姫香。この子は遠藤亞紀。えんどう あき あなたが土橋香代じばし かよ……さ
ん？ 女子軟式テニス部の部長でしょ？」

「そうだけど？」

あたしの返事に、二人はお互に顔を見合させて、『この子に間
違いない』とばかりに示し合わせたような微妙な目配せを送り合つ。

あたしは変な疎外感を感じてムッとなつた。

「ね？ 実はあたし達もテニス部に入部したくつてさ」

「そ…………そ…………？」

な、なあんだ。入部希望者…………ね？

そう思つたのだけれど、初つ端彼女のあんまりな質問に、あたし
はなおも不信感を募らせて新しいクラスメイトの一人を見上げた。

入部したいのならそつだと先に言つて欲しかつたわ。いきなり慶
の事を聞いてくるだなんて、どうかしているわよ。しかも『付き合

つていいの?』『だなんて、し……心外だわ。

慶の事を聞きたいのなら、本人がちゃんとそこに居るでしょう。』

ちらりと横目で盗み見た、斜め左後ろの席に居る慶は……信じられないくらいの大あくびを遣つて居る最中だった。行儀悪く、隣の机に腰を掛けている副キャプテンの門田くんが呆れて笑つている。

全く……『コレ』がテニス部の主将だなんて、思いつ切り幻滅させてくれるわよね。

教室内にはまだ何人もの女子が居残つて居つたのに、その大口を手で塞ぎうとかつて言つ気にはならないのかしら?……デリカシーの欠片も何も無いのね?

あたしは慶からさり気無く視線を彼女達に戻した。

姫香は、言葉遣いからして結構『個性^{アクリ}』が強そう。少なくとも名前から来る穏やかな印象とは真逆のタイプで、思つた事をすぐ口にしてしまってただけれども、その分胸に溜まるものが無いから、あつさりとしていて後腐れが残らなさそう。

方や遠藤亜紀さんは、川村さんは反対に内向的っぽい。色白でひ弱そうな彼女は、どちらかと言えば読書が好きな文学少女。思つた事の半分さえ言えなさそうで、頼り無さそつな印象を受けた。

「早速だけどさ、今日部活無いでしょ? あたし達と一緒に帰らなさい? それとも『アキバ系』と一緒に帰る?」

「は？ なんでやうなるのよ？」

姫香の言い方が気に入らなくて、あたしは猜疑心一杯の眼で以つて、机の前に遣つて来た一人を見上げた。

いつもなら、この後練習が入つてゐるだけれど、今日はうちの学校での指導研修があるとかで、他校の先生方が遣つて来る。モデル学級を残して他の生徒は帰宅させられてしまつし、運動場の一部が臨時駐車場になつてしまふから、今日の練習は無い。

「い、いいわよ？ 別に慶と待ち合わせして帰つている訳じやないもの」

あたしが〇×を出すと、一人ともホッとしたような表情を浮かべた。

「この一人の様子に、あたしは心の隅で微妙に引っ掛けらるものを感じたけれど、慶とは付き合つていないし、約束している訳じやないから……別に一緒に帰らなくつてもいいわよね？」

でも、わざと慶と一緒に帰らないだなんて、こんな事は初めてだわ。

『慶とは付き合つてなんかいない』……自分の言葉をここで証明してあげれば、彼女達の誤解も解けるはず。いつまでも慶と一緒に居られないのだし、丁度いい機会だわ。

あたしは心の中でそつと自分に言い聞かせると、身支度を済ませて立ち上がつた。

「ああ、香代、もう帰るのか？」と待てよ

先に席を立つたあたしの背後で、慶の慌てる声がした。

教室の出入口には、先に行つて待つている一人があたしと慶を見詰めてくる。

注目されている……そう意識した瞬間、あたしは猛烈に恥ずかしくなつて、情けない声で『待つた!』を掛ける慶を振り返り、睨み付けてしまつた。

「ひみきわねつーなんでそつ……こつも慶と一緒にじゃなくつちやいけないのよ?」

「は? どうしたんだ? 香代、お前にいつも……」

「あたしは他の子達と帰るの。じやあね

慶の言葉を遮るようにあたしは早口で捲し立てると、シンとそつぽを向いて踵^{きびす}を返す。そして、慶を振り返らずに彼女達の許に急いだ。

今まで遣つていた当たり前の『いつも』を、ほんの少しだけ勇気を出して『違ういつも』に切り替えたあたしは、なんだか急にお姉さんになつた気分だ。

「おまつ……香代?」

「ばーばー

「お……おこひ」

置いておまりを喰らつた慶が、情けない声であたしを呼んだ。

第2話 三人の秘密

「お待たせ」

「これでもう『慶と付き合っているの?』だなんて失礼な事は言わせないわ。

あたしは少し気取つて、二人が待つている教室のドアまで遣つて來た。

「あ、あのう……」

「なに?」

先に言葉を発したのは、物静かそうな亜紀だった。

彼女はパツン前髪に、左右振り分けお下げ髪の眼鏡っ子。彼女には失礼だけれど、自己主張したい今どきの女の子の中でも珍しく『地味』が服を着て歩いているような女の子だった。

彼女はまるで悪い事をしてしまったような、すまなそうな眼をしてその眼鏡越しにあたしの表情を窺うと、言い難そうに顎を引いて俯いた。

「い、いいの? ……秋庭くん」

「……え?」

亜紀はあたしから放置されてしまった慶の事が、心配になつて仕方が無いらしい様子だった。

その弱々しく言つた一言が、あたしの胸に細い針のようになクリと刺さる。まるで姫香の言葉を真に受けて、あたしの取つた行動を非難しているみたいな言い方だったから。

だけど、慶とは本当に単なる幼馴染のお隣さんなのであって、『彼氏』だとかそんな眼で慶を見た覚えは無い。それを証明してあげただけなのに、どうしてこんなにも亜紀の言葉が『痛い』と感じたのか、自分でも不思議だった。

あたしが居なくつても、慶には副主将の門田や佐伯……他にも一緒になつて帰る友達は何人も居る。だから、なにもあたしが気にする事もなければ、亜紀みたいに心配する必要なんて無いのに……

「ふふーん、気になるう？」

遠慮がちに亜紀が言つた言葉を、姫香が挑発的に切り返した。

亜紀はあたしに聞いていたのに、どうして姫香が出て来るの？

そう思つたのだけれど、二人は友達同士みたいだし……それに二人とも入部希望を口にしているけれど、どんな子達なのかよく判らない所がある。だから、あたしは一步退いて一人の出方を窺う事にした。

「だつ、だつて……き、急にあんな……姫香だつて……」

「はいはい、続きを帰りながら続けよ! ねー?」

「ち、ちゅうと姫香あ」

「いこから!」

名前を呼ばれた姫香の顔が、たちまち真っ赤になつた。そして畠紀に続きを言わせないよう回れ右を促すと、強引に彼女の背中を押して教室から離れようとする。

どうなつているの?

一人の奇妙な遣り取りを黙つて静観していたあたしは、自分に向けられた姫香の視線に気が付いてハツとした。

「そ、一緒に帰るんでしょ?」

「え? ええ……」

畠紀の背中を押しながらあたしを振つ返つた姫香は、にっこりと笑つてやつと叫つた。

「あ、香代あ、一緒に帰ろ! う?」

「うそ、い……」

「あ、うめーん、今日はバス」

下駄箱の所で、いつも一緒に帰っていた雛乃達から声を掛けられて、あたしはOKの返事を出さうとしたのに、姫香にきつぱりと断られてしまった。

「あ、ちょっと姫香さん？ もうからうりしてそんなに強引なの？」

なに仕切っているのよ？ これじゃあドリマとかに出でへる『お局様』みたいじゃないの。

姫香の態度が気に入らなくなつて、つい棘とげのあるような言い方をしてしまった。一緒に居る亜紀も、あたしと同感だと聞いたげな眼で姫香を見ている。

「ああ」めんね？ でも他の人には聞いて欲しくは無かつたから

「なにが？」

あたしの言葉を合図に、姫香はチラリと亜紀に視線を走らせるべ、亜紀は顔を赤らめて俯いてしまった。

「あのね？ この子、秋庭くんが好きなのよ

「……は？」

な、なに……？ 今、何て？

あたしは自分の耳を疑つた。

「や、やだー姫香ったら、そんなにハッキリと……」

「つて、ハッキリと言わなくっちゃ判らないでしょ!」

照れる亞紀に姫香がぴしゃりと言い切った。

あたしはいきなりな事を聞かされて混乱してしまって、なにがなんだか……

「でね? 亞紀はこんな性格だし、いつまで経つてもこのまんまみたいじゃない? それに秋庭くんにはあんたが居るし……」

「で、あなたが代わりにあたしに直接聞いて来たって訳?」

「ピンポン!」

言葉尻を取つたあたしに、姫香が能天気に調子付く。

「……」

あたしは言葉を失つた。

慶とは單なる幼馴染だと思つてゐるし、『好き』つていつほどの恋愛感情も持つてはいないと思つてゐた。でも、慶の事を想つてゐる亞紀の存在を教えられた瞬間に、自分でもよく判らないもやもやとした感情が胸の奥に湧き上がつて來たのを感じてしまつ。

「秋庭くんの事をよ〜〜く知つてゐるあんたが居れば、心強いわ。ど? ここはひとつ情報提供して、あたし達に協力してくれないかしら?」

そう言われても、簡単に『ええ、いいわよ』と呟つらくなれなかつた。第一、幾ら親友の事だからって、こんなに真剣に……

そこまで考へて、あたしある事に気が付いた。

初対面で慶の事を『アキバ系』と言っていたのに、今の姫香は『秋庭くん』と呼んでいる。

嘘……でしょ……？

亜紀はどうも気が付いてはいないみたいだったけど……まさか、姫香まで慶の事を密かに想つているのじゃないでしょうか？

第3話『彼』を見る眼

「ねえねえ、香代が『カノジョ』じゃないんだつたら、秋庭くん、他に付き合っている女の子つているのかなあ？」

姫香が上機嫌で聞いて来た。

慶に一番近い存在と見越して疑いを掛けて来たあたしが大外れだつたと判つたからか、さつきまで身構えていた姫香も亜紀も、何だか妙にリラックスしている。

それにしたつてこの二人、よりもよつてなんであんな慶を……？

さつきの大あぐびなんてまだマシな方。男子ソフトテニス部の主将だと聞こえは良いけれど、実力は他の部員といい勝負。部内で抜きん出た子が居なかつたせいか、顧問の先生から聞いた話ではくじ引きで決まつたそうだもの。

その時は、しつかりと納得してしまつたわ。小さかつた頃からずつと一緒に居たあたしには、慶が部活のまとめ役をやつている事自体不思議に思えたから。

最弱最強の幼馴染……残念ながら、昔の慶を知つてゐるあたしには、これ以上の皮肉な褒め言葉が頭に浮かばない。

幼稚園の頃の慶は物凄く身体が弱くて、すぐに熱を出しやすい体质だった。なのに、自分の身体が異常を訴えているのに本人は全く気付かなくて、周りの人人が先に気付いてしまう鈍感タイプ。だから

と言つて、我慢強くて辛抱強いのかと思えば弱虫で、遊園地に行つても、お化け屋敷やジェットコースター、観覧車に乗つてさえ、すぐ怖がつてメソメソ泣き出しあしまつような男の子だった。

当時、あたしは髪を短くしていて、動き易い短パン姿で慶と一緒に居たからか、あたしは大人達から男の子だと間違われて、しかも慶をいじめて泣かせた犯人だと濡れ衣を着せられてしまつた事だつてある。

今でもそうだけど、何かあれば必ず先生はあたしに慶の事を頼んで来るし、本人もすぐにあたしに頼つて来る。

お隣に居るだけなのに、なんであたしばかりが慶のお守をしなくちゃいけないのよ……？

泣き虫の慶のお陰で、あたしはいい迷惑だわ。

慶に対する不満は、日々大きくなつて行く一方で、あたしは慶と離れようと思つた事だつて何度もある。だけど、どんなに別行動を取つても、最終的にはあたしの近くには必ず慶が居た。だつて、帰る家が隣なんだもの。

姫香や亞紀が慶の事を想つているのは、昔の慶を知らないからだわ。今は随分とマシになつて来ているけれど、小さかつた頃の慶を知つたら、一人はどう思つのかしらね？

「彼女なんて居ないんじゃない？」

あたしは素つ氣なく言ひ放つた。

実際、慶は付き合つてゐる女のヤビツとか、意識してこむ女の子が居るよつな素振りさえ見られない。

「はあ～、香代つてばクールねえ～」

「だから、そんな仲じゃないから」

何度も言わせないで欲しいわ。

ずっと黙つてこる亜紀も姫香に同感りしへ、わざわざひつとつと相槌を打つてゐる。

「なんで？ 背だつて高くてカッコ良いし、テニス部の主将だよ？」

「あたしに見る田が無いとでも？」

「ほー、男の子は背が高ければカッコ良いの？」

背が高いのは慶のお父さんが高いから。単なる遺伝でしょ？ 主将だつて、くじ引きだもん。

「うん」

「……」

「これだもの。」

唐突に『隣の芝生は青く見える』という諺が頭に浮かんだ。一体、どっちが『見る目が無い』のよ？ と言いたい。あたしからしてみれば、二人の眼の方がよっぽど『節穴』だわ。

あたしはウンザリして深いため息を一つ吐いた。

「ねーねー、この近くにクレープ屋さんの屋台が来るの、知ってる？」

「へー？ そうなんだ」

呆れるあたしと会話が噛み合わないと思つたのか、姫香が話を切り替えて、寄り道「ースを提案する。

「ね？ 寄つて行かない？」

「でも、あたしあお金持つてないし……」

「奢りでも嫌？」

「行くつー！」

あたしは、慶と一緒に帰つていたら、絶対に知り得なかつただろう美味しい情報に飛び付いた。

姫香は去年の暮れにこの小学校に転校して來た。家庭の事情はみんなそれだけど、姫香の両親は離婚して、お母さんの実家のあ

る」の町に遭つて来たのだそつ。

彼女なりに辛い事があつたらしこれど、自分がお母さんを支えなくちゃと意識しているせいが、姫香は他の女の子よりも格段しつかりしている。でも、思つた事をズバズバ言つ性格が災いしてか、中々友達が出来なかつたらしい。

亜紀の家は、両親が揃つて内科医で、病院を営んでいる。下に弟が居るけれど、弟が居るとは思えないくらい温厚で物静かな子だ。本が大好きで暇さえあれば読んでいる文学少女だとか。でも内向的過ぎて周囲に中々馴染めないと云う、彼女なりの悩みを抱えていたそうだ。

そんなある日、姫香は、下校時間に鎖の解けた犬に吠えられて、泣いている亜紀を見付けて、犬を追い払つたのが知り合う切つ掛けになつたらしい。

「すゞーい。強いんだあ

「ううん。だつてあの犬飼い犬だつたし、尻尾振つていたもん。きっと亜紀に遊んで貰いたかつたんだと思つよ？」

感心したあたしが姫香にそう言つと、苺クレープを頬張つた姫香が鼻先に生クリームを付けたまま、にこにこして答えた。

第4話 居合わせた男の子

姫香から「あそぶ」になつた帰り道、あたしは舌先に仄かな甘いクレープの余韻に浸りながら、二人に入部希望の真相を知るべく、探りを入れた。

「ねえ、亜紀はどうして慶の事が好きになつたの？」

「うわー、香代ってば『慶』って呼び捨て？」

「あのね……」

呆れて言葉を失つた。

「何年慶のお隣さんを遣つてていると思つていてるのよ？ そんなあなたが『秋庭くん』って呼ぶ方がよっぽど不自然だわ。なら一人とも呼び捨てにしたら？」

「おおっ？ 幼馴染から呼び捨てのお許しが出たわよん？ 亜紀い、い、どーする？」

「でつ……でもお……」

姫香がにやにやしながら、『そんなこと出来なあーい』だなんて言つて赤くなつて俯いている亜紀を肘でつつく。

二人は『彼』の話題になると妙にソワソワして落ち着かなくなるところがある。同性のあたしから見ても可愛いなと思うのだけれど、そのお相手が慶だなんて……あたしとしては微妙だわ。

「で？ セツキの話だけど？」

「あー、あたし無視い？」

「姫香は後から聞いてあげるから」

茶化さないで欲しいのに、テンションが上がってしまったのか、姫香は超上機嫌。亞紀も姫香に乗せられたのか、クスクス笑っている。

あたしも一人に会わせて表面では笑っているけれど、その実、心中では何を聞かされてしまうのか心配になつて、ドキドキしていた。

亞紀が慶と出会つたのは、歳の瀬も押し迫つた去年の冬休みの事だった。

週に一回、停留所を七つ通り越した隣町までピアノのレッスンを受けに通つている亞紀は、この日、今年最後のレッスンを終えてバスに乗り、帰宅の途についた。

けれど、運悪く仕事納めの帰宅ラッシュと重なつて、定員をオーバーしたバスの混み具合は半端じやなかつた。

次のバス停で降りなければいけないのに、亞紀の立つている場所からは、停車サインのゴールボタンまで手が届かない。

立ち位置を変えられず、ままならないほどの中精一杯片手を伸ばすけれども、五年生女の子の平均身長よりも背が低くて、身体が小さい亜紀にとって、そのボタンは全く届かない場所にあった。

「…………

他の人に『押してくれませんか』の一言が恥ずかしくて、言葉に出して言えない。けれど、降りるはずのバス停は、どんどん近付いて来る……

いよいよ困って、泣き出しそうになつた時、亜紀の頭の上から声が降つて來た。

「次、降りるの？」

「…………

見上げると、自分の通っている小学校の校章が胸に入っている、白いジャージを着た背の高い男の子が、亜紀のすぐ傍に立っていた。

亜紀が涙目になつて大きく頷くと、男の子は亜紀の代わりにボタンを押してくれたのだそうだ。

「で？ それが慶だつたの？」

「ん……」

亜紀は恥ずかしそうにもじもじしながら頷いた。

あたしなら、別にボタンを押してくれた男の子にときめいたりなんかしないけど？

「まあまあ、香代、まだ続きがあるんだって」

不満げなあたしの表情を読み取ったのか、姫香が亜紀の話をフォローする。

「降りるんでしょう？」

「で……でも……」

男の子が停車ボタンを押してくれたお陰で、バスは亜紀の下車するバス停に停車した。けれど、今度は余りの混み様に、バスを降りたくても降りられない。

人を搔き分けて出て行こうにも、身じろぎ一つ出来やしない。そもそも、亜紀には人を押しのけて自分が通るなど、実行どころか考える事すら思い浮かばなかつた。

「降りる人が居ますので、少しあ待ちください」

せつかく運転手がアナウンスしてくれたのに、降りそうな客の氣

配が無いと覺つた他の乗客から『悪戯じやないの?』と囁つ声が上
がつた。

『わざわざ始めたバスの車内で、切羽詰まつてしまい、
今にも泣き出しそうになつた亜紀は、せつときの男の子から急に腕を
掴まれた。

「降りまーす!」

亜紀が想像もしていなかつた元気な声が車内響いた。

男の子は亜紀の腕を掴んだまま、他の乗客の中に分け入つて、ぐ
いぐい乗車口に連れて行く。

「なんとか降りられたね?」

「は……は……い」

バスから無事に降りられた亜紀は、男の子からそう声を掛けて貰
つた。亜紀は安心して気が抜けてしまつたけれども……何か大変な
事を忘れてしまつてしまふようにならない。

「降りる時は、頑張つて勇氣出さなくつります」

「あ、ありがとうございます!」

男の子にお礼を言つてペーパーと頭を下げる。そして、そこでハタ
と思い付いた。

「あ、あのう～」

「ん？」

「降りて……良かつたのですか？　あなたまで」

車内でボタンを押して貰つた時、確かに一緒に降りる予定では無かつたみたいな言い方をしていた彼だつたけれど……？

「えつ？　う、うわつ！　マジッ？」

亜紀の問い合わせで我に返つた男の子は、かなり慌てていたと言う。そして、次のバスが来る間、亜紀も一緒に待つっていたのだそうだ。

男の子は気を利かせて、いろいろ話しかけてくれたけれど、亜紀は恥ずかしさと緊張で会話どころじや無かつたらしい。相槌を打つのが精一杯で、会話の内容さえ覚えていなかつたそうだつた。

唯一、亜紀が覚えていたのが小学校の白いジャージ。それがテニス部のジャージだと知つたのは、年が明けて三学期始業式が始まつた後の事だつた。

「ね？　ね？　笑えるでしょつ？　ふふつ、一人とも間抜けなんだからー」

姫香が噴き出したかと思つたら、今度はお腹を抱えてくくく……と笑い出した。その背後で、亜紀が照れて耳たぶまで真っ赤になり俯いている。

「ははは……」

思わずあたしも乾いた笑いをしてしまった。

はあ、なんか……慶らしいオチだわ。

優しい所は認めてあげてもいいのだけれど、なにかいつ……スマートさんに欠けちゃうのよね。慶がトロいのはもう既に知っているし、話の途中でこうなるだらうなと結果は予測出来ていたのだけれど……

でも……ちょっとだけ、慶の事を見直しちゃった……かな?

第5話 別れ道

「で？ 姫香はどひなの？」

「つべえ？」

こきなじあたしから話題を振られて、姫香は慌てた。

さつきは亜紀よりも先に自分の事を話したかった癖に、隙が無さ
そうで案外隙だらけになつてゐるのね？

「慶のどんなトコが好き？」

「ち、ち、ち、違つわよつー！」

あたしの『直撃』に姫香は真っ赤になつて、猛然と否定する。

「え？ 姫香も秋庭くんを？」

「あのね、姫香はね……もがつ？」

「ちょ、まつ、待つてえー！」誤解して欲しくないんだけじ。あ
たしは亜紀の応援であつて秋庭くんのファンとかじやないから

『』一寧に解説しようとしていたあたしの口を、慌てて姫香が手で
塞ぐ。しかも、更に後から『絶対に』って強調して付け足した。

今更なにを隠そうとしているのよ？ 亜紀からは気付かれていな
かつたでしょうけれど、あたしの眼からはバレバレだわ。

亜紀だつて……姫香の事、もつと早く気が付いてあげなさいよね？ あたしなんかさつき知り合つたばかりなのに。もう判つちやつたから。

亜紀の『天然』ぶりに退いてしまいそうになる。

「ふふん、判り易い子ね？ 姫香、あんたこそ怪しいわ。ここで吐いちゃいなさいよ。スッキリするから」

さつきとは立場が逆になつた。なんだか自分が刑事か名探偵になつたみたいな気分だわ。

「べつ、別にどう思つていいかだなんて……つか、意識なんかしないわよ。ただ亜紀の応援でつい視線が秋庭くんに行っちゃつてるだけなのよ」

「ふ ん？」

怪しいなあ。

「あー、なにその怪いの眼は」

「疑つているもん」

「……香代つてしま！」

あたしの怪いの眼差しから必死で逃れようと、姫香は心持ち頬を上氣させ、『心外だわ』と言わんばかりに口を尖らせてあたしから眼を逸らせた。

まあ、なんて判り易い性格なのかしら？ それにしても『あの慶』を……ね？

背が高くてカッコ良いと言っていた亜紀達に、一度は否定的になつたあたしだつたけれど、確かに慶は男子の中で、そんなに人目を惹くほどのイケメンじゃないけれど平均ラインはクリアしているわね。

そう言えば……慶とよく一緒に居る副主将の門田くんにも、やつて下駄箱の所で会つた田名子が居る。補佐の田村くんにも他のクラスに居ると本人が話していたのを聞いた事があつた。

あのお笑い系目指しているんだと宣言している門田くんだつて『特別な女の子』が居るのに、慶にはそんな『特別な女の子』なんて居ないの……かなあ？ でもあたし、慶からそんな話を聞いた事も無ければ、別に噂だつて聞かないし……

慶は『女なんか不要だぜ！』みたいな硬派系でもなければ、逆のアブナイ方向なんかでも無い……い？ だけど門田くんも田村くんも、慶にいつもくつ付いているわよね……幾ら仲が良くなつたって、二人とも特別な女の子が居るのに、どうしてあんなに毎日……

あたしは俄かに慶の取り巻き連中が、妙な趣味を持つていてる妖しい連中に思えて來た。

「……」

「どうしたの？ 頬、真っ赤だよ？」

「香代？ おうう～い？ 『戻つて』 来～い」

「は～？」

我に帰つたら、亜紀と姫香が一人して心配そうにあたしの顔を覗き込んでいた。

「んな、な、ななんなんでも無いよ？ あはは……」

あたしはたつた今思い浮かべてしまつたイケナイ妄想を一人に見破られはしないかと焦り、必死になつて笑つてごまかす。

我ながら、想像力が凄過ぎて困つてしまつわ。

別に食べ物に釣られた訳じゃないつもりだけれど、改めて会話をしてみたら、姫香も亜紀も最初に受けた印象よりずっと親しみが持てる子だった。

姫香の突つ込みはキレがあつて鋭いけれど、亜紀がそれをやんわりと受け止める役目を果たしていく、二人の間には妙に嫌味な遣り取りは見られない。気性も性格も全く違つていて、しかもお互いが『慶』を想つている恋敵。ライバル同士の二人なのに。

その後、彼女達は女子軟式テニスに入部してくれた。

元々運動神経の良い姫香は、俊敏にボールに反応してくれるのだけど、コントロールがいま一つ。亜紀は逆にコントロールは良いのだけれど、ボールの球筋を予測して反応するのが遅れがち。二人とも、即戦力になるには時間が必要だった。

一人には、慶を知っているあたしに近付きたいと言う、邪な思惑よじしまがあつたから、きっと続いてはくれないかもと思つていたのに、彼女達はあたしの想像以上に熱心だった。

亜紀は、暇さえあればソフトテニスのマニュアル本を読み耽り、姫香はイメージトレーニングやラケットでの連続ボールつきを練習して、それぞれが自分に合つた自主トレを頑張つている。

部活終了後も彼女達の練習に付き合つてゐるから、あたしは慶とは帰りが全く一緒にならなくなつっていた。

第6話 異性の友達

朝の集団登校は、慶が先頭を行く『班長』で、あたしが最後尾の『副班長』だから、お互いに顔を会わせる必要性は無い。

姫香達の自主トレに付き合っている事もあって、あたしはあるで潮が引いて行くみたいに、急速に慶の居るグループから離れて行った。

「失礼しました」

「あれ？ 香代？ 香代お～」

田直の日誌を担任の先生に届けて職員室を出ると、雛乃から偶然呼び止められた。

「あ？ ……ああ、雛乃だあ、元氣い？」

「うん、元氣い。どうしたの？ 最近秋庭くんと一緒にじゃないのね？ つれないなあ～」

「……」

「うーん、やっぱりそう来たか。

でもってその言い方は、まるであたしが意地悪しているみたいじやない？

雛乃は慶の友達である門田くんの彼女。だから門田くんが慶と一緒に行動する以上、雛乃もセットでついて来る。

「聞いたわよ？ 男子ソフトテニスのマネージャーになつたんだつて？」

「うん」

雛乃が肩をすくめて照れくさそうに笑うと、左右に振り分けている艶やかなお下げ髪がクスンと揺れた。

あの慶が主将のテニス部のマネージャーを志望するだなんて物好きね……とは思つたけれど、門田くんの練習が終わるのをただ待つているだけじゃ、辛いかもね。

「マネージャーよりも、女子部に入ればいいのに。男子と同じ時間に終わるわよ？」

「えへ、だつて香代達、部活が終わつても自主トレしてゐるでしょ？ つてか、運動オーナーのあたしには無理だよ」

軽い気持ちでそう言つて誘つたけれど、雛乃からはあつさうと断られてしまった。

雛乃が言つた『自主トレ』は、もちろん姫香達の自主トレの事で、毎日の練習が終わつた後で一時間くらい。希望者も含めて五、六人が基本練習を遺つてゐる。

「あたしの事はいいのよ。香代？ あんた、秋庭くんとケンカでもしたの？」

「は？」

ケンカ？

「あれ？……違つた？」

あたしが軽く驚いて固まつていると、離乃是なにか自分が勘違いしているのじゃないのかと気付いたみたいだつた。

「あの……慶とあたしが……ケンカ？」

「違つたの？」

「ひ、違つわよー。なんであたしが『あの』慶とケンカしなくなっちゃなんないの？」

あたしは離乃の発言を否定した。

だつてここ最近、顔を突き合わせる事も無ければ、お互に話をする機会も無い。それに弱虫・泣き虫の慶は、昔からあたしには頭が上がらないし、あたしが慶を言い負かした事があつても、慶があたしを言い負かした事なんて、ただの一度も無いのよ？

ケンカするより以前の話だわ。

「そつ……なんだ。あー、でも良かつたあー。てつきり絶交でもしちやつたのかと思って心配したよ。もおー」

離乃是大袈裟にホツと胸を撫で下ろして見せた。

あたしは、自分でも気が付かない「いつか」、雛乃達に心配をさせてしまつたのだと気が付いて、少しばかりつまらが悪くなつた。

「別に慶とはなんでもないよ。でも、どうして雛乃はあたしと慶をくつ付けたがるの？」

「え？ 違うの？」

「えっ？」

「付き合つてゐるんでしょう？ 秋庭くんと」

あたしにとっては、慶の事よりも雛乃の反応の方が意外だつた。そして、俄かに不愉快になつて来る。

雛乃も姫香や里紀達と同じなの？

一緒に帰つたり、傍に居れば『付き合つて』って事になつちやうの？

あの……『アキバケイ』と？

「じょ、『冗談言わないでくれる？ 付き合つだとか。あたしはタダの幼馴染で、慶の家の『近所さん』だつて事だけだわ』

「『『』近所さん』じゃなくつて『お隣さん』……でしょう？ ……あひへー。」

やや興奮気味に語つたあたしの揚げ足を取つて、軽く受け流した

雛乃は、あたしの背後に誰かが這つて来た素振りを見せた。

「誰か来たの？」

「噂をすれば何とかだよ？ ほれ、秋庭クン」

「ええっ？」

雛乃の言葉に驚いて、あたしは背後を振り返る勇気さえ持たずには息を詰めて咄嗟に身構えてしまった。

あたしには心の準備つてものがあるんだから、いきなり出現なんかしないで欲しいわ。

特に慶には。

「ふ！」

「…………ど？ どうしたの？」

あたしの様子を見ていた雛乃が突然吹いた。

「『め……くつくつくつ……』、『めんね。まさか引っ掛かるとは思わなかつたから……今は『嘘』』

「な……？」

雛乃にからかわれてしまつたと知つたあたしは恥ずかしくなり、全身がかあーっと猛烈に熱くなつてしまつた。気持ち、なんだか息苦しいわ。

「ふむふむ……多少なりと意識しているのだわね？」

そう言って、雛乃は自分で勝手に頷いて納得しちゃつている。

「い、意識だなんて……し、していないからっ！」

「いいのよ？ 自分で判つていないだけなんだから」

なに？ そのお姉さんみたいな態度は。

「あ、ちがつ……違うつてば！ あ、あたしは慶の事なんか、少しも思つちゃいないわよー！」

「あーあ。言い切つちやつたわね」

「それがなにか？」

いきり立つて雛乃に咬み付くと、彼女は少し困った表情を浮かべてあたしを見た。

「香代？」

「んな……なによ？」

「素直じやないわよ」

「や、そんな」と……

笑いながら、冗談っぽく雛乃はわざと言つたけれど、あたしに

は十分重い一言のように思えて、正直不快だった。

雛乃の言葉の半分が「冗談なら、残りの半分は本気ってことだよね?
『素直に』……って、あたしが慶の彼女だつて認めなよつて事
なのかな?でも、本当に彼女だと彼氏だと意識……していな
いんだつてば。

確かに慶とは他の男子に比べて話し易いし、妙に気を利かせる必
要も無ければ、一緒に居ても気疲れもしない。友達以上、彼氏未満
の仲の良い『男友達』……じゃダメなのかな。

第7話 冷やかし

「なあ、土橋？」

「なに？」

「お前、最近アキバ系と一緒にやねーんだな？」

姫香と亜紀の三人で理科実験室に移動中、後ろからクラスの立川くんが声を掛けて来た。

立川くんはバスケ部の主将で、陸上全国大会に出場した高校生のお兄さんがいる。体育会系特有の負けん気としつこさを持つていて、何處となく不良っぽい所がある。噂では気が短くて喧嘩も強いらしい。あたしとしては苦手だし、近寄りたくないタイプの男子だった。

「別に。一緒にないと問題でもあるの？」

立川くんに早く離れて欲しくて、あたしは気持ち身構えて、シンと澄ましてソッポを向いた。

「なんでも、スカシやがつて。聞いただけじゃんかよ。『アキバ力山』」

「ははっ！ それって『秋葉かよ』？ いや、区切り方を変えたら、『アキ馬鹿よ』？」

「…」

男子一人の煽りに、全身がカツと熱くなつた気がした。

「い、今……なんて？」

なんであたしの名^あ字が慶の名^あ字になつてこるのはよ、しかも傍に居た鈴原まで面白がつて煽りを入れて来る。

一人の嫌な言葉はショックだった。あたしの頭の中で割れがねのよつて鳴り響く。

思いも寄らず耳を塞ぎたくなるような酷い言葉を投げ付けられたあたしは、言い様の無い強い不快感に見舞われて、きゅうと歯をひき結んだ。

「ぬわーー！ 立川！ アンタこの関係無いのに引っ込めー！」

「じやかあし！ オメーにや言つてねーじやんー！」

「厚かましいわね！ 人の事言つんなら、自分じやビツつよー！」

「アツカレバ黙つておー！」

姫香があたしを庇つて、お互に罵り合^{めあつ}の喧嘩になつてしまつた。日頃、口の悪い姫香は、この時とばかりに本領を発揮する。

「か、香代おー！」

「唯紀……」

姫香達の剣幕に怖くなつたのか、亜紀が泣きべそを搔いて心配そうにあたしを気遣ってくれるけれど……さすがに今のは効いたわ……まだ頭の中がクラクラしてゐるもの。

それに……

知らなかつた……慶と一緒に居た時は、こんな事言われたりなんかしやしなかつたのに……慶から離れて周りを見れば、みんなそんな眼であたしの事を思つていたんだ。

誤解なのだと言つても、みんなの眼からはそつは見えていないのだと知つて、なんだか悔しくなつて来る。

「大体アンタは卑怯だよ！」

「はああ？ 僕のじこが卑怯なんだよ？ フザケンナ！」

「あーやだ々。自覚が無いって……これだもの」

「な、なにをあ……この……」

乱暴な言葉に退くだらうと高を括つていたらしい立川は、姫香の反撃に怯んで) 色をなす。

姫香が果敢にも立川達に応戦している。しかも、この言い争いは一対二で普通なら分が悪い筈なのに、口が立つ姫香の方が優勢だつた。勢いで『うるせえ』とか『黙れ』とかを連発する立川に対して、姫香は立川達の出方を冷静に分析し、淡々と指摘するものだから立川達にとつては面白く無いだろう。

先に立川が切れて暴力沙汰になりそうな……そんな険悪な空気に上り詰めた時だった。

「ナニ遣つてんだよ？」

「え？ うわわ……アキバ」

「わわ……」

後から遣つて来た慶の冷静な声掛けで、一触即発になってしまつた危険な空気が一気に開放されて、委縮してしまつた亜紀とあたしは、緊張の糸が解けてホッとする。

「立川、準備係だろ？ 早く行けよ」

「お？ おお……」

「へー、噂をすれば……だな」

慌ててその場から立ち去つて行つた立川とは違い、居残つた鈴原が慶に絡もうとした。

普段でも立川は、他の人には上から目線で見下して来るのに、なぜか慶には素直だ。そして、鈴原は誰にでも難癖を付けては人をおちょくつて絡んで来る嫌な奴。但し、味方に付いてくれる仲間が居ないと咬み付けない。

「なんか用か？」

「いんや。別に。じゃあなアキバカヨ」

場の空氣を読んだ慶が、顎を引いて鈴原を軽く睨み付けると、分が悪いと覚つたのか、鈴原はあたしに再び『あの言葉』を浴びせると、まだ物足りなそうな顔をして立川の後を追い、行つてしまつた。

「……？ なんの話？」

鈴原に肩透かしを食らつた慶が、先に行つた鈴原の背中を見送りながら、あたし達に誰ともなく訊ねる。

「なんの話？ ジゃないわよ。来るのが遅いつて……」

「い、いや、な……なんでもないよ」

対戦相手が居なくなつてしまひ、持て余して今度は慶に突つ掛ろうとした姫香の言葉を遮ろうと、あたしは慌てて大声を出した。

あたしの挙動不審な態度を訝つて、慶が首を捻る。

「香代も……」

あたしのすぐ後ろに隠れるよつにじて、暁紀が情けない声を出す。

「ほ、ホントに、だ、大丈夫……だからっ！」

「ならいいけど……あのさ……だつたらなんで香代が泣いてんの？」「知らないつ！ な、泣いてなんか、いなつ、いないもん！」

「知らないつ！ な、泣いてなんか、いなつ、いないもん！」

言い難^{ひにく}そうに慶はあたしにそつと言つた。

慶との仲を誤解され、からかわれてしまつたあたしは、必死になつて平然を装つた。けれど本人を眼の前であんな事を言われて……胸に後から後から込み上げて来る悔しさと恥ずかしさが入り乱れて来たあたしは、抑え切れない不思議な感情で息が詰まりそうだった。

慶だつて、鈴原の言葉を聞いている筈なのに……あたしを気遣つているのか何事も無かつたように振舞つている。でも、その態度があたしにとつては余計に感情を逆撫でされている気がして、不愉快で堪らなかつた。

第7話 冷やかし（後書き）

（）色を作^なす：顔色を変えて怒りだす」と。

第8話 小さかつた頃の慶

あたしが小学校へ進学する年の二月。例年よりも風が無くて、暖かで穏やかな日差しの小春日和に、慶はお隣に引っ越し越して來た。

家に挨拶に來たのは、優しそうで背の凄く高いおじさんと、少しぽつちやりして良く笑う、可愛らしこばさんに、綺麗で素敵な女子高校生の美咲さん。そして、美咲さんの後ろに隠れるようにして、そつとあたしを見詰めていた慶が居た。

慶は、あたしの従兄の駿ちゃんよりも小柄で、あたしと大して変わらない背格好だった。

肌が白くて眼がぱっちりとした可愛らしい子だつたし、名前が『けい』ちゃんだったから、あたしはお隣に女の子が引っ越して來たのだと勘違いして喜んでしまつたもの。

慶は生まれつき身体が弱くて、年に何回かぜん息の発作を起こすらしく、『j両親は発作がよく起る夜中に慶を救急病院へ連れて行つていた。

見るからに貧弱そうで、少しきつい言葉を掛けるとすぐに涙ぐんでしまうほどの意氣地なし。

あたしの知つてゐる男の子ときたら、やんちゃ盛りな子しか居なかつた。

駿ちゃんなんか、ダイニングテーブルからジャンプして着地に失敗し、救急車を呼ぶ騒ぎになつたり、下りの坂道を整備不良の自転

車で疾走して壁に激突。この時も救急車沙汰になっていた。他の子
だつて駿ちゃんほどじゃないけれど、余所の飼い犬をいじめて咬み
つかれたり、種まきがやつと終わつた畑へボールを拾いに侵入して、
農家のおじいさんにこつ 酷く叱られたり、余所の家に駐車している
車にボールを当ててしまつたり……とにかくそんな事をする子達ば
かりだつたから、おとなしい慶は、あたしにとつて一種不思議な存
在だつた。

だつて、男の子がちよつとした事でメソメソ泣くだなんて、あた
しにとつてはあり得ない事だつたもの。

だから、ものの数週間と経たないうちに、見兼ねたあたしは慶の
お守役を買って出でしました。

何かあるとすぐに『香代けちゃん、香代けちゃん』とあたしを探して
は後追いしていた弱虫の慶。

でも高学年になつた頃には、慶のぜん息の発作も治まり、殆ど症
状が出なくなつていた。それは慶があたしの想像以上に努力家で、
負けず嫌いだつた事が幸いしたらしい。

小さかつた頃『泣き虫』だつたのは、『悲しくて』泣いていたわ
けじゃなく、『悔しかつた』から。本当は人一倍負けん気が強くて
……でも自分の弱い身体が思うように利かなくて、悔しくて泣いて
いたのだと言う事を、あたしは最近まで見抜く事が出来ずにずっと
誤解していたのだ。

慶は基礎体力を強化しようとスイミングや軟式テニスも自分から
積極的に遣り始め、最高学年の今年には、テニス部の『主将』にな
つていた。くじ引きで主将を決めたそつだから、最初は慶の事を少

し軽く見ていたのだけれど、それなりに実力が伴っていないと……何よりも部員が慶について来てはくれないだろうと思つ。

そして、気が付けばいつの間にか、慶は滅多にあたしを頼るような事をしなくなつて、お守役だったあたしと並び、対等の立場になつていた。

そんな慶に、不覚にも涙を見られてしまつただなんて……

慶に助けて貰いたいだなんて思つてやしなかつた。むしろその逆で、あたしは立川に絡まれた事を、真っ先に慶に知られたくはなかつたのに。

でも、助けて貰つたのは覆せない事実。しかもあたしの涙まで見られてしまった……

立川達が絡んで来た時に現れたのが、よりもよつてどつして慶なの？

あたしは自分の運の無さに落ち込んでしまつた。

* * *

立川達の悪口の嫌がらせは、その時だけじゃ終わらなかつた。

あたしが傍にいるのを田畠く見付け、事ある」と言い掛けたりを付けて来ては面白がつて『アキバカヨ』を連発する。

『よー、土橋……つて違った、アキバカヨ』

『おい、アキバ』

『なあなあ、アキバカヨ』

つたくもう！ 一々しつこいんだから！

あたしは慶とは関係無いって、何度も言わせれば気が済むのよ？
一体、このあたしに何の恨みがあるって言うの？ あたしは立川の
事なんか全然知らないし、関わり合いになりたくなんか無いのに。

『あの事』があつてから、立川は何かとあたしを呼び、引き合いで
にして来ては些細な事や面倒な事を押しつけ、言い掛かりを付けて
からかつて来るようになつた。

最初は真に受けて怒っていたあたしだつたけれど、そのからかい
が幼稚でくだらないものだつたから、あたしは徐々に相手をするのが鬱陶しくなつて行つた。

そもそも、立川から嫌な眼に遭わされていたこのあたしが、まと
もに相手をする必要など無いのよ。

だからあたしは素知らぬ振りで無視を繰り返していた。

第9話 切ない意地悪

そんな事が一ヶ月近く続いたある日の事だった。

修学旅行の日程が近付いて、あたしは姫香や亜紀が居る旅行グループの女子メンバー六人で、見学予定コースやお土産について相談していた。

「よーよー、ドバシ、これ何て読むんだ?」

授業前の休憩時間だった事もあり、前回の授業で音読を指名予告されていた立川が、国語の教科書を開き、珍しく真面目な顔をして雑談をしているあたしに近寄って来た。

でも、あたしは立川とは関わりたく無かつたから、雑談に耽つているふりをしたのに、立川の足はけつとも立ち止らない。

あたしは立川が会話に絡んで来れないよう、一際声を張り上げた。

「でさあ、今度の土曜日にな、みんなで旅行準備の買い物に行かな
い?」

「きゃあー、行く! 行くー!」

あたしのピンチを読んだ姫香がすかさずはしゃいで賛成し、一緒に居た亜紀もニコニコして大きく頷いた。

「何着て行こうかなあー

同じ班のかえで、さき、まりな、川を牽制した話題だつたけれど、休日待ち合わせしてのお出掛けに興味を持つてくれて嬉しそう。楽しみにしている修学旅行にプラスして、ちょっとしたイベント提案でみんな瞳がキラキラしちゃってる。

「ね、ね、ね、待ち合わせの場所と時間を決めておこうよ」

「つこで一緒に昼ご飯食べに行く？」

「いやあーん、あたしもそれ賛成いー！」

みんな立川の悪評を知っているし、あたしへの嫌がらせを快く思っていないから相手にしたくなくて、必要以上に会話が弾んで場が盛り上がったのだけれど……

「おい！ 聞こえなかつたのかよ？」

「つた！」

あたしが無視をしたのが気に入らなかつたらしく、立川はポーネールのあたしの髪に結んでいた紺色のリボンを乱暴に引いた。

引き方が悪かつたせいか、リボンは髪に絡まつてしまい上手く解^{ほど}けてはくれなかつた。

いきなり頭を後ろへ引っ張られた状態になり、あたしの身体は椅子ごと後方へと大きくバランスを崩してしまった。

あたしはその場に居た女子の『きやーー』と血の悲鳴と一緒にひっくり返りそうになつたけれど、必死に手足を突っぱねて支え、なんとか危ういところを免れた。

教室のあちらこちらで雑談をしていたみんなが、何事かと一斉に息を潜め、それまでざわついていた教室内が水を打つたようにシン……となる。

「いたた……なにするのよー。」

「よー、無視すんなよ。アキバ系に振られた癖に」

「な?なんですか?」

その失礼極まりない言い方にカツとなる。

真っ赤になつて怒り出したあたしを見て、立川がにやにやと笑みを浮かべながら偉そうに続ける。

「アキバに振られたから、女同士どうひつぶしてんだ?」

「それ言い掛かりじゃん!」

一緒に居た姫香がいきり立ち、それまで静かになつていた教室内がざわざわとざわめいた。

「ま、待つて」

何度も立川と危うい修羅場になつた姫香を、起き上

たあたしは右腕を彼女の方へ伸ばして遮り、黙らせる。この一人、放つておけば本当に殴り合いでもしそうだもの。それに、このままじゃ姫香にいつ害が及ぶか判つたものじや無い。

いつも逃げ腰だったあたしは心を決めて、「ばん！」と机を両手で叩き、その勢いで机から上半身を乗り出した。

「か、勘違いしないでよ！　あたしがいつ慶に振られたって言うの？」

そもそも慶とは単なる幼馴染であつて、付き合ひとか、振られたとか関係ない。

「ほお～、大した自信だぜ。じゃあ自分から振つたってのか？」

「てか、最初っからあたしは付き合つてなんかいないわ！　しつこいわよ！」

立川は腕組みをして、あたしの出方を斜に構えて面白そうに窺っている。その態度が気に入らなくて、立川の腹黒い笑い方に乗せられてカツとなつてしまつた。今まで事を荒立てずに穩便にしておこうとしていたあたしの努力は搔き消されてしまう。

勢いに任せて大声でまくし上げたあたしの視界には、驚いてこちらを見ているクラスメイト……

そしてその中に……慶が居た。

「だあ～とよ。ビーするアキバ系」

あたしの言葉をそのまま受け継いだ立川が、慶の方へ身体の向きを変え、見下した笑いを投げ掛ける。

嘘でしょ……？

後悔してももう遅い。

慶を眼の前にして視線が合つてしまつた瞬間、あたしは自分で言い放つた言葉の酷さに驚いて竦んでしまい、息を詰めて慶の様子を窺つた。

慶と言えば……門田くん達との雑談を急に中断させられたせいか、それともあたしの爆弾発言に怒っているのか判断に迷うところだけれど、少しだけムツとなつていて見えてる。

「どうよ？」

「……別に」

面白がつて立川に対し、慶は面倒臭そうな表情を浮かべて呟くように低い声でボソリと返す。

慶が言葉を発したのは、たつたそれだけ。

休憩時間の終了を告げるチャイムが鳴り、あたし達の遣り取りを中断させられてしまつたクラスのみんなは、慌ただしく各自の席に着いた。

席に着いても、あたしは慶の事が気になつて仕方が無かつた。

なんの感情さえ読み取れなかつた慶の返事を聞き、あたしは自分が言い出した事を棚に上げて、無性に腹立たしくなつて来た。

『別に』……つて。他になにか言い様は無かつたの？

憎らしい立川に、否定するなり冗談で切り返すなり……他に方法は無かつたの？

慶にとって、あたしはその程度の人間だったの？

第10話 弄(いじ)り

「おひやーーー！」

「面へーーー！」

掃除当番の田、同じ班になつた立川と鈴原が教室を掃く簞笥でチャンバラを始めた。あたしはバケツに水を汲み、机を拭ぐ準備をしていの最中だった。

「ハハハーーー 遊ばないでよーーー！」

班員である委員長の福田さんが、机を移動させながら大声を張り上げると、立川と鈴原はブツブツ文句を言いながらも振り上げていた簞笥を下した。

「つたぐーーー わざと遣らなくなつちや帰れないでしょーーー！」

「へーーー、委員長には逆らえねーな。何せ先公にチクるからよーーー！」

「言ひ掛かりだわ！ 叱られても仕方が無いよつた事をするからよーーー！」

福田さんの指摘に、立川達は舌打ちをして鼻息を荒くしたもの、それでも自分達が悪かつたと反省したのか急におとなしくなつた。

あたしはその間、関わり合いたく無い一心で彼等に背を向けて、せつせとクラスの机を拭いていた。

こつもあたしの護衛を引き受けさせてくれた姫香は、歯医者さん

に行くために先に帰っちゃっているし、亞紀もピアノのコンクールが近いから、帰宅せずに直接レッスン教室に向かってしまい、運悪く残っているのはあたしだけ。

「お、土橋！ これ頼むわ

「え？」

何の前触れもなく声を掛けられて、あたしは素直に振り返ってしまった。

瞬間、眼の前が真っ暗になり、じめじめと濡れたものがあたしの顔面に直撃する。

「こよつしゃああーー！」

「ナイスコントロール！」

あたしの顔を襲った『それ』が、ばさりと足元に落ち、男子一人の歎声が上がった。傍で福田さんの息を飲んで硬直している。

「…………？」

あたしの足元には、使い古された真っ黒くて汚らしい雑巾きたなが転がっていた。

まさかとは思ひけれど、さつも顔に直撃したのは、もしかしなくても……この雑巾？

自分の眼を疑いたくなるような状況に、ぞつと悪寒が奔った。

どうして？

立川はどうしてあたしを眼の敵かたきに……するの？

夢なら早く醒めて欲しい……あたしは何度も何度もそう願つたけれど、これは紛れもない、そして信じたくない現実だった。

「……もう……嫌だ……」

あたしが立川に何をしたって言うの？ 先に突っ掛かつて来たのは立川の方じやない。あたしは絡まれたく無かつたから、ずっと逃げて無視していただけなのに……

立川は乱暴だとは聞いていたけれど、クラスで直接被害に遭つているのははどうやらあたしだけみたい。品行方正の言葉からは全くかけ離れた立川だけど、どうしてあたしばかりがこんな眼に……

「ど、土橋さん……だ、大丈夫？」

「う……うん……」

福田さんが心配して声を掛けてくれたけれど……空元氣で平氣そくに返事をしてしまったけれど……こんなの……こんなの、大丈夫なんかじや……無い。

「あ～あ、泣いちゃった。よー立川、お前のせいだぞ」

一緒になつてふざけていた鈴原も、あたしの涙に驚いて掌てのひらを返す

みづて立川を咎める。

「はああ？ なんで俺？ つか、俺はちゃんと声掛けて投げたんだぜ？」顔で器用にキヤッチしたのは土橋じゅん

「こや、 けどよお」

「受け取つ損ねたやつの責任まで俺のせいか？」

鈴原が『あんまりじゃないか』と呟いたけれど、立川は少しも悪びれた様子は無かった。それよりも、あたしの反応の鈍さを指摘して、もつとからかおうとしている様子が窺える。

あんなやつの前でなんか、泣いたりなんかするもんか！…………あんなやつなんか……！

やつ思つていたのに、悔しくて、悔しくて……

「やつで向をしてくるー。」

「うわ、 やべ。 山本じゅん」

気配を察して、隣のクラスの学年主任があたし達のクラスに遣つて來た。

「先生！ 立川くんが……」

「またお前か？ 立川あー！」

福田さんの報告で、山本先生が立川をきつく叱つて居る声がするけれど、あたしはそれどころじゃ無かった。止め処なく熱い涙が溢れ出て、煙となつてぱたぱたと床に零れ落ちる。

どうして立川はあたしに酷い事をするの？　どうしてあたしじゃないと……いけないの？

頭の中で、いつもあたしを助けて庇つてくれる姫香や暁紀の顔が浮かんだ。そして、どうしてだか自分でも判らなかつたのだけれど、慶の顔が浮かんだ。

小さかつた頃はあたしがよく見守つてあげていた慶なのに、その慶に心の中で無意識とは言え、このあたしが助けを求めてしまつただなんて……どうかしているわ。

「立川、立川！」

先生に促され、立川があたしの方を見た気配がする。

「…………めんなさ…………？」

「土橋、立川も反省しているようだから、許してやつてくれないか？」

消え入りそうな声で、立川はあたしに謝つた。でも、その言葉には心が籠つておらず、先生から強制されて仕方なく言つたのだと……誰もがそう思える様な言い方だつた。

それでも先生は立川を許して遣れと言つてゐる。

「……はい」

あたしは仕方なく頷いた。^{うなずく}

立川がクラスに居る以上、こんな嫌がらせがずっと続くのかな？
もうこのクラス嫌だ。立川の居るクラスなんて居たくないよ！

ところがその日を境に、立川はあたしを弄つて来なくなつた……
と言つた、立川の方があたしに対しても完全無視をきめ付けている。

まるで狐に化かされたような気になつてしまつたけれど、あたし
にとつては眼障りで鬱陶しかつた立川が自分から離れてくれたのは、
歓迎すべき事だ。

不思議に思つたけれど、これ以上立川の事を気にしていたら、今
度は間違いなく本腰をいれていじめられそうな雰囲氣だつたから、
気にならないでおこうと思つた。

第11話 トラベル トラブル？

「香代、忘れ物は無い？」

「うん、大丈夫だよ」

初めての修学旅行。

初日は船で瀬戸内海を渡り、広島の大和ミュージアムに平和祈念公園から山口の秋芳洞に行つて宿泊。一日目には下関の海響館。そしてあたし達のお目当てである福岡のスペースワールド。

全行程は一泊二日で短いけれど、あたし達にとつては五年生の時の少年自然の家に次ぐ、お泊りのワクワク一大イベントだった。

旅行へ行く六年生はいつもよりも早い集合時間になつていて、今日は集団登校じゃない。

あたしはこの旅行の為にお母さんから買つて貰つたパステルピンクの大きいリュックを背負つて、履き慣れているスニーカーに足を通し、玄関で見送ってくれるお母さんとお父さんを振り返つた。

「まだ六時だよ？ 今からだと少し早くないかね？」

新聞紙を片手に持つたお父さんが、玄関脇の下駄箱の上に置いている置時計を見てそう言った。

「ん、でも班の子達と正門で待ち合わせするよりこじらか」

「お隣の慶くんと一緒にじゃないの？ なんならお母さんが車を出して慶くんと一緒に正門まで送つてあげましょつか？」

「いやだ。止してよ。小さい子じゃないのに」

「幾ら夜が明けるのが早いからと言つても、午前六時の外出は人気ひときが無いし寂しいからと、お母さんは心配する。

「大丈夫よ。ちゃんと防犯グッズ持つているもん。じゃあ、行って来るね？」

あたしはリュックの横にぶら下げている、キーホルダー型の卵型防犯ブザーを見せてそう言つて、お母さんの心配を余所にそつと家を出でしまつた。

立川の弄りも無くなつたし、あたしは楽しい学校生活を再び送れるようになった。

あの後、やつぱり氣になつてお母さんに話したら、お母さんは笑つていてぜんぜんあたしの事を取り合おうともせず、心配する様子でもなかつた。

『あんたがもう少し大きくなつたら、その子の気持ちが少しさは判るかもしね？ まあ、遣り方が少しばかり乱暴だけど……男の子だから……ねえ』だなんて。

乙女の顔に雑巾を投げ付けられたのに、お母さんはどうして立川

の肩を持つたりするんだろう？

あんなヤツは女子の敵よ、敵！　こいつから無視してやるんだからー。

らー。

修学旅行の出だし午前中は順調で、あたしにとつては見るもの聞くもの総てが新鮮で興味深かつた。

さすがに午後からの広島の平和記念公園は別で、物凄く怖かつた。

『核』があんなに凄い威力のもので、戦争がどれだけ怖くて悲しいものかを思い知られて、なんだか怖くて堪らない。お陰で今日はせっかくの旅行なのに、怖くて眠れそうにないし、眠つたら眠つたで怖い夢にうなされそうな気がして、あたしは余計に怖くなってしまった。

そして、もうひとつ不安な事があたしに降り掛かりそ�で、氣になつて眠れそうにない。

もうひとつ不安は……あたしの体調の事。

平和記念公園から秋芳洞近くのホテルにバスで移動している間に、あたしは少し気分が悪くなつて、窓際の姫香と席を代わつて貰つていた。

なんだか身体がだるくなつて来ているみたいな気がするし、喉が

やけに乾く。それに……何だかお腹の下の方が痛いよつな気も……する。

もしかしたらとお月様を疑つてみたけれど、先月まで順調にきつかり月末の一十五日で来ていたから、今月はまだまだ先だと思つて安心していた。だから、準備なんとして来なかつたのに……

「いたた……」

「香代おー、大丈夫？」

心配した姫香達が不安そうにあたしの様子を代わる代わる見に来てくれる。彼女達が凄く心配してくれているのは判るし、嬉しいのだけれど、こう卒中見に来られると『平氣だよー』と言ひつ元氣も忍耐も無くなつて、挫けてしまいそうだわ。

そう思つていたら、バスの斜め前に座つていた慶と偶然視線が合つてしまつた。

「おい、おまいも心配なのか？」

隣に座つていた門田くんが、にやにやしながら慶を冷やかすけれど……慶はあたしの方をじつと見詰めて表情一つ崩さずに、門田くんの冷やかしにさえ全く応じなかつた。無表情……といまではいかないけれど、なにかを言つたそな……心配そうな表情を浮かべているように思えた。

慶もあたしの事を気にしてくれているのかな？ それとも、今朝の集合の時に、慶を誘わずにさつと行つちゃつたから、もしかす

ると怒りているのかしら？

途中休憩で立ち寄ったドライブインのお手洗いで、あたしの心配は現実になってしまった。

もう……なんて最悪なの？

あたしはこっそり姫香達にSOSを打診して、みんなから好意の『寄付』を貰つたけれど、持つて来ている子だつてみんな自分の為に持つて来ている。それでなくとも荷物がぎゅうぎゅうで一杯なのに、他の子の予備なんか持つて来る余裕なんか無いだらうし、あたしだつてそんなことはしないわ。

でも、貰つた『用品』の数は、お泊りの初日で逆算しても足りそうに無い。

今まで恥ずかしくて、お母さんに買いに行つて貰つていた『用品』。修学旅行だから、常に何処からか男子の眼もあるし、あたしが買ひに行くだなんてとても恥ずかしくて行けないわ。

まあか、こんな日に来ちゃうだなんて、困っちゃうよ。

……どうしよう。

その日、あたしはとても旅行を楽しめた状態じゃ無かつた。

真剣に困っていたあたしは、宿泊ホテルでみんなが委員長の宮田くん達の部屋に遊びに来るよう呼ばれた時に、何故か慶から指名されて、慶達の部屋にそそと来るよう呼び出されてしまったの。

第1-2話 母からの…

みんな富田くん達の班の部屋に集合してしまい、他の部屋はシンとして、気味悪いくらいに静まりかえっていた。

通路に出たあたしは、人の気配がしなくなつた幾つもの部屋の前を、足早に通り過ぎる。

途中、みんなが集まつて居る部屋からは、ガヤガヤと騒々しい声が漏れ聞こえていて、他の部屋とともに対照的だつた。

あたしは体調が悪いからと書いて、姫香達には先に部屋で休みたいからと断り、頃合いを見計りつて慶の居る部屋に向かひと壁に隠れながら遣つて来た。

「慶？ 居るの？」

みんなが居る部屋の二つ隣にある慶の居る部屋のドアをノックして、あたしは周囲を気にしながら小声で問い合わせた。

「ああ、僕だけしか居ないから、入つていいよ？」

中から慶の声がした。

こんな時に、一体なんの用事なのかなと不思議に思いつつ、あたしがドアをそつと押し開けた。

「わ？」

ドアを開けた途端、すぐ眼の前に慶が立っていた。

「驚かして」めん。これ……今朝、おばさんから預かつて来たんだ」

慶はそう言つと、四角いスーパーの紙包みがすっぽりと入つた、小花柄の布製手提げバッグをあたしに差し出して來た。

大きさの割には物凄く軽くて、ふわふわしてて……？

たちまち、それがなんであるのかが判つたあたしは、頬がチリチリと熱くなつて来るの感じた。

「なつ？ ち、ちょっと慶！ これって……？」

「渡して來たのはおばさんだよ」

「これが何だか判つて……」

そう問い合わせると、慶は少し赤くなつて顎を引いた。

あたしは慶の表情を見るなり、カツと頭に血が上り、身体が戦慄わなないた。

なに？ 慶は今朝からあたしのお母さんから預かつていた『用品』を、あたしに渡そうと思って、ずっとあたしの事を見ていたの？

「あの……や、悪いんだけど僕に八つ当たりしないでくれる？ 僕は香代のお母さんから『これを渡して』って預かつただけだし、それに……僕には母さんも美咲も居るから、だいたいの事は、その…

…知つていいんだ。保健体育で習つたし、美咲がお腹が痛いって言つて毎月機嫌が悪くなるから」

「で、でも……でも……」

慶から受け取つたあたしの手が震えた。

慶の一言々が信じられない。

美咲さんは慶の年の離れたお姉さん。お姉さんが居れば、女の子のお用さまま当たり前のものだと思つちやうのかな……？

でも、慶は口では平氣だつて言つてはいるけれど、顔は正直に赤くなつて俯いてしまつてはいる。平氣だつたり、どうじてひりやんと眼を合わせて言わないので?

こんな所に呼び出して、何かと思えば……

「平氣なんかじゃ……ないでしょ?」

「や、そんなこと……」

否定しておきながら、慶はあたしを直視出来なくて居心地が悪そにソワソワし、視線も定まらなかつた。あたしは慶の氣配りが俄にわかに不愉快に思えて嫌になり、堪らなくなつて来た。

「慶の嘘吐き!」

気になつてはいる癖に!

やう言い捨てると、ぱつと身を翻して自分の割り当てられている部屋に駆け戻った。

用意されていたお布団に潜り込むと、横になつて身体を丸める。そして、たつた今慶から手渡された『用品』をぎゅっと両腕で抱き締めた。

恥ずかしくて身体が燃えるように熱い。このまま燃えて消えちゃえばいいのに……

結果的には物凄く助かったのだけれど、それでも頭に血が昇つて腹立たしかった。

お母さんもお母さんよ！ あたしを車で送つてあげるだなんて言つておいて、こんなのを慶に持たせてしまつんだから！ どうこう神経しているのよ！

あたしが恥ずかしい思いをするだらつひで、ビリして判つてくれないの？

受け取つた慶も慶だわ。

もつ……慶も立川と同じよ。男なんてみんなデリカシーが無くつて……嫌いっ！

どのくらい経つたのかな？

* *

通路からガヤガヤと雑談が近付いて来ている。

「香代おー調子はどう?」

姫香達が真っ先に声を掛けてくれた。

あたしは寝起きでほんやりしたまま「くんと^{ひなす}頷き、大丈夫だよと伝えると、同じ班の子達が、みんなホッとした表情を浮かべた。

「『めんね？　あたし達だけ楽しんじゃつて』

「ううん、いいのよ。みんなが楽しんでくれた方が、却つて心配されるより、楽しんでくれた方が嬉しいもの」

そして、あたしはみんなが集まつた時の事を聞かせて貰つた。

男子による一発ピン芸から始まり、結構盛り上がつたかくし芸大会になつたそうで、途中何度か先生が部屋に遣つて来て、厳重注意を受けのだと聞かされた。

しかも、解散直前に『シメ』だとか言つて、『あの』立川を含む五、六人がまくら投げを遣らかして女子まで巻き込む大騒ぎになり、遂に学年主任から怒られてしまつたと聞かされた。

首謀者の数名は、今も通路に立たされていると聞かされてて、あたしの笑いを誘つた。

「そろそろ、秋庭くんが遅れて来たんだよ」

不思議そうに言った亜紀の一言に反応して、あたしの心臓がどきりと大きく脈打った。

慶はその……あたしにお母さんから渡された物をあたしに届けるために、みんなが集合していた部屋に行けなかつたんだつたつけて……

「ひい、亜紀」

姫香の突っ込みをあたしが不思議に思つていて、慶はお手洗いに入つていて遅くなつたのだそつだ。同じ班の門田くんが本人よりも先にその事をみんなに伝えていたから、遅れて遣つて来た慶は男子のから拍手喝さいを浴び、ついでに下品なネタに困らされていたと詰つのだ。

……嘘よ。

慶は、あたしの為にみんなと離れて遅れてしまつただけなのに、クラスのみんなからかわれていただなんて……

結果的に、あたしは慶にも思わぬ迷惑を掛けてしまつた事になるのだわ。

それからといつもの、あたしは慶と視線を合わせられなくなつてしまつた。

慶がかさばる荷物を持ったまま、まる一寸どりやつてあたしに渡そうかと悩んでいて、出来る限りの気遣いをしてくれたみたいだつ

たのに、あたしは許してあげる事が出来なかつた。

クラスの担任は男の先生だつたから、とても相談できそうに無かつたけれど、それでも自分でなんとかしなくつちゃと、勇氣を出して買いに行こうと思つていた矢先だつたのに。

第1-3話 バレンタイン…（前編）

あれからほぼ一年近く、あたしは慶とは殆ど口を利かなかつた。

利かなかつたといつよりも、あたしが利きたく無かつただけで、慶からは相変わらずあたしに平気な顔をして話し掛けて来るし、何事も無かつたみたいに振舞つていて。あたしが慶の話をまともに取りあおうとはしなかつただけなのだ。

修学旅行のあの事は未だ誰にも知られてはいないし、みんなが宮岡君の部屋に集合していた時に、あたしと慶が会っていたなんてことも、誰にも知られてはいない。

ただ、あたしの近くに居る姫香と亜紀はあたしの変化に気が付いたらしく『どうかしたの？』と聞いて来たけれど、慶の話題を振る度に不機嫌になるあたしを嫌つてか、それともあたしの事をライバルの射程外だと思って安心したのかは定かじやないけれど、あたしの前では余り慶の話題を口に出さなくなつていた。

「ねえ、週末に菓子夢のショーカジムラティエにチョコを見に行かない？」

「えへ、でも自転車だと、ちよつと遠いよー」

「お母さんがお店の近くで用事があるんだって。三十分くらいだけど、行かない？」

「行くうー。」

三人の中でも一番の甘党であり、市内のお菓子屋さんがオープンすれば必ず行ってチェックを欠かさないと誓いつゝ、自称スウェーツ評論家の亜紀の提案に、早速姫香は賛成した。

小学校最後のバレンタイン。

亜紀は密かに慶への想いをずっと温めて続けているのだ。

姫香はと言えば、広く浅くをモットーに、田屋を付けた男子へのアプローチに余念が無い。本人は否定しているけれど、慶の事も少しは気になっているみたいで、何かと言えば慶に絡もうとしているのが見え見えだった。

「香代はどうする？」

「行くんでしょ？」

「え？」

一人の会話を上の空で聞いていたあたしは慌てた。

そう言えば……去年までは慶にチョコあげていたんだつたつけ……市販のミルクチョコを買って来て、湯せんで溶かし、星型やハートの可愛い形をしたアルミニカップに入れてラッピングしたものを。

でも、それは幼稚園に行っていた時に、慶が誰からも貰えないって言っていたからあげたのが切っ掛けであつて……ただなんとなくチョコを義理であげていたのが習慣になっちゃつただけ。

そう。義理よ、『義理』。少なくとも、真剣に想つてゐる亜紀は慶にあげるだらうし、もしかしたら姫香だつて『乗りだよ』なんて言つて『こまかして、慶にあげるのかも知れない。

だから、あたしの役目はもう終わり。

義理であげたりなんかしなくて、慶にはちゃんと貰える子が居るんだもの……そう思つたら、急に胸が苦しくなつた。

あたしは不思議な胸の痛みを感じながら……それでも一人の提案を拒否した。

「あ……あたしは……バス」

「ええええ～？」

姫香が大袈裟に驚いた。そして『香代も秋庭くんにあげるのじやなかつたの？』と付け足した。

『も』……つて事は、姫香も慶にあげるつもりだつたんだ。だつたら尚更あたしがあげるまでも無いじゃない。それにあたしが参加すれば、チヨコをあげるライバルが増えるだけなのに、姫香はそんなこと気にしないの？

「だつて、チヨコをあげたい男子がいないもの」

「秋庭くんにあげないの？」

亜紀が姫香の言葉を言い換えて、繰り返し聞いて來た。

「うん。悪い？」

乗りの悪いあたしの返事で水を差されたと思つてしまつたのか、一人はそれっきりチヨコや慶の事を口にしなくなつてしまつた。

* *

「じゃあね、また明日」

「ばいばい」

その日の下校時、あたしはいつもの所で一人と別れただけれど、休憩時間の時のチヨコの会話が気になつて、なんとなく家に真っ直ぐに帰る氣にはならなかつた。

あたしは氣の向くまま歩いて……氣が付けば、家と全く反対方向にある高級デパートが立ち並ぶ通りに来ていた。

来週のバレンタインイベントにお密をお店に呼び込もうと、どのお店も必死だ。

あたしはお店から少し距離を置いている路線バスの待合ベンチに座ると、売上に必死なお店の人や、道行く人達をぼんやりと眺めた。

クリスマスもお正月も、門田くん達男子の企画で会場を確保して、姫香や亜紀をはじめクラスのみんなと楽しく過ごせたのだけれど……バレンタインとなると話は別だわ。

バレンタインの本当の意味をまだ理解出来ていなくて、ただ女の子から大好きなチョコが貰える……くらいにしか理解していなかつた頃の慶に、あたしも深い意味を知らずに、ただなんとなく作ってあげていただけだもの。

そんなバレンタインに意味なんか無いわ。『乗り』であげていたチョコは、もう卒業しなくっちゃ……

そう思つては見たものの……

他にチョコをあげてもいいなと思つ男の子なんて想い浮かばなかつた。しかも、なぜか『他の男の子』のキーワードに反発して、刷り込まれたように慶の顔がばんばん頭の中に浮かんで来る。

眼の前を足早に歩いて行く人達の何割かはカップルで、彼氏と一緒に歩いてくれる彼氏が出来るのかしら……ううん、出来て欲しいせそろに微笑んでいるお姉さんも居る。

単純に、羨ましくていいなと思つた。

あたしもいつかはああやつて、腕を組んだり肩を抱いて貰つて一緒に歩いてくれる彼氏が出来るのかしら……ううん、出来て欲しい。

そう思つていたら、唐突に眼の前を通り過ぎたカップルの男の人の顔が、慶の顔に見えた。

「……」

なんで……慶の顔が……？

あたしは一人で真っ赤に赤面している事に気が付いた。

別にあたしを意識して見ているはずもないのに、道行く人達から見詰められた気がして、更に恥ずかしくなってしまった。

第1-4話 バレンタイン…（後編）

一月十四日……遂に遣つて來たバレンタイン。

その日は朝からみんななんだかソワソワしていて、特に男子は落ち着きがない。

「ねえ、見た? 二三宅くん、今年も両手一杯にチョコ抱えて登校して來たわよ」

一組に偵察に行つた瑞穂が、鼻息を荒くしながら戻つて來た。

「えへ、せっぽつ?」

「いや~ん、あたしももつと早く渡すのだったあ~」

「あたしもー」

「今から渡す?」

「うん。」

「あ、あたしも~」

瑞穂の帰りを待つっていたクラスの女子の殆どが、それぞれチョコを手にして席を立つた。

クラスの女子の大半は六年一組の二三宅くんのファン。

彼は四年生の時にイギリスから帰国して来た男子。お母さんが凄い美人のイギリス人だと聞いている。そのせいか、彼の髪は淡い栗色で、光に透けると金髪に見えるし、瞳の色も黒に近い濃いブルー。

背が高くて頭が小さいアイドル系人形みたいな容貌だ。帰国した当時は日本語が上手く喋れなくて、随分苦労をしたらしいし、望まないじめにも遭つたらしいけれど……基が頭の良い彼だったから、半年も経たないうちに日本語がペラペラになつて、あつという間にクラスに馴染んでしまつた。

彼とは五年生の時に同じクラスだつたけれど、品のある優雅な立ち居振る舞いをする彼の周りだけはいつも空気が違つていた。頭が良くて運動もそつ無くこなせるから、確かに女子に人気があるのは頷ける。去年のバレンタインでは、彼がダントツでトップだつたら、恐らくは今年もそうに違ひない。

「あ～あ、やつぱ今年もこうなるのかよ？ 乗りで告つても実らねーって事、まだ判んねーのかねー？ 競争率激しい『激戦区』なのに」

教室の窓辺に慶と並んで寄りかかっている門田くんが、嫌味混じりにぼやぐ。

あたしは自分の席から見えた二人に視線を送つたけれど、慶があたしの方を見ている気がして、慌ててぱっと顔を逸らした。

「秋庭さん、これ、受け取つて？」

「ん？ あ、ああ……」

「おおつ？ やるじやんチクショー。で、これ何人目？」

「え？」

「雪ひなよ、門田」

顔をそむけたあたしの耳に、慶宛にチョコを渡す女子の声が聞こえた。そして慶の妙に気乗りしていないような声がする。門田くんが傍にいて冷やかしたりするからそうなったのかな？

あたしはその通り取りを聞いただけで、自分が緊張して息を殺してしまった。

だつて、女子の殆どが一組に行っちゃって、手薄になつた今のこの狙い時を逃す手は無いわ。慶の所に行っているのはきっと亜紀だと思つてしまつたから。

さつそく亜紀は頑張つたのね……でも、亜紀にしてはなんだか大膽かも……？

そう思つて視線を戻したら、慶の前には二人連れの女の子の後ろ姿。一人はショートボブの髪で、もう一人はツインテールに髪を結んでいる。どちらも亜紀とは別人だわ。

姫香や亜紀じゃなく、あたしの知らない女の子が慶にチョコを渡している光景に、あたしは畠然としてしまつた。

「受け取つてくれてありがとうございます！」

「失礼しまーす」

その言葉遣いで、女の子達が後輩だと判つた。

慶に受け取つて貰えた彼女達の弾んだ声が教室内に響き、二人は嬉しそうに笑いながら教室を出て行く。

あたしは無邪気な彼女達の後ろ姿を見送つた。

本物の亜紀はどこに居るのかなと思い、教室を見回したら……教室の隅っこで、顔を真っ赤にして尻込みする亜紀と、亜紀を説得しているらしい姫香が居た。あの様子じゃ、亜紀は慶に渡す勇気が無くて、更に後輩の出現で精神的にプレッシャーを掛けられてしまつたみたい。

でも、亜紀には『あの』姫香が居るから、きっと大丈夫。渡せるよ。

そう思つたら、急に気抜けしてしまつた。

な、なあんだ……あたしが心配することなんか……無かつたじゃない。

心配しなくつても、慶つて意外ともてていたんだ……？

予想外の展開を目の当たりにして、席に着いていたあたしの両手が、無意識に机の下で長方形の箱を掴んでいた。

『慶なんかにあげないんだから……』 そう心の中で誓つていたもの……結局はいつものお手製チョコを持って来てしまつた。

チョコのカップが五個一列に並んでいるよう配置している細長い箱の中身は、去年雛乃から教えて貰っていた。生クリームとホワイトチョコのマーブル模様のチョコを、あのまま作らずに忘れてしまったのも……そのつ……勿体無いし。

だけど姫香や亜紀にしてみれば、あたし……立派に裏切り行為している。

* *

「ねえ、亜紀達もつ渡せた？」

「う、うん。なんとか……ね？」

「良かつたわね」

「うん」

午前中の授業が終わり、当番で給食室に行く途中、あたしが亜紀に問い合わせると、照れた明るい返事が戻って来た。

亜紀は、初めて慶と二人で喋った事が嬉しくて仕方ないのだと言う。姫香からかなり積極的にプッシュされていても関わらず、結構尻込みしていたみたいだつたから、あたしは凄く気になっていたのだけれど……無事に手渡しが出来て良かつたわね。

亜紀の成功を喜んだあたしだけれど、反面、あたしの心の中で何

かがほつかりと抜け落ちてしまつたような……不思議な感覚を覚えてしまつた。

それは多分、あたしが持つて来てしまつたチョコをずっと机の中に入れたままにしているから？

渡す心算が無いのなら、そもそも作る必要も無ければ、それを持つて来る必要だつて無いのにどうして持つて来ちゃつたんだら？…

今まで義理で渡すのが義務だと思つていたから、止めよつて自分で決めた事なのに……なのに辛く感じてしまつてしまつて……なのかな？

第1-5話 チョコの行方

午後の授業になつても、あたしは持つて来たチョコの遣り場にずっと座んでいた。

「こんなに座んでしまつのなら、みんなのお皿でだつた一組の二色くそにせつれと渡しておけば良かつたのに……」

やう思つたけれど、自分のチョコがなんだか惨めで可哀想になつてしまふやうな気がする。

第一、その氣も無いのにモヘンに渡そだなんて考える事自体がどうかしてこるし、渡されればモヘンだつてきっと迷惑だわ。

「……？」

あたしは頭の中でモヘンにチョコを渡そとじている図をシルエートしてみたけれど……大きな問題に氣が付いてしまった。

あたし、モヘンどんが、チョコを他の誰にも渡せそうにならない

……

今まで慶にしかあげた事が無かつたチョコ。もちろん『お義理』のつもりだから、お互いに譲まつたシチュエーションなんか無い。

『はー、これ~』『お~ サンキュー』なんて、プリントか回覧板を手渡すようなノリだつたから、『照れ』も無ければ『恥じらい』なんて言ひのり全く無かつたもの。

途端に持つて来たチョコが精神的に『重たく』なつてしまつた。ついでにあたしの胃の辺りもなんだか重苦しい気がして来る。

渡すつもつが無いのなら、どうして学校に持つて来てしまつたのだらう……。ううん、それよりももつと先……

チョコなんか……なんやけつたらんだらう……？

自分で言つて詰までして。

「リリー・香代」

「わや？」

急に頭の上からふぞけ氣味に怒鳴られたあたしは、自分の席で飛び上がりそのままくらじ驚いた。

「なあ～に遠い眼で秋庭くんの方見てんのよー。もつ授業終わつたよ～」

「あ～、え？　え……ええ……」

姫香と並んで左右から挟まれて縮こまつてしまつたあたしは、姫香の言葉に一度驚いてしまつた。

無意識とは言え、あたしが慶の事を見ていろつて言つの？

…………ううふ、そんなはずは無いわ。慶なんか嫌いだもん。慶には重紀や姫香が居るし、あたしさ慶とは単なるお隣さん……なんだかうう。

単なる……

あたしは一学期にあつた修学旅行の嫌な思い出を脳裏よみがえに蘇よみがえらせてしまった。

* * *

『お母さん酷い！ ピーピー慶にあんな物を渡したのよ？』

旅行から帰つて『ただいま』もセレモニー、あたしに恥ずかしい思いをさせたお母さんを涙田で責めてしまった。

『「うんね。本当は車で追い掛けようとしていたのよ。でも一度慶くんとお母さんがお家から出て来られたね、「香代ちゃんの忘れ物なら慶が届けますよ」って言われて……』

『断れば良いいじゃなー』

『せつかくのご好意なのに断れないでしょう？ それに、慶くんだつてお母さんが手にしていた物を見てすぐに何か判つたみたいだから、隠す事も無かつたしね。美咲ちゃんも居るし、別に取り立てて驚くような事じゃないでしょ？』

『だからいつにも……』

あたしは顔から火が出そうなくらい恥ずかしくなってしまった。反論しようとするのだけれど、余りの怒りに言葉が上手く浮かばない。

お母さんはそんなあたしを見て、少し困ったような顔をした。

『女の子のお用様は香代が思つてこるよつに、恥ずかしくて不潔なものかしら？ 慶くんのお母さんは、女の子には必要で大切なものとして慶くんに伝えているわ。香代は渡して貰つた時に、慶くんから何か嫌な事を言われた？』

『……………』

そんなこと……無かつた。

慶は少し恥ずかしそうだつたけれど……からかつたり、その事を他の男の子に喋つたりはしなかつた。それどころか、あたしに手渡す為に、みんなとの集合に間に合わなかつたのを、自分のせいにしてくれた……

『女の子は、旅行や体調の変化で急に周期が変わっちゃうって事がよくあるの。お母さんがうつかりしていたわ。気が付くのが遅れて「めんな」？』

あたしはそれ以上、お母さんを責められなくなってしまった。

でも、恥ずかしい思いはしてしまつたわけ……。このビーナスもなりそうにない不快感のせいで、以後、あたしは慶を避けるようになってしまった。

慶は全く悪くない。

だけど、お母さんからの話を聞かされても、どうしてもあたしは慶と視線を合わせる事が出来なくなってしまったのだ。

* *

「ねえ、香代はもう渡したの？」

重紀から不意に質問されて、胸がドキリと高鳴った。

「え？　あ、やあ……べ、別にあたしは、そ、そんな……」

曖昧に言葉を濁したあたしは、無意識に机の下へ隠していたチョウを触わった。

「なに？　怪しいな」

「な、なんでも無いたら。大体あたしはバレンタインだなんて興味無いし、それっ？」

あつといつ間に姫香の手が伸びて、あたしの机の中に入った。

あたしが軽く触れていた箱を素早く探し当てるど、それを握つて取り出した。

「あつー！」

「ふふ～ん、やあ～っぽし持つて来てるじゃない。もー、香代ってば、素直じゃないんだから」

「ちよ、ちよっと姫香…」

あたし達は小競り合いになつた。

ファンシーショップで買った、小さくて可愛い熊が一杯印刷されているクリーム色の包装紙に水色のサテンリボンを飾つていのチョコの箱にクラスのみんなの視線が集中する。

みんなが見てる……そう思つた瞬間、あたしはとっせに慶を見た。

慶は不思議そうな顔をして、あたしと姫香の遣り取りを見守つている。

慶が見てる……

慶の視線を意識してしまつたあたしは、更に恥ずかしくなつて真っ赤になつた。そして強引な姫香にムツとなる。

まさかこのチョコを慶の眼の前で披露して、姫香と引っ張り合つ破田になるだなんて。こんなのつて……無いよ。

「やだ、姫香放してよ。」

「そうムキになりなさんなつて

姫香はウシシと笑つて、妙に嫌らしい眼付きであたしの困った表情を窺つている。

「嫌なものは嫌なのよー。」

「まあ、まあ」

「あつ？」

お互に手を緩めなかつたのがいけなかつたのだ。

遂に包装紙と箱が破れて、中からカップに入ったあたしのチョコが、勢い良く教室内に飛び出して宙を舞つた。

第16話 捺されたチョコ

「ああ……！」

あたしは宙に舞つた自分のチョコを眼で追い掛けた。

五個入っていたチョコのうちの一 個が箱から勢いよく飛び出して、教室の床に落ちてしまつ。

「うひ……うめん！ 香代ひ！」

さすがにこれはいけないと思ったのか、姫香は両手を自分の顔の前で合わせてあたしを捕むように平謝りする。

あたしとしては、誰にも渡すつもりがなくなつていたチョコだもの。別に食べられなくなつたって……いいもん。そのつもりも無かつたのに、勝手を持って来てしまつたあたしが悪いのだし、こんなことになつちやつて逆に姫香が可哀想に思えて来る。

「い、い、いよ。別にそれ持つて帰らうと思つて……た……？」

チョコを持つて来ている時点で、あたしは姫香達に嘘を吐いて裏切つているもの。そんなあたしが、謝る姫香を責める訳にはいかないわ。

落ち込む姫香に慌てて言葉を掛けようとしたけれど……でも、ちよつとだけ悲しくて、まともに姫香と視線を合わせられなかつた。

それに、クラスのみんながずっと見ている眼の前で、チョコを落

とじてしまつたもの。

あたしは所在なく視線を泳がせてしまい、床に転がつたチヨコの一つを見付けて肩を落とした。

すると、男子の履いている青いゴムの縁取りがしてある上靴^{ショーズ}が歩いて来て、落ちたチヨコの前で立ち止まつた。

あたしはその上靴が容赦なくチヨコを踏み付けてしまつのではないかと思つてしまい、悲鳴を上げそうになる。

ところが、立ち止まつた上靴の持ち主は、上体をぐつと屈めて落ちたチヨコを摘まみ、拾い上げた。

「ふーん、今年のはアレンジしてんだ……」

「な……？」

あたしは、チヨコを拾つた相手を見て驚いてしまつた。

そろそろ散髪すればいいのにと思うような黒い髪に、部活で毎日日焼けして下地を作つてしまつた小麦色の肌。練習している時は眼付きも全く違つてゐるけれど、今は草食動物を連想させるような穏やかな瞳をしている慶が、あたしのチヨコを拾つて眺めていた。

拾つた相手がまさか慶だつたとは思いもよらず、固まつて動けなくなつてしまつた。そして慶が拾つたチヨコをどうするのかが気がなつてしまい、息を飲んで慶の一拳手一投足を見守つた。

「あ？」

慶はあたしの方をちらりと見るなり、拾つたチョコをカップから取り出すと、素早く自分の口の中に放つた。

「あ……あ……」

「たつ……食べた！　お、落としたチョコ……ひ、ひ、拾つて……」

亜紀も姫香も驚いて退いてやっている。

あたし達の^{とが}咎めるような視線を感じた慶は、珍しく一ヤリと不敵に笑つて見せた。

「うん？　こんな三秒以内に拾つて食べれば大丈夫だつて。それに、カップに入っているし、大丈夫だよ」

慶は口をもぐもぐさせながら、落ちていたもう一つのチョコも拾つて食べてしまった。

「美味かつたよ。はい、『いい』で、その手に握り締めてると交換^{つかわ}な？」

「う……」

「はい、これ」

落ちたチョコを拾つて食べられてしまつた事がショックだったのじやなくて、あたしは慶に食べられてしまつた事の方がショックが大きかったのに……

あげのを諦めていたチョコだったのに……

それまで見た事が無かつた慶のワイルドさを田の当たりにしてしまい、あたしは完全に気圧けおされてしまった。思わず握っていた破裂箱を慶の言ひ通りに差し出して、慶の手にしたカップの屑くずと交換してしまつ。

「おー、アキバケイ。今日マート整備だから先に行くぞー」

「ああ、待てよ、今行く。じゃ……」

先に教室から門田くんが出て行つた。

慶も今日は準備当番らしく、破れてボロボロになつてしまつたあたしのチョコを、バッグに押し込むと、急いで門田くんの後を追つた。

……一体どういぢつともりなの？

慶が言つ『三秒以内』説、二つ目のチョコは三秒以上落ちているから当て嵌はまらないし、説得力が無いしわよ？

「あ……あ……」

あたしは予想外の出来事に、開いた口が塞がらない。

「いや、ちよ……」

「かつ……」

姫香と亜紀の蕩けるような声で、あたしはハツと我に返った。見れば、姫香も亜紀も顔を赤くして慶の消えて行つたドアに向ひて、うつとりと視線を送つてゐる。

渡すつもりが無かつたけれど、結局は慶の手にチョコが渡つてしまつたと言つのに、一人とも怒らないの？ 一人が想つてゐる『慶に』……なんだよ？

「女の子に恥を搔かさないだなんて……さすがは秋庭くんだわ。やっぱあたしの眼に狂いは無いのよ」

「だよねー」

そう自信満々に言い切つた姫香は、今日何人の男子にチョコを配つていたのよ？まあ、亜紀は別だけれども。

あたしは……

あたしは一人とは少しだけ違つていた。今度こそお約束行事を止めようと思っていたのに、結果的には成り行きとは言え、また慶にチョコをあげてしまつたのだしちゃ……

落ちたモノなんか拾つて食べたら、お腹壊すんだから……

落ちたモノなんか拾つて食べたら、お腹壊すんだから……

「……あれ？」

姫香達の様子を微笑ましく思つて見ていたら、なんだか胸がドキドキしちゃつてる。

なに？ ここの動悸は？

クラスのみんなが見ていた……から？

意識したくはなかつたけれど、気にしちゃ 駄田と思えば思つほど
ドキドキが治まらないくて苦しくなつてしまつのに、お互々意識してしまつ。

以来、慶と顔を合わせればこのドキドキが起るようになつてしまつた。お陰で慶とはずっと顔を合わせられなくなつてしまい、あたし達はそのまま小学校を卒業して、地元中学の藤沢中学校へと進学した。

第17話 入部の動機

あたし達が入学した藤沢中学校は、市内でもかなり部活動に力を入れている中学校。部活動の三分の一が運動系で、県大会や全国大会にもランギングされているほど知名度が高く、高校の推薦入試では有利な位置を占めていた。

部活に運動部を選べば、自己の運動能力を高めるに規則正しい生活が前提となるため、藤沢の生徒は他の中学生よりも自己管理に優れていると、卒業生を受け入れる側から好印象を持たれている。

「どうしようか……」

入学式の後の部活動見学で、あたしは少しだけ迷つて溜息を吐いた。

「なにが？ ねえ、部活は当然軟庭でしょう？」

あたしの咳き声が聞こえても溜息が聞こえなかつたのか、姫香がにんまりと笑つて、部活案内のパンフを読むあたしの顔を覗き込んで来た。

笑い方が妙にいやらしく、下心ありに思えてしまいあたしは退いてしまう。

「な、なによそのやあ～らしい顔はあ

「ふつふーん、だつてえー秋庭くんはもう入部してるわよ？ ほら

「ええ？」

入部つて……さつき入学式が終わつたばかりなのに？

あたしは姫香が指した運動場の方を見た。

小学校よりも一回り大きくて広い運動場では、野球部とサッカーチーム、陸上部がそれぞれ分割して練習を始めていて、あちこちで積極的に新入生を勧誘する姿が見える。そして運動場と繋がっているけれども……校舎で『L』字型に区切られる奥まつた場所にテニスコートがあり、そこで男子先輩方が練習をしているのが、校舎越しに少しだけ見えた。

ラケットのガット中央に当たる、独特なボールのインパクト音が校舎の壁に反響している。

姫香は慶がその男子先輩方に混じって練習していると言つのだ。

* *

『僕さ、お父さんみたいにテニスの大会で優勝するんだ……』

小学生の声変わりする前の慶の声が、頭の中で急に蘇つた。

四年生に上がる年の春休みに、お仕事の都合で慶のお父さんは、遠い名古屋へ行つてしまつた。

小さい頃からお父さんっ子で泣き虫だつた慶なのに、お父さんが出発するまでずっと我慢していたみたいで、お父さんが出発した後、慶のお母さんとお姉さんは家に戻ったのに、慶だけは門の前で車に向かっていつまでも手を振りながら泣いていた……

あたしが心配して慶の所に行くと、慶はあたしに背中を向けたまま、片手でぐいと涙を拭いて振り返り、無理矢理引き攣つた笑顔を浮かべた。

その時、慶の右手には、お父さんから貰つたと言つ金色のメダルが納められている四角いケースを持つていて、あたしに見せながらやつ言つたのだ。

『いつかお父さんと試合が出来たらいいなって……約束したんだ。だから、香代も一緒にやつくりへ。』

『一緒にやつくりへ……』

『一緒に……』

慶の言葉が繰り返して頭の中でリプレイされる。

その時は慶に誘われた勢いで入部なんかしちゃつたけれど……今、冷静に思えば、なんであたしまでがテニスを遣らなくちゃいけないの？ と考え込んでしまつ。

でも、それからの慶は人前で涙を見せたりしなくなり、泣き虫の慶はどこかへ消えてしまった。

* * *

「姫香あー、香代おー」

呼ばれて声のする方を見ると、亜紀が息を弾ませながら運動場を校舎沿いに駆けて来るのが見えた。

「やっぱ、本人だつたでしょ？」

「うん！ 姫香が言つた通りだつたわ。でもああやつて見ると、秋庭くんつて主将遣つていただけあつて、さすがだわ。上手いんだね？ 先輩達に混じつて練習していたのに違和感無いもん」

「でしょ？ でしょ？」

一人は興奮して手を取り合つと、声にならない歓声を上げてその場でぴょんぴょん跳ねた。

「……」

……まるでアイドルの追っかけだわ。慶つてそんなにカッコ良い？

あたしは一人のはしゃぎっぷりに退いてしまつた。どうしても一人みたいに、慶がカッコいいとは思えない。

だけど……それは小さかつた頃の慶を知つてゐるから？

慶の失敗ばかりしていたのを間近に居て見過ぎてしまつたせい……のかしら？

あたしがぼんやりと入部案内を読んでいる間に、姫香は持ち前の視力で、あの遠方で練習している先輩方に混じっていた慶を見失ったらしい。そして亜紀は姫香の言葉を確認するため、先に練習を見に行つて来たのだそうだ。

「水を差すようで悪いけど、ここには顧問の先生が男女別々で、練習メニューも違うわ。女子は練習量もきついそうよ？」

「うん。聞いてるよ」

「男子よりも女子の方がレベル高いから、脱落する人が多いんだってね？」

あたしの問い合わせを二人は既に承知していたみたいだった。

実際、男子部員に比べると、女子は男子の三分の一。但し、練習量も多くてきついけれど、毎年試合では上位に入賞している。レベルが高ければ遠征も多くなり、必然的に練習量も小学校とは違つて多くなる。時間的・家庭の経済的にも負担が掛り、余裕がなくなってしまう。

あたしはそこまでして部活に打ち込めるかどうか……正直、自信が無かつた。実は去年入部した先輩方の殆どが、顧問の先生と揉めて退部してしまったのを聞いていたからだ。

それに……

四面ある「一ト」を練習量に合わせて男子部と女子部で振り分ける

そうだから、隣のマートには先に入部してしまった慶が必ず居るつて事になるのだ。

第1-8話 香代の悩み

「判つてるわよ。でも秋庭くんが居るから」

「ん、ねえ~」

「……」

二人はタイミングを合わせて大袈裟に首を傾げた。

彼女達はもうとっくに入部を決心しているらしい……でも、やっぱり入部理由は不純な動機のままなのね？

小学校でたつた一年間だつたけれど、二人とも他の部員より熱心に練習していたせいか、見違えるくらいに上手になつていた。

『秋庭くんが居るからテニス部に……』最初の入部動機はかなり不純で問題有りだつたけれど、それでも彼女達はそれぞれ練習を頑張つていたし、最近ではゲームの面白さが判つて来たみたいだつた。

後はもつと試合数をこなして経験値を上げて行く事くらい。あたしが二人に教えてあげられる事はもう無いし、本人達が今以上に上達するよう努力出来るか……だわ。

「ねえ、香代も入ろうよ?」

「う……うん……」

翌紀にブレザーの袖口を引っ張られて歩き出しても、あたしはま

だ迷つてゐる。

慶を見たら、また変なドキドキが始まつやうかも知れない……あたしはそれが怖かつた。

慶を見なければいいと単純に思つていたのは甘かつた。最近では近くに慶の気配を感じただけでドキドキして苦しくなる。

あたしはそのドキドキを姫香や重紀に……「うん、この事は他の誰にも知られたくは無かつた。

だつて、もしかしたら病氣なのかも知れないもの。

…………？

ぬめぬぬむほど胸が苦しくなつて、不安で堪らない。

もう……慶が居るからだわ。慶が居なければ、こんなドキドキに悩まされる事なんか無いのに……そんな酷い事を考えてしまつけれど、聞れば鬱陶しいと思つのこ、ござ姿を見なこと無意識に視線が慶を捜して彷徨つてしまつ。

一体あたしつじばぢづしたんだぢづへ？

あたしつじ、そんなに慶の事が眼障りで……嫌いになつてしまつたのかな……？

慶はなんにも悪くないのに。あたしが勝手に慶を動悸の原因にして、患者にしちやつていのだけじやないのかしら……？

「あの人ガ女子部の部長だよ？」

「え？」

亜紀に袖口を引かれて、されるままに付いて行けば……あたしはいつの間にか運動場の隅を姫香と亜紀に促されて通り、気が付けば慶達男子が練習しているテニスコートの前に来ていた。

あれこれと考え込んでいたのに、あたしは一人にまんまと連れて来られてしまつたのだ。

「今から入部するわよ？」

「ええっ？ ち、ちよつと亜紀ー。あたしは入部するだなんて一言も……」

「遅かつたね？」

「は……はい？」

言い掛けたあたしの言葉を遮るよつに、背後から慶の声が聞こえた。途端にドッキーンと心臓が大きく跳ねて、不規則にあたしの胸を打ち鳴らす。

あたしは自分の異変を姫香や亜紀に知られるのが怖くなつて、オドオドしてしまつた。

こんな時に、なんで慶が……？ な、な、なんで來てるのよ？

慶のお邪魔ムシ！

「あー、アキバケイ。あんたも「入部して練習してんだ。流石はテニス馬鹿だわね」

「『馬鹿』で悪かったな。で？ 三人とも入ったの？」

「えつ？」

その姫香の言葉に、あたしはキョトンとして自分の耳を疑つてしまつた。

だつて、慶が部活練習しているのを真っ先に見付けて知つていたのは姫香だよ？ なのにたつた今見付けたみたいな話し方をして……しかも、三人しかいない時の姫香は、慶の事を『秋庭くん』ってちゃんと名前で呼んでいるのに、本人を前にして他の男子と同じ対応で、タメグチ・あんた呼ばわりつて……どう言う事？

あたしの頭の中は、疑問符が一杯飛んでいる。

あたしはいつものドキドキを持て余しながら、それでも姫香が気になつて顔を上げたら、一度あたしの真ん前に亜紀が居た。

「……」

ああ……亜紀の慶に対する反応は、やつぱり以前と変わつていない。頬を赤らめて俯いてしまつている。

だけど、その亜紀の向こうで慶と喧嘩腰で話している姫香は、いつも姫香とは違つていた。

好きな人の前だと、どうやら普段よりもテンションが上がってしまうて尖とがってしまうみたいだわ。

「あのね、その『三人とも』って何よ？ あたし達はひと山幾らじやないのよ。失礼ね」

「はあ？ 失礼って言われても別にそんな心算じゃ……」

姫香に突つ込まれて慶が困っている。

あたしはその光景が、昔のあたしと慶の遣り取りに似ているように思えてハッとした。

「秋庭！ 次、お前だぞ？」

「あ、ハイ！ 香代、まだなら入部しろよ。じゃあな」

先輩から呼ばれて、慶はさつさとホールに戻つて行つた。

……なにその命令口調。それに、なんであたしが入部を迷つているのを、慶が知つていたの？

二人の前であたしは慶から名指しされてしまい、頬が熱く火照ってしまった。あたしだけ慶から特別扱いを受けてしまい、一人になんだか申し訳ない気がして引け目を感じてしまう。

亜紀はあたしの事を羨ましがり、姫香はと言えば……慶との遣り取りに不完全燃焼だつたらしく、少し不機嫌だったのに、慶が居な

くなつた途端にいつもの姫香に戻つて『秋庭くん、やつぱいにわ…』『だなんて惚氣のろける始末。

「はいはい、入部しないのなら、さつと帰れ。そこでボサーと突つ立つたら、アウトボールが飛んで来るぞ」

不意に背後から注意されて、あたし達は驚いた。

振り向けば、詰襟の学生服を着た慶と同じく背の高い、色黒の男子が立っていた。

第19話 入部

「ちょっと！ あたし達は入部するために来ているんだから。邪魔者扱いはやめてよねー！」

不羨な男子の物言いに、早速姫香が咬み付いた。
か

「へえ、三人とも『男子テニス部』に……か?」

「なつ
…
…
…」

「馬鹿じゃないの？」あたし達がなんで『男子部』なのよ？」

お約束でボケた彼に、すかさず姫香が突っ込んだ。

「あ？ すまん。この一人が『女子部』で、アンタだけ『男子部』に入りたいみたいだな」

『 』

惚けた彼は、真っ赤になつた姫香を指してニヤニヤと笑つてゐる。
偉そうな上から目線で馴れ々しく話し掛けて来るけれど、どこか憎
めないなと思つてしまつるのは、あたし達に對して惡意が全く感じら
れないからだろうか？

「危ない！」

「ボーリ行つたよ！」

練習中の先輩からの声掛け直後に、高く飛んだアウトボールがあたし達を襲つた。上空で小さな点になつていて軟式ボールが、急速にこつちに向かつて落下して来る。

「動くな！」

彼は上空を振り仰いでボールを捉えたままあたし達を一喝^{あおいかつ}して、素早く手にしていたラケットをケースから取り出すと、真剣な表情をしてあたし達の頭の上で慎重に払つて、ボールの落下コースを変えた。

彼によつて球威をいなされたボールは、練習中の先輩方の居るコートに口^{くち}口^{くち}と転がつてネットの端に引っ掛かる。

「サンキュー」

「ういーっす！」

先輩からの挨拶^{あいさつ}に軽く頭を下げる彼。

ふーん、先輩にはちゃんと礼儀^{わきまえ}を弁えているんだ。場の空気を読んでふざけたり、真面目になつたりの切り替えがきちんと出来ているのだわ。そうだと判ると、今までの嫌味も彼の[冗談の範囲内に思えて、良くなかった最初の印象が薄れてしまった。

……一人、姫香を除いては。

彼は何事も無かつたような素振りで、ラケットを再びケースに片

付ける。

「いや、マジでココに居れば危ないって。入部希望なら俺もだから、一緒にに行こうか」

「ちよ、ちよっとおー！だから『男子部』じゃないって！つか、アンタこそ『女子部』に入部するつもり？『一緒にに行こうか』ってナーニ？」

「いんや、誰が『女子部』だよ。男の方はマネジが居ないから、入部希望者は女子も男子も窓口が一つなんだとさ」

『案内するよ』と言つてあたし達の前を行く彼を、姫香は気持ち悪がつたけれど、そういう理由なら仕方が無いわ。

「てか、まだあたしはまだ決めて……」

「はい、ウダウダ言わない。『入部するから』つてさつと言つてただろ？」

「それはあたじょなーーー！」

初対面で叱られた。あたじょなくつて、言つたのは姫香なんだつてば。

「いいじょん。ひと山セツトで」

「まだ言つかあーーー！」

強引な彼に促され、あたし達は奥のコートで練習を始めている

女子の先輩方の所へと連れて来られてしまった。

「いや～女の子が大漁、大漁！ 部活ライフが愉しみだぜい」

今にも鼻歌を歌い出しそうなくらい上機嫌な彼とは対照的に、あたし達三人はやや機嫌を損ねてしまった。しかも、あたし達の事を魚か何かと勘違いしているし。

特に姫香は思いつ切り頬を膨らませて鼻息を荒くしている。

あたしは彼のテンポに乗せられてしまい、STOPを掛けるタイミングを完全に失っていた。亜紀もあたしと同じく退いている。

「先輩、入部希望者四名でお願いしまーす」

「はーい。じゃあここにクラスと名前、連絡先を記入してね

「ハイ」

姫香と亜紀は最初から入部するつもりでいたから別に問題は無かつたけれど、迷っていたあたし今まで巻き込まれ、不甲斐なくも流され……断る事が出来ず、結局入部してしまった。

彼の名は『田村 恭介』^{きょうすけ}。親の事情で校区外の東雲小学校から、この春に引っ越し越して来たのだそうだ。

見覚えの無い顔だわ……と思つていたら、通りでね。

「へー、俺よりも先に入部していた奴が居たんだ。てっきり俺が一番だと思ったのになあー……あき……にわ？……あきにわ？ あきば？」

田村くんが口にしているのは、先に名簿に記入されていた慶の事だとすぐに判つた。名前に振り仮名が無いから彼は呼び方に少し戸惑つていたみたいだつた。

あたし達三人は、これから慶のライバルになるかも知れない田村くんの反応を窺つて、息を潜めた。

「おっ？ これ、アキバケイじやん。なあ〜んだアイツかよー」

そう言つと、田村くんは後ろの男子コートを振り返り、慶の姿を探し出す。

「知つてるの？」

「ああ、試合で何度も……あ、居た居たあそこだ

「対戦していたんだ」

あたしの問い掛けに、彼は黙つて頷いた。

あたしは慶よりも色黒で体格の良い田村くんを見て、直感的にの方が慶よりも強いと思つてしまつた。彼が入部するのなら、慶のライバルになるのかしら……？

急に慶の事が気になつて、心配になつてしまつた。

あたしの表情を読んだのか、田村くんはまたしても「ヤーヤ」と笑いながらあたしの顔を覗き込んで来る。

「何度も対戦してもボツコボ」に……負けんだけよな～「これが

「……はあ？」

彼のわざといらし『聞』で思いつ切り肩透かしされてしまつた。これも田村くんの得意な冗談なのだろうかと、判断に悩んでしまつ。

「女子の更衣室はそこ」。男子は向かいの奥……少し離れているけれど、つき当たつて左が部室よ」

入部手続きを終えた田村くんは、先輩の説明もそんやうにあたし達から二・三メートルほど離れた所で荷物を乱暴に置くと、いきなり制服を脱ぎ始める。

「あやつー」

「ち、ちよつとー、なにココで着替えてるのよー 部室があるでしょうがー！」

「はあ? つか、下に着てるじ。見なきやいこだろ?」

「やつ、やねやひ問題じや……無いつたりあー」

姫香の注意をえ聞いてない。

結構『俺様』な田村くんには、姫香の突っ込みが中々さまになつていらぬよつと思えた。

第20話 本当の姫香

小学校の時より中学校の校区が広いから、クラスの友達や顔見知りになつた人もたくさん出来たし、入部した女子軟式テニス部でも友達や先輩に囲まれて、あたしは充実した中学校生活を送る事が出来るようになった。

入部したテニス部は、小学校での部活とは違つて練習量も多いし、一日にこなすメニューも口を追う毎に増えて行ってそれなりにきついけれど、姫香や亞紀もあたしと同じく、音を上げずに頑張つて先輩方に付いて行く。

だけど、たつた一つだけ心に何かが引っ掛かっていて不快だつた。急に何かのきっかけで大切な事を思い出せそうな気がするのに、それが何であるのかを思い起せない。不思議な焦りを感じてしまい、それが不安を搔き立て、胸が苦しくなつてしまつ。

最近では、みんなとワイワイ騒いでいる時や、あたしが何かに満たされている時に限つて、その奇妙な引っ掛けを持った『何か』があたしの中のを過つて、夢中になつていた会話に突然醒めてしまつたりしていた。

一体、このモヤモヤの原因は何なのよ……？

あたしは何を焦つているのかしら……？ 何を……？

「て、ねえ、香代？ 聞いてる？」

「え？　あ、ああ……うん……で、何だつたつけ？」

「あのね……聞いて無いじゃん」

亜紀の問い合わせに、いい加減な生返事をしてしまったあたしは、姫香に呆れられてしまった。

「……」「めん」

「よお～く聞いててね？　明日、八幡神社の夏祭りに、練習が終わつた部活の一年生同士で行こうつて話していたでしょ？　亜紀はピアノのレッスンがあるから行けないそつだけじ、香代はどうする？」

「い、行くつー！」

どうせ部活が終わつたら、家に帰るだけだもの。家に帰つてもお父さんもお母さんも仕事を持つてゐるから、なかなか帰つて来ないし、毎日独りで留守番してゐるのも寂しいわ。

「やううと思つたわ。良かつたあー、香代が来てくれて

「え？」

意味深な姫香の言葉に、あたしは妙に警戒する。

「だつて、四組の国立さんや中村さんなんか、彼氏を連れて来るつて言つのよ、これつて一緒に待ち合わせても良いけれど、後は別行動になつちやうじやないのよ。他の子とは、あたしあんまり話し

た事がないからさあ……心細くて

「みんな女の子だけでしよう? 七人中、一人だけ? でも、彼氏連れて来るのは違反だよー」

「でしょ? でしょ?」

姫香はあたし以上に興奮している。

『彼氏』

あたしはその言葉が妙に気になり、キーワードとして胸に響いた。

何故だか慶の顔が頭の中であちらつくけれど……あたしの中に現れた慶の顔は、みんな小学生の頃の幼い慶の顔ばかりだった。『彼氏』と言つ言葉を聞いてから、あたしの心は妙にざわついて落ち着かない。

どうして……なのかな?

* *

浴衣を持っている子はそれを着て、学校正門に七時半に集合との約束だった。

次の日の部活が終わつたあたしは、お母さんが用意してくれていた紺色生地に綺麗な蝶が描かれている浴衣に初めて袖を通し、慣れない手つきで浴衣を着た。

あたしが着ていた小学生の時の浴衣は、白地にピンクが基本色のカラフルな手毬模様で、帯もふんわりしたピンクの幅広い帯のちょうちょ結びだつたけれど、今度の浴衣は色も暗くて少し地味かなとも思った。でも、帯は浴衣とは反対色の鮮やかな黄色。後ろの部分が先に結つて出来あがっている帯だから、結び方で困る事は無いし、あたしでも簡単に着る事が出来た。

「……わ……」

着つけを終えて、姿見を見たあたしは少しだけ驚いてしまった。

浴衣を着ただけなのに、あたしつてこんなにお姉さんっぽくなっちゃつた……

お隣の美咲お姉ちゃんみたいで、凄く嬉しくなる。

ついでにお母さんの化粧品を借りようかと思つたけれど……それはこの前に失敗して、お化けみたいになつちゃつたから止めておこうと思い直した。お化粧は、まだあたしには早過ぎるのかも知れないわ。

約束の時間に正門に集まつたのは、七人中六人。そのうちの一人は宣言通りに年上の彼氏を連れて来てい、彼女達二組は早速別行動になつてしまつた。

あたしみたいに浴衣を着て来たのは、浴衣を持っていない姫香以外全員だつた。但し、あたしと一葉だけが足首まで丈がある、昔ながらの浴衣で、他の子達は膝上丈の今風のミニだ。

「羨ましいな……」

そう小さな声で言つた姫香の独り言を聞いてしまい、あたしは悪いような気がして、浮かれていた気持ちが一瞬で萎んでしまう。

何故浴衣を着て出掛ける前に、絶対に行くと約束していた姫香と着て行くものを合わせてあげられなかつたのか……友達なのにそのくらい気を効かせてあげても良かつたのじゃないのかしらと。

「香代おー、もしかして今、あたしに凄く悪いって思つてる?」

「うん」

「気にしないで。あたしだけが持つていなかつたのはそれなりにシヨックだつたけど……でも、よくよく考えたら浴衣が似合つようなあたしじゃないし。良いのよ別に」

「どうして判つたの?」

「だつて、香代つてば顔にちゃんと書いてあるもん」

「え? 何で?」

「あたしに『ごめんね?』つて。でも気にしてくれて嬉しかつたなあー。あたしはもう大丈夫だから、せつかくのお祭りなのに楽しもうよ? ね?」

そう言って、姫香はこいつと笑つてくれたけれど、笑つた姫香の田尻からは、光る涙が少しだけ見えていた。

普段、男子にも気遅れしないで張り合ひくらいの負けず嫌いで、芯の強いしつかり者の姫香だと思っていたけれど……本当は自分の弱い部分を知つていて、それを隠すためにわざと強がつて見せていたんだわ……

一年以上も一緒に居て、少なからず疑つていたのだけれど……本当に……そうなんだ。

あたしはこの時初めて『素』の姫香を見てしまった気がした。

「姫香ああ～～～」

「えやつ？ な、なに？ ビーツしたのっ？」

あたしは思わず姫香に抱き付いてしまった。精一杯背伸びしかやつてるアマゾンジャクみたいで、なんだか可愛く思えたから。

第21話 女神（おんながみ）様のいたずら… 1

あたし達の校区には、市内でも一番大きくて立派なお社を持つ神社がある。福の神である女神様おんながみを祭つてある県内でも有名な神社で、季節の行事がある度に遠方からわざわざ参拝しに来る人も多い。

神社が近くなるに連れて、沿道には参拝する人達が増えて来た。屋台も神社から随分離れた所から、ぽつりぽつりと見掛けるようになつたけれど、朱塗りされた大きな神社の鳥居を過ぎると、もうそこは完全に車進入禁止区域で規制されていた。

普段は車が行き交う片側一車線の道路だけれど、広く余裕を取つて舗装されている道路が歩行者で埋め尽くされているのを見てしまふと、つい参拝が億劫になつて気後れしてしまいそうになる。

左右の道路脇にはいろいろな屋台がびっしりと軒を連ねて、行き交う人達の眼を愉しませた。美味しそうな焼きそばのソースの匂いや、香ばしいイカ焼きの匂いもして来て、鼻をくすぐられたあたし達は誘惑されてしまいそう。

「香代ー、たこ焼き買わない？」

「えー、お参りが先でしょう？ それに、荷物が増えるからまだ駄目だよ」

姫香が堪らなくなつてあたしの浴衣の袂たもとを軽く引く。

本当はあたしも賛成したい所なのだけれど、ここはうちの学校の校区内。まだ明るいからたこ焼きを頬張つている時に、知り合いの

子や先輩に逢うかも知れないもの。

それはちょっと恥ずかしいかなと思つてしまひ。

「ん~、でもね香代」

「なに?」

「一葉達、もうチヨコバナナ買って食べてゐわよ」

「あ……いいなあ~」

一葉達が美味しそうに食べているのを見てしまい、上品なあたしはどいかに消えてしまった。

神社が執り行つお祭り 夏祭りには、昔から健康や農家の収穫などの祈願や厄祓いと言つた目的がある。だけどあたし達にとつては不謹慎だけれども、お祭りイコール屋台が本当の目的になっちゃつていて。そして、もし神様が居てくれたのなら、成績を上げて貢いたいとか、ステキな人と巡り逢えますように……なんて都合の良いお願いをコツソリと言いに来た……くらいにしか思つていない。

「ねえ、みんなは何をお願いするの?」

姫香の質問に、みんなはテストや部活での成績の事や、片想いの彼氏に想いが届きますよつに……つて、やつぱりお約束みたいな都合の良いお願い事が返つて來た。

「ねえ、香代はあ?」

返事を渋っていたあたしに気付いて、姫香があたしの顔をぐぐつと覗き込んで来た。

「ええ？ そりゃう姫香は？」

あたしはもう一人姫香の質問にまだ答えて居なかつた本人に話を振つた。

「あ？ あたし？ よくぞ聞いてくれたわね。あたしのお願いは、今年こそ『意中の力レに振り向いて貰う』ことよ！」

「えー、それって誰？」

「い……いやあ、あのさあ……今のどいうままだ一人に絞しづれてなくつてさあ……」

「それって複数の力レだよね？」

「う……うん……」

莓チヨ「」を頬張つた一葉が暢気に突つ込んだら、さつきの威勢はどうやら……息巻いて答えた割には、しどろもどろになつちゃつて消極的な答えになつてしまつた。

「一体、何人居るのよ？」

「……」

「決められないんだ」

「やだ、香代あたしづか答へさせて、今度は香代の番だよ?」

真つ赤になつた姫香が、慌ててあたしに振つて來た。

「いや、あ、あたし……」

本当は、神様が居てくれるのない、一つだけ願い事があつた。

それは、六年生からあたしがずっと悩み続けている事で、他の子達はもちろん、姫香や暁紀でさえ内緒にしていた事。

以前のみづ、慶と普通に話せるようになつたりにな。

別に慶と喧嘩したわけじゃ無い。あたしが慶の事を自分で勝手に嫌つてしまい、勝手に慶のなにもかもを悪いよつて思つていただけ。慶は何も悪くはないもの。

でも、そんな事を姫香を前にしては言えないとわ。

姫香も慶の事が好きだから。

だから……

「ナ・イ・シヨウ」

「あ～香代、する～い

祭りのお雛子^{ひなこ}が近くなつて來た。

東西の大きな朱塗りの鳥居からお社^{やしろ}までは、双方ともに約一キロほど距離がある。あたし達は屋台に惹かれて寄り道をしながら、やつと田^た的の神社に到着した。

普段は広くて閑散としている境内だけれど、この日は一日限りの夏祭り。日がとつぶりと暮れると、境内のあちらこちらには暖かいオレンジ色の提灯^{ちょうちん}が賑やかに点された。

所々足元を照らす行燈^{あんどう}のような照明も用意されて、行き交う人の足元を照らしたけれど、こう人が多くては足元なんか判らない。

「あー」

「大丈夫？ 気を付けて？」

人混みに揉まれた拍子^{ひょうし}に、あたしは階段があるのに気付かなくて躓いてしまった。見知らぬおばさんから優しく声を掛けられて、恥ずかしくなつて慌ててすぐに立ちあがつたけれども……

「……」

あれ……？

たつた一瞬だと思ったのに、あたしの傍^{そば}に居たはずの姫香達が……居ない。

……やつてみた。姫香達と、まぐれちゃつたみたいだわ……

第22話 女神（おんながみ）様のいたずら……2

あたしは一緒に居たはずの姫香達の姿を捜して、薄暗い辺りを見渡した。

既に姫香達の気配さえ周囲の雑踏に搔き消されてしまい、あたしは一人になってしまった心細さを通り越して、恐怖心すら感じてしまう。

たくさんの人が行き交う波を避けようとして、見知らぬ人と何度も肩や腕がぶつかつた。あたしはその度に「すみません」と言つて、相手と視線を合わさずに頭を下げる。

「あ、カズハ～？ あたし。今ねえ～……」

「！」

あたしと一緒に来ていた『カズハ』と同じ名前を口にした人が居た。

ハツとして声のした方を振り返ると、二十代の女人が携帯に出た『カズハ』さんに話しかけている所だつた。彼女の隣には、赤ちゃんを抱っこした男の人が一緒に居る。

この神社には、今まで幾度となく両親と来た事があつた。普段の日なら、明るい昼間に友達同士で来た事もある。でも、こんなに暗くて人が一杯居る境内で、はぐれてしまつ事なんか無かつた……

一葉の名前を言った人が羨ましい。彼女が手にしていた携帯が、これほど欲しいと思つた事は無かつたもの。なぜなら、一葉も姫香も携帯を持って来ていたから。あたしが今ここで携帯を持つさえいれば、はぐれてしまふ事も無かつたのに。

* *

あたしは中学生になる時、共働きで留守勝ちな事を気にしてか、お母さんから携帯を持たないかと勧められていた。

あたしは既に小学校で携帯を持っていた子を何人も知つていた。けれど、その子達は大抵、両親があたしと同じ共働きで鍵っ子だつたり、母子・父子家庭の子だつたから、携帯を持っているというだけで少し可哀想な家庭環境の子だと言つイメージが出来上がつてしまい、余り良いよには思つてはいなかつた。

だから、あたしも携帯を持つ事で他の子達から同情の眼で見られたくなかつたし、携帯が無いと困ると言うよつな事も無かつたから、その時は必要なんか無いわよと断つていたのだけれど……それはあたしの大きな誤解であり、勘違いなのだと判つた。だつて、中学生になつたら、クラスの殆どの子が携帯を持っていたんだもの。

親から話を掛けられていたにも関わらず、あつさりと自分で断つてしまつたから、やっぱり携帯が欲しいだなんて、すぐには言ひ出せなかつた。

取り敢えず、携帯が欲しい状況になつてしまつた事が無かつたもの。

でも、今は違う。

今は一緒に居たみんなの誰でも構わないから、彼女達への情報が欲しい。

とにかく、姫香達となんとか合流しないと……

お社へ続いている人混みの流れからなんとか離れることが出来たあたしは、眼を凝らして姫香達の姿を捜した。

あたしの視線が行き交う人達に注がれるけれども、眼に付くのはあたしと同じように浴衣を着た女人ばかりだった。

一緒に来た里緒達みたいにミニの浴衣姿の人も居れば、あたしみたいに足元まで裾がある昔ながらの浴衣を着ている人も居る。

しかも、浴衣姿の人には限つて彼氏らしい男の人と連れ添つている。

何組ものカップルを眼にしてしまい、自分の置かれている状況さえ忘れて見入つてしまつたけれど、そこで偶然、あたしと色違いで同じデザインの浴衣を着こなしている綺麗なお姉さんが眼に留つた。

そのお姉さんが他の人よりも一際美人だつたせいもあつたけれど……お姉さんの隣に連れ添つている男の人も、背が高くて結構イケメンのお兄さんなのに、和装のお姉さんとは正反対の普段着Tシャツに穴あきのダメージジーンズ姿。男の人は本当に彼氏なのだろうか、それとも単なる友達なのだろうかと疑つてしまつた。

奇妙なカップルだわと思つてしまつけれど、二人はそんなあたしの視線には気付かず、楽しそうに連立つて歩いている。

「いいなあ……」

思わず羨ましくなつて言葉が出たら、眼の前の景色がぼやけて見えた。

あたしなんか、姫香達とはぐれてしまつて一人なんだもん。

もうこのまま先に帰つてしまおうか……それとももう少し捜してみようか……？ 迷ついたら、左右から人の気配がした。

「あれ～、お嬢ちゃん独りなの〜」

「え……？」

俯いていたあたしは、それが自分に掛けられた言葉だと思つて顔を上げた。

助けてくれるのならこの際誰だって構わないわと思つたけれど、あたしを挟み込むようにして立つているおじさん達を見て、咄嗟に危険だと感じてしまった。

優しそうに声を掛けてくれたけれど、このおじさん達は困つてゐるあたしを助ける為ではないのだと。

「どうしたのかな？」

「あ……お、お友達とまぐれちゃって……」

「ああ、そこつは困つたねえ」

「お兄さん達が一緒に捜してあげるよ」

『お兄さん』……？

見た目よりも、この人達若かったのかな……？ だなんて思つて
いる場合じやない。早くこの一人から逃げ出せないと

「ええ、べ、別にいいです。じ、自分で捜しますから」

「一緒に捜した方が早く見つかるよ？」

「で、でもこいんです。ありがと/or/わこました」

あたしはさう早口で捲し立てる、その場から急いで立ち去つ
とした。

「待てよ。一緒に捜して遣るか言つてんだが？」

「ひ……」

急に口調を変えたおじさんが、素早くあたしの手首を捕まえた。
大きな手でしつかりと捕まえられてしまい、逃げ出せなくなつたあ
たしは怖くなつて立ち竦み、声を出せない。

いや！ だれか……助けて！

その時だった。

「ああ、そこに居たんだ」

あたし達の背後から、聞き覚えのある声がどんどん近付いて来る。

「もー、捜したじやないか。どこ行つてたんだよ」

あたしは今日、女子同士でお祭りに遭つて來た。男子と待ち合わせもしていなければ、彼氏を作つた覚えも無い。

だけどその台詞は、今まで一緒に居てはぐれてしまつたあたしを搜してくれていたようこしか聞こえなかつた。そして、あたしを困らせたおじさん達にもそつ自然に聞こえたみたいだつた。

「よ、良かつたな、見付かつて」

「じ……じゃあな」

言葉とは全く反対に、おじさんは奇妙に口元を歪めると、するつとあたしの手を放して背を向けた。

「なんだ？ 連れが見付かったのかよ……」

背中越しに元氣いつつ、おじさん達は舌打ちして去つて行つた。

「……」

あたしは後から現れて助けてくれた人物を黙つて見上げた。

第23話 女神（おんがみ）様のいたずら…… 3

彼が誰なのかすぐに判つたあたしは、本当は今にも泣き出しへじまいそ�だつたのに……意地を張つて顔を引き攣らせてしまつた。だつて、彼の眼の前では絶対に泣き顔なんか見せたくないと思つたから。

泣き顔を見せるだなんて……そもそもアンタの特許じやなこのよ。

そりでしょ？

慶。

あたしは何度も息を吸つて必死に泣き出すのを堪えた。そのせいか、きっと慶からはもの凄い顔に見えていたのだと思つ。

「あ、あのう……ひょっとして、僕が来て悪かつたのかな？」

「うー」

んな事有るはずないじゃないのよ？

「もしかして、香代怒つてる？」

「……」

喋る事なんか出来なかつた。喋ればきっと、ぱんぱんに脣らんだあたしの涙腺が、容易く緩んでしまつやつだつたから。

だけど……

助かつたわ。

あのまだつたら不審者おじさん達に、どこかへ連れて行かれる所だつたんだもの。

「か、香代つ？」

緊張が一気に解けてホッとしたせいか、あたしは膝に力が入らなくなつて、へなへなとその場に座り込んでしまつた。

助けて貰つたのは嬉しかつたけれど……でも、どうして慶がここに居るの？ それもたつた一人で。いつもの門田くんや田村くん達と一緒にじゃないなんて。

あたしはこここの神様に慶との事をお願いしようとしていたのに……まだお社に行つてお願いさえも告げていないので、神様つてばもうあたしの願い事を聞き届けて……くれたのかしら？

「大丈夫？」

「う……うるさいわよ

慶が身体を深く折つて、あたしの目線まで屈み込んで来る。かが

「こんなに大勢の人混みの中で……慶はあたしを見付けてくれたんだ。そう思つとなんだか氣恥しくなつて、あたしはふいとそっぽを向いた。

「……『めぐ』

「な、なんで慶が謝るのよ？」

かああああつと顔が熱くなる。

謝るのはあたしの方だわ。あたしの方だと判つてゐるのだけど
でも……でも……こんなに急に会つちゃうだなんて、心の準備
がまだなのに……素直になんか……なれないわよ。

「『めん。でもその元気なら、気遣い無用だつたね』

「そんな……そんななんじや……ない」

安心したような慶の穏やかな声がした。

近くでハツキリと聞いた慶の声は……今まで聞いていた声よりも
幾分低くて太い声になつていた。慶と距離を置いてしまつたあたし
の知らないうちに、慶はもう声変わりをしちやつっていたんだ。

「慶いー、その子香代ちゃんだったのぉー？」

「うそ

「じゃあ、先に行くわよ？」

「判つた」

「……」

なんだ。慶は美咲姉さんと一緒にいたのね。

慶が振り返った先を見ると、浴衣を着た美咲姉さんともう一人。美咲姉さんに寄り添っている和服姿の男の人が居る。察する処、あの人気が美咲姉さんの彼氏みたい。

「うわあ……なんて素敵でお似合いのかしら……？」

あたしは慶に助けて貰つていると言つのに、今どき珍しい和装姿のカップルに心を奪われてしまい、見惚れてしまった。

さつきの『浴衣美人』と『不良オトコ』の奇妙なカップルも気になつたけれど、やっぱりあたしはこっちの正統派美咲姉さん達の方が断然素敵でいいなと思った。

「立てる?」

「……」

慶は心配そうにあたしの顔を覗き込むと、あたしの眼の前に掌てのひらを上に向けて差し出してきた。

あたしはスマートに差し出された慶の手に、自分の手が出せなくて、自力で立ち上あがつとしたのだけれど……膝に全く力が入らない。

それほどさつきのおじさん達の事が、怖くて堪らなかつた。あん

な怖い思いなんかさつさと忘れてしまいたいのに、今頃になつて冷や汗を搔き、身体が自然と震えて来る。

「じゃあ、おんぶしようか？」

慶があたしに向かつて、くるりと背中を向けた。

うちのお父さんほどじゃないけれど、慶があたしに向けた背中は……随分成長していく広くなっていた。Tシャツ越しに引き締まつた背中の筋肉が盛り上がって見える。

あたしの中に棲んでいる慶の『時間』は止まつていて、未だに小学生のままだつた。だから、成長した慶の姿に驚いて氣後れしてしまつ。

「い……いいわよ。小さこそじやあるまいし。自分で立てるから」

「だつて、香代立てないじやないか」

「さ、休憩していろだけなのっ！ 沐浴姿なのに、おんぶしようだなんて言わないでよ。まったくもうっ！」こっちが恥ずかしいでしょ。そ、それに慶こそ美咲姉さん達と一緒に行かなくつてもいいの？

？

「ああ、良いんだ。要兄が一緒に行こうって誘つてくれたんだけど、美咲は僕が付いて来るのを凄く嫌がつていたから。でも、要兄の誘いを断るのも何だか悪い気がしてわ……で、結局ついて来たんだ」

慶は恥ずかしそうに照れ笑いを見せる。

「『要兄』って言つんだ。あの人」

「うん。美咲と結婚……するんだって」

「え？」

「そのうちにね。要兄に愛想を尽かされなきゃだけど……ね」

「……」

慶はほんの少し頬を赤くして、嬉しそうにさついた。

まさか慶の口から『結婚』と言つ葉が出て来るとは思わなかつたわ。あたしよりも幼稚でいつまでも子ビも々している慶だと思つていたのに……

あたしは美咲姉達が消えて行つた人混みの方へと視線を送つた。頭の中で、何度も『結婚』と言つ憧れの言葉^{キーワード}が繰り返して浮かんでは消えて行つた。

第24話 女神（おんがみ）様のいたずら 4

「ほひ、 手を出しちゃ? もう立てるだろ?」

「え、 ちよ、 ちよつと待つて……」

慶は半ば強引にあたしの手を取ると、立ち上がりせよつと腕を引く。

あたしは立つつもりは無かつたのに、慶から片手でひよいと引き起こされてしまった。タイミングもあつたのかも知れないけれど、あたしの殆どの体重が慶の片腕に掛つたはずだわ。

「お、 重いでしょ?」

「なにが?」

「……あたし」

「え? そう? ……別に?」

あたしは慶と眼が合わせられないと云ふが、恥ずかしくて消えてしまいたいくらいだったのに、慶はけろりとしてそつ言つた。でも、口では大した事無いだなんて言つているけれども、本当はあたしの事が凄く重かつたって顔をしているに違いないんだから。

慶の言葉を疑つたあたしは、それまで逸らしていた視線を恐々慶に移した。

「……」

お互に立つたままの状態で、あたしは慶の顔を見上げてしまつた。

嘘……

慶つて、また背が伸びたんだ……

もちろん、あたしだつて成長期。身長も女子の標準に近付いて来ているけれど、百八十以上もあるお父さんがいる慶には、全く敵わなかつた。顔つきだつて昔よりも少しだけキリッとして、お兄さんっぽくなつたように見える。

久し振りに近くで顔を見合つてしまつたあたしは、妙な照れと恥ずかしさから身体の火照りを感じていた。

こんなにも慶が成長していただなんて予想外。『男の子』だったはずなのに、急に慶が『お兄さん』みたいに思えて来る。このあたしを置いてきぼりにするだなんて……は……反則……なんだから。

視線が合つた慶は、ふわりとあたしにほほ笑んだ。

「一人で来たつてわけじゃ無さうだね。他のみんなとばぐれたの？」

「う……うるさいわね。見りや判るでしょ」

触れて欲しく無かつた事を蒸し返されてしまい、あたしは可愛げ

無口で答えをしはじめる。

「見りや判るつて……まあ、それはそつなんだけど……」

慶はそれ以上、みんなの事については何も言わなかつた。言えば
きつとあたしが怒り出すと思つたのだろうけど……本当にあたしは
その逆だった。

きつと、居なくなつたあたしをみんなが心配していると思つた。
不注意とは言えみんなに迷惑を掛けてしまい、情けなくて自分が嫌
になつちゃうもの。これ以上、あたしを落ち込ませないでよ。

だから、慶にほなつとしておこで欲しくて、つい、もつこ言い方
をしてしまつた。

「やうだ。はい、これ

「なこ?」

慌つかつて、慶は手にしていた綿菓子の大袋をあたしの眼の前に差
し出した。

せつときからずつと片手で後ろに隠していたものが、まさかこれだ
つたなんて……見掛けは大きく変わったけれど、中身の成長はまだ
なのね？ そう思つて、あたしは多少なりと上からの眼線を慶に送
つてホッとする。

「要兄から貰つたんだけど、僕はこうこう砂糖系の菓子つて苦手な
んだ。良かつたら貰つてくれない？」

「……だったらなんで買つて貰つたのよ」

さてはあたしの眼線に勘付いたのね？ でも、なんだ。慶が強^ねだ
請つて買つて貰つたのじゃなかつたんだ。

「印刷されているキャラクターの絵が懐かしくて見ていただけなんだ。そしたら要兄が買つてくれたんだよ」

「欲しくなかつたのなら断ればいいじゃない」

「うーん、まあそれはそうなんだけどさ……これが美咲だつたら絶対に断つて……って言うか、僕に買つてくれたりなんかしないからね。じうじうの。小遣い買つているんだから、自分で買えつて言うだろうし」

「ふーん」

「なんかさ、要兄の気持ちが嬉しくつて」

「あー、だから断れずに買つて貰つちやつたんだ」

「そうなんだ」

そう言つて慶は苦笑いをしながら頭を搔いた。

『僕、本当はお姉ちゃんじやなくつて、お兄ちゃんが欲しかつたな
……』

美咲姉さんと喧嘩をする度に、負けた慶はその言葉を口にしていた。姉弟が居るだけでも一人っ子のあたしにとっては羨ましい悩みなのに、なんて贅沢を言っているのよとあたしはすうと思つていた。

でも、美咲姉さんが結婚したら、慶にはお兄さんが出来るんだよね？

さつき遠眼でしか見えなかつたけれど、要兄さんは中々イケメンのお兄さんだつたし、慶の嬉しそうな顔を見て、とても優しい人なのだわと判つてちょっとびり妬けた。

「受け取つておいてなんなのだけど……やつぱりこれ、返すわ」

「なんで？」

「慶が要兄さんから貰つたのでしよう。受け取れないわ」

あたしは一皿慶から貰つた綿菓子を返そうとした。

「いいつて。それに『あの時の』をまだ香代には返していなかつたから

「なにが？」

慶はあたし達が小学二年生だった時、夜店で買つて貰つた大袋の綿菓子を、あたしが一人で食べれないだろつからつて、あたしのお母さんが慶に半分あげてしまい、怒つて泣き出した事を話した。

「あの時はびっくりしたよ。香代が泣いて怒るんだから」

「そんな……そんな大昔の話なんかされたって、あたしは覚えてなんか……いないわよ」

遠い眼をして嬉しそうに当時の事を思い出す慶に、あたしは一種、恐怖みたいなものを感じてしまい、怖いなと思つてしまつた。あたしが覚えていない事まで……うつん、覚えていて欲しく無い事まで、慶は昨日の事のようにじつかりと覚えてくれていたんだもの。

覚えてくれていて嬉しい……と言つよりも、なんだか自分の弱味を握られているようで……ちよつとだけ慶と一緒に居るのが嫌だなつて。

「だから、これは『あの時』のお返しだと思つて貰つてくれない?」

「…………」慶がそつまつになつた。

慶の穏やかな話し方に揺らされたような気がした。

「慶はもう御参り済ませたの？」

「うん」

「じゃあ、もう帰る？ か？」

あたしの願い事はもう叶つたし、さつき嫌な眼に遭つたから、これ以上の長居は無用だと思つた。それにこれだけ大勢の人々が御参りに来ているんだもの。

今のおたしは慶とツーショット。だから、そ、そのう…… デ、デー
トしているみたいに見えちゃつとアレだし、ましてや姫香達に見
付かつたら、この状況をなんて言い訳……、いやあのその……な
んて説明すれば良いのか……

今日はお祭りに来ていないけれど、姫紀が慶の事を想つていてるの
は判つているし、氣の多い姫香だつて、本命は慶なのかも知れない。
あたしは、一人とも慶の事が好きだと知つていてるから、幼馴染のお
守役だったあたしが慶を独り占めして一緒に居ちや、なんだか悪い
ような気がするもの。

「香代は参拝済ませたの？」

「あ……ああ、その……」

「なに言つてんの。正直に言ひなよ。もう。まだ行ってないんだろ

？」

「……」

当たり。あたしは心の中で返事をする。でも、しどりむじひの答えになつちやつたから、一発でバしゃつたのかも。

「行くよ?」

「つて、何処へ?」

思わず聞き返してしまつた。慶は困つた顔をして小首を傾げる。

「なに言つてんの? 神社に決まつてるでしょ?」

「あ? う、うん そ、そつだよね」

慶にリードされて、あたしは渋々従つた。周囲の雑踏に紛れてあたし達は肩を並べて歩き出したけれど、あたしはそわそわして落ち着かない。

お祭りのお囃子の音が近くに聞こえ、和太鼓の力強い音が、あたしの早くて浅い呼吸に合わせるようにドンドンと身体に鳴り響く。

お願いだから、誰にも会こませんよ?.....

あたしは心の中で祈る様に咳ながら、こつ頬見知りの誰かに会

うかも知れないと、うつむきでキドキの状態を気にしていたのに……中々そんな状況にはならなくて、気が緩んだあたしは、いつの間にかそれさえもスリルとして余裕で愉しんでしまった。

しかも周囲にはあたし達と年の近いカップルも結構居て、あたしの視線が無意識に同年代のカップルを捜している。

……もしかしたらあたし達、あんな風に他の人達から見られるのかな？

やう思ひ嬉しくなつて浮かれてしまつた。

「ねえ、慶はどうんな子がタイプなの？」

「え……？」

慶は一瞬あたしの質問に困つたような顔をした。

会話が途切れてしまい、黙つてお社へと向かつて歩くだけになってしまったあたしは、この沈黙の状態が我慢出来なくなつていた。殆ど顔を合わさなくなつてしまつたし、お互いに状況は違つている。せつかくの接近チャンスなのだから、亜紀達が一番慶に聞きたい事を聞いてみようと思つた。

で、あたしもついのところは是非聞いてみたい気が……するし。

歩いていた慶は、急に足を止めてゆっくりとあたしの方へ身体を向けた。思わずあたしの胸がドキンと弾む。

「いや、急に聞かれても……」

「ううん、違う。違う。あたしが気になつていいのじゃなくて、男子の意見を聞きたいと思つただけ……だけなのよ。でね、慶の意見はどんなのかなあーって」

「……」

「あ？ んなつ、なに？ そ、その疑いの眼は？」

慶はすぐには答えてくれなかつた。訝つてあたしの様子を窺つて、いる慶の視線に、またもやドキドキの動悸が……

「や、それとも、もう彼女が出来た……とか？」

「いや、居なこよ。まだ……」

慶の答えにドキドキしながらホッと胸を撫で下ろした。だつて『居るよ』って言われたらどうしようかって……返事に困つてしまつたから。

「『まだ』……って事は？」

あたしの視線を受け取つて、慶は軽く頷いた。

「そうだなあ……すぐに想つた事が顔に出て、判り易くて『嘘』が吐けない娘……かな？」

「は……あ……」

「なんかさ、判り易い所が可愛いかも」

なんだか曖昧な言い方ね？」

慶の言つた言葉をもう少し解釈してみると……

あたしの頭の中には、純情可憐ではにかみ姫の亜紀の顔が浮かんだ。亜紀は今年のバレンタインに勇気を出して慶にチョコを渡しているし、去年は同じクラスだったから慶が亜紀の事を知らないはずは無い。

確かに亜紀なら慶の理想の彼女にぴったりかも知れない。積極性を持ちたいからって理由でテニス部になんか入つているけれど、普段は本ばかり読んでいるおしとやかな文学少女で、男子とはなかなか会話に至らないオクテ中のオクテ女子。

そうなんだ……慶は亜紀みたいな女の子が好きなんだ……

なんだ。ちょっとだけ残念……かも……

「……って、香代、聞いてる?」

「え? え、ええ、き、聞いてるわよ?」

慶からの急な『振り』に驚いて、あたしは慌てた。

「いや、聞いてなかつただろ? 今の」

「ええ? きつ、聞いていたわよ。わ、判り易くて単純な子が良い

んでしょう?」

「……」

あたしのつけんどんな言い様が癩に障ってしまったのか、慶は少しだけムツとなつて眉を寄せる。

「んな、なによ?」

「つたぐ……なに誤解してるんだよ? 僕は……の事が……」

「ええ? なに? 聞こえないわよ?」

「だか、う……」

肝心な所を言い掛けた慶の言葉は、お囃子のクライマックスになつた和太鼓と見物客の歓声に搔き消されてしまった。

「なに赤くなつてゐるのよ? 聞こえないつてばー!」

「も……もうこ、こ、よ……」

一人でなに鼻息を荒くしていのよ?」

亞紀が好みだつてわかつたと認めちや、え、ば良いものを、ごちやうぢや言つから邪魔が入つて……聞こえなかつたんじゃないのよ。

「だけど……せつぱり慶は亞紀みたいな女の子がいいんだ……お守り役だったあたしなんかじや……駄目……なんだよね?」

第26話 女神（おんながみ）様のいたずら 6

慶に女の子のタイプなんか聞いたりするのじゃなかつたわ。『男の子からの一般的意見を聞きたい』だなんて、本当はそんな事なんか考えてやしないのに。

慶が……慶の事が気になつたから、知りたかつただけなのに、都合の良い口実なんかを見付けたりして。

答えを焦り過ぎたあたしは、半ば判り切つていた答えだつたはずなのに……やっぱり少しだけ後悔してしまつた。だって、亜紀も慶の事が好きなんだもの。

これつて……どう見たつて両想いだわ。なのに一人に動きが無いって事は、慶がまだ動いていないって事だと思つ。だけど、いずれあたしが思い描いているような展開に……なつちやうのかしら？

慶から想われている亜紀の事が羨ましく思えた。慶は楚々としたおとなしい子を選ぶのね……残念だけれど、あたしには慶の理想には近付けそうに無いわ。

「……」

……なんだらう？　この胸のモヤモヤは……？

慶の事を想う度に、胸が苦しくなつて切なくなる。

「どうしたの？　急に立ち止まつたりして」

「え？ ……な、なんでも……ないよ」

お社へ、慶と話せた事のお礼を伝えて、無事に誰とも遭わずに参拝出来た帰り道に、慶の事を考えてぼうつとしていたあたしは、慶の呼ぶ声に驚いて、貰った綿菓子で顔を隠した。

……慶があたしを見てる……

慶は、嘘が吐けない素直な子が良いと言っていたのに、あたしは平気で嘘が吐けるもの。慶の理想が知りたくて、適当な口実を作つて聞き出せるんだもの。

ドキドキの鼓動が鳴り止まない。

「よお、なんだよ結局ツーショットしてんじやん」

聞き覚えのある乱暴な喋り口調に、あたしは飛び上がるほど驚いた。恐る々振り返ると、そこには見知らぬ女の子と一緒に来ていた立川が居た。

立川は去年……六年生の時にあたしと掃除当番だったグループの一人で、慶と離れたあたしに何かと付き纏いまと、あたしから相手にされなかつた挙句にあたしの顔に雑巾を投げ付けて、その後卒業するまで、クラスの女子全員から総スカンの完全無視を喰らつていた。

女の子に酷い事をしたのだから、無視されても当然の仕打ちだわ。

被害を受けたあたしは、それ以来立川と話す事はおろか、顔さえ会わせる事は無かつた。

嫌な奴に、慶と一緒に居るのを毎晩されてしまつたわ……そう思つたのだけれど、慶はあたしとは違つていた。

「よ、久し~。クラスが違うだけなのに、全然会わないな」

「ああ、お互い部活で忙しいからな。でも、奇遇と言つが、やつぱりと面づか……」

爽やかに挨拶をする慶とは反対に、立川は意味有り氣な一ヤーヤ笑いを浮かべてあたし達に近寄つた。

「? なにが?」

「惚けるなよ。ドバシの事に決まつてんだろ?」

立川は、左右ズボンのポケットに両手を突っ込んで、わざとらしく肩を聳^{そび}やかし、あたしに向かつて横柄に頸^あを杓^{しゃく}つた。

「?」

「お前、なにバックレでンの?」

「香代がどうかしたのか?」

「ああッ? シカトすンなよ」

わざの不審者おじさんとほほほ同等。相変わらず偉そうに凄味を利かせる立川は、そこいらの不良と変わらない。それなのに、慶はなんでも無いみたいだ。

あたしは昔の嫌な事を思い出してしまい、怖くなつて慶の後ろに隠れた。

「ああー、もうあんなこと遣らねーから、そんなに俺の事嫌うなよ」

「……」

あたしは慶の右腕から、そつと顔を覗かせる。

「ねやとじや無いつて言つたら嘘になるね……あの時は悪かつたよ。でも、俺だって反省していたんだぜ？ 遣り過ぎだつて」

「なんかあつたのか？」

あたしに話しかける立川を訝つて、慶は惚けた質問をする。だつて、慶はその時居なかつたから、あたしが立川から雑巾を投げ付けられた事は知らないもの。

「つま、イロイロとね。アキバケイの知らぬ一トロロで、イロイロ訳アリだつたのさ」

「やだつ、立川もつ止め……」

「ねえ、話まあ～だあ～？ もつ止めよお

あらぬ妄想を書き立てるよう、意味深に言つた立川の口を塞^{ハシ}いつけと
言い掛けたら、立川に連れ添つていた茶髪彼女が口を挟んだ。

「あら、どうも。彼女を放つてないで、さつとも何処かに行つて欲しいわ。

「まあ、待てよ久し振りに……」

立川が彼女を説得している最中に、慶が人混みの中から誰かを見付けて眼を細める。それが誰なのかすぐに判つて、慶は大袈裟に両手を大きく左右に振つた。

「おーい、門田あ、こっちだ！」

「おあ？ アキバケイ？ やつぱオマイも来てたのかよー？」

「アキバケイ！ いやつほーう！」

「あれ？ 田村も？」

「ンだよー。オマケで悪かつたな」

慶は人混みの中から、慶の友達であるテニス部員の門田くんと雑乃のカツプル。そして今年転校して来た田村くんと……何故か田村くんにくつ付いている姫香を見付けた。

「つて、お前等俺に言わせろよー！」

一人、みんなから台詞を強引に止められた立川が、情けない声を出してみんなから笑われる。

なんで姫香が田村くんと一緒に……居るのは?

あたしの視線を感じてか、姫香は肩を竦めてペロっと舌を出した。

「良かつたあー、香代が見付かつて」

「で? あたしの事は放っぽつて、田村くんとアートなわけ?」

「え? ち、違うつて」

田村くんが慌てて否定する。

「せうだよ。違つよー。一緒に香代を捜してくれるつひまつからさ
あ……」

「でもどひして一人なの? 一葉や沙耶は?」

「それがさあ……あたしも香代の事捜してて、余所見してたら一人になっちゃったんだなこれが」

「本当なのかなあ……? なんとなく、あたしをダシにされたような気が……しないでもないのよね?」

「あー! 姫香ー、香代おおーー!」

「捜しちゃつたよーー! もお、ビハシよつけたって言つてたところ
だつたんだあー!」

「沙耶、一葉あ～！」

人混みの中から不意に呼ばれて、あたしは一緒に来ていた女の子達と再会する事が出来た。

「おーし、メンツ揃つてるから、イッヂョ歌い上げに行くか？」

「おー！」（×八人）

慶の二次会カラオケ提案に、全員が盛り上がる。

……一人、あたしを除いては……

せっかく慶と二人っきりで良い感じになつていたのに……みんなが揃つてくれて嬉しいのは嬉しいのだけれど……こんな……こんなのつて、無いわよ。

神様のいじわるうつ……！

帰宅後、お母さんにお祭りでの出来事を話した。

お母さんは、笑いながら、みんなと出会えてよかつたねと言つた。

「香代は、あのお社に女神様おんながみが祭られているのは、知つているわよね？」

「うそ」

「祭られているのは女神様だから、カツプルでお参りに行くと、神様が妬いてしまうのだって」

「ふーん……」

「だから、お友達同士で行つた方が良いのよ」

「そ、そんなの、もつと早く話してよね？」

女神様が嫉妬する……

あたし、とんでも無い事を神様にお願いしちゃつたから、神様が拗ねちゃつたのかなあ……

「でも、慶くんと話せて良かつたじゃない。あなたは世、慶くんの面倒はあたしが見るのって言つていたからねえ」

「や、ヤダお母さん……」

お母さんは一体いつの頃を思い出しているのよ？ 少なくとも、小学校低学年の頃はそう言つっていたのかも知れないけれど……大昔の事を引き合いに出されても、あたしだって困るわ。そんなのって、もう『時効』よ。

だけど……母さんから冷やかされてしまつたけれど、あたしは少しだけ気持ちが上向きた。このまま、以前のやつに慶と仲良しく出来ればいいな……

やつ思つていたの」……

* *

新人戦が近付いて来ていたある日の事、双方の顧問の先生が不在で、本番さながらの試合形式でゲームを遣つていた時に起つた。

「アキバケイ！ 任した」

「オッケ！」

ダブルスで後衛ヒツエーを受け持つて居た慶が、相手コートからの高いロビングボールを眼で追いながら、軽快な足取りでスマッシュを決めよじと後退する。高く左手を上げてバックスイングの体勢に入った。

あたしは「コートが空く順番待ちをしていた。

相変わらず、隙の無い構え方をする慶に、あたしは少しだけとぎめきみたいなものを感じて、慶の姿を眼で追った。

丁度、隣で練習していた女子部のコートから転がったアウトボールを、亞紀が必死に追い掛けていたのに、殆どの部員が慶のスマッシュが決まるかどうかを見届けようとしていて、一人のニアミスに寸前まで気が付かなかつた。

「亞紀！ 避けて！」

「つああ、ヤバイ！ アキバケイ！」

「STOP！」

「ぶつかる！」

二人の危険に気付いた部員達がそれぞれに警告するけれど、『わー』と言つ悲鳴に似た声に搔き消されてしまい、あつと言つ間に二人はお互に気付かないままぶつかつた。慶は背中を丸めて屈んで

いた亜紀に足を掬^{すく}われるような格好で転倒してしまつ。

乾いたグラウンドコートから、土煙がもうもうと舞い上がる。

「いたた……」

後ろから転んで、背中を強かに打つた慶が呻^{うめ}いた。

「さやあー！ 亜紀い！」

「大丈夫かつ！？」

「アキバケイ！ 早く退きなさいよっ！」

姫香の金切り声が炸裂する。

慶の下敷きになつてしまつた亜紀は、部員どころか隣で練習していた陸上部や校舎テラスに居た吹奏楽部等の他の部員達から一斉に注目を浴びてしまい、真っ赤になつて顔を伏せた。

「大丈夫？ どこか痛く無い？」

「大丈夫かつ？」

姫香とあたしが慌てて駆け寄った。男子部員も駆け寄つて、一人の無事を確認する。

「う、うん……」

「「」めん、遠藤さん。怪我しなかつた？」

慶が慌ててグラウンドに正座して、亜紀の無事を確認する。

「だ……大丈夫……です。すみません、秋庭さんこそ怪我はない？」

「あ？ ああ、別にどこも……って、痛ッ！」

亜紀の無事な表情を確認してホッとしたのか、慶は利き手に痛みを感じ、右手首を庇つて蹲る。

慶達の隣のコートでゲームをしていた先輩方も、ゲームを中断して遣つて來た。

「転んだ時に、捻ったんだろ？ 秋庭、保健室に行つて来い！」

「つは、ハイ……」

痛さに顔を顰めながら、慶が先に立ち上がった。

あたしは利き手を痛めた慶の事が心配だつたけれども、慶には男子部員が大勢居るし、きっと大丈夫だよと自分に言い聞かせる。それよりも、身体の大きい慶の下敷きになっちゃつた亜紀の方が可哀想だ。

「亜紀、立てる？」

「う……うん……ー」

亜紀は両手を着いて、慎重に立ち上がりつと右足に力を入れた。

「亜紀つ？」

「い……た……」

途端に亜紀のバランスが崩れて、糸の切れた操り人形みたいにその場に崩折れそうになつた。

みんなが息を飲んで亜紀を見守つてしまつた瞬間、先に立つて亜紀の様子を窺つていた慶が、倒れ掛けた亜紀の左腕を掴んで、タイミング良く引き寄せた。

慶に支えられて事無きを得た亜紀は、もう耳みみ朶たぶまで真つ赤だ。今にも破裂しそうなくらい心臓がドキドキ音を立てているのじゃないのかしら。

「『めん 遠藤さんに怪我をせちやつたみたいだ』

「あ、あのつ、そ、そんな……そんな事な、無いです。あ、ああ、あたしが周りを見ていなかつたからこんな事に……あたし……あ、あたしの方こそすみません」

「うわつと?」

亜紀は慶に支えて貰つていたのを忘れてしまい、深々と頭を下げた。

急に亜紀から体勢を崩されてしまい、亜紀の『重心』を見失つた慶がバランスを崩しそうになつてつるたえた。

女子部のキャプテンも騒ぎを聞き付けて遣つて来た。

「二人とも保健室で見て貰いなさい」

「はい」

「付き添いは必要かしら?」

「いえ、大丈夫です。平氣ですか」

慶の返事を聞いた両方のキャプテンは一人を保健室に向かわせる
と、他の部員に緊急招集を掛けて、注意喚起を促した。

本当に大丈夫なのかしら?

慶はみんなにそう言つていたけれど……男子キャラブテンと短い遭り取りをしていた間に、慶が庇つていた右手首は、見るうちに赤く腫れ上がつていった。

キャラブテンが『ねんざ』したのかと言つていたけれど、『ねんざ』つてあんなに腫れちゃうものなのかな?

真紀は慶とは反対で、もの凄く痛くそうだった。

最初は慶がおんぶして連れて行くよと言つたけれど、慶も怪我をしているのにそんな事はさせられないと、男子キャラブテンが身体の大きい田村くんに真紀を保健室へ連れていかせようとした。

でも、真紀はこれ以上迷惑は掛けられないからと、今にも泣き出しそうな顔をしてキャラブテンからの勧めを拒み、独りで行くからと言ひ張つて両キャラブテンを困らせた。

見兼ねた慶が肩を貸して真紀を連れて行くことになつたけれども、それでも真紀は恥ずかしがつてなかなか慶に触れようとしない。

「……」

あたしは小さくなつて行く一人の後ろ姿を、複雑な想いで見送っていた。

保健室がある校舎に一人が辿り着くまで、亜紀はずつと左足ケンケンで移動して、痛めた右足は一度も地面に着けたりはしなかった。ケンケンが辛くなつた時の少しの間だけ慶に肩を貸して貰っている亜紀の姿が、妙に脳裏に焼き付いて離れない。

来月予定されている新人戦まであと僅か。^{わずか}もちろん、二人の怪我の事も気になるし、心配だつた。

でも……

亜紀は慶の事が好き……なんだよね？

そして、慶は……

慶は亜紀みたいな女の子が好みだつたよね……

夏祭りで慶と二人つきりになれたあの時、肝心な部分が周りの雑音に搔き消されてしまい、全く聞き取れなかつたけれど、慶は『すぐ』に想つた事が顔に出て嘘が吐けなくて判り易い』……亜紀みたいな女の子が好きなんだよね？

練習中、不安な想いは一向に晴れず、心の隅に湧き上がつた黒い暗雲はどんどん拡がつて行つた。そしてあたしの身体に重く圧し掛かり、ボールへの反応を更に鈍くさせていた。

「土橋さん、ちょっと……」

「はい」

練習とは言え、三ゲームともストレートで落としてしまったあたしは、ゲーム終了後にキャプテンから呼び出されてしまった。

「貴方が呼ばれたの、理由はもつ自分で判つているわよね?」

「……はい」

あたしはキャプテンが何を言いたいのかすぐに判り、肩を落としてがっくりと頃垂れた。

ゲーム中、凡ミスの連発に（）インターフェアが一回。あたしとペアを組んでいた松木さんが怒つてしまつのも仕方が無い。

「仲の良い遠藤さんが怪我をしてしまつて、気になるのは判らなくも無いけれど……本人は大丈夫だと言つていたのだから、貴方も彼女の言葉を信じてあげなくてはね。幾ら練習だからって、試合中では泣き言は言えないわよ? もつと気持ちを切り替えて（）コンセントレーションを上げて行かないと。今が大切な時期だつて事を忘れてはいるの?」

「い、いえ……判つています……」

「うん、判つていなかつたから負けたんだ……」

「土橋さん? 下を見ないでこいつを見なさい?」

「……はい」

穏やかに諭すよつと語ったキャプテンの声に、あたしはなかなか顔を上げることが出来なかつた。

あたしは一度も勝てなかつた理由を、慶と亜紀の怪我のせいにして、尤もらしい言い訳をしていたんだ。ううん、違う。怪我は單なる口実で……本当は一人の仲が気になつて仕方が無かつたから……想像の域を出ない『仮定』としての妄想で、自分の不安を煽つていたから……。こんな結果になつてしまつたんだ。

あたしは自分が情けなくて堪らなかつた。

* * *

練習が終わり、コート整備も完了して部室に戻ると、先に部室に入つていた先輩方は、怪我をした一人の話題で持ち切りだつた。

三年の先輩方は、顧問の先生が不在の時に起こつた予測可能な怪我に、責任を感じて落ち込んでいる。その先輩方を慰める人が居れば、一方的に慶が悪いとして男子に責任を押し付けようとする人まで出て来る始末。

あたしはそのどちらでも無いと思つた。

ぶつかつた二人の注意力が足りなかつたせいももちろんだけれども、慶の試合に気を取られてしまい、一人の危険を予測出来なかつ

たあたし達にも、全く責任が無かつたわけじゃ無いと御つもの。

「亜紀、どうなつたのかなあ……」

姫香が心配そうにぽつりと呟いた。

男女合わせると一クラス分が簡単に出来るほどの大人数。部員全員が保健室に押し掛けて行くわけにはいかないので、先輩からは様子見は控えるようになると先に言われていた。

「ねえ、亜紀に会いに行かない？」

あたしは着替えをしながら、隣で同じく着替えをしている、元気の無い姫香に声を掛けてみた。先輩は『控えろ』と言つただけで『行くな』とは言つていらない。

てっきり姫香からは、OKを貰つものだとばかり思つていたのに

……

「『めん香代……あたし、実はこれから用事なんだ

ホント、ゴメンね？』

「だから、亜紀の事が気になつても、時間が無くて行けないの。

ホント、ゴメンね？」

手早く身支度を済ませた姫香は、あたしに向かつて揃ひよつて両手を合わせると、胸の前で右手をひらひらと左右に振つてサヨナラをする。

「え……？」

先に部室から消えて行く姫香の姿を追つて、虚ろになつたわたしの視線が漂つた。

「あーら、香代。姫香はあんたよりもデータの方が大事みたいだわね？」

あたし達の遣り取りを見ていた一年の先輩が（勿体を付けてそう言つたけれど、あたしは先輩にそれが何故なのかを問い合わせる）気力さえ失くしていて、姫香が消えた部室のドアを見詰めたまま、呆然と立ちぬいていた。

「なになに？」

あたしの代わりに他の先輩が話に参加して来る。あたしに話を振つた先輩は、乗つて来ないあたしを無視して勝手に喋り始めた。

「あのね、先週の土曜日にさ、姫香と新田高の男子が一人で歩いていたのを見ちやつたのよ」

「ええ～～～？ それ、本当に高校生？」

「うん。だつて鞄、新田の校章だつたもん」

「姫香やるうー！」

あたしにわざと聞こえるよつと話す一年の先輩方。

あたしは『心配だ』と口に出しておきながら、怪我をした亜紀の様子を知りうともせずにさっさと帰ってしまった姫香の行動が信じられなかつた。

三人の中ではいつも姉御肌であり、あたしなんかよりもずっと亜紀と仲が良いのに……

姫香の事を疑い始めるとい、先輩方のひそひそ話で裏付けされてしまい、それが単なる噂じゃ無く本当だったのではないかしらと錯覚を起しごしてしまいそうになる。

どうして？ 姫香ってそんな女の子だったの？

友達が怪我をしたのに、彼の方を優先してしまったような子だったの？

第28話 亜紀と慶…2（後書き）

-) インターフェア : 正しく入れたサービスボールをレシーブ側でないパートナーが触れること。打球妨害。
-) コンセントレーション : ボールや相手の動きに精神を集中させること。精神統一。
-) 勿体を付ける : わざと深刻に振舞う。

第29話 先輩の場合

「……よ？ 香代？」

「あ？ はい」

一年の百瀬先輩の声で我に返った。

百瀬先輩は、あたしが部長だった前の年に小学校軟式庭球部のキヤプテンだった人だ。

「川村さんに振られちゃったの？ ぼーつとしちゃって……可哀想に。まあ、彼氏が出来ればそんなものよ？ 女の友情なんてね」

「そ……そんな……」

あたしは先輩から思いがけず同情されてしまい、戸惑った。

『振られた』ってわけじゃないと思いつけれど、それはあたしの都合の良い思い込み……なのかしら？

姫香を弁護して反論しようにも、言い返す言葉が思い浮かばない。

でも、きつとなにか……どうしても抜け出せなくて亜紀の所に行けなかつた理由があるのでわ。あたしにも言えない事情があるので思つていよ……

そう自分に言い聞かせていたら、百瀬先輩が気を廻してくれた。

「気にするような事じゃないわ。川村さんが特別つてわけじゃ無いのよ？遠藤さんの怪我だつて捻挫でしょう？そりやあ新人戦が近付いたこの時期の怪我は痛いけど……心配なら、一緒に行きましょうか？」

「はい」

たつた一年しか違わないので、百瀬先輩が物凄く頼り甲斐のある人に思えた。

* * *

「すみません。付き合つてくださったのに……」

百瀬先輩と肩を並べて廊下を歩きながら、しょんぼりとしていたあたしは、取り敢えずのお礼を言つた。

亜紀の事が心配で、練習が終わつた後に保健室へ先輩と一人で直行したのに、二人とも先に帰つたと保健室の先生から聞かされていたのだ。

「まあね？自力で帰れるのなら、取り敢えず怪我の方は安心だわね」

「……はい」

そう優しく言つてくれる先輩の言葉も、今のあたしには休めでしか無い。

保健室に入ろうとして、引き戸の取っ手に手を掛けると、外で用事を済ませて保健の井坂先生が戻つて來た。

「先生、亜紀は……亜紀の様子はどうですか?」

あたしからの質問に、先生は少しだけ氣の毒そうな顔をした。

「ああ、先に一人で帰つたわよ? あの一人、仲良さそうね?」

「……」

あたしは少なからず、先生の言葉にショックを受けてしまった。

『先に一人で帰つたわよ?』

『帰つたわよ?』

『一人で……』

先生の言葉があたしの頭の中で何度も何度も繰り返される。

そして、時間が経つに連れて、あたしの心中は穏やかじや無くなつて来る。

だつて、一人からしてみれば思いも寄らない急速大接近。お互に相手の事を気に掛けているんだもの。

いつもなら慶には門田くんや田村くん達が居るし、亜紀にはあたしや姫香が傍に着いている。でも、お互いに怪我をしてしまって、二人きりになれただなんて……こんなチャンスなんて……滅多に無いわ。

姫香だけでなく、亜紀からもあたしは急に独りにされてしました気がして、不安に包まれてしまった。

* *

「あたしもねー、実は土橋さんみたいになっちゃった事があるんだよね。なんだか放つて置けなくなっちゃって」

「え？」

廊下を歩きながら、百瀬先輩が意味深な事を言つた。

「あたしね？ 幼馴染でケンカ相手……って言つてもタダの口喧嘩みたいなものよ？」

「はあ……」

「周りからは『ケンカ出来るくらい仲が良い』って思われるくらいの男友達が居たの」

「……」

「でね、塾に行くようになつて仲良くなつた友達が居てね？ 半年くらい経つた頃……だつたかな？ 彼女から、その彼を紹介して欲しいつて……」

「紹介つて……引き受けちゃつたんですか？ まさか？」

あたしの問い合わせに、先輩は黙つて頷いた。

「おかしいでしょ？ 彼とは本当に『友達』の付き合いだつたの。だから、彼女も友達として紹介したはずだつたのに……」

「……だつたのに？」

「彼女は友達としてじやなくて、『彼氏』として紹介して欲しかつたのね。気が付いた時はもう手遅れ。自分が本当は彼の事が誰よりも好きだつたのに、彼にはもうあたしが紹介しちゃつた彼女が居て……で、その後は判るかしら？」

「……」

「一人とも、あたしとはもう殆ど顔を合わせる事が無くなつたし、もう口も利かなくなつちゃつたわ……『異性の友達』と『恋愛』つて、線引きが難しいのよね」

「せ、先輩は……先輩はそれで構わなかつたんですか？ 友達を『彼氏』として取られちゃつて……」

「ん……」

先輩は俯くと、少しだけ言葉を詰まらせた。

「それでも……あたしが今更告白したとしても、アイツはあたしとは『友達』のまんまだつたんじゃないのかなって思うワケ。結局、アイツはあたしを『友達以上』には見てくれない。彼女とは上手く行つても、あたしとアイツとでは友達以上になんかなれなかつたのだと思うわ」

「そんなん……」

「あたしにも『気持ち』があるよ」と、アイツにも『気持ち』つて言うか、選ぶ権利があるでしょう。簡単に想いが通じたりするのな」「、こんなに悩んだりなんかしなかつたわよ」

「でもお……」

「仲が良過ぎて相手を恋愛対象には見られない……そんなこともあらのよ」

「……」

先輩の一言々が心に深く突き刺さる。だって、これってあたしと似たよ「うな……」

そこまで考へると急に顔が熱くなつた。

「まあ、香代つじば素直なんだかい……」

「え、えいつ意味ですか？　あ、あああたし、そつ、そんなに

『素直』じゃ……」

言い当てられて、更にあたしは茹で上がってしまったあたしの顔を見て、百瀬先輩がくすくす笑った。

第29話 先輩の場合（後書き）

読んでくださってありがとうございます。

今年の更新はこれでお終いです。

完結目指して頑張りますので……見捨てないで～～～（汗）

（気を取り直して……）

来年も宜しく あります。（ケロロ風）

2009/12/31 守備範囲が広い 和 貴より

第30話 お守り役

急に百瀬先輩は立ち止まり、思い詰めたよつた顔をしてあたしに向き直ると、ずいっとあたしに顔を近付けた。

「い～い？ 黙っていたって自分の想いなんてのは、行動に移さない以上、相手に伝わつたりなんかしないものよ？ 特に相手が鈍感男だつたら尚更だわ」

「えつ？」

先輩のいきなりな説得に、あたしは思わず混乱して退いてしまった。

「『逃がした魚は大きい』って事……どうしてこんな面白くも無い話を思い出して、あたしがわざわざ香代に話したのか判つてる？ 香代見ているとイライラするのよ」

「? ? ? ……な？ も、急にあたしに振つて来られても、何のこ
とだか……」

「ほりー、また惚けて逃げてる。怒るわよ？」

「や、やつ言われたつて……」

ムキになつた先輩の迫力に気圧されて、あたしは委縮して俯いてしまつた。

先輩の言わんとしている事も、そして、先輩があたしと誰の事を

指して言つてこゐるのかだつて、ちゃんと判つてこゐる。

……ただ、自分の本当の気持ちが判らないだけ。

自分の気持ちが慶に傾いているのは、それは慶の『幼馴染のお守役』つて言つ特権からまだ解放されていないから……なのだと思つてこゝ。だからどうしても慶の事が気になつてしまつたのだと。

「本當」……いいの？　このまま……？

「す、すみません先輩……あたし……あたし自分でもよく判らないんです……」

幼馴染としての慶が好きなのか、それとも異性として意識しているのかだなんて、今のあたしには判らない。

でも、あたしがこゝへ立ち止まつている間にも、周りの状況はどんどん変化して行くし、慶だつていつまでも子供のままの『あの時の慶』じゃない。

そんな事、先輩から言われなくつたつて判つて。

「な、なんで香代が謝るのよ？　あたしはてつもつ……」

「……先輩い」

あたしの事を氣遣つてくれる先輩の気持ちが嬉しくて、思わず顔を上げた。

先輩はあたしとしつかり眼が合ひてしまい、少し恥ずかしくなつ

たのか照れた素振りであたしから視線を逸らせる。

「な……や、そんなキラキラした眼で見ないでよ。あ、あたしまで恥ずかしくなっちゃうでしょ？」

「す、すみません……」

「だから、謝らなくつたっていいから」

「すみません」

「またあ～ん！」

条件反射みたいに反応するあたしに困ったのか、先輩は怒りせっていた肩をすとんと落として息を吐いた。

そして「お節介……だつたかしらね」と小さく呟いた。

* * *

次の日の朝、慶の家の前に黒塗りの高級車が止まり、運転手さんが降りて来て慶のお母さんと言葉を交わした後、家から出て来た慶を無理矢理高級車に押し込んで連れ去ってしまった。

丁度登校しようとしていたあたしは、眼の前で起つた非日常的な出来事に驚いてしまった。

「お、おばさん」

「あ、番代ちやんねせよ！」

慌てて駆け寄つたあたしは、おばさんはじつもと変わらない笑顔を向けてくれた。

「お、おばよいじやむこます。あ、あのへ、い、今……慶くんが……？」

連れ去られてしまつたように見えたのだけど？

「ええ、先方には大丈夫だからって言つたのだけどな。あたしのお嬢さんが凄く気にそれでいて……」

「は……あ……」

おばさんの話で、その高級車を誰が遣して来たのかが直ぐに判つた。亞紀は足首の捻挫で歩行困難だから車で登校するのは判るけれど、手首を怪我しただけの慶に車での御迎えは少し大袈裟なのじゃないかしら？

「慶も歩いて行けるって言つたのだけどね？ 先方がビビつてしまつて……」

「あの、おばさん？ 慶くん、わざわざ腕を吊るして……」

あたしは慶が三角の白い布を肩から吊るしていたのをじっかりと見てしまった。しかも、手首から肘の辺りまで包帯でぐるぐる巻きになっていたし。

「ああ、あれね？ 大した事は無いのよ？ 少し骨にヒビが入っちゃつてたみたいだけど、お医者からは少しの間動かさないでねって言われただけだし、本人は平氣だつて言つてるから、大丈夫よ？ 心配しないでね？」

「……」

『心配しないでね？ ……なんて言われたつて……心配するわよ。

骨にヒビが入つていただなんて……

お互に不注意だつたとは言え、あたしは亜紀の気持ちを察して、暗くなつてしまつた。

慶は男子部員の中でもテニスが上手な方だ。噂では今度の新人戦で、もしかしたら上位入選するかも知れないと、先生方が期待しているのだと聞いた事があつたもの。

そんな慶が亜紀とぶつかつて怪我をした。しかもそれが慶の利き腕の右手首だつたなんて。

亜紀じやなくたつて、罪の意識を感じてしまつわよ。

そう思つたのだけ……

亜紀は慶とあたしが居るクラスとは別のクラスだ。

なのに、時間があれば頻繁にクラスに遣つて来ては、あれこれと

世話を焼きに来る。

「あ、秋庭くん……一時間田音楽室でしょ？　荷物、持つわ」

「い、いこよせ？……自分で行けるから。遠藤さん……」

「だ、駄目よ？　無理しちゃ。暫くは安静にしておかないとけないって……そ、その、お医者さんから言われたでしょ？」

聞いている二之ものが恥ずかしくなつて来るわ。

二人はお互に顔を真っ赤にさせて恥ずかしげりながら、こんな遣り取りをもう朝から何度も遣つていた。

最初はクラスの男子が面白がつて冷やかしたりしたけれど、録画再生を見ているような進歩の無い遣り取りに白けてしまったのか、やがて誰も相手にしなくなつてしまつた。

時間が経つに連れてあたしには、はにかみ屋の亞紀が慶の怪我を口実に押し掛けて来ているように思えて……そして、口では断つておきながら満更悪くは無いような素振りを見せる慶に、何故だか不快感を覚えてしまつた。

なんだから……？　一人を見ていると苛々する……

優しい亞紀だからこそ、いつして慶にお詫びの心算で遣つて來ているのだと判つて居ながら、苛立つてしまい、ワケの判らない自分に嫌気が差してしまう。

第31話 聞かれてしまった独り言

五時限目の授業が終わって黒板を消してたら、さつき呼ばれて職員室へ行つた委員長の瑞穂が、プリントを抱えて戻つて来た。

「香代っち、今日、あんた日直だつたよね？」

「うん」

「先生が『日直は職員室へノートを取りに来るよ』だつて」

プリントは一人に三枚ずつあるらしく、交互に重ねられていた。瑞穂はそのプリントの束を崩さないように、教壇の上にそっと置く。

「ノートって、今朝持つて行つた宿題のノートの事?」

「うん、そう」

「ええ／＼？」

あたしは自分で驚くくらい、嫌そうな声を上げてしまった。

だって、今日の日直はあたしと慶だ。その慶が怪我をしているから、いつもなら二人で分担していた作業なんかを、全部一人でこなさなくちゃいけない。

ノートの事だつて、今朝みんなの宿題ノートを回収して、独りで苦労しながら職員室に運んで行つたばかりだつて言つのに、今度はそれを返すから取りに来るようだなんて……

あんまりだわ。

ノートが重くて、一度も職員室を往復したのに……

だからと書いて、利き手が動かせられない慶に手伝えとは言えなかつたし、慶の事を気遣つてあれこれと世話を焼く亜紀は別のクラス。幾ら友達だからって、慶の田直の仕事を手伝わせるのはちょっと無理に手伝つてと言つのは気が引ける。

こんな時、頼りになつてくれる姫香は、慶と亜紀が怪我をした田以来登校して来ない。

先生の説明では、他県に住んでいる親戚が亡くなつたと連絡があつたそうで、あれからずっと戻つて来ていないのだそうだ。

あの時、亜紀の怪我の具合を気にしながらあたしに謝つて帰つちやつたのは、部活終了後に予約されていた列車の時間を気にしていたからであつて、別にあたしや亜紀に心変わりや愛想を失かせたわけでは無かつたらしい。

理由を話せなかつたのは、身内の『不幸』ならば、姫香が言い辛くなつたのもなんとなく判る気がするじ。

姫香の件はアリだとしても……なんであたしはこんな時に、慶と田直なんかになつちゃうのかな?

「はあ……」

あたしは大きくため息を一つ吐いて、重い足取りで職員室へ向かつた。

「香代、どこに行くんだ?」

浮かない顔をして廊下を歩いていたあたしは、背後から慶に呼び止められて思わず立ち止つた。

「し、職員室……」

「職員室? ……ああ、今朝香代が持つて行つてくれたみんなのノートか?」

「そ」

あたしは少しだけいじけて素っ気なく言い放つ。

「あれ、重たかっただろ? 僕も手伝……」

「い……いいつ! 独りで持つて来れるから」

「……香代?」

言い掛けた慶の言葉を遮り、あたしは強く言い切つた。

剥きにならなかつたと言えば嘘になる。

あたしは、それまで垂緞からちやほやされていた慶が急にあたし

を気遣つてくれたのが嬉しかった反面……悲しくなつてしまつた。

自分だつて口直なのこ、今頃になつて口直であるあたしを意識して
ただなんて……遅過ぎるわよ。

それでも、あたしは自分の気持ちとは真逆の言葉を口にした。

「あ、あんたは来なくていいから。そのまま教室に残つて居なさい
よね？ け、怪我してるんだから。それに、一回に分ければ持つて
来られるんだし、慶が気にする事ないよ」

ああ、あたしの馬鹿馬鹿馬鹿つ。なんでこんな時に意地張つちや
つたりなんかして、平気なフリするのよ？

「でも、香代……」

「『でも』じゃないの。いいから慶は教室に帰つてて……」

慶の心配そうな声を振り払つよつて、あたしは後ろを振り返らず
にそつそつと捨て置くと、可愛げも無くサッサと足を速めて歩き始
める。

なんだか顔が火照つて……身体が熱いわ。

……れ？ あたし……なんでこんなに怒っちゃつているのかな？

口直に気付くのが遅かつた慶に対して頭に来ているのか、それと
も、通紀にちやほやされて照れていた慶に対してなのか……？

でも本当はもつと早くに慶は日直の事に気付いていたかも知れない。だって、午前中は亜紀が心配して、休憩時間はずつと付きつ切りだったから。

慶が日直を遣らうものなら、きっと亜紀は自分が代わりにするつて言い出すだろうから、慶は行動出来なかつたのかも知れないわ。

「全く……それで無くたつて新人戦が近いのに、こんな時になんで怪我なんか遭つたりするのよ……ふんだ。亜紀にデレデレなんかしちゃつて……」

お陰であたしまで迷惑を被っちゃつたじやないのよ。

「こんな事で気持ちが浮いたり沈んだりするんだもの。

その……」、困らせたり……しないでよ。

「…………めん」

「ええっ？ う、うわー！」

ぼそっと呟いた独り言だったのに、いきなり背後から慶が謝つて來た。

もつとつぐに教室へ慶が帰つてしまつたとばかり思い込んでいたから、この不意打ちには驚いてしまつたわ。

「なつ、なんで？ 慶は教室に居ればいいって言つたじやない」

「そんなコト言わなこでよ。片手なり遣えるんだじ」

慶は穏やかに笑つてあたしの田の前で左手を広げると、ひらひらと振つて見せた。

「……」

ひやあ～～～、ヒリ、ビュンメウ。

もしかしてもしかしなくても、あたしの今の独り言を慶に聞かれちやつたの……かな？

「うわあ、あたし聞かれると拙い事を口走つて居たりしなかつただらうか……？」

いや、そんなコトよつも……

あたしそれ慶へくつけてこるであらつて紀の姿を捜して、辺りをキヨロキヨロと見回した。

「あ、重紀は……？」

「教室移動が無いから、来ていないよ~。」

「や、やア……」

慶の言葉にホッとした。

だけど……

だけど、同時にあたしの友達でもある亜紀の不在を聞かされて、
安心してしまった自分が何だか卑怯に思えて……

第32話 思いもよらない誘い

「ねえ、なんで慶が練習に来ているのよ？」

田直で慶と一緒にみんなのノートを取りに行つてから、一週間が過ぎた。

部活動の途中、先に自分のゲームを終えた田村くんが、派手に水飛沫を上げて手洗い場で洗顔しているのを見付けたあたしは、早速慶の事を尋ねてみた。

田村くんは顔を洗うと、出しつ放しの水に頭を突っ込み、水浴びをした犬みたいにブルブルと頭を左右に激しく振る。

「つふはあ～、チヨー気持ちイ～～」

咄嗟に持っていた汗拭きタオルでガードしたけど、それでも散らされた水飛沫があたしに掛つた。

「冷たつ！ もお。ねえ、聞いてるの？」

「ああ悪い。で？ なんだつて？」

田村くんは、首に掛けていたタオルで顔を拭きながら、あたしの質問を聞き返した。

「慶がどうして練習に来ているのかつて、聞いているの」

「ああ、そういうやあ居るよな？」

田村くんはあたしの質問をやつと理解してくれたのか、アウトローでラケットを手にして順番を待っている慶に視線を送った。

「出来るから来てるんだろ?」

「え?」

意外な答えに、あたしは驚いて思わず聞き返してしまった。

慶の利き手である右の手首は確かにヒビが入っていて、安静にしないといけないはずだ。以前、事故で骨折を体験した事があるお父さんから、歩くだけで傷に響いて痛かったとその時の事を聞かされたいたから、少しならどんな具合なのかは想像が付く。

慶の場合はヒビだからかも知れないけれど……それでも心配になつて来る。

やつぱり怪我しているんだもの。痛くないハズなんて無いわよ。

「だ、だつて利き手を怪我して……ラケットなんか持てないでしょ?」

「いや? アイツ、左でやつてるぜ?」

「え?」

「だから、左手で練習してんだよ」

「え?」

「なんだ？ 知らなかつたのか？ アキバケイは元々左利きだつたんだつてよ。昔、注意された事があつて、無理矢理治したつて言つてた。でも、クセは抜け切れてなくて、今でも給食でミカンが出たら、左で皮を剥いてるんだぜ？」

「え……？」

そ、そつだつた……かしら？

今まで氣にしたりはしなかつたから、よく覚えていないけれど……言われてみれば、慶は左手でミカンの皮を剥いていたような気がするわ。それに、確か慶のお父さんが左利きだつた。

遺伝的な事はよく判らないけれど、ずっと昔……幼稚園の頃に、クレヨンの持ち方を先生に注意されて、慶が泣いて怒つた事を思い出してしまつた。

慶が泣いて怒つたのは、あたしが知つている限りでは、後にも先にもその事だけだつたように思う。おとなしい慶が泣き出すのはよくある事だつたけれど、注意されて逆ギレした慶を眼にしたのはそれ一回きりだつたはず。

以来、慶はあたしの知つている、臆病で泣き虫の慶に戻つてしまつた。

たつた一度だけだつたし、まだ一人とも小さかつた頃だつたから、印象が強くても忘れてしまつていたのだわ。

あたしは意識して、もう一度ア・カトニーに座る慶を観察した。

慶の右手は包帯でまだぐるぐる巻きだつたけれど、今は肩から二角布で吊るしたりしていなし、ラケットを左手に持つて自分の順番を待つてゐる。

時折、左手の感覚を確かめているのか、何度もラケットのグリップを握り直してその度に下を向き、手元を確認している素振りだつた。

「自分から直接本人に聞けば良い事じゃねーの？ そんなに気になるのか？」アキバケイが

田村くんは意地悪そつこにニヤニヤ笑いながら、あたしの顔を覗き込んで来た。

「ちひ、違ひわよ

あたしが慶を不安そうに見詰めていたものだから、田村くんから誤解されちゃつたみたいだわ。

「ふーん『違ひ』ってか？」

「あ、当たり前でしょ？ な、なんで田村くんがそんな事……」

田村くんは慶よりも少しばかり背が高いし、身体も大きい。そんな田村くんから顔を覗き込まれてしまい、あたしは近過ぎる彼の顔の位置に驚いて、思わず身体を引いてしまつた。

田村くんの強引な接近に、あたしはドキリとした。ほっぺたが熱くなつて痺れているみたいな感覚に、あたしはハツとして顔を伏せてしまつ。

な……なんでこんなに近くに居るのよ？

女の子との距離が判つていなかしい。もう、近くを過ぎただわ。

「じゃあ、今度俺に付き合わない？」

「…………え？」

なに？ その『付き合つ』って、どういふ意味の『付き合つ』？

あたしの頭の中で、疑問符が乱舞した。

『付き合つ』って、友達として？

それとも……？

田村くんから、なんだか物凄い事を聞かされたような気がしたのだけれど……今のはあたしの聞き違い？

友達として改めて付き合つ様な余所々しい仲じやないし、そもそも彼が部活に……その、強引だつたけど誘つてくれたから、あたしは成り行きで仕方なく入部してしまつた。

普通に友達として、じつして会話が成り立つているのだから、こ

の場合、田村くんの言った『付き合ひ』とは違ひよつた気がする。』

「あー居たゞ、香代～！ 次い～、アンタの順番だよー！」

居なくなつたあたしを見付けて、姫香が向こう側の離れたコートから大声を張り上げ、あたしに向かつて手を振つた。

「……」

女の子同士なら、買い物とかに誘う時気軽に『付き合ひ』なんて言われたりするけれど、男の子からでもそつまつてアリなんかしら？ そんな言葉を掛けられた事が無かつたから、あたしは自分の都合の良い聞き違いなのかも知れないと、自分の耳を疑つた。

「なに固まつてんだよ？ ホレ、川村が呼んでるぞ？」

「あ？ あ……ああ」

「なに？ ほづつとしちゃつて。連絡、遣すからさ、楽しみにしていいなよ」

「……ち、ちよつと……待つて！ あたしは何も、返事なんかしていないわよ～」

慌てて言い返したけれど、田村くんの姿はもう無かつた。

田村くんも男子部員から声が掛り、彼は爽やかに笑つて練習ニートに戻つてしまつたのだ。

「……」

強引な田村くんに振り回された気がして、少しばかり不愉快な思いを抱いてしまう。

第33話 雨の日の…

次の日は生憎の空模様だった。午後から降り出した雨のせいで、コートは幾つもの水溜りを作つて水浸しになつてゐる。

だから今日の練習時間は、新人戦が終わつた後に控えている学内の文化祭行事について、部員同士で話し合う場を設けられていた。

文化祭での催し物は、文化部の活動発表がメイン。なのであたし達運動部は、その殆どが軽食や屋台関連の物を任せられている。

あたし達テニス部では、男女合同で毎年喫茶店をするように決まつてゐるのだそうで、今日はその役割分担と詳細を決める事になつていた。三年生の先輩方は既に引退されていたけれど、引き継ぎ等詳細の為に、一部の三年先輩方が打ち合わせに参加してくださつていた。

メニューは毎年変わらないそうで、飲み物はアイスとホットが選べるコーヒーと紅茶。それからコーラとサイダーで、百円を追加すれば冷たい系の中にバニラアイスが付くフロートタイプが注文出来る。軽食は簡単に出来るたまごサンドと、一口サイズのホットケーキ。個数限定で女子部の先輩達が焼いたクッキーを出すのだそう。

売り上げの一部は部費に還元されて、新しいボールの購入やネットやライン用の石灰と言つた備品消耗関連に宛がわれるので、先輩方の意気込みは半端じゃない。

小学校の頃の文化祭と言えば、体育館でクラブ活動の紹介と入部

者の勧誘くらいしか遣つた事が無かつたあたし達は、このイベントにワクワクして胸を躍らせてしまう。

買い出しと調理等の準備は先輩方が手分けをして分担し、残つた一年生は幾つかの班に分かれて接客を任されるのだそう。

部員人数が多いから、自分の担当時間以外は各自が自由行動。他の部やクラスに遊びに行つても構わない。

「で、一年は各自エプロンと三角巾を持つて来てください。新しく買わなくとも、小学校の時の調理実習で使用したもので構いません」

「はあーい」

百瀬先輩の説明に、あたし達女子は声を合わせて返事をする。

「接客と言つても、お密さんを空いている席に案内して、メニューを見せて注文を聞いてくれば良いだけだから。緊張しなくていいからね?」

「はあーい」

「案内した席の番号と人数をオーダー用紙に書いて、それから注文を……」

「でええええ～～～？」

先輩の説明を遮るようにして、男子の方から上がつた突然の拒否宣言の大声に、あたし達は驚き、何事かと思って振り返つた。

あたし達と同じ様に、男子も一年が接客をするようになつていてるみたいだけれど、どうやら普通の接客ではないみたいだつた。だつて、鈴木先輩が見本として手にしているのは、後ろからだけれども、ヒラヒラフリルが一杯付いた、後ろのウエストで大きなリボン結びのエプロン……って、どう見たつてメイドのエプロンでしょ？ あれば。

で、その『コスプレ姿』で男子は接客をせらるるの？

あたしの視界に、先輩の力説に蒼くなつて退いている慶達一年の男子の姿が映つた。その向こうには、照れ笑いをして赤面している一年の先輩方の姿が……

線の細い男子なら良いかも知れないけれど、線が太くてガツチリタイプに分類されてしまう慶や田村くん達は……本当に申し訳ないけれど、本気で着て欲しくないなと思つて軽く吹き出してしまいます。

「……まあ、た口クでもない事を男子は企んでいるみたいね」

別のグループで打ち合わせをしていた、金子先輩と富脇先輩が百瀬先輩に近寄つた。

「男子、去年で味を占めて、また今年も遣る心算よ？」

「やーね……ふざけ過ぎだわ」

口では嫌悪感を露わにしたような言い方だったけれど、三人の先

輩方の顔は物凄く嬉しそう。そして、今にも吹き出しそうになるのを必死に堪えているみたい。

って言つか、去年……って？

それで一年の先輩方が真っ赤になつて恥ずかしそうに笑っていたのだと、あたしは納得した。

「先輩へ、当曰は『デジカメ持つて来ても良いですか？』

空氣を読んでなのが、姫香がサッと手を挙げて質問した。あたしの隣に座っている亜紀も、その隣の一葉もウンウンと頷いている。な……なに？」の彼女達の意気込みと盛り上がりは？

「デジカメの学内持ち込みは、貴重品だから駄目よ。携帯持つているでしょ？」

「だつて画像が粗くて……」

「引き延ばしでもする心算？ 広報部が各部を巡回して撮影に来てくれます。後日、写真の販売もあるそつだから」

「で、広報部。去年はすさまじい売上だつたそつよね？」

富脇先輩が困った表情を浮かべて補足説明をすると、金子先輩が嬉しそうに補足の『追加』をしてくれた。

「うわ、なんですか？」

「やつたあーー！」

手放しで喜ぶ姫香達に付いて行けず、あたしは退いた。

でも、本氣で男子の先輩方は慶達にあのフリフリHプロンを着用させる心算なのかしら……？

まさか……本氣？

「せ、センパあ～い？ ジョ、[冗談]ツスよね？」

顔を引き攣つらせた田村くんが、片手を軽く挙げて問い合わせただしたけれども、先輩の様子は残念ながら本氣……みたい。

会計の谷先輩が、男子の部長に声を掛けた。

「ねえ、小林い。男子は去年と同じじにするの？」

「他に良い案があるのかよ？」

「メイドエプロンは去年ウケたでしょ？ でも今年も大受けするとは限らないのじゃなくて？」

「はあ？ だからなに？」

流石は女子部の先輩だわ。行き過ぎた催しモノに異議を唱えてブレークを掛けてくれるのだから。

そう思っていたのに。

「今年はタキシードで……って、どうだ？」

「つてか、それホスト?」

谷先輩は、小林部長に向かつて意味ありげに満面の笑みを浮かべる。

「げ！」

二人の遭り取りに、固唾を飲んで注目していた一年の男子が一斉に退く。

「あやあー、その案に賛成一票ー！」

「あたしもーー！」

「前日は、絶対携帯充電しておかなくっちゃあー！」

退いている一年の男子を無視して、勝手に盛り上がる女子部員と男子先輩方。

谷先輩の発言で、借り切っていた一年の教室が、蜂の巣を叩いたように急に騒がしくなる。

「真面目に遭りなさあーい！」

遂に部長の長谷川先輩が、顔を真っ赤にして声を荒らげた。

「ううん、舞ちゃん。これは集客の為のとても大事な戦略なのよ？ふざけているみたいに見えるかも知れなければ、集客イコール

売上に繋がるんだから。重要な事だわ」

「…… 言つかな？ そこまで」

「うそー。」

「」しながら副部長の真鍋先輩が、長谷川部長を宥めてる。

はあ。それなりに説得力はあるけれど、なんかもつみんな趣味に奔っちゃっているみたい。

「いやー、今年の男子は中々のメンツが揃っているから、結構愉しい文化祭になるんじやないの？ あたしはどうちらの案でもOKだわー」

「…… へんな想像しないでください」

百瀬先輩の腹黒い笑顔に、あたしは心の中で思わず突っ込んでしまった。

「もおーーー 百瀬先輩まで…… みんな…… みんな、一体どうしちゃつたのよおお？」

その後は、即、準備可能なメイドタイプのエプロンを着用するのか、それとも真逆の正装タキシード姿になるのかを時間ギリギリまで議論する事になつたけれども決着が付かず、最終は男女二年の先輩方で取り決められる事になつてしまつた。

け、慶や田村くんがメ、メイド姿やタツ……タタタタキシード姿になるだなんて……

も、もお、想像したあたしの方が、恥ずかしくなつたやうじやないのよ。

あ、あああ、あたしさわ、その、ビ、ビッちでも……、
良いかな……なんて思つたりして……

第34話 初めて吐いた嘘

週末土曜日の午後六時。新人戦まで残すところあと一週間を切っている一年生のあたし達には、休日だなんて皆無だわ。みんな、今より少しでも上達して良い結果を得ようと、その日も練習に励んでいた。

女子部は基本ストロークから始まって、ライジングやパッシングショットと言った、相手にわざとタイミングを合わさない、試合の流れを変えるための鍵になるレシーブや、サービスの見直しをするメニューが組まれていた。もちろん、顧問の先生も休日出勤で来ている。

「礼！」

「ありがとうございました！」

「お疲れ様でしたあ！」

キャプテンの合図で「ホールに一列に並んだあたし達は深々とお辞儀をして、やっと練習が終了する。

「お疲れ様です」

「失礼します」

更衣室を先に出て次々と帰宅する先輩方に挨拶をしながら、あたし達は居残つてグラウンドの整備をしていた。

それは一年の男子も同様だつたけれど、今日は生憎慶の姿は無い。

「香代おー、帰りにマックに寄つて、ショイクなんてどお~。」

姫香と亜紀が早速提案をする。

今日一日、たっぷりと汗を流したから、持つて来た一コットルのレジャー用水筒が空っぽだつた。

「んー、ショイクも良いけど、今はお茶かスポーツドリンク。とにかく水分が摂りたいなー。それにあたし、この後用事があるの」

「じゃあ、北門にある自販機に行こつか? あそこ新製品を入れ替えして、五百缶が百円になるキャンペーン遣つているのよ」

「うん」

約束時間にはまだ少しばかり余裕があつた。それに、姫香達の誘いを断つてもあたしは自販機に駆け込む心算だつたから、この姫香達のお得情報の誘いに乗らないワケにはいかない。

「でもあー、香代が約束だなんて珍しい。相手はダレ?」

冷やかし半分なのか、姫香はにこにこしながらあたしの用事を詳しく聞こうと突っ込んで来た。

あたしと同じく喉が渴いていた姫香は、一気に五百のスポーツ飲料をクリアすると、もう次の一本を買おうと自販機にワンコインを落とす。

せりあと全く同じ種類の五百缶が、コトニーと鈍い音を立てて転がり出す。

「姫香あー、そんなに一気に飲んじゃったら身体に良く無いよー」

「わうだよー、それにこんなに冷たいのに、お腹壊すわよ~。」

「いいのいいの。喉が渴いているんだから。暑いから一度冷えて良い感じだわ」

あたしと亜紀の心配を余所に、姫香は迷わずフルタブを引き起した。

運動直後の急激な水分補給は良く無いって、姫香は知らないのかしづく。

あたしと亜紀は道路と歩道を別けているガードレールに並んでもたれ掛り、揃つて同じメーカーのスポーツ飲料をちびちびと舐めるよう飲んでいるのは、そんな理由だ。

「本当にお腹壊しても知らないから」

「大丈夫だよー。」のあたしが腹痛ハライタときになつたりするもんですか。第一、お腹壊した時に飲むのもコレでしょ？ だつたらモンダイ無いわよ

「だからって、これ冷え過ぎだよ?」

亜紀が心配しているの、姫香は全く聞く耳を持っていない。ま

あ、あれだけ「一トをくたくたになるまで走らされてゲームすれば、喉が渴くのだけ半端ないわよね。

「それよかさ」

「うふ?」

「さつきの返事は?」

「あ? ああ、あれね?」

「いやむやになつていたあたしの約束の件を、姫香はしつかりと覚えていて、なぜか追求して来る。

だけど幾ら友達だからと言つても、まさか男子部員の田村くんから個人的に呼び出されているつて事をペラペラ喋る心算は無かつた。

最近では亞紀と良い感じになつている慶の事を、姫香はあまり好いように思つていらないみたい。で、今の姫香は田村くんがどうも気になる存在みたいになつて来ているらしい。だつて、田村くんの前では姫香はウソみたいにしおらしこ女の子しちゃつているんだもの。

だから、尚更姫香には呼び出しの相手が誰なのかを言えなかつた。

……姫香、「めんね?

そして、あたしは親友に向かつて、初めて嘘を吐いてしまつた。

「あたしの従兄。来年、地元の大学を受けるつて。下見で田舎から出て来るの」

「ふーん、あんたに受験生の従兄ねえー」

「……」

白々しい嘘を見破られてしまったのかなあ……？

亜紀はあたしの約束がなんであるのか全く気にならない様子だったけれども、姫香はあたしの言葉に敏感に胡散臭さを感じ取ったのか、意味有り気な視線であたしを見詰めて来る。

だけど、受験生の龍馬兄(りょうまにい)があたしの家に来るのは本当の事だもの……来週だけだ。

「ねえ、香代」

「なに？」

「それ……ホント？」

怪しげにあたしの心の中を見透かそうとしている姫香の視線が痛い。姫香をあたしは傷付けたくない、嘘を吐いているんだもの。

男の子からの本格的……らしい誘いつて、あたしにとつてはこれが初めてだつた気がする。

『俺に付き合わない?』

田村くんは、そうあたしに言つてくれたのだけれど、なんだか引
っ掛かる微妙な言い回しなのよね?

『俺』と『付き合わない?』って、限定した言い方じゃ無かつたし、
『俺』に『……』って言つ言葉の向こうには、複数の人が絡んでい
るような気がするんだもの。

第34話 初めて吐いた嘘（後書き）

ライジング : ワンバウンドした球が、軌道上十分に上がり切らない状態を打つ。

パッキングショット : ネット前衛の横を打ち抜く打球。略してパス。サイド側はサイドパス。真中はミドルパス。

第35話 お洒落？

姫香達と別れた後、田村くんからの呼び出しを受けて向かつた待ち合わせ場所は、数年前に市が移転拡張した中央公園だった。

公園に向かう途中で自宅があるから、あたしは一旦自宅に帰つて、部活へ持つて行つた荷物一式を降ろした。ついでに手早くシャワーで練習の埃と汗を流して、普段着に着替えた。

だけど、初めて男の子との待ち合わせと言つぱりドキドキなイベントに、少しだけ自分の格好が気になつて、こっそりお母さんの部屋に入り、置いてある姿見に全身を映して、くるんと廻つてみた。

「ん~と……」

自分の姿だし、誰からも見られていないのは判つてゐるのだけれど、何だか少し……照れちゃうな。

あたしが着替えたのは、淡いベビーピンクのTシャツとクリーム色のパステルカラーのハーフパンツ姿と、これからまた部活練習すると言わても違和感が無い恰好だつた。

「……」

ちらりと頭の中で、この前お母さんから貰つた、白地に小さな青い水玉柄のワンピが浮かぶ。

それはお母さんが型紙と布を買って来て、手作りしてくれたワンピだ。ちょっとした場所にも出られるよつこと、丈の短い半袖ボレロタイプの上着とセットになつてこる。『アンサンブル』とか言う上下のお揃いの服だ。

あたしのお母さんは手芸が得意で、年に何回か地域で開催されている趣味の講座で、手芸教室の講師として呼ばれたりしている。

フルートの布で可愛いマスコットなんかを簡単に作つてしまひし、季節によつては編み物とか、刺繡。カントリー調のトールペイントとか、ステンドグラスなんかも自分で作つちやう、とても器用なお母さんだ。

でも、あたしはお母さんの器用では譲り受けでは居なかつたみたい。

第一じつと座つて居られないし、家庭科でお裁縫をしても怪我ばかりするし、縫い目はバラバラでとても見られた出来じや無い。

お父さんとお母さんは、あたしが生まれた時、女の子で良かつたつて喜んでくれたそつだけじ、今のあたしはちつともお淑やかじや無いし、女の子らしくなんか無いんだもの。

* *

あたしはリビングのロングソファにうつ伏せに寝転び、膝から下

……両脚を宙に浮かせて時折足首をヒクヒクヒクヒクと動かしながら、頬杖をついて優雅に雑誌を見ていた。

『少しはスカートでも穿けば?』

練習が無い日でも、ジャージかスウェットの短パン姿でいるあたしを見兼ねたお母さんがそう言った。

でも言われば、いつの間にか家でスカートを穿かなくなつている事に気が付いた。

『ええー? あんなのヒラヒラしてて邪魔だもん。あたしにスカートだなんて似合わないわよ』

『そんなこと無いわよ? 女の子なのに。お母さんは香代のスカート姿を見たいわ』

一度ジャージの心地好さと囁つか……ラクなのを体験してしまうと駄目だわね。それに、ジャージだってオシャレで結構可愛いのを売っているもの。スカートだなんて窮屈に感じてしまつて駄目だわ。

『学校の制服だつてスカートでしょ?』

ハコヒダのプリーツスカートをいつも穿いているじゃない。

『それは制服でしょ? もう……そりじゃ無くつて、家で穿くの』

『面倒だもん。これでいいの』

あたしはそれっきり、お母さんにぶいとそっぽを向いた。

お母さんにはスカートを穿きたくないみたいに言つたりやつてしまつたけれど……本当はそんなことなんか無い。ずっと小さかつた頃は、いつもスカートだったもの。

いつの間にか、周りの友達がスカートを穿かなくなつたせいもあるけれど、スカートの丈によつては自転車に乗れなかつたり、飛んだり跳ねたり出来ないし、それに男の子とはつきりと区別されるみたいで、なんとなく恥ずかしくて嫌だなつて思つてしまつたから……

暫く着ていなかつたワンピースやスカートに妙なコンプレックスを抱いてしまう。『似合わない』とさえ思つてしまつるもの。

そつは思つてみたものの……『もしかしたら似合つかも知れない』……とも思つた。だつて昔はちゃんとスカートを穿いていたんだもの。

「……」

あたしはお母さんに作つて貰つた田に水玉ワンピ姿になつた自分を想像した。

そうしたら……何故だか眼の前に……左右からあたしに向かつてにっこりと笑い掛け、手を差し伸べる慶と田村くんが、セツトで出て來た。

「いいいつ？」

な、なに？　うへ、この状況は……？

あたしは顔が急に熱くなつたのを感じ取つてしまい、慌てて両手をバタバタと振つり、妄想を搔き消した。

しかも、文化祭の男子一年生に用意されるコスチューム騒動が冷め遣らぬ今の中のあたしの脳内には、一人ともタキシード姿……って、何気に処か、猛烈に恥ずかしくなつて来る。

い、幾ら田村くんからの誘いでも、でつ、でで、デートなワケじやあ無いんだから、^{かしこ}畏まつて氣張る必要なんか無いわよね？

あたしは姿見に映つた自分の姿を、今度は観察するよつと見詰めた。

日焼け止めを塗つていたけれど、今日も炎天下で頑張つて練習に励んでいたから、服から出ている顔や手足は、少しだけ熱を持つて赤味を帯びてはいるものの、程よくこんがりと色付いている。

日焼けを何とも思つていらないらしい慶や田村くん達男子の黒さには負けてしまうけれど、それでも……

「焼けてる……」

思わず自分に向かつて言つた言葉で傷付いてしまつた。

* *

テニスコートに一番近い駐輪所に自転車のスタンドを立てると、あたしは辺りを見渡して田村くんの姿を捜した。

彼らテニス部だからって、部活後に即呼び出しだなんてあんまりよ。そう思いつつ、男の子との待ち合わせに少しだけドキドキ。

「あ、おうこ土橋い」

あたしの姿を先に見付けた田村くんが声を掛けて来た。

声のした方を振り向いたあたしは、居る筈の無い慶の姿と、もう一人の人物の姿に驚いて眼を見張り、顔を引き攣らせてしまった。

「……」

自転車置き場で立ち尽してしまったあたしは、頭から冷水を浴びせられたような気分だった。

田村くんのお誘いに、なんだろうかと首を突っ込みたくないって、少しだけ舞い上がり……そして、半分だけ姫香の事を想つて嘘まで吐いてしまったのに……あっさりと嘘がばれてしまつだなんて。

あたしは姫香に訊ねるべき言葉を失くして俯き、親友に嘘を吐いてしまった事を後悔した。

こんなのが……無いよ。

それに、どうして姫香がここに居るの？

練習の後、きっと姫香はあたしがこうして遣つて来る事を既に知つていたのだわ。だから曖昧に答えるあたしに対して、妙に絡んで来ていたのね。

でも……姫香だって酷いわ。慶や田村くん達と一緒になら、先に言ってくれれば良いじやない。それならあたしだって余計な心配や、嘘なんか吐いたりする必要なんか無かつた筈よ？

「あれえ？ 香代、親戚の人来るのじゃなかつたの？」

「う……ううん。あたしの勘違い。来るのは来週だったの」

「ふうん」

予想通り、姫香はあの時があたしの答えを蒸し返して來た。

きつと、姫香は嘘を吐いたあたしの事を見損なつてしまつたに違いないのだわ。一緒に居る慶や田村くんだけ、あたしを友人に嘘を平氣で吐けるとんでもない女の子だつて思つた筈よ。

「あ、あたし……やつぱ……か、帰る……ね」

あたし……三人から見詰められている……やつと思つと身体が竦んでしまつた。震える手をやつとの思いで自転車のハンドルに伸ばして、握り締める。

あたしは居た堪れなくなつて、とにかくこの場から逃げ出そうとした。

「香代、待つって」

「あー、待てよ土橋」

慌てた慶と田村くんの声が重なる。そして……

「ほらな川村？ 言つた通りだつたら？」

「……そうね」

田村くんと姫香が意味深な遣り取りを始めた。

あたしは何事かと思い、俯いてしまった顔を上げて一人を見る。

あたしから嘘を吐かれた姫香は……少しも怒つてやしなかった。むしろその逆で、なんだかあたしを氣の毒がり、可哀想に思つてゐるみたいな表情を浮かべている。

対して田村くんは、彼の後ろで困つている慶を見て、少しだけ意地悪そうに「ヤニヤと笑つていた。

「な……なに？」

あたしは一人の様子を訝り、答えを求めて姫香を見詰めた。

「ううん。大した事じゃないの」

姫香は無理矢理な作り笑いを見せる。

「そんな……」

『大した事じゃない』……って、一体どう言つ事なの？ あたしは姫香に嘘を吐いちゃつていいんだよ？ 悪いのはあたしでしょ？ なのに、どうして笑顔なんかあたしに向けられるの？

「さー、これでメンツも揃つたし、行こうか？」

何事も無かつたみたいに平然としている田村くんの声に、あたし

はハツとする。

「ちよ…… 田村くん？ 一体どつこい事？」

あたしは自分の置かれた居心地の悪い状況に納得出来なくて、今度はあたしを呼び出した田村くんに食つて掛けた。

「ハイハイ、んじゃあ後で説明して……」

田村くんは面倒臭そうに軽く両手を上げて見せたけれど、その後すぐに慶とあたしの顔を素早く盗み見ると、急にプツと吹き出してクスクス笑い出したかと思つたら、掌を返すように態度を変えた。

「やっぱ説明すんの……止めるわ

「おこ、田村そつや無いだ？」

「え？」

言ひ返さうと身構えたら、先に慶が口を開いた。

慶も……なの？ 慶もあたしみたいに呼び出されたのかしら？

田村くんは慶から突つ込まれているにも関わらず、相変わらず二ヤニヤ笑いを浮かべている。慶はそれが気に食わなかつたらしく、少しだけ頬を紅潮させながら眉を潜めた。

「まあ、口で話込んじまうのも時間が勿体無いしよ。取り敢えず予約してるバーに行かね？」

「……お？　あ、ああ……」

慶は狐に摘ままれたみたいな顔をしたけれど、田村くんの強引な押しの強さに氣圧されて、上手く丸め込まれてしまったみたい。二人の男子はあたしに背を向けて、先に歩き始める。

「……」

ちよつと……待つて？　『時間が勿体無い』？　『予約してる』
ート？？？　ってなに？

取り残されてしまったあたしは、田村くんの言葉に混乱した。

「ほりあ、香代もひづち、ひづち」

「え？」

先に一人の後を追う姫香が、あたしに声を掛ける。

「あれ？　ラケット持つて来なかつたの？？」

「え？」

「仕方無いなあー、じゃあ、あたしの予備を貸してあげるね」

「ええ　つ？？？」

ラケット持参が当然のような姫香の言い様に、退いてしまった。

「」に呼び出されたのは確かだけれど、でも、今日、たって一日中部活をしていたのよ？なのに、部活がやっと終わったら、呼び出されてまたしても練習なの？

第37話 我儘な思い込み

「セー……ンじゃあ、アキバケイが医者から『一応治ったよ』宣言を貰つたってー『トだし、『出所祝い』にイツチヨ揉んでやりますか?』

田村くんが左手に持つていた白い軟式ボールを、青空に向かつて真上に高くトスアップした。

夏の頃の濃い蒼さは無いけれど、澄み切つた青空に田村くんが上げた真っ白なボールが、ポツンと綺麗に浮き上がる。

「だ、誰が『出所』だよ? 人聞きの悪いコト言つなよな?
つたぐう」

口を尖らせて文句を言いつつ.....それでも慶はすぐに笑顔を浮かべると、田村くんの反対側コートの後衛に就き、軽く膝を折り曲げてレシーブの構えを取つた。

田村くんは、コートへと真つ逆さまに落ちて来るボールを慶に向かつて打ち込み、サービスエースを取ろうとしたけれども、右手でラケットを握り、腰を落として低く構えていた慶が、容易くリターンを決めて来る。

「違うじゃないか!」

田村くんが不敵に笑い、速攻で返球する。

「……」

あたしは眼の前で突然始まつたゲームに、どうすればいいのか困惑い、立ち戻くしてしまつた。

「ほらほら姫香代、アンタもサッサとコートに入つた。入つた」

「ち、ちょっと、姫香あ？ あたしゲームするだなんて……」

そんな心算で来ていいないつて。

別に田村くんとペアを組みたいとか、慶じやなきや嫌だなんて思わなかつたけれど、慶の居るコートには、もう姫香がチャツカリ入つちゃつてペアを組んでいる。その姫香に誘導されて、あたしは空いていた田村くんの居るコートの前衛に渋々入つた。

練習直後にまた練習？ 「んなの……聞いてないわよー？ だけど、練習すると判ついたら、もしかして、ここには来なかつたかも知れないわね。

田村くんが言つ通り、さつきの安定したリターンで、慶の怪我がほぼ治つたつて事は判つたわ。でも、治つた報告なら、明日の部活に行けばみんな判る事じや無い？ デリしてこんな所にわざわざあたしを呼び出さないといけないのよ？

何だか姫香と田村くん達から、良いように利用されりやつたみたいだけど、それがどうしてあたしなの？

「土橋！ 右！ 抜かれる」

「あ？」

あたしはここに呼び出された理由を考え込んでしまい、前衛の守備が疎かになってしまった。

ガラ空きになつた右サイドに、慶から（レベルスイングで強烈な）ショートボールを打ち込まれてしまい、後衛の田村くんがフオローに走るけれども、球足の速さに追いつけない。

「はーい、（ゼロ、ワンね）

姫香が嬉しそうに言い、田村くんは面白くなぞうに「ちえっ」と軽く舌打ちした。

「いいか土橋？ 川村はオマケだ。アキバケイを狙つて返球しろよ？」

後衛に居る田村くんが、ラリーを続けながら声を張り上げる。

「やかましい！ ダレがオマケよ？ このあたしを無視すんなー！」

田村くんの言葉に姫香はムッとして顔を赤らめた。そのまま彼を見ると、腰に左手を当て、仁王立ちになつてラケットで差す。

田村くんは承知しているのか、へへっと笑つて舌を出した。

「の二人……こつの間にか仲良くなつてる。『抜け駆けしないで

ね』って言っていたのは、姫香の方だったのに……。

少し悔しくなつてしまつたけれど、姫香と田村くんってなんだかお似合いって気がするわ。姫香の今年のバレンタインの成果は、無駄じゃ無かつたつてコトなんかしり?

「アキバケイを狙つて行けよ?」

「え ?」

繰り返して言ひ田村くんの言葉に、あたしはラケットを抱えてうろたえた。

「また無視するーー!」

「うぬせえ、外野!」

「なにいへーー!」

一人の遣り取りにあたしは退いた。今気が付いたけれど、慶も相手コートで退いちやつているわ。

でも……なんて口の利き方なのよ? まあ、仲良くなつてているからいじや、こんな凄い遣り取りが出来るのでしょ? けれど……

それにしても、慶に向かつての返球つて……それつてボディショットを遣れつてコト?

「『え　　？』じゃ無い。一年のジヨシで一番コントロールが利くの、土橋だろ？」

「ボディショットでしょ？ それ。何も慶にそんなコト……第一、あたしじゃなくつたつて、他にたくさん……」

あたしの言い訳を聞いていた田村くんは、頭を搔いて面倒臭そうに相槌を打った。

「あー、ハイハイ……でもな土橋？ 他のヤツに頼んで、そいつがOK出してくれると思うか？ 試合が始まつたら仲の良い友達でも下手すりや組み合わせ次第でライバルになるんだぜ？ 誰もが上位入賞を目指して頑張ってるのに、ケガしてリスク負ったアキバケイの上達の手伝いを遣つてくれと言つたって、そつそつ相手してくれるヤツなんか居ないだろ？ 正直、俺だつて手を貸すのなんかゴメンだ。アキバケイが居なければ、俺はその分上のし上がるんだからな」

「だ、だつたらなんで……」

今、こうして慶の手伝いをしているのよ？ それに、混合ダブルスなら判るけど、男子対女子の個人戦は無いハズでしょ？

「さ～あ。なんでだるうな？ 放つておきやあ良かつたんだるうナど……俺にも判ンねーよ」

「……なにそれ

「たださ、不戦勝ならこぞ知らず、試合にアキバケイが出る以上は、怪我で練習不足になつてるアキバケイを打ち負かしても、自慢には

ならないんだって。俺はそんのは好きくナイんだよなー

「……え？」

田村くんのその言葉で、今まで知らなかつた慶の本当の実力が、どれほどのもののか読み取れたような気がした。

部活動習中、派手なパフォーマンスで周囲を巻き込み騒いでいる田村くんの実力が、他の男子部員よりも上の方だと言う事は知っていたけれども、田村くんよりも控え目で大人しい慶の実力がどの程度のものなのか、興味はあつてもずっと判らずに居たし、正直な所、知りたくは無かつた。

だつて……

あたしの中の慶は、小さかつた頃のあの泣き虫慶で居るんだもの。その慶が、実力を持つていると認められている田村くんにさえ、一目置かれているだなんて……本当は、いつまでもあたしを頼つて、後を就いて来てくれる慶でなくつちや嫌だつたんだもの。

じつして田村くんや姫香がワンクッシュョンとして間に入つて来てくれるお陰で、慶の事を身近に感じて、少しずつ見えて来ているような気がするわ。同時に、慶がどんどん成長してしまい、いつの間にかあたしに追い付き、追い越していった事も、嫌と言つぽど思い知らされてしまった。

もうあたしに頼る必要なんか……無いんだね？

そうでしょう？……慶？

あたしはゲームの最中だと囁き事をすっかり忘れて、田村くん独りに慶と姫香の相手を任せてしまつた。

必死になつて対戦する田村くんだけれども一対一。怪我が治つたばかりだとは言え、小学校では主将を務めていた慶と、途中入部だつたけれども卒業前には上位に居た姫香の二人を敵に回して、たつた独りで太刀打ち出来るワケなんか無い。

あたしと田村くんのペアは、たちまちワンゲームを落としてしまつた。

「ゲームオーバー！」

姫香が嬉しそうにコールする。

「コラ士橋！ ボサッとしてないで、お前もちつたア 参加しろよー！」

「ひゃああつ？」

ぼんやりとしていたあたしの頬に、田村くんはコートのすぐ近くの自販機で買った、キンキンに冷えたスポーツ飲料をいきなり押し当てる來た。

第37話 我儘な思い込み（後書き）

-) レベルスイング : 腰から胸の間の高さから打つグランドストローク。
-) シュートボール : 直線的に打つ、速いボール。野球のシュートとは違います。
-) ゼロ、ワン : カウントは、常にサービス側を先にコール。

第38話『彼と彼女』

「うわっ？ ゴメン」

驚いて飛び上がったあたしを見てふざけ過ぎたと思つたのか、田村くんは慌ててすぐに謝つてくれた。

「なつ？ なに……？」

あたしは姫香から借りたラケットを、思わずしつかりと胸に抱き締めて畏縮してしまつ。

「悪い、土橋。でもな、せつかくお前を呼んだのに、なにもせずに帰つたりするなよな？ ほれ」

田村くんは、動搖しているあたしの心を読んだのか、それとも場の空気を読んで和ませようとしたのか判らなかつたけれど、悪戯つ子みたいな笑顔を浮かべながら、あたしの頬に押し当てたスポーツ飲料をそのままあたしへと差し出した。

そして、もう片方の手に持つた同じ物を、ぐいぐいと豪快に呷る。^{あお}

「つそ……」

そんな……事……判らないわよ。

ワンゲーム落としたけれど、田村くん一人でも慶と姫香の相手は十分じゃない。なのにどうしてあたしを呼んだりしたの？

「あー！ 恭ちゃん、あたしの分は？」

「ぶ つ！」

あたしに遣した缶を見て姫香が騒ぎ、田村くんが飲んでいたスポーツ飲料を吹いた。

『恭ちゃん』……つて、姫香と田村くんはそんな仲なの？

あたしはこの時、既に自分が慶の事を姫香みたいに呼び合っている事に気付きさえしていなかつた。だつて、小さかつた頃からお互いに名前で呼び合つていたし、名字で呼ぶ必要なんか今まで殆ど無かつたんだもの。

「おまつ、お前なあ……『恭ちゃん』つて……んな、なに甘えてんだよ？ ジツ、自分で買え」

田村くんは顔を真つ赤にして照れている。わざと田村くんの事を『恭ちゃん』って呼んだ姫香の方も、少しだけ頬が赤くなつていた。

「えー、だつて香代には買つてあげてるのにー？」

「あのなー、土橋は特別。来てくれた駄賃だ」

「いいじゃないのよー。ねーねー買つて、買つてえー」

「だーら、自分で買えっての」

姫香が田村くんの袖口を掴み、口をアヒル口みたいに尖らせて、黙々つ子みたいに拗ねて見せる。

いいなあー、姫香は。

そう思つた。

多少のワガママだと承知していても、物怖じせずに自分の思った事を素直に田村くんに伝えられる勇気つて言つか……今のあたしには持つていらないモノを姫香は持っているのだわ。彼女を見習つて真似をするかどうかは別にして、小悪魔っぽい姫香の『女性』を見ちやつたような気がして、なんだか新鮮に思えた。

普段は自分から『アタシ、毒ばつか吐いてるし』なんて言つているのに。いつもより少しだけ、姫香がお姉さんっぽく見えたのは、あたしがいつまでも進歩していないせいだからなのかなあ。

田村くんに声を掛けられた時から、もしかしてのトキメキがあたしに無かつたと言えば嘘になる。でも、ゲーム中に姫香との仲の良さそうな遣り取りを田の当たりにしてしまい、そして今此処で渝しそうにじやれている姫香と田村くんを見ているうちに羨ましくなつてしまつた。

『彼氏』と『彼女』ってこんな感じなのかな？

羨ましく思う反面、なんだかあたし一人が取り残されてしまった

ような気がした。切ないような不思議な息苦しさを感じて心細くなつてしまい、二人から視線を逸らせると、少し離れたその先に慶が居た。

あたしと同じく、姫香と田村くんの遣り取りを見ていたけれども、あたしとは違つて慶は一コ二コしながら見詰めている。それは一人の仲をとっくに承知して見守つているみたいな視線だつた。

その慶と、視線が合つてしまつた。

あたしの視線に気付いた慶は、いつものように穏やかな笑顔を遣して来る。

「……」

本当は、慶から何か言って欲しかつた。

田村くんみたいに、「冗談でも何でも良いの。気の利いた言葉で無くても良いから、あたしに言葉を掛けて欲しかつた。一人の遣り取りを見ていた直後があたしにとっては、慶の笑顔に物足りなさを感じてしまい、思わずそっぽを向いてしまう。

帰りたい。

姫香達と逢つた瞬間から、ずっと引き摺つていた想いが沸々と湧き上がり、一段と強くなつてしまつた。

あたしと慶は、昔はこんな風じや無かつた。お互に氣心が知れ

ていたから、何でも気軽に……それこそ今の姫香達みたいな遣り取りだって出来たかも知れなかつたのに。

でも、そんな関係を続けられなくしてしまつたのは「」のあたし。

姫香や亜紀に面と向かつて慶との仲を問い合わせただされてしまい、自分の気持ちを確認している隙ひまさえ失くして、あたしの方から慶を遠去けてしまつたからなのだわ。

あたしは、慶になんて酷い事をしちやつたんだろう。

慶もあたしに近寄れなくなつてゐるのだと、この時にハッキリと判つてしまつた。

お互たがいに気詰つむまつてしまい、言葉を掛けられなくなつちやつた……こんな状態になつてしまつだなんて、あの時は思いもしなかつたんだもの。

もつ仲直りだなんて、無理……なのかなあ？

じりじりとした焦燥感は募る一方だった。

「おうーい、土橋？ 起きてるかー？」

「はっ？」

顔の前で手を振り、あたしの意識を確認している田村くんの声で
我に返った。

またしても驚いて肩を跳ね上げてしまつたあたしを見て面白かつ
たのか、田村くんは急に笑い始めた。

「ぐすくす……土橋つてさー、ピクビクし過ぎだよ。小学校で飼つ
ていたウサギみたいだ」

「うへ、うわきこ？」

あ、あたしが？

「ん。で、因みに川村は凶暴な二コト……コッ」

「はー、そこまでー」

田村くんは姫香から最後まで言わせては貰えなかつた。姫香が田
村くんのおでこに向かつてラケットをボレーするみたいに強く押し
出すように振つたからだ。

「痛つっだあああ～～～っ！……ん、なつ、ナースんだよ？」

涙目になつた田村くんのおでこには、姫香が付けたガットの網状
痕が、赤く薄つすらと付いていた。

第39話 ダブルスなのに…

田村くんはスポーツ飲料を一気に飲み干すと『ふはーと大きな声を出した。

あたしは彼の声に驚いてビクつき、姫香は『ヤダー、オヤジっぽい』と言つてあからさまに嫌そうな顔をして非難する。

でも、田村くんはあたし達の反応を、全く氣にも留めてはいなかつたみたいだつた。

「アキバケイは治つたつつてゲーム遣つちやつてるけど、それは本人が言つてるだけだよ」

「え？ で、でもゲーム前にお医者からOKが出たつて言つたのは田村くんでしょ？」

あたしは田村くんの辻褄つじつまが合わない言葉に引っ掛かる。

「ああ。詰まり、医者が許可を出したつて言つても、リハビリ程度の許可つてコトだよ。落ちてしまつた体力や筋肉を元に戻す為のリハビリ許可さ」

「おい田村、余計な事言つなよ」

自分のベンチへタオルを取りに行つていた慶が、あたし達の会話に合流して來た。

弾んでいた会話が自分の事だと知った慶は、少し怒っていたみたい。

滅多に怒った顔なんか見せない慶だから、単にあたしが場の空氣で勝手に怒っていると思ったのかも知れないわ。もしかしたら、田村くんに暴露されて困っていたのかも……

「つて、今ゲーム遣つていいんじゃない? いいの?」

「良かねーよ。んなワケねーって」

姫香が少し慌てた突っ込みをするけれど、田村くんは平然として受け流す。

「田村つー!」

「あづづづ……んま、参つたつ。うひ、ノーサン」

慶から片腕で首を締められてしまい、田村くんは顔を真っ赤にして降参した。慶の照れ隠しだとは思つけれど、幾ら仲が良くなつたつて暴力は良く無いと思うのだけ……

「だつたらどうしてリハビリの筋トレじゃなくつて、ゲームを遣つているのよ?」

「んー良い質問だねー。要はそこだよ」

姫香の質問を田村くんは待ち受けっていたみたいだった。悦に入つた田村くんが調子に乗つて腕組みをする。

「むづめりよ。続や、遣りつけ？」

「あー、おお」

慶が情けない声を出して、ゲームを急かした。あたしには、慶が田村くんに『それ以上言ひな』と口止めをしたように思えてならない。

「土橋、いーか？ アキバケイ日掛けで思いつ切り打ち込んで連れ

「え ッ、出来ないわよ」

田村くんはあたしにせば同じ指示を出してきた。

「ダイジョウブだつて。香代のへナチヨンなんか当たりやしないか
う」

「一.」

あたしの心配に突っ込みを入れるよう、相手「コードから慶が声を張り上げる。

……なんか……今やつを力ちんと来ちゃったんだけど……本気出しても良いかしら？

□では出来ないと言しながら、それでもあたしに振つて来たボールを慶田掛けて返球する。

キャッチボール等なら身体の真ん中で捕らえるのが基本だけれど、

この場合、身体を田掛けて飛んで来るボディショットは、かわす事は簡単でも、返球となると中々難しい。

田村くんの速いリターンとあたしの集中砲火で、慶はそのゲームを落とした。

「コイツ、新人戦が近付いて来たものだからおとなしく休部出来ないのさ。いきなり俺達男子とゲームしたって、分が悪いだろ？ その点女子なら良いリハビリになるだろうしね。特に土橋なら声掛け易いし、周りから変に思われたりしないしやー」

その後半部分はどういう意味？ 聞き捨てならない田村くんの回答に、ムツとなってしまつ。

「田村！ 香代に勝手なこと吹き込むなよ」

「はああ？ 土橋を呼べと言つたのは、オマエがやね？」

赤面した慶が迷惑そうな……きまりが悪そうな顔をして、田村くんに向かつて強烈な（ドライ）ドライブを掛けて来た。

「お……つと、もうこなくっちゃなー！」

軽口を叩きながら、田村くんも負けずに返球する。

打球が……速い！

さつきのゲームの速さじるじや無かつた。どんなに集中して見ても、軌道上のボールが点じゃなくて、線に見えてしまつ。

あたしは田村くんの意味深とも取れる発言に一瞬引つ掛かつたけれども、一人のラリーに圧倒されてしまつて、考えを巡らせている余裕すら持てなかつた。

部内女子のリターンとは、比べ物にならない男子の激しい打ち合
い。

元々、パワーで押して来る男子のラリーを、アウトコートから見
ていて速いとは思つていたけれど、同じコートで、しかもこんなに
至近距離で打ち込まれたら……脚が竦んで怖くなつてしまつ。

「ち、ちょっと…怖…い…なに本氣出してシングルス始め
てるのよ…ダブルスじゃなかつたのぉ？」

どうやら相手コートの姫香もあたしと同じみたいだ。手出し出来
なくなつてしまつた男子シングルスのゲームに巻き込まれて戸惑つ
ている。

「最初は球速に慣れれば良い。」ポーチ出来そんなり遠慮せずに
入つて！

「えへへへ、い、いんなの……で、出来ないわよ…」

「出来るつて」

そんなん
……

笑いながら軽く言つてのける慶の言葉に、姫香もあたしも黙つて
しまう。

第39話 ダブルスなのに…（後書き）

）ドライブ　：　ボールに順回転を付けて強打すること。
）ポーチ　：　ダブルスで、パートナー側に飛んだボールを飛び出してカットすること。インターフェット。

第40話 ゲームの後で…

結局、一回田のゲーム終盤途中から慶が腕に違和感を覚えてリタイヤしてしまった。その後はみんな慶の事が気になつて集中力を欠き、あたし達はゲーム続行どころではなくなつてしまつた。

みんなには内緒にしていたみたいだけれど、あたしは慶が一回田のゲーム後半頃から、休憩の度に自販機のジュースを飲みながら、さり気無くテープリングで固定していた手首に冷えたペットボトルを宛がつていたのに気付いていた。

最初、慶がジュースを当てていたのは氣のせいだと思つていた。でも田村くんにさえ気付かれないように慶が取つていた行動は、あたしの眼には疑惑から確信へと変わつてしまつた。

きつと急に動かしてしまつたから、痛み始めたのだと思つ。

試合が近いからと言つたつて、リハビリに本気出してゲームする事は無いと思うのに……そんなに痛い思いをしてまで練習して、試合に臨みたいだなんて……どうかしているわ。慶に付き合つている田村くんがつて、姫香だつてやうよ。

あたしは、慶の無茶に付き合つている一人の気持ちが判らなくなつてしまつた。もつとも、姫香は単に男子一人に付き合つているだけで、彼等の無茶振りを気にしてはいないうに思える。けれど、そんな慶に気付いていても、あたしの口からゲームを止めるようことは言えなかつた。

『僕はね、お父さんみたいにテニスの試合で優勝するんだ』

小学校の時に軟式テニス部に入部することを決めていた慶は、お父さんが大学生時代に優勝した時のメダルを自宅から持ち出して来て、あたしに見せてくれた。

色あせた紅白のリボンが付いていた金色のメダルは、そのまま飾られるように透明なケースの中央に丁寧に収められていた。それは、慶が四年生になる年の春、お父さんがお仕事の関係で、名古屋に転勤する為の引っ越し作業をしていた時に、偶然書斎の奥から見付かったのだそう。

初めて田に対する金色の丸い綺麗なメダルに慶は強く興味を持ち、処分しようとしていたお父さんから貰ったのだと言っていた。

お父さんに対する尊敬と憧れを抱いていた慶は、自分の目標を定めてどんどん先へと進んで行つた。あれから三年半 慶はお父さんの事を決して口にしたりはしないけれど、あたしには慶がずっとお父さんの背中を見て、追い付き、追い越そうとしているみたいに思えてならない。

そして、あたしは……

慶から誘われて何となく入部したテニス部で、そこそこの成績を保ちつつ小学校を卒業して、そしてまた成り行きでテニス部に入部してしまった。

アキバケイといつも一緒に…… そう周りから冷やかされ、慶と出来ているのだと他人から勝手に思われて、結び付けられるのがどうし

ても我慢出来なくて、あたしは慶と距離を置いてしまった。そして気が付けば、あたしの後ろをついていたはずの慶が、いつの間にかあたしを追い越して先を行き、あたしが慶を追い掛けているようになっている。

焦りとも諦めとも区別がつかないような複雑な想いが、胸の奥底から湧き上がって来る。

田村くんの事が気になり始めていたけれど、かなり強引に引っ張つて行く所がある彼にはやっぱりついて行けそうにない気がするわ。何より彼にはもう姫香が傍に居るんだもの……

田はとっぷりと暮れてしまい、川の近くにあつた駐輪場では、涼しい風がそよいでいて心地良い。ポニー・テールにしているあたしのおくれ毛が、そよそよと風に煽られてくすぐったかった。

田中、みんなと練習を頑張つたけれど、数時間しか経っていない慶達のゲームに参加した時の方が、疲れ方が半端無いのはどういふ事なのかな? 練習量では圧倒的に、部活の方が多いはずなのに。

「香あー代、まあーだ氣にしてるの?」

「ん……」

浮かない顔をしているあたしに、姫香が悪戯っぽく笑い掛け來た。

そう 姫香との事だつて、あたしの中ではまだ何一つ解決なん

かしていないのよ？

でも姫香やその場に居た亜紀に吐いてしまった嘘だつて、姫香は全然気にしていないみたいだわ。それとも、あの時あたしが嘘を吐くだろ？と、承知していたとでも言ひのつかしら？

田村くんが姫香に囁いていたのは、多分その事。そして、姫香は田村くんの言葉に納得していたわよね？

どうして？

あたしは姫香に問い合わせるよつた視線を送った。

「あたし、もう氣にしていないわよ。あの状況で来ようと思つたら、香代でなくつたつて誰だつてそう言つてはぐらかすしか他に方法が無かつたと思つもの」

「姫香……」

「つて言つが、これは恭介の受け売りなんだげね。ホントはあたし、香代には嘘を吐いて欲しくは無かつたんだゾ～」

やう言つて、姫香は照れたよつに笑つた。

「……」めん

「あ？ ああ、気にしないで？ でも今のはあたしの本音なの。亜紀が居たつて、気にする事なんか無いのよ。だつて、アキバケイと香代は幼馴染なんだし、お隣さんなんだから」

「え？」

あたしは姫香の言葉に引っ掛けりを覚えて訝った。

姫香は、あたしが田村くん経由で慶から呼び出されていると思っているの？ あたしは田村くんから呼び出されていたのであって、慶がここに居合わせていた事をえ知らなかつたのよ？

三人の中の誰かが、あたしの反応を面白がつて見ている……そんな風に思った時、頭の中で真っ先に田村くんの日焼けした悪戯っ子みたいな顔が浮かんだ。

四人の中で、彼が一番あたし達の個人情報を知つており、誰に対してどんな想いを抱いているのかをえ……恐らく今の田村くんなら判つてているはず。

もしかしたら、意味深な言葉で揺さ振りを掛け、あたしの気持ちを確かめようとしたのかしら？

田村くんから試されたような気がして、少しだけ不愉快な気がした。事実、あたしは疑いこそしたけれど、田村くん本人から直接誘われたのだと勘違いして浮かれていたのだから。

第41話 彼女の視線

閉鎖される時間が近付いていたせいか、公園内の広い駐輪場に残されている自転車は、あたし達の自転車を除くと、もう殆ど残つてはいなかつた。

自転車を押して並んで歩いているあたし達を後にすると、慶と田村くんは自転車に乗つてさつさと出発してしまつた。随分遅れているあたし達には気付かずに、会話を弾ませているのか時折笑い声が聞こえていたけれども、その声もすぐに聞こえなくなつてしまつ。

だから、この場での会話を聞かれたりする事なんか無い そんな安堵感が、あたしと姫香との間で暗黙の了解として成立していた。

「初めて会つた時から思つていたんだけどさあ、香代は自分の気持ち、判つてないよ」

「……」

核心を突かれた氣分になつて、あたしは言葉を飲み込んだ。だつてあたしには、胸を張つて否定出来そうに無かつたから。もしかしたら、姫香の言つている通りなのかも知れないもの。

友達が黙つっていても、その子の言動から男子の誰を意識していて、どう想つているのかくらいすぐに判るのに……なのに自分の事となると、知りたいと願つていてるのに本当に判らない。

「恭介が言つてた。怪我をしていたアキバケイを一番氣にして心配していたのはあんただって」

「それはお隣同士だから……」

「あー、やっぱ、違つてしまふ？」

少し苛立つた声。

そして、姫香は顔を潛めて……『素直じゃないんだから』とも付け足した。

「……」

反論し掛けた言葉を遮られてしまい、あたしは何も言えなくなってしまう。慶の怪我の事を心配しているのだって、それはお隣ですつとあたしが慶のお世付役だったから。単に、お世話係だったから他の男子よりも気に掛けあがられていたからであつて、決して慶の事が……その、す、す……好きだからとかじゃ……ないと思うのに。それに、慶の事が好きなのは姫香の方じやないの？

あたしの視線から言いたい言葉を読み取ったのか、姫香は少しだけ頬を赤くした。

「あ、亜紀はどうだか判んないけど、あたしは別に……アキバケイが好きだつてワケじやないんだからね。今年のバレンタイン、あたし片つ端からばら撒いていたの。気付かなかつた？ ほ、ほら、だ、男子なんて単純なのよ。ねつ？」

「……」

怪しい。姫香は慶に脈がないと覚つて、田村くん達に鞍替えしち

やつたつて感が拭えないのよね。

あたしの疑いの眼差しに、姫香は少し緊張したのか、おでこに薄っすらと汗が光っている。別にゲーム後の事だったから、汗を搔いていようが荒い息を吐いていようが不自然じゃなかつたけれども、今の場合なら姫香があたしの疑いの視線に焦つているとしか思えな喋り方だわ。

「香代つてばホンツト弄り甲斐があるわねえー」

「いっ、弄り甲斐つて……そ、そんなあ……そりゃあ、姫香は結構ばら撒いていたけど……だからって、どうじて急に田村くんとやつ言つ仲になつちゃつっていたのよ?」

つて言つか、弄り甲斐があるのは姫香の方でしょ? なに赤くなつちゃつてるのかなあ。

「うわ、そう来たの? 参つたわねえ」

あたしに先を向けられた姫香は、苦虫を噛潰したような顔をした。

「吐け」

「て、なんであたしの話になるかなー? 今は香代つちの事を話していいんだよお?」

姫香は自分に話題を振つて來たあたしから逃げ出そうとしたけれど、あたしはここに呼び出された本当の理由も、姫香がどうして田村くんとそういう風な仲になつちゃつたのかが知りたかったから、

赦してあげない。

「ヤー、おめでた」

「香代つちつて……シツコイわね」

「それほどどうも。褒めて貰つたって事にしておくれ。あたしの事はいいから、田村くんとの仲を吐け」

「やーん、香代っちがいぢめるうーーー」

姫香が珍しく氣弱になつた。別に怖い顔で迫つた心算は無かつたのだけど。そんなに怖かつたのかしら……？

「『吐け』つてナニを？」

「アラフ？」

「あー、恭ちゃんにアキバケイ。一体、何処から湧いて出て来るのよ」

「誰が『湧いて出る』んだよ？　つーかマジで『恭ちゃん』は止まつてば

背後でクスクス笑う慶の声にあたしは驚いて飛び上がり、先に振り返った姫香は一人を見付けて、助かつたとばかりに明るく振舞つた。

見ればそこには自転車に乗つたまま片足を着いて停車している慶と田村くん。確かに一人は帰っちゃつたのだと思っていたのに、

いつの間にかあたし達に気が付かれないよつて、廻り道してここまで戻つて来たみたい。

あたしは一人から盗み聞きされ、小馬鹿にされたよつな気がしてムツとなつた。

女の子同士の秘密の会話を盗み聞きするだなんて失礼よ。

膨れつ面になつていたあたしに気が付いて、慶がニコニと笑う。

「そんなに気にしなくつても、今わしき僕達は来たばかりだよ。内容だつて聞こえなかつたから大丈夫だよ」

「で、聞かれてそんなに怒る様な事を話していたのか？」

慶の『安全宣言』を混ぜ返すよつて、田村くんが一ヤ一ヤしながらあたしを見る。

あたしは田村くんが何となく苦手に思えて来て、つひと人から視線を逸らせた。

「何でもないわよ。ねー、香代？」

「え？ う、うん……」

姫香の鮮やかなスルーに、あたしは戸惑いつつ頷いた。そして姫香は、田村くんに向かつてからかう様に『お節介』と言つ。

これつて、もしかしてチヨツカイを出して来る田村くんからあたしを姫香が守つてくれた事になるのかしら……？ そつとも取れて、

少しだけ恥じくなってしまった。

今まではずつと慶の『お守役』で、守っていた側のあたしだったから。姫香からの助け舟が心地よく感じられた。

「ま、良いけど。でも、十橋」

「なあー?」

「試合直前まで……詰まり、明日もゲーム遣るからこないに来てよ。」

「ええ　　?」

車の往来が激しい国道線沿いの信号待ち

田村くんの半ば強制的なゲーム参加に、あたしは思わず不平を漏らした。

「どうしてそうなるのよ？」

あたしに拒否権は無いの？

口を尖らせてジトツと慶を睨んだ。

慶を選んだのは、ここに居る中で一番返事をしてくれそうに思えたから。だけど、あたしと視線が合った慶は、一瞬だけ困ったような表情を浮かべると、気不味そうに視線をあたしから逸らせてしまつた。

「ちよ……」

なんで無視するのよ？

答える心算が無さそうな慶の反応にムツとなる。

確かにリハビリ序のゲームなら、パワーで押して来る田村くん達男子ばかりを相手にするのはキツ過ぎるかも知れないわ。でも、だからと言つてあたしをわざわざ指定する必要なんか無いでしょう？田村くんだって、妙な所であたしにボディーショットのコントロールをするようこと、しつこいくらい指示していたし。

あたしは慶のリハビリ要員として呼ばれただけなのだと思い込み、不愉快になってしまった。第一、当の本人がこうして無視するんだもの。これはもう、リハビリ要員ですときっぱり言われてしまった

のと同じ事だわ。

「土橋いー、ンなに拗ねンなよー」

「だつ、誰が！……す、拗ねてなんかいないわよつー！」

あたしの心を見透かしたのか、田村くんが妙な猫撫で声を掛けて来る。でも、今更「まかそうとしたって、そろはいかないんだからねつ。

「ホントーがあ？ 僕の眼にはどう見ても拗ねてるよつんじか見えねーぞ？」

「う、つるむいわねつー！」

田村くんの直球が一々癪に障る。

だけど、仕方が無いじゃない。何の説明も無しに呼び出されて、姫香に嘘まで吐いて遣つて来たら、拳句、慶のリハビリ練習に付き合わされ、疲れた身体を酷使してゲームに参加させられてしまったんだもの。

「ねえ、香代？」

「？」

田村くんとの遣り取りを黙つて見ていた姫香が口を割った。

「このメンバーでゲームしたの、面白く無かった？」

「…………」「さうだ

そんなこと……無い。

普段、男女別々で練習をしているから、練習量も違えば、こなして行くメニューも若干違っている。ストロークのフリー程度なら男女混合もあるけれど、部員数に対してコート数が少ないから、混合ダブルスのゲームを遺つたりする事は滅多に無い。だから、あたしはこのゲームがとても新鮮に思えた。

正直、男子一人からのパスは速くて中々手が出せなかつたけれども、ゲームが進むにつれて眼が慣れて来たのか、ボールに対する恐怖心はどんどん薄れて行つたように思う。

それに、部活中では全く考えられない事だつてあった。

ゲーム中に時折あつたミスショットへの突つ込みや、冗談を交えて笑いを取り、わざと相手のミスを誘う卑怯な心理戦のお喋りも、ツボに嵌つて面白かったもの。こんな愉しいゲームも『在り』で良いのかなあ……なんて。

「なら、明日も来ない?」

「姫香……?」

「愉しめて上手くなれるのなら、あたしはそれでいいと思つよ? 要は『『氣』の持ち様じゃない?』

「…………ん~? そなのかなあ?」

「やうだよー」

なんだか姫番に上手く丸め込まれてしまったような気がするわ。
試合が近いと言うのに、こんな事で良いのかしら……？

夕暮は遠く西の空^{そら}の端に消えてしまい、代わって一面に拡がった
漆黒の空には星^{ほし}が瞬^{またた}き、東の方から綺麗な満月がぼっかりと浮かん
でいる。田中はまだまだ残暑が厳しいけれど、夕暮れとともに気温
が下がつて過ごし易くなつて来た。

あたし達は広い歩道を四人が一列になつて、自転車を押して話しながら歩いていた。他愛の無いお喋りから、アゲアシの取り合いや突っ込みまで……。こんな時間に、男の子達を交えてこうしてお喋りするのは初めてだったような気がする。なのに、何故だか『懐かしい』と感じてしまったのは、このメンバーの中に慶が居るからそう思つたのかしら……？

「じゃーな、また明日。腕、ちゃんと手当^{てあわせ}しあおけよ？」

「うん。サンキュー。田村^{たむら}、帰り氣を付けるよ」

「つせーな。アキバケイに言われたかねーよ、そのセリフ」

慶との遣り取りをしながら、田村くんは慶にふざけて軽く右手でパンチを繰り出し、慶は笑いながらそのパンチを広げた左掌で受け
る真似をする。

「香代、明日ね。お疲れー」

「うん、お疲れー」

姫香は田村くんに送つて貰つたのだとそ�で、一人は先に自転車を漕ぎ出した。

姫香にはもつと一緒に居て欲しかつたけれど、家の方向が違うからこばかりは仕方が無いわ。

そしてあたしは、家がお隣どりだから当たり前なのだけ……

慶と一人きりになっちゃつた……

いふなると、何から話せばいいのやら……別に意識する必要なんか無いのだと頭では理解出来ていて心算なのに、何処か妙に構えてしまい、胸が痞^{つか}えて息苦しい。

そして自然に口が重くなつてしまつ。

そんな自分が不自然で変だなと思つた。

こんなのいつものあたしじゃ無いわ。姫香と田村くんが居てくれた時は、こんな事なんて無かつたのに……

「……」

急に黙り込んでしまつたあたしを訝つたのか、隣で慶が様子を窺つている気配がしている。だけど、あたしは慶の方を振り向いて直視する勇気が出なかつた。

振り向けば胸の奥で癌えている何かが、もつと大きくなってしまった
いそうで不安だったから。

慶は田村くんや姫香みたいに、想つた事を直感的にズバズバ言う
ような事はしないし、かと言つて気の利いた会話をしてくれるほど
器用でも無い。

どちらかと言えば不器用……なのは、あたしと同じね?

だからこそ、慶の事が苦手になってしまったのかしら……それと
も他になにか理由が……?

第43話 帰り道

暫くお互いが黙り込んでしまって、居心地が悪くてどんよりとした重い空気があたしを包む。でも、さうとそれは慶も同じだと思った。

「か、香代、あの…… セ……」

「……？」

あたしの斜め後ろで自転車を押して歩いていた慶が、躊躇いながら先に沈黙を破つた。

だけど、やつきまでみんなと一緒にだった時は、自然に慶を見る事が出来たのに、今はダメ。

声を掛けられて少しだけホッとしたけれど、振り向いて慶を見詰める勇気が出ないあたしは、自転車を押してのろのろと歩きながら、浅く俯いてしまった。

視線の先には、何の変哲も無いアスファルトが延々と続いている。けれど、あたしの中では慶の事を意識していく、慶の一語一句を聞き洩らさない構えで耳を欹てている。

それは慶がこれから言い出すかも知れない、あたしの禁止NGワードが頭の中を駆け巡ったから。

慶がそのNGワードを話題として取り上げれば、すぐにでもダッシュして自転車を漕いで逃げ出しちゃうと思ったから、両手で握つていの自転車のハンドルをぐっと強く握り締めて身構えた。

「今日は来てくれてありがとう」

慶は微妙に照れながらあたしに話し掛けってきた。

ゆっくりと歩いていたあたしの歩が止まり、思わずその場に立ち停まる。

「……」

「香代が来てくれて、懐しかったよ」

ありきたりな社交辞令のかも知れないけれども、それでも何故だか嬉しくて、気持ちがやや上向きになる。慶が先に話し掛けてくれたせいか、あたしはそれまで張り詰めていた心の糸が、一気に緩んでしまった。そして、胸に痞うがえていた重苦しい不快感が和らいで軽くなる。

なに？ あたしはもしかして、慶からお礼を言つて貰いたくて、ずっと不機嫌だったとでも言つの？

あたしつつて、そんなに『何様』だったワケ？

「べつ……別にあたしは……」

「結構上手くなつたじやない？」

「なにが？」

「ボールのコントロール。田村がマイペースでゲームを進めたから、

前半は殆どポーチに出られなかつたみたいだけ、後半は積極的だつたよね。三セツト目の時には遣られたなー。綺麗に決められちゃつたし

「ああ、唯一慶がリターン出来ずにバスしてしまつたやつね？」

何を言ひ出すのかと思つたら、さつきのゲームの反省会？ 相変わらず気が利かないと言つたか、テニス馬鹿つて言つた……

呆れて見上げると、眼の前にあたしと同じく自転車を押す格好で立つている慶と視線が合つてしまつた。

街灯に照らされて無邪気に笑つた慶の顔が何故だか眩しく思えて、あたしは戸惑いながら顔を逸らせてしまう。

「で、手首もだけど、頭はもう大丈夫なの？」

「あ？ ああ、あれ？ 軟式だからそんなに痛くないのは香代だつて知つてるじゃない」

「そつ、それはそうだけど……」

打撃の良い音がしていたし。

「ま、その……あれから川村のサービスの度に、前衛でビビつたのは事実だけど」

慶はゲームの最中に、ペアを組んでいた姫香のミスサーブで、後頭部を直撃されていた。

セオリーとして、慶はあたし達相手コートからのリターンに集中するため、ペアである姫香のサービスの時に、背後は完全に無防備状態になってしまいます。

姫香だつてわざと慶の事を狙つてサービスしたのじやないのだろうけど、味方のまさかの攻撃に、前衛で構えていた慶はその場に頭を抱えて蹲うすくまり、あたしとサービスをした姫香は驚いて そして田村くんは慶の不幸を見て、コートに引っ繰り返つて大爆笑した。

ミスマードでペアを攻撃つて言うのは意外とある事だし、あたしは経験者じゃないけれども何度もそのシーンを見た事があった。でも、今日みたいに狙い澄ましたようクリティカルにヒットして、慶の真上垂直にボールが高く跳ね上がったのを見たのは、これが初めてだつたから。

あの時は心配したけれど、もう本人が大丈夫だつて言つているんだもの。

そう思つたら気が抜けて、思わずくすくすと笑つてしまつた。

「あー？ なに思い出し笑いしてんんだよ」

「え？ だ、だつてえ……」

あたしが笑うのを注意している慶が、釣られてくすくす笑つてる。

声変わりをしてしまつた慶の笑い声を聞いたのは、この時が初めてだつた氣がするわ。クラスの男子の馬鹿笑いとは全く違う、低くて幅の広さを感じさせる慶の笑い方が妙に大人っぽく思えてしまい、あたしは頬とおでこが異様に熱くなつてしまつた。

でも、薄暗い街灯の下だから、きっと慶には気付かれたりはしないわよね？

先に口を開ぎして笑うのを止めたのは慶の方だった。

あたしには、慶が急に黙ってしまったように思え、訝つて慶に放^ならう。

「なあ、香代

「ん？」

「遠藤さんには、その…」この事を内緒にしていて欲しいんだ

「どうして？」

言葉を選んで言い難そうにしている慶を、あたしは見上げた。

慶の手首の怪我だけ、あの時は誰が見たって事故だと思つだらうに、試合間近に慶に怪我をさせてしまったと強く責任を感じて、自分を責めていた亞紀。

だったら、リハビリゲームをしている今こそ、彼女を呼んであげた方が亚紀だって喜ぶのじゃないのかしら？

「ほ、ほら。遠藤さんは责任感が他の女の子よりも強いから、僕がこうして香代達と自主トレしていたのを知れば、きっともつと責任感じてしまうからさ」

「なんで口止めみたいな事をするのよ~、暁紀も呼んであげればいいじゃない」

『あたしなんか呼ばなくつても、あんたの事をずっと一途に想い続けている暁紀が居るんだよ?』 そう口に出してしまった。けれども、あたしはそれ以上言えなかつた。

第44話 香代の心

慶は亜紀の想いを、まだ受け取つてはいないの？

小学生の頃から、亜紀は慶の事が好きで……面と向かって慶には言えないけれども、ずっとその想いは変わつていないみたいだつた。だから、慶が怪我をしてしまつた時に、責任を強く感じてあれこれと世話を焼いていても、いつも嬉しそうにしていたのも頷けるわ。

一途に慶の事を想つてゐる亜紀なのに、慶はそんな亜紀の想いに気付いて受け取ろうとは思わなかつたの？ 夏祭りに言つていた、慶の理想の女の子は亜紀の事だと思つていたのに。

探るよつな眼で黙つて慶を見詰めると、視線が合つた慶はあたしに何かを言おうとして躊躇つた。そして言い出す決心が付かなかつたみたいに、あたしから思わず視線を逸らしてしまつ。

暫く息が詰まつてしまつそうな『間』が空いて、慶はあたしに何かを話そつか話すまいかと悩んでいたみたい。

右の人差し指で自分の頬をぽりぽりと搔く仕草を見せたけれど、やがて慶は言葉を選ぶようにして切り出して來た。

「んー、呼ばれても困る……って言つた、迷惑つて事があるだろ？ 遠藤さん、いつも習い事が凄いじゃない。そのう……僕の怪我の事を、なんだかいつまでも引き摺つてゐるみたいだし、こう言つちや何だけど、口実にされるのも僕としてはなんだかや……」

「何があつたの？」

「うん……まあね。悪いけど、遠藤さんに助けて貰つても……却つてこっちが余計に気を遣つちゃうんだ。前に一度、帰りの時に僕の面倒を見てくれていて、習い事に間に合わなくなつてさ。心配した家の人気が迎えに来た事があつたんだよ」

「なにそれ？ 一体どんな面倒を見て貰つていたのよ？」

あたしの鋭い突っ込みに、慶は顔を赤くして慌てて手を左右に振る。

「べつ、別に大した事じやないよ。下校時間に包帯が緩んじやつて……で、困ついたら遠藤さんが『直してあげる』って言うからさ。だけど意外と彼女、不器用つて言つか……直してくれていたはずなのに、どんどん緩んでつて前よりも酷くなつちやつたんだ」

「はあ。それで塾に間に合わなくなつちやつて、家の人気が來たの」

「家の人人は困つた顔するし、遠藤さんは泣き出しちやつて……そりやあの時は誰からも責められたりはしていなかつたけど、まるで僕が悪者みたいだつたからさ」

「ううう。それ、やつぱり慶が悪いわよ

「ええっ？」

あたしの鋭い指摘に、驚いて慶が退いた。

本当は、慶の気持ちを判つてあげられるのだけど、亞紀はあたし

の友達だから、この際慶が悪い事にしておくわ。

確かに亞紀は部活の後、自宅に直帰することは無い。本人から直接聞いたわけじゃないけれど、彼女の家は旧家 地元に古くから続いている家柄で亞紀は文字通りの『お嬢様』なのだそう。

きっと、慶もその事に気が付いていたのよね？ それとも単に亞紀の事が苦手だつただけなのかしら？

「亞紀の事が苦手なの？」

本当は慶から肯定して欲しい癖に、あたしはとんでもない事を聞いてしまった。どうしてそんな事を思い付いて口走ってしまったのか、自分でもよく判らない。

こんな事を聞いてしまって、もし慶が『そんな事はないよ』って否定されたらどうしようだなんて心の片隅で思つていてる癖に。だけじゃそんな返事は、期待しても返つては来ないだらつて判つてた。

判り切つているのに、慶から直接本心を聞き出したくって……ううん、あたしはやうだと確認したいと思つていてるんだもの。

まるであたしが意地悪な小悪魔になっちゃつたみたいな気がした。

「そ、そんな事なんか想つてないよ……って言つたか、何で僕が悪いんだよ？」

「ウン。優先順だから」

「ゆつ、優先順？ 僕と遠藤さんとじゅ、遠藤さんが先つてコト？」

「つそ」

あたしは満面の笑顔を慶に向けた。

慶は物凄く困った顔をして、あたしの言葉に首を傾げて悩んでいる。

「ふんうん、もつと悩みなさいね。」

あたしは心の中で舌を出す。

もつと器用に立ち回れないのかしら？ 慶つてば……相変わらずなんだから。

亜紀がある日を境にして慶に寄り付かなくなつたのは、そんな事があつたからなのねと納得した。きっと、亜紀も慶が普段以上に気を遣つて退いちゃつている事に気が付いたのだわ。

そこまで思つて、あたしはハタと考えた。

あたしつてば、なにを期待しているの？ 亜紀の想いが慶に通じればいいと思っていたのじゃなかつたの？ 慶だつて……

「うん、違う。」

亜紀は大切な友達だし、好きな人が現れたのなら絶対に応援してあげなくちゃ……と思う。けれどその相手が慶じゃダメ……やつぱり慶とは仲良くして欲しくなんか無い。

他の人となり誰でも良いの。慶じやなければ誰であらうと絶対に応援してあげる。

「……？」

『慶じやなければ……？ つて、なに？ このあたし的限定は？』

「？ どうしたの…？」

その慶の一言で、急に顔が物凄く熱くなつた。まるで、炎に炙られているみたいに。

そして、あたしは自分の本当の気持ちに今頃になつて気が付いた。

第45話 帰宅

「んな、何でも……無いわよつ……」

慶があたしを見てる そう思つと、余計に胸がドキドキして顔だけじゃなくて身体中が火照つて来て熱くなる。

わーん、おち、落ち着け心臓つ！

「大丈夫？ 香代、顔が真つ赤じやん？」

「ひつ？」

いつもとは違つて『退き』の体勢になつてしまつたあたしを気にしてか、慶は自転車をぐいと一押しして一氣にあたしの眼の前まで来ると、心配そうに顔を覗き込んで来た。

驚いてしまつたあたしは、思わず涙目になつて飛び上がる。

「はあ？ 『ひつ？』……つて、ナンだよ？」

「う、ひつ、ひつむわね」

意識しちゃダメだつて頭では判つているのに、慶の顔が近過ぎて余計に意識しちゃうわ。

あーん、誰か助けて～～

「あのや、なにも取つて食おうつてワケじやないんだけど……つて

「いつか、香代なに泣いてんの？」

「んなつ、泣いてなんかなこわよつ。」

あたしはありつたけの空元氣で、訝る慶に咬み付いた。

「わうかあ？ でも涙田になつてゐるよ。」

「なつてないつ。」

あたしの事が心配なのか、慶は浮かない顔でまたあたしを覗き込んで来る。

慶の氣を逸らすとして辺りを見回すと、いつの間にかあたし達は慶の家のすぐ傍まで帰つて来ていた。眼の前が慶の家つて事は、その向こう側お隣があたしの家だ。

「……調子悪いのか？ 今日も暑かつたからなあ。部活後に付き合わせちやつたせい？」

「ち、違つてば！ 調子がまだなのは慶の方じゃない。なにに言つてるのよ。人の事を心配するよりも、自分の腕の事を心配しなさいよ。ほ、ほら、帰つたわよ。それ、さつやと自分の家に帰んなさいよ」

「あ？ ああ……」

あたしの様子に若干訝りつつ、それでも慶は短く「じゃあ、お疲れー」とだけ言って、自宅の門を潜つて行った。

あたしは路上で立ち止まり、家に入つて行く慶の白いポロシャツ姿が見えなくなるまで、そつと後ろ姿を見送った。暗くてはつきりと判らなかつたせいか、あたしの眼には、学年男子の中でも背が高い部類に入る慶の背中は、何処かの知らないお兄さんの背中みたいに映つっていた。

息が詰まりそうだつた状況からやつと解放されて、あたしは誰にともなく深い安堵の息を吐く。

助かつたわ……」それ以上、慶と一緒にだつたら……

……どうなつていたのかな？

* * *

「香代へ、『飯出来たわよ~』

「はあーーー」

家に帰つてすぐにシャワーを浴びたあたしは、またいつものジャージ姿に戻つていた。

練習をして帰つた後は、いつも取つ換え引つ換えでこの格好。お母さんが色氣も何も無いわねと愚痴を溢してくれるけど、これが『あたし』なんだもの。

だけど幾ら『外見』が同じでも、この日のあたしの心の中は、い

つもとは違っていた。

毎日繰り返されている『いつも』なのに、なんだかおかしい。自分の事なのに、何処がどう違っているのかだなんて、よく説明が付かなくて不思議だった。それでも何か 胸の奥で何かが痩^{つか}えているようで苦しい……そんな違和感を感じている。

「香代？ あんた、熱でもあるんじゃないの？」

「えー？」

「顔、赤いわよ？」

「つそ…… そうかな？ だ、大丈夫だよお」

食事中、あたしの赤ら顔を見て心配したお母さんが、箸を止めてあたしのおでこに右手を当てよつとした。

なんとなくだけれども、あたしにはその原因が得体の知れない違和感からだらうと思つていた。そしてそれは少なからず慶の事を意識し始めてからだと判つていたし、そんなあたしの心の中までお母さんから見透かされてしまいそうで怖くなり、少しだけ椅子から身を引いてお母さんの手を嫌つた。

「ほり、ちゃんと座つて……あら？ ホントに熱があるみたいよ？」

「え？」

あたしは手にしていた箸を置き、右手を自分のおでこに押し当て

る。

「……？ 判らない」

「自分で触つても判り難いかも知れないわね。まだ上がり始めた
いだけど、寒氣とかない？」

「やう言つてお母さんは、おでこからあたしの頬に掌を優しく滑ら
せると、今度はあたしの首筋に触れて、体温を調べている。

家事だけじゃなくて、仕事もこなしているお母さんの掌は、思つ
ていたよりもカサカサで少し荒れていた。それでもひんやりとして
いて気持ち良い。

「ううん。そう言われれば、身体がだるいかも……練習の遣り過ぎ
かな？」

あらひ……変だなと思つていたのは、本当に熱が出ていたから?
それなら今まで覚えていた妙な違和感の説明が付くかもだわ。

「香代がこんなに練習熱心な子だとは、お母さん思つていなかつた
わ」

「試合が近いからなのかなあ……」

「なに言つて居るのよ。試合なら、あんたもつ何度も経験している
でしょ?」

熱が出ていると知つて氣弱になつてしまつたあたしを見て、お母
さんが笑つた。

「だあつて、中学校で初めての新人戦なんだよ？」

「はいはい、判つたわよ。判つたから。食べる気がしないのなら無理に食べなくともいいから、イオン水を多目に飲んで。今日はもう寝なさい。後でお薬を持って行つてあげるから」

「……うん」

新人戦が始まって一日目の午後

四日前まで熱を出して体調を崩していたのがそのまま尾を引いてしまい、あたしは姫香や亜紀達よりも一足先に、ダブルスでは二回戦。シングルスは三回戦で敗退してしまい、新人戦の前半戦で早々とトーナメント表から名前を消してしまった。

せっかく頑張って練習して来たのに、思う様に身体が反応してくれなかつた。顧問の先生は『よく頑張つたね』と言ってくれたけれど、あたしにとつては楽勝だと思えた序盤戦の攻防からの、まさかの敗退。後半は完全に息が上がり持久力・集中力ともに欠落していましたわ。

あたしの上位入賞を期待して応援に来てくれていたクラスメイトや友達も、流石にあたしの負けを読めなかつたらしいけど、それでも皆から温かい拍手を送られ、声を掛けて貰えて嬉しかつた。

……と同時に、試合直前まで完全に自己管理が出来なかつた自分に対するもの凄く腹が立つた。

顧問の先生や先輩方からも期待され、励まされていただけに、こんな不甲斐ない成績を残してしまつた自分が堪らなく情けなくて、悔しくて……あたしはコートを後にしながら泣き出してしまつた。必死になつて我慢しようと頑張つたのに、後から後から止め処なく涙がぽろぽろ流れ来る。

途中、泣き崩れてしまいそうになつたあたしは、応援に来てくだ

さつていた百瀬先輩から優しく抱き留められて、それまで抑えていた何かが、安堵したあたしの中で堰を切つて溢れ出してしまった。納得出来ない結果のまま終わってしまい、あたしは先輩の胸に縋つて、初めて声を上げて泣きじゃくってしまった。

百瀬先輩に『勝つ人が居れば、負ける人も居るの。勝負だから仕方が無いわ、悔しかつたらそれをバネにして、次に頑張ればいいのよ?』と言つて貰つたけれど、それでも落ち込んでしまったあたしには氣休めでしか無かつた。

必死で泣ぐのを止めようとするとけれど、息がまともに整えられず、あたしは何度もしゃくり上げてしまつ。

「先輩、す、すみません。」いつ、こんな情けない成績を残してしまつて……

「香代? 貴方達一年生は、まだまだこれからなのよ? 二年生になるまでに、時間はあるわ。その時間を大切になさいね?」

「……はい」

「ん~? 声が小さいわよ?」

「はっ、ハイツ!」

「つむ。宜しい。じゃあ取り敢えず顔を洗つておいで。他の子達、まだ何人か残つているわよね」

「はい」

「一緒に応援してあげよっ?」

につ、こりと優しく笑つてくださつた百瀬先輩の笑顔が、あたしにはすぐ眩しく思えた。

* *

「あ、居た居た」

「香代お、二つち二つちー！」

あたしのすぐ後を追う様にして敗退した亜紀と姫香が、男子コート前のフェンス横を通り掛かつたあたしに向かって、嬉しそうに声を掛けた。

残念ながら、今年の女子部員は上位入賞出来ず、新人戦では過去最低の試合結果に終わつてしまつたらしい。女子部員は残念な結果だつたけれど、男子は予想されていた数人が期待通りの結果を出し、ダブルスでは既に慶と門田くんのペアが三位入賞の栄冠を手にしていた。

「今、誰か試合中?」

「うん、アキバケイが出てる。凄い接戦でね、今3-3後のファインアルコールされた所だよ。さつき門田くんが教えてくれたんだけど、もう残つているのはこのアキバケイともう一人……ええと、彼、幽靈部員らしいから、あたしは全く知らないのよ」

「八神くんつて言つたの。彼、プロの選手が親戚に居るそつよ。凄い

けど、幽霊部員なのに選手として扱われるだなんてちょっと近寄り難いわよね？」

姫香の言葉に亜紀が追加補足をしてくれた。『八神』って苗字、何処かで聞いた事があると思ったら、お父さんが司法書士をしている八神事務所の息子さんだわ。

小学生だった頃、二年生だったが、三年生だったかよくは覚えていないけれど、同じクラスに居た八神くんの事だと思った。此処からは向こう側にあるコートが遠過ぎてよく見えないけれど……確かに親戚にプロのテニスプレーヤーが居ると本人から聞いた事がある。

小柄な身体をしていて、サラサラの髪に色白の肌。端正な顔立ちをした物静かな子だったから、当時あたしは女の子だと思っていたのだけれど、間違えられる度に本人が猛烈に否定していたのをよく覚えているわ。

「二人とも負けたとしても、個人戦でベストハに入るのよ？ 淫く無い？ 香代も応援しようよ」

「うん」

あたしの問い掛けに、亜紀は口に焼けて赤くなつた顔で二コ二コしながら答えた。

こうしてあたし達が遣り取りしている間にも、弾んだボールの軽快な音がして、見学応援している人達の間からは、歓声と拍手が湧き上がっている。

あたしは慶の試合を観戦しようとフロンスの入り口へ急ぎ、姫香

の隣に陣取つた。

「残つてゐるのは一人だけ？ 田村くんや門田くんは？」

「田村くんも門田くんも意外だつたわ。先に負けちゃつて、そこで応援しているわよ」

姫香の指差す方向に視線を遣ると、見覚えのあるウチの男子部員が固まつて慶に声援を送つてゐる。

「ふうん……そなんだ」

あたしは慶に引けを取らない田村くんの事が頭に浮かんでいた。腕前は慶と互角だと豪語していた。だけど試合の相手は慶じや無い。慶よりも遙かに上手い選手はたくさん居て当たり前。

慶達との自主トレを企画して、あたしを巻き込んでくれた田村くんは、慶よりも背が高い。パワーにモノを言わせて、上から叩き落とすようなサービスをする田村くんは、男子部員から恐れられていただけに、彼の敗退の知らせはあたしには意外だつた。

「アウト！ デュース」

審判（正審）の「ホールに、場内が湧いた。

慶が一ポイントを獲得して同点になり、応援していたあたし達の観客席側が活気付いて、騒々しく盛り上がる。

これで試合は五分と五分の白紙状態。ゲームの流れは、やや慶が押されているように見えるけれど、それでも慶は表情を変える事無く試合に集中していた。

長身を折り曲げて低く腰を落とし、浅く踵を浮かせた前傾姿勢の慶が、ラケットを真正面に構えて対戦相手の動きを注意深く読み取つている。

相手の一瞬を見逃さず、隙あれば切り込んで均衡を崩し『この試合に勝つんだ』と言う、慶の意気込みが手に取るように伝わって……そして慶の真剣な姿が、あたしには妙にカッコ良く見えた。

「アキバケイ、遣るじゃん」

「うん……素敵……」

「うん……素敵……」

あたしは耳に届いた亞紀の言葉に妙な引っ掛けたりを覚えてしまつた。

今は慶の事が物凄くカッ「良く見えるけれども、亜紀にみたいに『素敵』だなんて、そこまでは思つてあげられないわ。

あたしは並んで観戦していた姫香と亜紀へちらりと視線を遣した。

一人とも、今でも慶の事が好きなのね？

あたしの視線に気付いていない一人は、小声だけれども弾んだ会話を遣り取りしている。だけどあたしは、一緒になって応援は出来ても、一人のようにはしゃぎながら慶の事を熱く語つたりする気にはなれなかつた。

慶と対戦している相手は、今年の新人戦優勝候補者の筆頭として名前が挙げられている東雲中学の高柳遼平くん。あたしの知つている限りでは、過去何度か大きな大会があつたけど、慶はこの高柳くんと何度も対戦していて一度も勝つた事は無かつたはず。

ファイナルコールをされた後、「デュースの応酬が続いていた。慶はリードする高柳くんに必死で喰い付き、得点を取られては取り返すと言う、手に汗握るシーソーゲームを続けている。

こうなつたら技術どうこうの差じゃなくて、試合から逃げないで勝つんだと言う氣力との対決になつていて。そして、慶はまだこのゲームを諦めようと言つ素振りは全く無い。

鋭い目つきをしたその表情からは、普段のおつとりとした慶の面影さえ見当たらないし、今まで慶の試合なんかまともに見ていないかつたあたしにとつては、真剣な慶の顔を想像する事さえ出来なかつた。

「すつ」ーい！ タスガは元主将のアキバケイね！ 対戦相手に一歩も引かないわ。相手の彼、確か今年の新人戦優勝候補だよね？」

「うん」

慶のゲームに興奮した姫香が思わず口走り、つられて夢中で応援している亜紀が大きく頷いた。

ああ、そう言えば、慶は小学校の時にテニス部主将をしていたのだつたわ。

あたしも女子部の部長を務めていたけれど、それは部員への統率力と言うか、みんなを纏められるかどうかで顧問の先生が勝手に決めていただけであつて、部長に選ばれたからと言つて他の部員よりもテニスが上手だと言つワケじや無かつた。だから男子主将に選ばれていた慶も、きっとあたしと同じ理由だらうと勝手に決め付けていたの。

今、真剣勝負を繰り広げている慶に、あたしはもしかしたら凄く失礼な思い込みをしていたのかも知れないわ。

あたしが気不味く想つてゐると、隣で応援していた男子部員が急にざわめき始めた。

「どうしたの？」

「ああ、向こうで試合していた八神が負けたってさ」

近くに座つて観戦していた慶のペアである門田くんが返事をして

くれた。

そう言えば、慶と同じくこの試合で勝てばベスト四に進出するハ神くんが居たのだわ。だけど、男子部員の皆が慶の試合を応援して此処にいるつて事は、ハ神くんの所へは誰も応援に行つていなければ事になる。幽霊部員だからと尊されているけれど、誰も応援に行つてあげないだなんて……ちょっと男子って酷いじゃない？

そう思いながらさわめいている男子部員を見ていたら、もう一度門田くんと視線が合つた。

「なんだよ土橋。何か言いたそつだな？」

「ハ神くん、負けちゃつたのね？ でも、誰も応援に行つてあげなかつたの？」

「ああ？ つたり前じゃん。アイツがそろそろ負けるつてコトは、想定内だもんな」

「そんな……」

当たり前のように平然と言い切つた門田くんに対し、あたしは少しばかり不愉快になる。

「今回も警告喰らつて失格になつたんだし」

「え？ 警告で失格？」

大会開催中でのまさかの事態に、あたしは驚いてしまった。

審判からの『警告』は三度まで。その殆どが、ボールのイン、アウトの判定で副審や主審と揉めて、ペナルティが付与されてしまう。たとえボールの痕跡が残っていたとしても、それは『絶対』の証拠には成り得ないため、プレーヤーがアピールしたとしても頭ごなしに抗議することは無理で、そんなことをすれば警告を受け、三度目には退場させられてしまうと言つ、サッカーと似たルールがある。

その事は、八神くんだって知つてゐる筈なのに。

「警告退場だなんて俺等には在り得ねーけど、八神は俺等とは違うんだよ。昨日だって、ダブルスを組ませた田村と初戦で早々負けちまつてさ、八神のヤツ、自分の勝手なプレーは棚に上げて、負けたのは田村のせいだつて言いやがつて……乱闘寸前になつたんだ。まあ、その場は先輩とアキバケイが何とか収めてくれたけどな。自己中もあそこまで行けば立派だよ。相手にもしたくなーし、あんな奴の応援だなんて、行つて遣ろうとも思わないね」

「そつ、そつ

あたしには、門田くんの言つた言葉が俄かには信じられなかつた。黄、プロのテニスプレーヤーが親戚に居る事を何よりも誇りに想い、自分もプロになりたいと言つていた八神くん。自宅にテニスコートを持つついて、毎日練習に励んでいたのだとも言つていたし、何よりも今回の新人戦で、慶とたつた一人しか残つていなかつた事實を思えば、それは彼がずっとプロを目指して今まで必死で練習していつからこの結果だと思う。

だけど、その敗退の理由が警告退場だなんて……

あたしは八神くんが幽霊部員になつてしまつた理由が何となく判

つてしまい、昔の純真だった彼を知っていただけに、凄く残念で切なくなつた。

「つま、プライドのお高い奴には向いてねーんじゃねーの？」

あたしと門田くんの会話を、前のベンチで黙つて聞いていた田村くんが、慶の試合を観戦しながら不機嫌にボソリと呟いた。

> . i 1 1 4 4 4 — 3 1 6 <

「アドバンテージ、レシーバー」

四度目のデュースをコールした主審に、慶がインジュリータイムを求めた。息詰まる接戦の最中、緊張の糸が解れたように観客席でホツとした空気が流れ、そしてざわざわとざわめき始める。

逆にあたし達部員は何事かと思つて息を潜め、コートに居る慶の一拳手一投足を見守つた。

基本、インジュリータイムはファイナルコールをされる前に取るようになっている。

選手は終盤戦に入る前の休憩の僅かな間に水分補給等で体調を整え、集中力を高め、持てる力の限りを尽くして試合に臨むのだけれど、この中途半端な間合いでインジュリータイムを要求したのはどうしてなのかしら？

慶は真っ直ぐに自分のベンチに戻つて行つた。どうやら靴紐が解けたとか、ガットが切れたとかの異常は無さそうに見えるのに。

顧問の先生が駆け寄つて慶の右手を取り、真剣な表情で何事か話掛けている。

全身で大きく呼吸を繰り返し、直飲みの水筒を掴んだ。そして呻あおるようすに水分補給をしながら話を聞いていた慶は、乱暴に水筒をも

ぎ取ると、先生に対して強く首を横に振つて見せた。

先生は慶の強い意志に一瞬怯んだみたいだった。でも、すぐに救急箱から消炎スプレーを取り出すと、慶の右手にしていた蒼いリストバンドをやや乱暴に引いてずらせ、白いテープティングを施した手首を出した。そしてその手首全体にまんべんなく消炎スプレーを吹き付ける。

スプレーが沁みたのか、それとも急激なアイシングが効いて驚いたのかは判らないけれど、慶が肩を怒らせて顔を顰め、先生の掛けるスプレーに必死になつて歯を食いしばり耐えている姿が眼に留る。

あたしの氣のせいかとは思つたけれど、テープティングをしていた慶の手首は、なんとなく腫れて赤くなつてゐるよつて見えた。

「やだあ！ アキバケイ、こんな時にまさかのリタイア？」

「えええ？」

不安そうな姫香の声に驚き、両手を祈るように胸の前で組んだ田紀が、今にも泣き出してしまいそうな顔をして、コートに居る慶を中心配そうに見守つてゐる。

前のベンチで応援していた田村くんが急に立ち上がり、後ろのベンチへと移動して來た。門田くんの隣に座つていた福原くんに片手で挙げるような仕草を見せてひょいひょいと頭を下げるが、一人の間に無理矢理割り込んで座つて来る。

「おー、アレ……」

「ああ、昨日はそんなに氣にならなかつたし、悪いとは思わなかつたんだけど……なんか急に雲行きが怪しくなつて來たな」

田村くんが何を言いたいのか、門田くんにはもづく判つてい。

慶の怪我の経過を一番身近で見ていた一人は、心配わなやで騒ぎ合つた。

「大丈夫なのが？」

「さあ……だけどせつかく自分のペースに引き込んだこの流れを、わざわざ自分から止めるつてのは……ちょっとヤバイのかもな」

小学生の時から慶とペアを組んでいる門田くんが、眉を寄せて唸うなるよつて言つた。

今までの試合で、慶はリストバンドなんか着けてはいなかつた。一年生にとって、今回の「レビュー戦はみんなそれぞれの思い入れがあるし、もちろんあたしにだつてある。

そんな中、慶が着けたりストバンドは单なる汗拭きで、ちょっと生意気な格好付けのように思つていた。けれど、実はそれが慶のテレビングを隠すために使われていたのだと判つて、あたしは急に心配になつて來た。

拮抗している相手からの一ポイント獲得で、慶は氣が遠くなりそうな連續ラリーを続けていた。怪我は治つたつて言つても、縛もつれ込んだ延長戦で、また傷が痛み始めたのだわ。

慶が負傷しているのに気が付いた観客は、一慶ざわめいた。

「これで対戦相手の高柳くんに、慶の怪我 しかも右利きプレーにとつて致命的な右手首の負傷を教えてしまった事になる。ヤー」とつて

「マジでヤバイな……相手にアキバケイの弱点がバレちまつた。フォアのチェックが厳しくなるぞ」

「仕方ないだろ？ 」この炎天下でこれだけ長期戦に持ち込まれたら。少しでも早く手当をしておかないと後が持たない

「後のゲームが出来ればいいがな」

「不吉なコト言つなよ」

田村くんの漏らした言葉に門田くんが文句を言った。意味深な遣り取りを耳にして、慶の怪我を知っていた部員はざわめき、それぞれが口々に慶の怪我と勝敗の行方を心配する。

「ノータイム」

正審のゲーム再開コールを聞き、慶はリストバンドを素早く元に戻すと、左手でラケットを握つてベンチから立ち上がつた。

一時は棄権かと危ぶまれた慶の様子に、それまでざわめいていた観客席から、再び試合に挑む慶に向かつて盛大な拍手が沸き起る。

「つしゃあ！ 行つけー！ アキバケイ！」

「頑張れー！」

「ファイトーー！」

部員全員が総立ちになつた。

慶の背中に向かつて、自分達なりの言葉で慶を称えて力強く励ます。

慶はみんなの応援に対し、背中を向けて「コートに歩み寄りながら、ラケットを持った左手を軽く挙げて応えると、姫香と亜紀は勿論の事、応援していた女子部員達から一斉に黄色い声が上がつた。

「何だよー、アキバケイがオイシイ所全部持つて行きやがつて……」

「田村も対戦に残れば、オスソ分けくらい貰えるかもな」

「ンだと、門田あー」

「わ、わっ、たつ、たんまー！」

活気を取り戻した部員席で、慶と一番仲の良い二人がじやれて、調子に乗つた田村くんが門田くんの首を腕で締める。

慶は自分に気合を入れる様に、目深に被つていた白いキャップをくるりと反対に向けて被り直した。その素振りがどつかの悪戯つ子みたいで少し生意氣そつに見える。

これは慶の相手に対する負けないと黙り意思表示？ 心理戦の心算かしら？

負傷している慶なのに……それでも慶の後ろ姿から気合のオーラが立ち昇っているせいか、不思議と頼もしく見えた。

第48話 新人戦・3（後書き）

インジュリータイム：文字通りタイム。靴紐を結び直す為や、怪我をした時等、不測の事態が発生した場合に10分ほど取れる休憩。

フォア：フォアハンドストローク。利き手側から打つ基本スイング。バックハンドストローク。

慶は左手でラケットを握り、右手にボールを持つて、集中力を高めているようにそのボールを片手で何度も地面に着く。

それまでは右手でプレーしていた慶だつたけれど、今度は左手に持ち替えてプレーを再開する心算なんだわ。

「お？ 出るかアキバケイバージョン」

田村くんが余裕を出して、慶を冷やかすように笑いながら言った。

みんなは田村くんの情報に、何事かと興味を持ち、息を潜めてコートに立つ慶を見守る。

頼もしい田村くんの解説だけど、あたしには慶が半ば白棄やけを起こしてしまったのかと疑い、さつきの期待は一変してして、この試合の結果が見えたような気がしてしまった。

元々左利きだった慶だけど、今までずっと遣つていなかつた左手が、急に言う事を聞いてくれる筈は無い。実際に何度もあたし達と自主トレゲームをしていて、慶は左手が右よりもややパワーとコントロールに難ありだと知っていたから、試合を見るのが怖くなり、急に不安になつて来る。

だけど小さかつた頃の慶は本当に臆病で、女の子にからかわれたり、転んで腕や足を軽く擦り剥いだけでもすぐに泣き出していた。そんな慶を知っているあたしには、怪我をしても歯を食いしばって試合に臨む、強気な姿勢で居る今の姿が、まるで……まるで別人み

たいに思える。

正審のプレー再開を合図に、慶は高柳くんの様子を注意深く窺いながらコートに向かつて左足を一步退き、右肩口を正面に向けた。慶の足の位置はクローズドスタンスである事から、より安定性を狙うために、スライスサービスを打つ気なのだと判る。

慶は右手に持っていたボールを、小鳥を空に放つように高くふわりとトスアップすると、弧を描くように左手で持ったラケットをボルトスと連動させて流れるような動きでバックスイングを始めた。大きく振りかぶつてボールを擦り上げるよう叩くと、ボールは矢の様に深くコートに食い込み、跳ね上がる。

慶が利き手をチョunjしたせいで、防護が左右逆になってしまつた高柳くんは一瞬怯んだみたいだった。

だけど流石は優勝候補者と噂されているだけはある。普通なら一歩も動けなかつたはずなのに、慶のキレのあるサービスを速攻でリターンし、逆にポイントを奪い返されてしまった。

「デュース、アゲイン」

東雲側の観客席からは、割れんばかりの拍手が沸き起こり、慶の応援席からは悔しさが滲み出でている溜め息が漏れた。

「ドンマイ！ まだまだあ！」

「アキバケイ！ ファイトおー！」

「惜しつ……！」

両手で口元をメガホンのように囲った田村くんが、空に向かって声を限りに叫び、彼のワードで部員みんなが慶を応援する。

簡単にはエースを取らせてくれなかつたけれど、慶だつて負けたままじや居なかつた。

それまでは片手でリターンしていたけれど、今度は両手でラケットを構えて打つ、両手打ちのフォームに切り替える。

両手打ちにすればガット面が安定するしパワーも上がつて、痛む右手首に掛る余計な負担は軽減される。だけどその半面、ボールに届くラケットの守備範囲が狭くなり、的確なリターンを狙う為には必然的にコートを走らなくてはならなくなる。

案の定、高柳くんからリターンで左右コートの深い所 サービスラインを狙われて、慶は振り回され、左右に走らされた。

慶が後方に退がつている隙に、高柳くんはネット中央に走り込むけれど、慶は彼の動きを捉えて、ボールを掬い上げるようにして高柳くんの頭上を高く越えるロブを上げる。

サービスラインぎりぎりのロブが上がる度に、あたし達はボールの行く先を見守り、両手を組んだ亜紀が顔を伏せて祈つた。

「くえ……中々のコントロール」

「？」

みんなが息を詰めて慶の試合を見守っている最中、不意に頭の上で声がした。

「お、お前、なにしに来たんだよー。」

「他はどうに終わっているのに、まだ続いている所があるんだなと思つて来ただけだ」

田村くんの怒鳴り声で振り返ると、そこには警告処分になつた幽霊部員のハ神くんが立つていた。

自分の試合が終わつた後に慶の試合を応援する訳でも無く、すっかり帰る身支度を済ませていたハ神くんに、田村くんが掴み掛りそうになつたのを、隣に居た門田くんが慌てて後ろから羽交い締めにして取り押さえ、あらん限りの罵詈雑言を浴びせ掛けようとしていた口を手で塞ぐ。

「てめ、門田あー、んぐぐ……」

「応援に来たつて、素直に言えよ」

田村くんを力尽くで押さえ付けながら、それでもハ神くんへ穏やかに話掛ける門田くん。さすがは元副主将……って言いたかったけれど、門田くんの作り笑いが今にも崩れてしまいそう。きっと心中は田村くんと同じなのだわ。

「はあ？ 僕が？ どうして？」

「同じ部員だわ！」

「止してくれよ。まさか居残っているのがアキバケイだったなんて。知つていたら立ち寄つたりしなかつた」

「ンだとーー！」

「アドバンテージサーバー」

冷たく言い捨てた八神くんに向かつて、田村くんが門田くんの手を振り解いて怒鳴った途端、正審のゴールが耳に届いた。

どつと沸く東雲中の応援席に、あたしはハッと我に帰った。

視線を落としたその先には、コートのサービスライン付近で、右の手首を押さえて両膝を着き蹲ついている慶の姿が映った。そして慶の蒼いラケットがずいぶん離れた所に落ちている。

「いやあーん！ 負けちゃうーー！」

姫香が今にも泣き出してしまっては、もう泣いている。

どうやらあたし達が八神くん達の遣り取りに気が逸れてしまった間に、高柳くんのリターンが慶の手からラケットを弾いてしまったみたい。

「フン。居残つてた割には、大した事ないな。来て損した」

「なにを！ 失格になつたオマエが言える立場かよー！」

「止せ！　田村！」

憤る田村くんを門田くんが必死になつて宥めている。

八神くんは鼻でフンと笑い、くるりと背中を向けて観客席を後ろにした。

あたしの知つてゐる昔の八神くんは、そんな事を言つよつた人じやなかつた。もっと素直であたしよりも純真で……なのに、どうしてそんな風に変わっちゃつたの？

「や、八神くん」

あたしは思い切って彼に声を掛けた。お節介だと思われてしまふかも知れないので、それでも同じテニス部員なのに、一人で放置されるだなんて寂し過ぎると思ったから。

けれども、八神くんはあたしの声が聞こえなかつたみたいだつた。

「うん。絶対に聞こえていたはずなのに、彼は無視を決め付けたんだわ。だつて声を掛けた時に一瞬だけ八神くんが立ち止まつたのを、あたしは見てしまつたんだもの。

久し振りに逢つた八神くんはすっかり性格が変わつていた。相変わらず、女の子かと見間違えそになるくらい綺麗な顔立ちをしているけれど、何だか今はトゲトゲしていて近寄り難くなつている。

みんなが慶の応援を優先するのは判るけれど、それでも同じテニス部の部員なのに、応援席から立ち去る八神くんを引き留めようとする人は他に誰も居なかつた。中学一年生にしては小柄な八神くんの後ろ姿が、あたしの眼には余計に小さくなつて見える。

「なんか、取つ付き難くて感じの悪いヤツだわね」

「土橋、あんな奴の事なんか気にするだけ無駄だつて。もつ良いから放つて掛けよ」

姫香の言葉に田村くんが付け足す。

「だけど、一人とも昔のハ神くんを知らないからそんな酷い事が言えるのだと思った。」

「でも……」

「土橋、あれは自己中な我儘を繰り返したハ神自身の問題なんだ。あんなつてしまつた以上、もう本人が自覚して気付くまで、外野がとやかく言つたって駄目なんだよ。」

あたしと同じく昔のハ神くんを知っていた門田くんが、視線は慶の試合に向けたままであたしに向かつて忠告した。

「アウト。」

審判の凜とした声が響き、慶の試合を観て居なかつたあたしは、ハツとして我に返つた。

押されていた慶の試合状況を思い出してしまい、あたしは恐るおそる慶のパートへと視線を送る。

慶のパート側の副審が、片手を挙げて高柳くんのボールがアウトになつたと判定を下していた。ラインぎりぎりの際どいコース判定に、これで終わりになるかも知れないと、固唾を飲んで見守つていたみんなは、ホツと安堵の息を吐いてざわざわとざわめいた。

「つきっしょー！ アイツ、さつきからアキバケイの弱点ばかり狙つて来やがつて」

「仕方ないでしょ？ 勝つためには」

「あ？ お前はどっちの味方なんだよ？」

「あ、そりゃあアキバケイには勝つて欲しいけど、でも対戦相手が強過ぎるわよ」

熱くなつた田村くんに、姫香の容赦無い冷静な突っ込みが入る。

軽口を叩いている田村くんだけ、慶がかなり苦戦している様子が彼の焦りとなって表れているのが判つて、あたしは正直、この試合をじつと見守り続けるのが辛くなつて来ていた。

確かに今の慶はベストコンディションで試合に臨んではいない。だからと言って痛んでいるだらう右の手首を庇いながら、歯を食いしばつて必死に対戦している慶がここで負けたとしても、誰も慶を責めたりなんかしないのに

それでも慶は気力を振り絞り、果敢に高柳くんに向かつて挑戦した。両手打ちでラケットのリーチが短い分、そのリスクに対してもコート内を懸命に走つてカバーする。

慶を追い詰める高柳くんは、左右へ振り回すよう慶を走らせながらチャンスとあらば、球足の速いリターンを繰り出し、時には慶の身体を掛けて鋭いボディーショットを仕掛けて来る。けれど、慶は粘り強く返球して、なかなか勝負を彼に譲らうとはしなかった。

今振り返れば、慶の自主トレにあたしが呼び出されて慶へボディーショットを仕掛けるよつ田村くんが注文をしていたのは、この時

の為だったのかなと思つた。

激しい接戦ラリーが続いた末、高柳くんよりも先に慶の体力と集中力が遂に底を尽いてしまつたらしい。慶がリターンをアウトさせてしまつた直後に、高柳くんの強烈なスマッシュが、慶のラケットを弾き飛ばして決まつてしまつた。

悲鳴とも絶叫とも取れる声が部員達から響いたけれど、お互いが全力を尽くした名勝負に、プレーヤー一人に対し、双方の観客席からは割れんばかりの拍手と声援が惜しみなく注がれた。

勝敗の明暗を分けるように、高柳くんはラケットを握ったまま空に向かつて両手を挙げ、観衆の声援に応え、慶は待機していた顧問の先生に連れ攫われるようにして足早にコートから退場し、病院へと向かつた。

「良い試合だつたな」

「ああ」

「まるで決勝戦を観ているみたいだつたよ」

負けてしまつたけれども、鳴り止まない拍手に囲まれて満足そうに笑顔を浮かべる部員に混じつて、田村くんが「冗談を言ってみんなを笑わせる。

「あれ？ 亜紀は？」

「れ？ 何処に行っちゃったんだろ？」

気が付くと、興奮して拍手を送る姫香の隣に座っていた亜紀の姿が消えていた。

もしかして亜紀は慶が負けたのは、自分のせいだと思ったのじゃないのかしら？ でも試合前までに慶の怪我は治っていた訳だし、お医者から暫くは安静にするようにと言われていたにも関わらず、自分からトレーニングを再開して完治を長引かせてしまったのは、他ならない慶本人の責任だわ。だから、今更亜紀が責任を感じる事なんか無いのに。

会場の外で自分を責めて泣いているのかも知れないと思った。あたしは亜紀を探そうと、ベンチから腰を浮かせる。

「良いから、暫くはそつとしておいであげなよ」

「え？ で、でも……」

「思い込んでいたこのあたしでさえ何を言つても聞かないから。今はそつとしておいであげて」

あたしが姫香の言葉を振り切って、亜紀を追い掛けないようにしているのかは判らなかつたけれども、姫香はあたしの右手を取り、きゅっと握つて来た。しつかりとした口調だつたけれど、姫香の手は緊張しているのか少しだけ冷たかった。

多分、姫香もあたしと同じで、本当は今すぐにでも亜紀を探し出したい気持ちで一杯なんだなと思つた。

「 もう少ししたら、一緒に捜して行こう」

「 うん」

「 あー、お前等何？ 女同士で手なんか握り合ひやがって」

調子に乗つて突つ込む田村くんを、真剣な顔になつた姫香がキツと睨み付ける。

「 う、いのわあ～い！」

「 土橋さん、川村さん、騒がない！」

「 す、すみませ～ん」

一年の先輩から名指しで注意されてしまい、あたしと姫香は居心地が悪くなり小さくなってしまった。ちらりと騒ぎの張本人を見上げると、田村くんは意地悪そつに「 ヤーヤーヤ笑つてこちらを見ている。

「 つたぐ、あ、あの馬鹿……なに勘違いしているのよ」

「 ……」

怒った姫香が、顔を真つ赤にして呴いた。

あたしも姫香と同じように顔を赤らめてしまつたけれど、それは男子の田村くんからそんな風に見られてしまったのかと、恥ずかしくなつたからだった。

新人戦が終わり、解散したあたしの隣に亜紀の姿は無かつた。

あれから部員全員で手分けをして、亜紀の姿を捜したのだけれど見付からず、もしやと思って慶を病院に連れて行つた顧問の藤野先生に長谷川部長が携帯で連絡を取ると、なんと亜紀は慶に付添つて藤野先生と一緒に整形外科までついて行つていたのだそう。

「は……なかなか大胆なコトするわね」

「で、でも、亜紀が慶の事を心配するのは仕方ないじゃない。あの時の怪我が無かつたら、慶は勝てたかも知れないのに」

部長の報告を聞いた姫香が、開口一番にそう言った。

亜紀と一番親しい間柄の姫香のその言葉からは、少しだけ怒つているような……そんな気配を感じてしまい、あたしは慌てて亜紀の立場を弁護した。

ところが、姫香はあたしの八方美人系な反応が気に入らなかつたらしく、険しい顔をしてあたしを睨んだ。

「香代、あんたねえ……まだそんな事……」

「えつ？ んな、なに？ あたし何か気に障るようなコト言つた？」

「いい加減、惚けるの止めなさいよね？」

姫香はあたしから視線を逸らせて溜め息を吐いた。そしてあたしに聞こえるか聞こえないくらいの小さい声で「一番心配してるのは、香代じやん」と溢したのを、あたしは聞き逃さなかつた。

「……」

なにも言えない。言い返せなかつた。

姫香は今のおたしの気持ちを、完全に見透かしている。

姫香は、あたしが慶の事を特別な誰かさんだと意識しているのを、誰よりも先に……このおたし自身だつて気が付かなかつた事に気付いていた。だけど、お互いが友達同士。抜け駆けするのは何となくNGだと言う暗黙の了解が、三人の間で成り立つていたのに。

口では慶の事を気にしていないと言い、意地を張つてツレナイ態度を取り続けるアマノジヤクなあたしを姫香はとっくに見破つていただけれど、亜紀はおたしの嘘にまだ気付かないでいるのかしら？それとも気付いているのに、気付かない振りを装つて……？

そこまで考へると、あたしは深く息を吸い込み、大きく深呼吸をして肩を落とした。

……止よそう。友達を疑つたりするのは。

疑い始めればきりが無いだけじゃない。第一、あたしは一人に嘘を吐いているんだから。亜紀は全く悪くはないし、マイナスに考えれば考へるほど、あたしが惨めに思えてしまつもの。

身長が百四十前後の小柄な亜紀は、少しだけぽつちやり体型。それだけで幼く見られるけれど、普段は眼鏡をかけて愛読書を片時も手放さないでいる、色白の文学少女。理知的だけれども、かなりな童顔の上に広いおでこがトレードマークのせいか、余計に幼く可愛らしく見える。そして、何より地元旧家の本物のお嬢様。

清楚なお嬢様である亜紀は、本人は全く気付いていないみたいだけど、実は男子からは憧れの対象になっている。普段一緒にいるあたしや姫香は、何度か亜紀を紹介して欲しいと頼まれた事があるけれど、その度にあたし達は「直接本人に言いなさいね」と断つて来ていた。

亜紀本人は気が付いていないくらい鈍い所があるせいが、それとも勇気を持つて近寄ろうとする男子が今のところ現れてはいないせいか、亜紀は自分には女の子としての魅力に乏しいのだと思い込んでいる所がある。

だからと言って、なにもよりもよって慶に近付いやうだなんて……こんなのは無いわよ。

自分の気持ちに純粋で、素直な亜紀が羨ましいと思つた。晴れない気分を亜紀のせいにする心算はないし、こんな時でも素直になれない自分が悪いのは判つている。けれど、あたしの気持ちは畠ぶらりんにぶら下がつたままで、どうしてもスッキリとはしてくれない。

浮かないあたしの気持ちを姫香は代弁してくれたつて言つのに、それでも放つて描いて欲しいと思つてしまつ。

駄目だなあ……あたしつて。

「でもね？ ついでに行くのなら、せめて一言言つて欲しかったわよ。
黙つて行つちやうじつて……無いよ」

「……そうだね」

みんなが散々心配していた挙句がこれだもの。さすがにこれには姫香も呆れてしまつたらしい。他の部員も同様らしく、みんな口には出さなかつたけれど、心配を掛けてしまつた亜紀の事を、良く思わなくなつてゐるような……そんな不穏な空気が流れつつあるのを、あたしはひしひしと肌に感じ取つてしまつた。

「まだ自分のせいだつて思つちやつてゐるのかな？」

「どうだらうね。案外今回も口実が出来たと思つて、急接近しちやつてゐるのもよ？」

やんわりと跳ね返すような口調で姫香が答えた。だけどその言葉の意味は、あたしにとつて心中穏やかでは居られなくなるようなものだった。

本当は……

本当は、あたしだつて慶の事が心配……なのに。あたしは亜紀が慶の事を知るよりもずっと前から、慶の事を見ていたのに……

周りから『大胆な行動を取る娘』だと思われても、自分に素直な亜紀が羨ましくて……そして少しだけ妬けちゃうよ。

もつとあたしが素直だつたら、堪らないこんな気持ちに振り回さ

れたりなんかしなかったのに。今の慶の傍には、亜紀じゃなくてあたしが居たかも知れないのに……

だけど、今更自分の本当の気持ちに気が付いたって、あたしは亜紀が慶の事をずっと想い続けているのを知っているし、慶の事で何度も周りから冷やかされても、意固地になつて否定し続けていたのは、他でもない自分自身だわ。

あたしは今まで自分が慶に対して執った酷い言動を思い出して、胸が張り裂けそうになつた。あの時は、本当に自分の気持ちが判らなくなつていって、周りから冷やかされたりしたから余計に意地を張つて否定してしまつた。

慶を想つ亜紀の出現に困惑つて、周りだけでなく自分にまで嘘を吐いてしまつたけれど、亜紀の存在から自分の本当の気持ちに気が付いただなんて、なんだか悲しいよ。

一度嘘を吐けば、その嘘を隠す為に何度も嘘を吐く。だからあたしは何度でも嘘を吐いて、あたし自身を騙だましてしまつた。

……もう、あたしには……慶を好きになつちゃいけないの？ 好きになる資格だなんて無いの……？

せめて、慶と昔みたいな関係には戻れないのかなあ……？

「……よ？ ねえ、香代つてばあ

「あつ、え？」

亜紀の事を考えていてぼうつとしてしまつたあたしは、姫香から

声を掛けられて我に返つた。

「『え?』じゃないわよ。ほら、あたし達も帰るわよ」

姫香の後ろ ずっと離れてしまつたけれど、試合会場を後にするみんなの背中が小さくなつて見えた。

ひつしてあたし達それぞの新人戦は終わつた。

延長戦を続けた高柳くん達の準決勝と決勝戦の試合は、明日以降に持ち越される。

試合会場は、市内方面と郊外から流れる大きな河が出合つ場所にあり、振り返ると大きくて真つ赤な夕日が、遠く黄昏に染まる河口の向こうへ溶けて行くみたいに沈みかけていた。

第52話 アンフニア

「本当にお世話になってしまった……ありがとうございました」

「いや、じゅうぶん大切な息子さんに怪我をさせてしまつてすみません」

慶の家の前で一台の白い自家用車が停まつていて、玄関から慶のお母さんと藤野先生の声が聞こえていた。

あれから姫香や一葉達数人の女子部員で、いつもそり打ち上げのお喋り会で盛り上がり、あたしは帰宅するのがすっかり遅くなつてしまつた。

あたしは慶が病院から戻つて來たのだと察し、同時に亜紀が傍に居るのではと疑つて、思わず道端で立ち止まつてしまつた。もちろん慶の怪我の具合も心配だつたけれど、今のあたしには、独りで亜紀と会つて会話をする勇気が無かつたから。

「大会、お疲れでしょう。どうぞ中へお入りになつて、お茶でもどうぞ」

「あ、いやいや、じゅうぶん構いなく

「でも……」

「玄関先で失礼します。慶くんの症状ですが、試合の……」

なかなか終わりそうもない、慶のお母さんと先生との会話が漏れ聞こえ、あたしはそれを耳にしながら、慶の家の前を横切ろうか、それとも先生が帰るのを待とうかと悩んでいた。玄関に先生が居つて事は、亜紀が一緒に居る可能性が高いから。

どうしようかと迷っていたら、門に設えてあるポストの郵便物を取りに来たのか、それとも暇を持て余した、居るかも知れない亜紀が外の様子を見に来たのか、門の内側で人の気配がして、あたしはハツとして身構える。

「あれ？ 香代ちゃん、今帰り？」

「ひゃ！」

門からひょっこりと顔を覗かせた女人に驚かされてしまい、思わずあたしの両肩が跳ね上がり、顔が強張った。

「お帰りなさい」

「たつ、た、ただいま……」

「なあに？ どうかしたの？ そんなに驚いちゃってえ」

引き攣つたあたしの顔が余程おかしかったのか、その女性の美咲姉さんが、小首を傾げて上品そうに片手を口元に押し当てながら、くすくすと笑つた。長くて艶やかな黒髪が肩にさらりと流れ落ちて、あたしは会うのが夏祭り以来だつた美咲姉さんが、前よりももっと大人っぽく綺麗になつたなと思つて息を飲んだ。

「あ、いえっ、そ、そのつ……美咲姉さん、今日は帰るのが早いな
つて」

出て来た人が亜紀じやなくてホッとしたわ。

美咲姉さんは亜紀の事を知らないだろうけれども、あたしが拳動不審なのは、どう見たってバレバレだわ。何かの下心があるように思われたのじゃないかしらと思い、猛烈に恥ずかしくなった。

「あれ？ 香代、今頃帰り？」

「一。」

極めつけにもう一人……先生から送つてもらつた慶が、美咲姉さんのすぐ隣にひょっこりと顔を出して來た。

「あ、あああ……あんた……じゃなかつた、慶

「はいよ」

「けつ、けつ……」

驚いた拍子に、いつもの呼び方をしてしまい、あたしは慌てて呼び直したけれど、既に恥ずかしさが倍増してしまつたあたしには、冷静な会話は難しくなつていた。

「『『け』』？」

「あンだよ？」

あたしの激しい慌てぶりに、きつと一人の頭の中には大きな疑問符が浮かんだ筈だわ。あたしは必死になつて、呂律るれつが回り難くなつた舌で、やつと言葉を捻り出す。

「けつ、怪我はどーしたのよ？」

「ああ、大丈夫だつて。」これくらい」

慶は、門に隠れてあたしからは見えない右手を高く挙げて見せた。アイシングの処置をしているらしく、手の甲まで包帯でぐるぐる巻きにされて太くなつた右手は、痛々しく肩から三角布で吊るされている。

「つて、大丈夫つてレベルじゃないでしょそれ」

「大袈裟なんだよ。医者も先生も」

「『ハハー わつきそのお医者さんが何て言つていたか覚えてるの?』

「イテー。」

あたしの言葉に反論して、生意氣そうに軽口を叩く慶へ美咲姉さんが水を差し、指先で軽く慶のおでこを弾く。

「え? 美咲姉さんも一緒に?」

「うん。丁度午後の講義が終わつた頃に母から連絡があつてね。慶の様子をチョツチ見に行かつて」

そう言えば試合会場は、美咲姉さんが行つてている大学の近くだつ

たのだわと今頃になつて氣が付いた。

「あ、あのー、女の子が一緒じゃなかつたですか？」

あたしは恐るおそる暁紀の事を尋ねる。

「んー？ ああ、あの彼女？」

そう言つて口籠つた美咲姉さんは、自分の頭を軽くくしゃつと手で掴み、少しだけ氣不味そうな表情を浮かべた。

「遠藤さんなら、むづくへ帰っちゃつたよ」

「え？」

美咲姉さんの言葉を引き継いで、慶が答えた。

あんなに慶の事を心配してついて行つちゃつたのに、美咲姉さんの出現で、慶を放つて帰つちやつた……ってコトなのかしら？

「あの子、あたしの事を変に誤解しちゃつたみたいなのよー」

「？？？」

美咲姉さんの言葉の意味が理解出来なかつたあたしは、キョトンとして眼を瞬き、答えを求めようと一人を交互に見遣つた。

「めつ……メイワクなのよね。『んなの』『彼女』だなんて誤解されるのは」

「冗談。コツチだつて願い下げつ！」

少しだけ頬を赤らめて、仕方なく答えた美咲姉さんの言葉に被せるように言い掛けた慶へ、美咲姉さんの否応なしのゲンコツが襲つた。

「痛つて～～～つ！ うわ、暴力反対！ 要兄に言つて遣るからな

「ほ～う、その度胸が何処にある？」

凄味を効かせた低い声と殺氣を帯びた強い目力で以つて、美咲姉さんは慶の胸倉を片手でむんずと掴み、引き上げた。

「うあ～、んなつ、ナイナイ！ ありませ～んつ！」

慌てて慶は首を左右に激しく振りて否定し、この状況から逃げ出そうと騒ぎ出す。

「あ、あたし、これで失礼しますねー」

不穏な雲行きを察したあたしは、そそくさと慶の家の前を通り過ぎる。すると、家の方から慶達のお母さんの鋭い声が飛んだ。

「一人とも何しているのつ！ セツセと家中に入んなさい！」

兄弟喧嘩だと思ったらしきお母さんの一喝が、一瞬で揉めている慶達を黙らせる。ですがは慶のお母さん。美咲姉さんのよりも迫力が違つてるわ。

そして次の瞬間には豹変して、会話中だった先生に向き直つたみ

たいだつた。

「おー、おひ……」

「ぱいぱい。香代ちゃん」

「はっ、ハイ」

美咲姉さんに向かつて、引き攣つた愛想笑いを浮かべてぺこりとお辞儀をしたあたしは、十数歩で自宅の門に辿り着く。

相変わらず、慶は美咲姉さんには頭が上がらないと言つか……腕力でも何故だか美咲姉さんには敵わないらしい。

此処からは見えないけれど、藤野先生が退いている姿が想像出来て、あたしは思わず噴き出しそうになつた。

重かつた胸の痞え^{ひが}が、ほんの少しだけ癒されたような……そんな気がした。だつて、もう勝ち目^めが無いと思つて諦めていた慶と亜紀の関係が、美咲姉さんの出現で反故^{はんご}になつたみたいだつたから。

これで亜紀とあたしは、また同等……同じスタートラインに立つて事になるのかしら？

だけど亜紀は、あたしが自分の本当の想いに気が付いて、慶を意識し始めているだなんて、きっと気付いてはいない筈。しかも、美咲姉さんが慶の『彼女』だと思って誤解しているらしい亜紀にどうては、凄くアンフェアな立場なのかも知れないわ。

そんな風に、自分に都合よく考へてしまつあたしつて、厭な女の
子……なのかな？

9 2 1 3 1 6 3 1 6 <

男子個人戦の結果は、やはり当初の予想通り、対戦の前評判で噂されていた東雲中学の高柳くんが優勝した。

彼は優勝者のインタビューの中で、準々決勝で対戦した慶との対戦が、今試合で最も印象に残った対戦だったとコメントを残し、慶の技量を高く評価してくれていた。

あたし達の松山中学校では、今大会運動部での新人戦結果報告とその総評を全校集会で行い、とりわけ日覚ましい活躍をした選手数人を、校長先生が名前を挙げて健闘を讃えたたえ、その数人の中に男子ソフトテニス部の慶の名前が挙がっていた。

ただ、何かの手違ひがあつたみたいで、校長先生は全校生徒の前で慶の苗字を言い間違えているのに気付かずに、最後まで『秋庭』を『アキバ』と何度も連呼して、一部の生徒達からの失笑を買つていた。

お陰で、慶の名前は一躍全校生徒に知れ渡ってしまい、この事がその後に起こったある出来事の切っ掛けになってしまった事を、本人の慶はもとよりあたしでさえ予測出来なかつた。

* *

新人戦が終わり、あたし達はまたいつもの慌ただしい学生生活が始まった。と思ったら、瞬く間に一週間が経ち、ひと息吐く暇もない感じで文化祭に突入する。

先輩から購入する必要は無いと言われていたけれど、あたし達一年生は相談の結果、文化祭での喫茶店用エプロンを同じお揃いにしようと決めた。自称ネットオタクの姫香がインターネットでエプロンのカタログを用意して、何度も意見を交換した末に、フリルをふんだんに使った胸当て付きショート丈の白いメイド用エプロンに決まりたのだ。

「ひやーん、やつぱ」のエプロンかんわゆ~い!

「やつたネッ！」

「うん！ バツチリ！」

それまでは対戦相手であり、良きライバルでもあるあたし達も、今日だけは関係ない。

前後の名前ゼッケンが貼り付けてある、色気の無い学校の体操服と紺色のハーフパンツに、ひらひらのエプロン。幅広のリボンを後ろでキュッと蝶結びに縛ると、気分は何だか少しだけ大人になつて、カフェのお姉さん気分だわ。だけど全く同じじや個性が出ないって意見もあって、頭に被る三角巾だけはそれぞれが持ち寄った。

あたしはお母さんが学生時代に使っていた、渋めの赤と緑のチエック柄に白いフリルをあしらつた三角巾。少し古臭いかも知れないけれど、あたし的にはこれが丁度好きそう。

亜紀は何処かのお給仕さんみたいな真っ白な三角巾で、姫香はレースをふんだんに取り入れ、なお且つ原色一杯のハート柄。他には牛柄や豹柄……みんなそれぞれ三角巾一つで個性を出しているものだわねと、思わず感心してしまつ。

「一年生、準備は良い?」

「はいー。」

廊下からドア越しに掛けられた先輩の声に、あたし達は閉ざしていた部室を解き放つ。同じおろしたて純白エプロンを身に着けた一年生総勢二十六名が部室からぞろぞろと出て来た。

「あらあら、また今年は……」

「合わせなくともいいって言つたのに。ホント仲が良いわね」

ドアの外で待つていてくださっていたのは、クスクスと優しそうに笑つた百瀬先輩方数人。去年ウエイトレスだった先輩方は、今は裏方さんになる。

「じゃあ、各班に分かれてテーブル席の準備を宜しくね?」

「はいー。」

一頃り準備とこれからのお給仕さんみたまに予定を教えてくれた先輩方に、あたし達は部活動の時のような歯切れの良い返事をした。

「メニュー表はテーブルには置かずに、席に着いたお客様さんに手渡す事。自分の時間が終わったら、次の交代時間までフリーだからね。でも、時間に遅れないようにな」

「はあい」

「先輩」

「なに？ 一葉？」

「当番の人がエプロン姿なのは判るのですが、当番じゃ無い人まで、一日中みんなこの格好なんですかー？」

「うーん、良い質問だわね。それはね、貴方達がその格好で校内を廻つて、喫茶テニス部の宣伝をしてくれれば良いのよ」

「えー？」

みんなの声がハモつた。

そして先輩は、当番以外のあたし達に喫茶店の宣伝文字を書いた腕章を配る。

「心配しなくとも、男子も同じだから。って言つか、男子の方が恥ずかしいかしらね」

「あつ、でもね、これも売り上げの為だし、毎年恒例の事だから」

「そりそり。あたし達も去年は全員が潜つたんだものね」

そう言い合つてホホホと笑う先輩方に、あたし達一年生は妙な腹黒さを読み取つてしまつ。

「先ぱあーい。結局、今年の男子の格好はどうなつたんですか？」

「ああ、今年は……」

姫香が片手を挙げて質問し、百瀬先輩が答えようとした時だつた。

突然、階段を慌ただしく駆け降りる数人の乱れた足音と、大声が聞こえて、あたし達はそれぞれが訝り、ざわざわとざわめいた。

「そつちに逃げたぞ！」

「挟み撃ちにして捕まえろ！」

「よつしゃあー！」

誰かを捕まえようと/or/るらしいその足音は、何度も教室内でバタバタと行き来を繰り返しながら、徐々にあたし達の居る部室前の廊下に向かつて近付いて来ているみたいだつた。

「なにあれ。三浦の声じゃないの？」

「誰を捕まえるつて？」

金子先輩が、男子先輩の名前を挙げ、宮脇先輩が噴き出しそうになりながら誰にともなく問い合わせる。

あたし達が居る部室は、丁度廊下が『L』字型になつている角の傍^{そば}で、その先は行き止まりではなくて、他の校舎に繋がる通路へと続いている。だからその先から運動場へは簡単に出て行けるのだ。

逃げているらしい足音が、あたし達が集まつて占拠している廊下に向かつて、どんどん近付いて来る。

「つて！ そつちは女子の部室！」

「構つか！ こっちは出られる！ うわ！ 来たあ！」

慶と田村くんの切羽詰まつた声がして、少し遠くで『待て』と誰かが走りながら叫ぶ声がした。

なに？ 逃げているのは慶と田村くんなの？ 每年の恒例行事だと聞いているのに、なんで先輩方に追い掛けられたりしているのよ？

「ちよっとー こっちに来る」

「あつー！」

言ひ終わらないうちに、上下長袖ジャージ姿の慶と田村くんが全力疾走状態で角を曲がって現れた。一人とも、通路一杯に拡がつて先輩の説明を聞いていたあたし達に、寸前まで気付かずに

「う……ん?」

「あ? 気が付いた?」

「……え?」

耳元で慶の囁くような声がして、あたしはパチリと眼を開ける。
なに? どうして慶の声がこんなに近くから聞こえて来るのよ?.

温かいベッドの感触と、眼の前には心配そうな顔をした慶のアップが横から不自然な角度で覗き込んでいる。

あれ? いつも慶と雰囲気が違つてゐる……

ぼんやりとした頭を抱えたあたしは、何故だか判らないけれどそう思つた。

それには一体……?

あたしは頭を少し動かして、辺りの様子を窺う。

白い壁に、病院でよく見掛ける水色の布の衝立^{ついたて}。そして教室に使われているのと同じ蛍光灯。これって学校の保健室じゃない。

でも、なんで慶があたしを見ているの……?

そう思つた途端、急にあたしは我に返り、慶の事を意識し始めてしまつた。たちまちあたしの顔がもの凄く熱くなる。

みつ……見られたっ！

あ、あたしの無防備な寝顔を！

「きやあ！」

予期出来ない状況に驚いて、あたしはがばっと跳ね起きる。

「香代、大丈夫か？」

「な、なななにがよ？ って言つが、どうじて慶がこゝに居るのよ？ しかも、あつ……あた、あた……」

あたしの寝顔を見たわねっ！

そう言いたかつたのだけれども、余りの恥ずかしさに声すら出せなくなつてしまつた。パクパクと口は動くのに、言葉に出せないくらい恥ずかしい。

あたしの寝顔……お、女の子の寝顔を見ていただなんて……そ、そんな……

「なに涙目になつて怒つてるんだよ？ そのつ……悪かったつて

「馬鹿つー！」

いの不愉快極まりない想いを、どう説明すればいいのか判らなく

なつたあたしは、とにかく慶の視界から逃げ出したいくて、ベッドに突っ伏して顔を枕に埋めてしまつ。

「あ、謝るからで、そう怒るなよ」

「それ、謝つてないじゃなし」

「……」

あたしの鋭い切り返しに、慶は意表を突かれたのか急に黙り込んでしまつた。

少し『間』が空けて氣を取り直したのか、慶は「『めん……』とすまなそつに言葉を濁す。

「今更謝つても遅いわよ」

「じゃあ、どうすればいいんだよ?」

「し、知らないつ!」

あたしは遣り場の無い恥ずかしさをばぐらかそつとして剥きになり、ツンとそっぽを向いてしまつた。

慶もあたしの態度が気に入らなかつたらしく、怒つてしまつたみたいな言い方をする。でも、許せないものは許せないのよ。

「一体、なんで……なんでこんな事になつちやつたのよ?」

あたしは傍に慶が居る事を変に意識してしまい、ドキドキしながら必死に記憶の糸を手繰り寄せてみた。

確か……今日は中学校では初めての文化祭。軟式テニス部は毎年恒例で喫茶店を催し、その利益でボールやネットといった消耗品を購入するようになつてているのだそう。あたし達一年生はお揃いのエプロンで決めて、部室前の廊下で先輩方の説明を聞いていた最中だった。

そこへ男子部員の慶と田村くんが先輩方に追い掛けられていて、通路一杯に拡がっていたあたし達の眼の前に飛び出して来た。

慶は咄嗟に急ブレーキを掛け、（踏鞴たたら）を踏んで止まろうとしたけれど、後から来た田村くんは女子に気付くのが遅れ、止まろうとしていた慶とぶつかってしまった。田村くんの勢いを背中からモロに受けた慶は、彼に吹き飛ばされた状態になり、一人は居並ぶ女子部員……しかもよりもよつて端っこに居た、このあたしに向かつて突進してしまったのだ。

男子一人分の勢いと体重に、あたしの身体は簡単に飛ばされてしまい、あたしの後ろに居た姫香や一葉達も巻き込まれ、将棋倒しになつて……

それからの記憶が全く無かつた。眼が醒めると、あたしは保健室に寝かされていた。しかも慶に寝顔を見られてしまうと言つオマケ付きで。

「ここまで慶が独りであたしを運んで来たの？」

「いや。なかなか気が付かなかつたから、百瀬先輩と一緒に運んだんだよ」

「田村くんは？」

「あいつはそのまま逃走した。『悪い』なんて言つてね。俺は捕まつちゃつたけど、田村は……あいつはまだ先輩から逃走中じゃないのかな？」

『なんで逃げたりしていたのよ？』そう聞こいつかと思つたけれど、改めて見上げる視界に映つた慶を見て、眼が醒めた時の違和感と、慶が逃げ出した理由がなんとなく判つてしまつた。

逃走していた慶達は長袖の上下ジャージ姿だつたのに、今は夏用半袖に短パン姿。それに以前ミーティングで揉めていた、まさかのひらひらメイドエプロンを慶が着用していたからだ。

期待していた姫香の答えがこれなのね。結局、予算の都合で今年も去年の使い回しエプロン姿に決まつたみたいだわ。

「そ、そんなに見るなつて。門田達は何故か判らないけど、結構この格好が気に入つていたみたいなんだけどさ、俺と田村はね。だつて幾ら集客の為だとは言え、一日中こんな格好させられるんだよ？ もうカンベンつて感じだよ」

情けなさそにぼやくエプロン姿の慶を見て、その余りの格好に思わずクスリと笑つてしまつた。

「あ？ 香代まで笑う。もう、笑うなよな」

「ふふっ……、ゴメン」

まあ門田くん達なら田に見ても『似合ひ』範囲ギリギリだけど、身体が大きい慶や田村くんなら、幾ら先輩の命令でも逃げたくなるかも知れないわね。でも、そんなに慶が思っているほど似合わなくはないと思つただけだ?

第54話 文化祭…2（後書き）

踏たたら輔すけを踏ふむ：この場合、勢いが余つて足が空回りする状態。小刻みに足踏みする状態。

機嫌を損ねた慶から注意されても、あたしはまだ含み笑いをしながら慶の『雄姿』を見詰めて、何気に足元を見てしまった。

「わー！ 見るなよ」

「どうして？」

あたしの視線に気付いた慶は、慌ててエプロンの端を握つて膝下を隠し、爪先を立てて座っている椅子の奥へと追い遣つた。

慶の慌て方が理解出来ずに、あたしはあよどんとして小首を傾げる。

「そ、最近すね毛が濃くなつて来ているから恥ずかしいんだよ」

「え？」

一年中屋外での部活で真つ黒に日焼けしている慶に、そんなものが在る事さえ忘れていた。間近で息を詰めて見ないと判らない程度のすね毛なんて、濃いって言うレベルじゃないでしょ？ それに部活じやすつと短パンじゃないの。今更恥ずかしいも何もないじゃないと思った。

うちのお父さんのすね毛に比べれば、恥ずかしがつている慶の生脚なんか、まだまだ許せる範囲……って言つた、慶の脚はあたしにとって全然気にならない程度なのに、慶はどうやら本気であたしの視線を意識して恥ずかしがり、困つていてる。

女の子でも肌を気にする子がいるけれど、案外男の子でも気にしたりするものなのね。

あたしに生脚を見られるのを嫌がつた慶は、自分の脚からあたしの意識を遠ざけようとしてか、話をもとに戻して来た。

「香代達にぶつかつてから、僕はすぐに追い掛けってきた先輩に捕まつて観念したんだけど、『ゴツイメイド』とか『キモカツコイイ』だなんて散々茶化されるし、写真部からは追い掛けられるし……」

「で？ 逃げ場を失つて、丁度あたしが寝込んでいるから都合が良いくつて思つて逃げて來たの？」

「ち、違つよ。捕まつた時に先輩から着替えた後でここに戻つて良いかつて許可を貰つているよ。そのう……香代の事が気になつてたし

あたしの言葉に不満たらたらで、口を尖らせて言いたいだけ言つた後、急に慶は口を噤つくみ、あたしの顔をじつと見詰めながら自分の顔を近付けて來た。

「んな、なによ？ ちよ、ちよつと、なにを見てるのよ？」

慶との距離がかなり近過ぎるわと意識して、あたしの胸がどきりと大きく高鳴つた。一体、あたしの何処を見詰めているのだろうかと慶の視線を辿つてみると、じつやらあたしのおでこを見ているらしいと判つた。

「そ、そのう……おでこ」

「え…… むでーへ、えつ？ ちょっと、なにこれ？ った！」

申し訳なさそうに言った慶の言葉に反応して右手でおでこを触つてみると、じんわりとした鈍い痛みが奔つた。しかも違和感のある肌触り。

これって……熱冷まし用の市販品シートが貼り付けられているのじゃないの？

「『メン。僕は石頭だから』

「……」

そう言いながら慶は自分のおでこを撫でて見せる。

どうやら慶はあたしとぶつかって転倒した拍子に、あたしのおでこに頭突きをしてしまったらしい。他の女子も一緒になぎ倒されたのに、あたしだけが何故意識を失ってしまったのかと言つ理由がそこにあつたみたい。

言われてみれば、確かに慶が覆い被さつて来て、慶の超アップが見えたような……気がするわ。

「眼が醒めてくれて良かった。安心したよ。香代はもう少しで休んでいればいいよ。百瀬先輩もそう言つてくれていたし

「ん……」

「じゃあ、僕は部の店に戻るから

「うふ

慶はそう言つて立ち上がり、カーテン越しに居る養護の先生に声を掛けると、保健室の引き戸を静かに開けて出て行った。

「……」

あたしはベッドに半身を起したまま、ぼうつとした状態で、無意識に慶の広い背中を見送ってしまった。

「土橋さん？　体調はどう？　秋庭くんはああ言つていたけれど、貴方が大丈夫そなうなら行つても構わないわよ？」

「あ？　はい」

慶と入れ違いに、養護の三崎先生が優しい笑顔を浮かべながら、あたしの居るベッドのカーテンに手を掛けて現れた。

まだ少しほうつとしているけれど、特に気分が悪いとか頭痛があるといった症状は無さそう。それに、あたしは何かを忘れているような気がしていた。

心の隅に何か引っ掛けりを覚えてもどかしくなる。

「時間、いいの？　土橋さんはテニス部のウエイトレスさんじゃなかつたかしら？」

「えつ？」

先生の向きない言葉であたしの髪が逆立つてしまった。

そつ、そつだつたわ。忘れていたのはこの事よー。交代つ！ あたしは『じグループ』なのに。

「せ、先生！ 今何時ですか？」

「え？ 十時半だけど？」

さやあああ！ あたしの当番は十時からなのに、すっかり三十分のロスタイル。

「先生！ ありがとうございました！」

あたしは慌てて掛け布団を剥ぎ取ると、枕元に置いてあったエプロンと三角巾を握り締め、ベッド脇に揃えられていたシューーズを引っ掛けるようにして履いた。

廊下の窓越しから見えた会場は……部員全員でこの日の為に作つた、色の付いたティッシュを何枚も重ねて折り畳み、綺麗に開かせた花と、折り紙のチェーンで飾られていた。

質素な机は寄せられて、各テーブルに色とりどりの大柄チェックのテーブルクロスが敷かれていて、中央には華道部からの戴き物である、コスモスの花を水に浮かべたグラスが置かれている。椅子には部員それが持ち寄ったクッショ�이用意されていて、それまで殺風景だった教室は、それっぽい臨時の喫茶店に模様替えしていた。

一度だけ、まだ慶とあたしが仲良しだつた頃の小学生時代に、美咲姉さんが通っていた高校の文化祭に連れて行つて貰つた事がある。そこで美咲姉さんのお友達が遣つていた喫茶店に雰囲気が似ているなと思った。

一步間違えば幼稚園のお遊戯会場になりそうなお手軽素材なのだけれど、そこは先輩方が工夫して派手過ぎない演出をしている。

あたしが足早にその教室前まで辿り着くと、オーダーを取つて隣の調理室に向かう一葉とばつたり出合つた。

「あれ、香代、もう良いの？」

「うん。準備、手伝えなくてごめんね」

「ううん。みんな心配していたのよー。大丈夫？ 無理しなくても良いのよ？」

みんなに心配を掛けてしまった照れ隠しに、えへへと笑つたあたしを見た一葉は、優しく笑つて、あたしを調理室の裏方へ来るよう、おいでおいと手招きする。

何かな？ と思ってついて行くと、隣の調理室は軟式テニスの男子と女子の先輩方で入り乱れ、もの凄く混雑していた。どの先輩方も、小学校の時から調理実習は受けているけれど、男子の先輩方に応用が効かない人が多いらしく、専ら女子の先輩方が食品担当で、男子の先輩方が飲み物を担当している。

慣れない炭酸ジュースのグラスつぎに、泡だらけになつて苦戦している先輩も居れば、お湯を散らせて近くに居た人を巻き込み、大騒ぎして女子の先輩から叱られている先輩も居る。

「あ、香代！ 良かつたあゝ気が付いたんだあー」

その声に振り返ると、先輩方に混じつて姫香がサンドイッチの手伝いを遣らされていた。

「え？ 姫香って、ここ？」

「うん。せつかくみんなとこのエプロンでキメていたのに。急に人手が足りないって、裏方さんに廻されちゃつたの。ほら、例の田村くんも捕まつて働かされているわ」

姫香の指差す方を見ると、慶と一緒に逃走していた田村くんが、居並ぶ女子の先輩方に囲まれて、フライパンを片手にホットケーキ

の実演を披露していた。

先輩方に捕まつても、彼は意志を曲げなかつたらしく、慶達みた
いに半袖短パン姿じやなくて、上下の長袖ジャージに支給されてい
たエプロンを着用していた。慶よりも似合わない彼の姿に、あたし
は保健室に運ばれた原因を作つた本人なのに、そんな事さえ忘れて
しまつて、思わず吹き出してしまう。

「あたしも家の事情で自炊くらにするんだけど、田村くんほどベテ
ランじやないからねー。裏方なら長袖ジャージでものくつて事らし
いわ。でも……流石に似合わないわよねー」

姫香は田村くんの姿を横目で盗み見ながら、クスクスと笑つた。

そう言えど、田村くんは小学二年生の時に両親が離婚されて、
お父さんと弟さんの父子家庭。だから調理の腕前は中々のものな
だと噂で聞いている。実際、ガスコンロから少し離して、ホットケ
ーキの生地を焦がさない様にする彼のフライパン捌きは、料理番組
でも見ているような錯覚を起こしそうになるくらい見事だわと思つ
た。

「つあ！ 笑つたな？ 笑うなよな川村あー」

姫香の声が聞こえたのか、顔を赤らめた田村くんが、こちらを向
いて不満そうに頬を膨らます。

姫香は田村くんに判らなこよつ、あたしに向かつて口をつと舌を
出した。

調理室内はガヤガヤして賑やかなのに、田村くんの耳は地獄耳な

のかしら？ それにしても、姫香ひてば……あたし達だけの時は『恭ちゃん』で、学校内じや『田村くん』つてちゃんと区別しちゃつてる。結構、お似合いのカップルなのねと自分で勝手に納得し、妙にこじわくくなつて、あたしは頬が熱くなつてしまつた。

「あ、ねえ、亜紀は？」

「亜紀は急遽あすき谷先輩達と買い出しに行つてゐるわ。香代の様子、亜紀と覗きに行く心算だつたのに、行けなくてごめんね」

「ううん、大した事無かつたもん。あたしの方こそ心配掛けてゴメン」

「まあ、アキバケイが行つてたと思つから、オジヤマ虫が行かなくて良かつたのかもだけどね」

「えつ？ エエツ？」

「いやにや笑ひ姫香の何氣ない言葉に、思わずあたしの髪が逆立つた。

「あれ？ 行かなかつた？ 彼、行くつて言つて……それでさつき、香代よりも少し前に戻つて來たわよ？」

それつて……どう言ひ意味？

厭な予感に、あたしの心臓が締めつけられたみたいに苦しくなる。

姫香が知つてゐるつて言つ事は……もしかしたら、部員みんながこの事を知つてゐるのかも知れない……そう思つた瞬間、頭の中に

亜紀の顔が浮かんで来て、彼女に対する物凄く悪い事をしてくるような罪悪感を覚えた。

亜紀が慶の事を好きだと知つて、自分から勝手に慶と距離を置く様にした癖に……

「ううん、違う。あたしはただ慶と昔みたいに……

昔みたいに……

心の中で、そこまでの言い訳をしてみたけれど、それ以上先の答えが見付からず、あたしは金縛りに遭つたよになってしまった。

それよりも、眼の前に居る姫香が、慶とあたしが一人つきりで逢つていたと知つている事実を、とにかく搔き消してしまったかった。

不安な気持ちが胸の中にもやもやとした黒い影として渦巻いて来て、あたしは我慢が出来なくなる。

「そっ…… そうなの？」

「えー？ 行ったハズだよ？」

「えい、気が付かなかつたわ」

……あたしはこの期に及んでもなお、姫香に嘘を吐いてしまった。

「ああ、じゃあもしかして、番代がまだ寝ていたから戻つたのかも知れないわね。はい、これ七番のテーブルに持つて行つて。でも、その熱冷ましシート取つて行かない？」

「え？ あ、ああ……」

あたしは姫香から指摘された熱冷ましシートを慌てておでこから剥ぐと、たつた今姫香が作ったハムサンドと、七番の数字が書かれた番号札が載つたトレーを受け取つた。

「どうしたの？」

「え？」

「それ」

姫香に指摘されて彼女の視線を辿ると、あたしは自分が手にしたトレーが微妙に震えている事に気が付いた。

あたしひてば、また嘘を吐いちゃつたんだ……

もしかすると姫香の事だから、あたしの嘘をとっくに見破つてい るのかも知れないわ。

あたしは後ろめたい気分になつて氣不味くなり、調理室を後にした。

『一度嘘を吐けば、その嘘を隠す為に何度も嘘を吐く……だから貴方には嘘を吐いたりしない子になつて欲しいの』

小ちかつた頃から、お母さんが繰り返してあたしに言つていた言葉が、頭の中で聞こえたような気がした。

嘘を吐いたりするだなんて、そんなことをあたしはするような子じゃないもの。

お母さんの言葉は、何度聞いても遣つてはいけない当たり前の事だと判つていたし、自分が嘘を吐いたりなんかする筈が無いわと思つていた。なのに振り返つてみれば、最近のあたしは親友の姫香や亜紀に嘘を吐き、調子の良い事ばかり言つて、彼女達の機嫌を取つているような気がする。

今年の軟式テニス部喫茶店は思いの外好評で、まだ一時間半しか開けていないと、いつの間に、一つの教室を使用した喫茶店の席は既に満席になつていて、去年のお客さんの倍は来ているとの事だった。

「お待たせしました」

あたしは先輩に教えられた通り、四人のお客様が座つている七番テーブル席の前で、軽く膝を曲げて浅くお辞儀をすると、サンドイッチを注文していた人を捜してその人の横に歩み寄り、静かにテーブルへと注文の品を置いた。そして、先にテーブルに在る品数を持つて居た注文品のリストを確認する。

「『注文は以上でしようか？』

あたしの問い掛けに、四人がそれぞれ軽く頷いた。

ふう。初めてにしては、なかなか上手に言えた……かな？　そう思つて氣を緩ませた時だつた。

「あ、ねえ、この子じゃない？」

「あ、ホント。この子だよー」

あたしの顔を見るなり、お密さんだつた四人の先輩方が急に騒ぎ始める。

先輩だと判つたのは、この中学校の制服に縫いつけているプラスチックの名札の色が、三年生の白い色だつたから。ちなみに一年生は濃い赤で、あたし達一年生は黄色い名札が付いている。

知らない先輩から『この子』だと特定されてしまい、何の事だか判らないまま、あたしはトレーを胸の前で抱えると、取り敢えず二ツコリと愛想笑いを浮かべてみた。

「あ、あのう、私がなにか？」

初対面の先輩方から騒がれても、良い気は全くしない。それどころか、この先輩方からはあたしに対して好意的な態度とは逆の態度を取られているみたいにしか思えなくて不快だつた。

「貴方、今朝保健室に運ばれた子でしょ？」

「彼氏にお姫様抱っこして貰っていたわよねー。羨ましいわあ」

「なつ……はあ？」

あたしことつて、在り得なかつた先輩方の爆弾発言に、体中が力ツとして熱くなる。

今……今、なんて言つたの？ あたしを保健室に運んでくれたのは、確か慶と百瀬先輩だつた筈……慶はそう言つていたのに。しかし、しかも『お姫様抱っこ』……つて、嘘でしょ？

「あらり、どうしたの？ 固まっちゃつて」

「良いじゃない。校内で有名な『アキバケイ』くんに、お姫様抱っこされたんだから」

チラチラとあたしの表情を盗み見ては、お互に視線を合わせてクスクスと笑う先輩方の意味有り気な態度がどうしても厭だつた。まるであたしが小馬鹿にされているみたいな……そんな上から目線で見詰められているのが、堪らなく不愉快になる。そして、その視線がずっと前 あたしの記憶の奥深くに閉じ込めた、小学校で初めて出逢つた頃の姫香と亞紀の視線と重なつて見えてしまつ。

「貴方が土橋さん？ 確か『アキバケイ』くんの、お隣さん……よね？」

あたしが持つて來たハムサンドに手を伸ばしながら、長い黒髪を左右に振り分けた先輩が、にやにやと笑いながらそつと言つた。

「そんな……」

否定出来ない事実を言い当てられて、あたしは身体を一層小さく縮みあがらせる。

なんで……なんでそんな事まで知っているの？ 確かに慶は新人戦で一躍有名になっちゃったみたいだけれど、だけどどうしてあたしの事まで知つていいの？

慶の事だけならまだしも、なんであたしの事まで……

「なに？」の子、泣きそうになつてゐるわよ？」

「馬鹿じやないの？ なに泣きそうになつてゐるのよ？」

あたしの真向かい側に座つていたショートカットの先輩が、鼻で笑うとシンと澄ましてソッポを向いた。

先輩の大きな声に驚いたのか、ざわついていた室内が水を打つた様にシン……となる。そして、他の席のお客さんがあたしに注目してしまい、固まっていたあたしは恥ずかしさと理不尽な不快感に一層身動きが取れなくなつてしまつた。

『なあに？ あの子誰？』

『アキバ系の彼女？』

『ええ？ 嘘、付き合つてゐるの？』

『ふーん、普通の子ね。もつと可愛い子なら幾らでも居るの』

『自分で可愛いとでも思つてゐるのかしら?』

ヒソヒソと囁き合ひ声が、あたしには殊更大きく聞こえる。そのどもが否定的な発言で、聞くに堪えられない言葉ばかりだつた。

どうして? どうしてあたしが見ず知らずの人からそんな風に言われないといけないの?

「ち、違います……」

『あたしは慶の彼女なんかじゃ無いし、付き合つたりもしていません』 そう言葉にして言いたかったのに、あたしの口はそれ以上動いてはくれなかつた。

だつて、今のあたしは慶の事を……

「あ? 来たわよその『彼』」

その声に反応して、あたしは部屋の入口に視線を奔らせる。

そこには、この先輩方から噂されている事なんて何も知らないだろう慶が、例の短パン夏の体操服にメイド用エプロン姿で、注文されていたオレンジジュースとクリーミムソーダを一杯ずつトレーに載せて現れた。

「ちょっと、まさかの本人?」

悲鳴とも歎声とも取れない声が、テーブルのそこかしこで湧き上

がり、一種独特の雰囲気に包まれた室内に遭つて来た慶は、何事かと一瞬怯んで視線を左右に泳がせる。

彼女達からの視線の束縛から解放されたあたしは、その場から逃げ出す様にして教室を出て行つた。

「あ、お疲れ様～。どうだつた？ 初のお仕事は？」

教室で何が在ったのか知らない姫香は、戻つて来たあたしを見るなり笑顔で迎えてくれた。

「う……うん」

「どうしたの？ 元気、無いなあー。あ、もしかしてテーブルを間違えたとか？」

「そんなことないわ。ハムサンドはちゃんと注文先のテーブルに届けたもの」

「じゃあ、どうしてそんなに落ち込んでいるの？」

「え？ ああ……ちょっと……ね」

あたしの様子に気付いた姫香は訝つて訳を聞いて来た。だけど、今のあたしには姫香にさつき教室で起こつた事を、そのまま伝える氣にはなれない。ううん、あんな事、伝えられるどころか、相談出来る訳が無いじゃない。

そう思つていたら、姫香の方から彼女なりの推測が……

「さつき、アキバケイが香代の後から行つたでしょ？ 急に騒がしくなつたから。で、その事で香代に何かあつたみたい……って、在つたんでしょ？ 大体、今年は三年の女子がやけに多いね」って、

先輩方が言つていたもん。殆どがウエイトレスのアキバケイを見に来てるつて専らの噂だよ。だけどなかなか来ないって。それで待つている間、みんなあれこれと噂していらっしゃいからねー。香代の不利になりそうな噂も在ったのじゃないの？」

「……うん」

「そりだつたんだ。それはちょっと氣不味かつたわね。なんならあたしと一緒に裏方に居る？」

「いい。大丈夫……だから」

姫香の言葉は嬉しかつたけれど、既に持ち場を決められているあたしには、先輩の許可無しに勝手に持ち場を替えるわけには行かなかつた。しかも、それが慶の事が原因で……となると、ますます他の人達から怪しまれて妙な誤解をされてしまふかも知れない。

慶と昔の時みたいな関係に戻りたいと想うのに、慶に近寄つて来る女の子にはどうしても心の何処かで嫉妬みたいな意地悪な気持ちを抱いてしまう。その癖、他人から慶の彼女なのかと聞かれてうろたえ、否定してしまうなんて。

「一体、あたしはどうしちゃったのかしら？」

今あたしには、一旦離れてしまった慶との距離をどう保つべきなのか、それさえよく判らなくなつてしまつていてる。

「ただいま帰りましたー」

「おっ！ 待つてたよ～んホットケーキの素～」

「つで、あたし等を待つてたんじやないんかいつ！」

買い出しに出ていた谷先輩と亜紀が戻つて来た。浅井主将の御迎えに、即突つ込みを入れる谷先輩との遭り取りに、調理室が明るく賑わう。

「香代、もう起きて大丈夫なの？」

姫香の隣に座っていたあたしを見るなり、亜紀は買つて来た荷物を実習台にそそぐと置いて、真っ直ぐにあたしの処へと近寄つた。

亜紀の姿を見たあたしの頭の中で『お姫様抱つ』にされて』と言つた三年生の先輩の言葉が繰り返して聞こえている。慶の事を今でも一途に想い続けている亜紀には、その時あたし達がどう映つたのだろう？ もし、あたしが亜紀だつたら、あたしの事をどう思つたのかしら？

亜紀が近寄つて来る……でもあたしは心配してくれている彼女を無視したりは出来なかつた。

「う、うん。心配してくれてありがとう」

「なに？ 他人みたいな事言つてるのよ」

お約束の言葉を切り出したら、姫香から突つ込まれてしまつた。

慶は、自分と百瀬先輩とあたしを保健室に運んだと言つた。で

も、やつきの先輩は慶があたしをお姫様抱っこで連れて行つたつて……一体どっちの言葉を信じればいいの？ そして、今のあたしは亞紀になんて言えば良い？

亞紀の接近に思わず一歩後ずさつてしまつたあたし。その挙動不審な態度はたちまち亞紀に伝わってしまった。

「どうかしたの？」

立ち止まつた亞紀が、あたしの様子に訝り小首を傾げる。髪に天使の輪が掛けた亞紀の肩までの黒髪がサラサラと流れ、同性の女子であるあたしでさえ、ハツとさせられてしまった。

「亞紀、隨分と綺麗になつて……る？」

ふつくらとしていた亞紀の身体は、小学生の時よりも少し痩せたように見える。低いと思つていた背丈だって、なんだかあたしと同じくらい。

ずっと傍にいたせいが、あたしは亞紀の見た目の成長でさえ見落としていたんだわ。離れてしまつた慶だつて、あんなに成長していたんだもの。

「亞紀の成長は、見た目の外見だけじゃなかつた。

「ん、な、何でもないよ？ 亞紀は大丈夫だった？」

「これくらい、平氣よ？」

そう言つてクスッと笑つた。今朝の騒動に巻き込まれて肘を擦り

剥き、絆創膏を貼っているのに、それでもあたしの事を気遣ってくれている。そんな亜紀の純粋さが、あたしには眩しく見えた。

亜紀は、今朝のあたしと慶の事を何とも思わなかつたの？

慶が言つていた事と、先輩が言つていた事の一體どつちが本当なのだろう？……あたしは自分が取るべき態度の判断に迷い、亜紀の出方を窺おうとした。

その時だつた。

急に隣の喫茶店が一際騒がしくなり、次いでせつをあたしと入れ替わりでオーダーを取りに行つた一葉と美帆が、バタバタと調理室へ駆け戻つて來た。

「廊下は静かに歩きなさいつて……」

「た、大変ですぅ！ サッキ來たお密さんの中！」……

長谷川部長の注意を遮る様にして、美帆が息を切らせて報告する。

「し、し、東雲中のあの『彼』が来て、アキバくんに再試合を申し込んでいます」

「なんですか？」

驚いている女子部員一同とは全く逆の反応で、男子部員はそれぞれが奇声ならぬ雄叫びを上げて一斉にざわめき立ち、まるで蜂の巣を叩いたような騒ぎになる。

「ちょっと……浅井！」

長谷川部長は男子の浅井主将を呼ぶけれど、その声は全く届いていなかつた。

「雪辱戦だ！」

「こんな時に、試合だなんて駄目よつー」

反対する女子部員の声を無視して、男子部員の先輩方がコート使用の許可を貰いに、顧問である藤野先生を探しに何人かに分かれて、それぞれの方向へと散つた。

第58話 文化祭…6（後書き）

この辺りで最新話に出てくるキャラ設定の整理です。（ちと遅いかも～）

ご不要ならスルーしてください。

主人公 : 土橋 香代（中学一年生軟式テニス部員）

親友 : 川村 姫香、遠藤 亜紀、一葉、美帆、他

男子同級生 : 秋庭 慶、門田 雅人、田村 恭介、他

二年生（女子）

部長 : 長谷川 舞

副部長 : 真鍋

会計 :

先輩 : 百瀬 真奈美、金子、宮脇

男子部員 この時点ではまだ一年生は辞めていません。

部長 小林（三年） 浅井（一年）

副主将 原（三年） 北村（一年）

会計 : 三浦（一年）

顧問 : 藤野先生（男子部）、岡先生（女子部）

文化祭は週末の日曜日に行われ、あたし達は次の月曜日に振り替え休日となつてゐる。

大抵の中学校は文化祭が特定の日曜日に集中するから、他校生が遣つて来る事は稀だけれど、かと言つてそんなに珍しい事じや無い。一般的の父兄や学校のご近所に住む人達が自由に参加出来るイベントなのだし、問題の無い身なりであれば簡単に正門を通してくれるのだ。

だからと云つて、なにも東雲中学校の制服姿で新人戦の優勝者である高柳くん本人が、わざわざこの学校に遣つて来るだなんて……

まさかの高柳くんの訪問と、その彼の目的を聞き付けた部員の殆どが、自分達の役割分担を忘れてしまい、調理室から出て行つた。慶の同級生であり友人でもある田村くんや門田くん達は、真っ先に調理室から逃げ出し、そして姫香や亜紀をはじめ、一年と二年の女子も殆どが隣の喫茶店へとなだれ込んでしまつた。

残つたのは、みんなから遅れを取つてしまい、調理室に取り残されてしまつたあたしと数人の先輩方の五、六人だけ。それでも、外から情報を仕入れて来た先輩数人が先輩方と合流して、あれこれと話題を振つた。

「正門でも、彼の事が噂になつていたのだそつよ」

「堂々と乗り込んで来るだなんて、良い度胸だわね」

「えー？ 東雲中も今日が文化祭じゃなかつたつけ？」

「何でも八神くんが来るよつて誘つたのだつて」

「八神？ つて、あの幽霊部員の子？」

ヒソヒソと囁いているはずの先輩方の声が、静かな調理室でことさら大きく聞こえる。

八神くんは身内にプロが居るし、あたし達よりもずっと顔が広い。彼自身、将来はプロを目指していると言うのだから、彼が高柳くんと繋がつていっても何ら不思議だとは思わなかつた。

でも、幾ら他校の生徒が出入り自由でも、大会で堂々と試合に勝つた高柳くんが、なんで今更慶に試合を申し込んで来るの？ 普通なら、負けた慶からのリベンジの申し込みじゃない？

「ねえ、試合したとして、どっちが勝つと思つ？」

「東雲中の彼でしょ？ ウチのアキバケイもあの時は大会入賞が懸かっていたけど、今日試合やつても無理じやない？」
「真紀まで何言つているのよ」

「厭だわ舞ちゃん。だからあ、もしもつてハナシ。仮定よ。仮定」

金子先輩と百瀬先輩の会話に、長谷川先輩がムツとして突っ込んだけれど、百瀬先輩が軽く受け流してしまつた。

「怪我はもつ治つていいでしょ？」

「だからさあ、気持ちの持ち様だつて」

「きっと、ウチのアキバケイを完膚なきまでに叩きのめしに来たのよ」

「そりなのかなー？」

高柳くんが再試合を申し込む理由にあれこれと思いつを巡らせてみるけれども、そのどれもがみんなが口にした憶測の域を出ないでいる。

無責任で他愛の無い会話を耳にした、長谷川先輩の怒りが徐々に高まっているのが見て取れたわたしは、先輩の怒りが伝わってくるみたいで怖くなってしまった。

あたしも小学校の時に部を纏めるべき部長をしていたから、今の長谷川先輩の腹立たしい気持ちが判る気がする。部員達だけで盛り上がっているみたいだけれど、今は勝手に試合に応じるべきじゃないと思うし、第一、肝心の先生がまだ見付かってはいない。先生の許可を得なければ、この高柳くんからの挑戦は受けるべきものじゃない。今日は学校行事の文化祭なのに、こんな馬鹿騒ぎは止めるべきだと思った。

「おいアキバ！ 潔く応じろよー！」

廊下に集まっていた男子部員の何人かが、田村くんの声に『そうだ！ そうだ！』と口々に煽る。

「止せよー。アキバ！ 挑発に乗るなー。」

「ンだと門田あー。」

隣の部屋から田村くんと門田くんの大きな声がして、一人が揉み合いで、誰かがそれを止めようとして更に騒ぎが大きくなつた。

さすがは門田くん。慶の副主将をしていただけのことはあるわ。あつと慶だつて主将をしていたのだから、あたしと同じ考え方なのだろつと思つた。でなければもうとつくに「一トの準備がされていて、慶と高柳くんはそこに居るはずだから。

「おー、センセ居たか？」

「え？ 正門の方に居なかつた？」

「職員室に戻つたのか？」

「もつ一度捜しに行つて来い！」

お店を投げ出して顧問の藤野先生を呼びに行つた男子部員がぽつぽつと調理室に戻つて来ては、情報交換をする。けれども、誰もまだ藤野先生を探し出す事が出来ないみたいだった。

「居たか？」

「居ません」

「入らなつたら、もう勝手にコートを遣わせて貰おうぜー。」

誰かが言つた一言に、喫茶店内から『わやーー』と囁ひの黄色い声と拍手が起つた。

男子部員の全員がこの試合が始まるのを、今か、今かと期待しているみたい。しかも、喫茶店に入っていた他のお客様さん達までが、突然の予期せぬ大きなイベントに歓声を上げて喜び、みんな浮足立つてしまつていてる。

「ちょっとー 貴方達、お店はどうするのよー。」

男子部員の勝手な行動に対して、居残つていた部長の長谷川先輩が苛立つて声を荒らげる。けれど、みんな高柳くんの事で頭が一杯らしく、この試合が当然行われてしまいそうな……そんな危険な空氣に包まれていた。

「……までもお膳立てされたら、もつ中止するの無理じゃないの?」

「ねえ……」

ひそひそと囁く他の部員達のお喋りを耳にしたあたしは、どんどん不安な気持ちが大きくなつて行く。

「香代ー まだそこに居たの? あんたも早くこちに来なさいよ」

「う……うん」

先に隣の様子を窺つていた姫香が戸口に立ち、瞳を輝かせてあたしを手招きしたと思つたら、ぱつと身体を翻して隣の教室へと戻つ

てしまった。

あたしは気乗りしないまま、思わず居残っている長谷川先輩達の顔色を窺つてしまい、視線が先輩と合つてしまつた。

「貴方も行くの？ 土橋さん」

姫香に流されてしまいそうになつてゐるあたしに対して、怒つてゐるような長谷川部長。騒ぎについて行かなかつたあたしを見直していたのに、がっかりだわ……と言わんばかりの視線に、あたしは身動き出来なくなつた。

「あ、あのつ……今は文化祭で喫茶店をやつてゐるのに……わ、私はみんなを止めるべきだと思います」

「よく言つたわ」

長谷川先輩の満足そうな声に、あたしは少しだけホッとする。

別に良い恰好を取つた心算は無かつたし、顧問の先生不在の今は勝手に試合をするべきじゃないと思つ。だけど……

「おーーー、コートの準備が出来たぞー！」

男子の誰かが大声で叫んだ。

あたしと長谷川先輩達数人は、ハツとしてお互いの顔を見詰め合う。このまま先生の許可も無しで勝手に試合を始めれば、幾ら慶が試合を拒否した事実が在つたとしても、先生方からは何らかのペナルティを覚悟しておかないと……

「あれ、まだ先生見付からね？」

「原くん、浅井は？」

ひょっこりと調理室に戻つて来た副主将の原先輩に、長谷川先輩が声を掛ける。

「え？ 知らねーよ」

「……もひー 浅井は何処？」

遂に長谷川先輩が立ち上がり、この馬鹿騒ぎを止めるべく、男子の主将である浅井先輩を探しに行ってしまった。

「この試合、何が何でも止めさせなくつちや」

「あ、待つてよ、舞ちゃん」

元々责任感が人一倍強い部長の長谷川先輩は、廊下でざわめいている部員の在り様に、遂に我慢が出来なくなつたらしく、椅子から勢い良く立ち上ると、肩で風を切つて歩くみたいにずんずんと調理室を出て行つた。そして、その後を追つ様に残つていった百瀬先輩方も出て行く。

「……」

残されたあたしは、複雑な気持ちで先輩方の後ろ姿を見送つた。

姫香達と一緒に、もう一度慶の試合を見てみたい気持ちが半分と、残りの半分は長谷川先輩と同じく、顧問の先生の許可無くして『今は遺るべきでは無い試合』にSTOPを掛けなくてはいけないと言う気持ち。だけど本当は、長谷川先輩の気迫に呑まれて怖くなつて、素直に先輩に合わせてしまつた。あたしは無意識のうちに先輩から嫌われるのを避けて、在る意味良い子ぶつてしまつたのかも知れない。

どうしよう。長谷川先輩からは快く思われたかも知れないけれど、一緒に居た百瀬先輩や金子先輩からは、あたしはどう思われてしまつたのかしら？ 他の一年生はみんな隣の教室へ行つてゐるのに… もしかしたら、変な子だつて思つてしまつたのかも知れないも

の。

あたしは何故だか急に先輩方の視線を意識してしまい、咄嗟に口にしてしまった自分の言葉に、自信が持てなくなってしまった。

「おい、準備が出来たって言つてる……」

「その必要は無いわ！」

慶達を「ホールへ引っ張り出そうとしていた男子先輩方が再び外から声を掛けた途端、長谷川先輩が更に大きな声でぴしゃりと言い放つ。

一瞬にして、ざわざわして浮足立つて居た部員全員が息を飲み、空気が凍つたように思えた。

あたしは得体の知れない不安を抱きながらこいつそりと、廊下に集まっているみんなの傍に歩み寄る。

「当の本人達がその心算が無いみたいだし、外野がとやかく言う必要は無いでしょう？ それに、今日は何の日だか、みんな判つているの？」

慶達の様子を見て安堵したしたのか、落ち着いた長谷川先輩の声に、あたしはそつと教室内を見廻して、慶の姿を捜した。

みんなが遠巻きに高柳くんの座っている席に注目している。その視線を辿つて、あたしは向かい側に座つているエプロン姿の慶を見付けた。先輩が噂していた八神くんはその場には居なかつたし、彼

の不穏な存在感さえ微塵も見出せない。

「あの時、グリップチョンジでまさか秋庭が切り返して来るとは思わなかつたよ」

「僕にはもう後が無かつたからね。単なる苦し紛れさ」

「そんな事は無いさ。秋庭はいづれ硬式に?」

「うん。その心算。高柳は?」

慶の問い掛けに、高柳くんは注文していた紅茶を一口飲んで、にっこりと笑つた。

「僕もだ。だつたらこれを機会にもつと積極的にグリップチョンジを遣つた方が良いかも知れない。特に、バックハンドストロークでのヘッドスピードを上げたいと思う時に、浅めのイースタングリップで手首と腕をしならせてヘッドを加速した方が間違いなくヘッドスピードは上がると思つんだ」

「あ、なる……」

あたしの心配を余所に、どうやら慶は高柳くんの再戦を無難に回避出来たみたいで、一人の間には和やかな雰囲気が醸し出されている。

「ちえ、つまんねーの」

「せつかぐのイベントだったのに」

ホッと胸を撫で下ろしたあたしのすぐ横で、男子の先輩それぞれが咳き、その場を後にした。その先輩方に倣う様に、次々と部員が愚痴を溢しながら各自の持ち場へと散つて行く。

「はあ～、土橋、アキバケイって、根性無しか？」

「えつ？」

不意に背後で田村くんの声がした。田村くんは慶の試合を待ち望んで、反対していた門田くんと揉め合っていたのを、あたしは知っている。

「あ、あの……」

「ホント。せつかくのチャンスなのに鷹鹿だわ」

氣弱になってしまったあたしの言葉に被せるよつて、姫香がキツイ一言を浴びせた。

『そんなことは無いわ』と否定したかったけれど、それ以上あたしは何も言えなくなってしまう。

「土橋、気にするなよ。一時はヤバイ空氣になりそうだったけど、アキバケイだつて今は何をするべきかくらい弁えてる。それに、高柳つて奴も判つてくれたみたいだしな」

誰かと思つて振り返ると、その声はすれ違ひざまに発せられた門田くんのものだった。

門田くんは、慶を焼き付けようとしていた田村くん達に反論して

言い争っていたのだつたわ。

あたしは門田くんの声に励された気がして、沈んでいた気持ちが軽くなる。そして、ここにももう一人……

「秋庭くん、彼と仲良くなれたみたいで良かったわ」

そう言って笑い掛けてくれたのは、慶の事を今でも想つている西紀だつた。

「う、うん」

「あのままみんなに流されて、許可無しで試合なんて遣ねばどうなつていたか判らないもの。でも秋庭くん、きっぱりと彼の申し込みを断つていたわ。後日お互いの都合の良い日にゲームをしようつて」

「そうなの?」

「ええ」

意外だつた。だつて、慶は昔から人に頼みごとをされれば断る事が出来なかつたから。

何事も穩便にしようとする傾向が強い慶は、時には自分にとつて厭な事でさえ受けたり、不利になる様な事を押しつけられたり……でも、それでも他の人に頼つたり、泣きついたりなんかしない頑固な所が在つたから、いつもあたしが見るに見兼ねて慶の代わりに断ると言つ、意地悪な女の子の役引き受けっていた。六年生の時から慶と距離を置くようになつてからは、門田くんが慶の断り役になつていた事だつて、あたしは薄々気付いていた。今日の高柳くん

の事だつて、自分からハッキリと断る事なんか出来ない、気弱な慶
だから廻りや先輩方に流されてしまつて、とんでもない事になつて
しまつのがないかしらと思つて心配していたのに。

ところが、高柳くんの来校は、慶にとつては単なる交流として終
わつたけれども、それまでの経緯^{じきさつ}が顧問の藤野先生の知る所となり、
勝手に試合をさせようとした男子部員に厳重注意が行われ、藤沢中
学校の男子軟式テニス部はとんでもない事態に巻き込まれてしまつ
た。

第6-1話 気まずい関係

文化祭はその後、何事も無く……写真部の撮影襲撃に遭い、一年生男子の数人が撮影を拒否して逃げ出すと言つ多少の騒ぎはあつたものの、それでも軟式テニス部は去年の売上を大幅に上回る好成績で終わった。

三年の先輩方から『よく頑張ったわね』とのお褒めの言葉を戴いたし、暫くは公式戦も無いと、安心していた矢先の事だった。

あたしが『その異変』に気が付いたのは、文化祭の振り替え休日後一週間が過ぎようとしていた。

隣のコートで、慶達一年生はみんな揃つてラリーの練習をしているけれども、部員数が少ない。よく見ると、一年生の先輩方の姿が一人もいなかつた。

「ねえ、何だか男子部員が少なく無い？ 一年生どうしちやつたの？ 模試？ それとも何か……？」

気になつて、隣で球拾いを一緒にしていた姫香に声を掛けると、意外な返事が返つて來た。

「香代、知らないの？ 一年の先輩は受験勉強だつて言つて、主将の浅井先輩を残してみんな退部しちやつたのよ」

「ええ？」

あたしは思わず耳を疑つた。受験勉強だなんて心配しなくても、三年生になれば残り一学期で終わりになるのに。

「おかしいと思うでしょ？　でも、これは表向きの退部理由なのだつて」

「表向き？」

「うん。実はね……」

姫香は文化祭であつた慶と高柳くんとの試合を煽つた先輩方が真っ先に退部してしまつた事。そして、その先輩方が部内で一番『顔が効く』人達だつたから、他の先輩方はその人達に睨まれるのが怖くて退部してしまつたらしい事を話してくれた。

「そんなのアリなの？」

「表向きは進学の為の退部なんだから、顧問の先生だつてそこまで言われれば文句は言えないでしょう？　元々ウチの学校は進学校だしね」

勝手に試合をさせよつとしたから注意されたのに、その事がどうしても納得出来なくて気に入らなかつたのね。でも、自分達は勝手に辞めちゃつて清々しているのかも知れないけれど、残つた後輩はどうなるのよ……

だけど、あたしはいつも思った。

幾ら新人戦だつたからと言つても、自分達では無く後輩の慶が注目された。今回の再戦だつて、先輩として後輩の慶を立ててあげよ

うと少なからず思つたのに、先生方にはその想いが届かず、理解して貰えなかつた……もしもあたしも同じ立場だつたら、部活を続けてはいられなくなつていたかも知れないわ。

「尤も、浅井主将が残つてくれたからこそ、こうして部活動が続いているのだけど」

そう言つた後、姫香は少し悪戯っぽい目つきをしてあたしを見た。

「でね？ もう先輩が居ないから、部長は浅井主将が兼任するらしいのだけど、副主将や会計、補佐なんかはもう決まつてているのだけど」

て

「ふうん」

「副主将、誰だと思つ？」

「さあ」

本当は、慶が副主将をするのじゃないかしらと思つた。慶は小学校の時はキャプテンだつたし、門田くんだつて副主将。成績はぱつとしないけれど、統率力から見れば、田村だつて十分候補者になるわと思った。もしかしたら、あたしの知らない男子部員がなつているのかも知れない。

だけど、今回の先輩方の退部事件の本当の理由が慶にあるのだとしたら、慶が副主将になればそれこそ退部した先輩方の神経を逆なでするみたいになるし……

迷ついたら、姫香がクスリと笑つた。

「副主将はね、アキバケイだよ」

「え！」

まさかとは思つたけれど、その『まさか』が的中した。

姫香もあたしの心の内を察してか、同情してくれて『いるみたい』な眼であたしを見る。

* * *

「おーい、香代」

練習が終わつて姫香達とも別れ、もうすぐ家に辿り着くという時に、あたしは慶から呼び止められた。

先輩方から裏切られ、さぞかし落ち込んでいたのかと思つたら、案外あたしが思つていたよりも慶は陽気だ。

「な、なによ？」

「僕さ、副キャプテンに選ばれたよ」

ただでさえあたしよりも大柄な体を揺すつて、慶は自信に満ちた笑顔を向けて來た。

慶は……慶は先輩方が退部してしまつた本当の理由を知らないん

だ……そう思つた時、この能天氣で無神經な慶が、なんだか歯がゆく思える。

「そ、そう?　おめでと」

「先輩方がみんな受験勉強に集中したいって退部しちゃったからさ、浅井主将以外、僕達一年生だけになっちゃつて。で、門田が会計で田村と王生が補佐役になつたんだ」

聞きもしないのに、慶は嬉しそうにあたしに話して来る。

あたしは慶の知らない本当の理由を口にしてしまって、そりになつて、必死に素っ気ない態度を取つた。

慶、あんたは先輩方が受験理由で退部しちゃつたって事を本気で真に受けているの?　おかしいなとは思わないの?

あたしは慶の『人を疑わない性格』が純粹過ぎて怖くなつた。

「土橋、どこを見ている?」

「あつ、は、はい!」

数学の授業中、あたしは先生から注意を受けてしまい、咄嗟に席を立つた。

授業中に注意を受けたのは、これでもう三回目。あの時の慶の反応が意外だったせいで、授業中であつても気が付けば無意識に慶の事を見てしまう事が多くなつてしまつ。

「ああ？ ドバシはアキバケイを見ていたんだよなあ」

「『アキバ系』に『アキバかよ』って語呂が良くな？」

後ろの方の席から男子の誰かが離し立てる、それに便乗した他の男子が騒ぎ出す。授業中にどつと沸いた教室で、あたしは恥ずかしくなつて屈た堪れなくなつてしまつた。

「だつ、誰が『アキバかよ』よつ！」

馬鹿にしないでつ！ どうしてあたしづかりが損をするの？ 慶の事を心配するのは大きなお世話なのかしら？

そしてあたしの怒りは、何故だか慶の方へと向けられてしまつた。

時々慶があたしの方へ視線を送つてくるけれども、あたしはその一切を無視してしまい、その後半年近くも、お互に気不味い想いをしてしまう事になつてしまつた。

第62話 オトナの約束

勝手にあたしの方から慶と離れてしまったけれども、お隣同士だと家庭の事情は多少なりと筒抜けになつてしまつ。

それは、慶からあたしが距離を置く様になつて、半年くらいに経つた春の田だつた。

「お隣の慶ちゃん達、これから大変になるわね」

「どう言つ事?」

春休みの昼食時、お母さんが「近所のお隣さんから貰つたね」を調理してあたしと一緒に食べていると、お母さんが、ふと、お箸を休めて氣の毒そうな顔をしたと思つたら、急に慶の事を口にした。

あんな鈍感で無神經な慶の事なんか、もう関係ないんだからと一方的に突つ撥ねてしまつたあたしだつたけれども、さすがにこのお母さんの一言が気になつてしまつ。

「慶ちゃんのお母さんね、暫く入院しないといけないのだつて。あ、でも美咲ちゃんがいるから、心配しなくても大丈夫かしらね?」

お母さんは余計な心配をしてしまつたかのような素振りを見せたけれども、あたしはお母さんの様に心穏やかにはなれなかつた。いつも優しく笑つて声を掛けてくれる慶のお母さんが入院するだんて……その事を聞いただけでも胸が塞がる様な厭な気分になる。

あたしのお母さんは、ずっとお父さんと共に働きで、毎晩は仕事に行っている。だから専業主婦でいつも家に居る慶のお母さんが羨ましかった。毎晩幼稚園や小学校へ行っていたあたしの急な病気の時に、お母さんの代わりに迎えに来てくれたり、お母さんが会社から帰つて来るまでの間、ずっと傍で看病してくれたり……いつも家に居て、急な時でも安心出来る優しい慶のお母さんがとても羨ましくて、あたしのお母さんもずっと家に居てくれればいいのと思いう時もあった。

その慶のお母さんが入院……だなんて。

「入院……って、どこが悪いの？」

あたしが不安になつてしまつたのに気が付いたのか、お母さんは話題を振つてしまつた事を後悔した様子だった。

「ああ、大した事は無いのよ。け、健康診断で再検査になつたつて言つていただけだから。それから、この事は近所のおばさん達には内緒にしておいてね。噂されると慶ちゃんのお母さんじこ迷惑が掛るからね」

「うん……」

あたしは軽く頷いて、それ以上聞けようとしなかった。

心配せまいとしてわざと明るく振舞つているのが見え見えだった。お母さんは嘘を吐くのが下手なの、あたしはもつとつくりに知っているんだもの。浮かないお母さんの表情で、慶のお母さんの状態がどれだけ悪いのか、なんとなく判つてしまつた。

それに、お母さんや『近所のおばさん達にはナイショだけれど、美咲姉さんは大の家事嫌い。結婚しても、家事が苦手だし専業主婦にはなりたくないから働きたいわ』と言っていたのをあたしは美咲姉さんから直接聞いた事がある。慶のお父さんは仕事の関係で、慶とあたしが小学校四年生の時に、名古屋へ単身赴任をして、久しくこちらに帰つて来ているのを見た事が無い。

慶のお母さんが入院しちゃつたら、慶達はどうなつてしまつのか
しり……

不安な気持ちなどんどん膨らんで大きくなる。

「あら、香代？ なに泣きそつた顔をしてこらの？」

「だつて……だつて、おばさんが……」

「ああ、却つて心配をせひやつたわ。言ひのじや無かつたのかしらね？ でも、いい？ くれぐれもこの事は『近所のおばさんや余所の人喋つては駄目よ？ 慶ちゃんのお母さんは『そんなに長い間の入院じゃないし、』『近所の皆さんへ余計な心配を掛けたくないから、黙つてこいつそり行きますね』って言つていたから。でも、お母さんよりも香代の方が、毎晩、慶ちゃんのお母さんに会う事が多いでしょう？ 暫くお留守をしている事を香代に伝えておかないと、香代が心配するからと思つたの」

「…………うん」

聞きたくない事だつたけれども、その半面、話してくれて良かつたと思った。お母さんの言う通り、仕事で遅く帰つて来るお母さん

よりも先にあたしは下校している。慶のお母さんはお花が大好きで、慶が下校して帰る頃になると、いつも庭に出ていてお花の手入れや水やりをしていて、慶だけでなくあたしにも『お帰りなさい』って声を掛けてくれる。その『いつも』の情景が急に見られなくなつて、慶のお母さんがいなくなれば、きっとあたしは心配になつてじつとしては居られなくなつてしまつもの。もしかしたら、お母さんが帰つて来るまでに近所のおばさん達に尋ねて廻り、慶のお母さんが望まない事になつていたかも知れないわ。

「慶ちゃん達の事は、美咲ちゃんが居るから大丈夫よ。香代は黙つて静かに慶ちゃん達を見守つてあげてね?」

「うん」

半べソを搔いたあたしの頭をそつと撫でながら、お母さんはそつと言つた。

ショックな話だったけれども、あたしはお母さん達オトナの内緒話に、少しだけ参加させて貰つたような気になつた。

自分で勝手に慶の事を放り出しておきながら、心の底では慶の氣になつていて仕方が無かつた。だけど、慶はあたしが思つていた以上にずっと成長していく、あたしが気に掛けたりする必要なんか、もう無いのだわと思つていたのに……

第63話 意地つ張り

慶は……あたしが気にしなくてたって、もう大丈夫なんだから……

やつとやう思えるよくなつて、何だか胸の奥の痞えつかが取れたよ
うな……ふつされたと言つたか、そんな気になればかりなのに……

あたしとしては思ひ出したくも無い、あれはついこの前のバレン
タインでの出来事だった。

去年行われた新人戦での健闘を学内で称えられた慶には、お約束
みたいに慶を応援しようと言つ女の子が増えた。中には、慶を意中の彼氏として付き合つて欲しいと言つ子まで現れる始末。

あたしがこひ思つのも何だけど、確かに慶の見掛けは『黙つてい
ればカッ』『良い』。背が高いお父さんの遺伝なのか、まだ中学一年
生なのに身長は軽く百七十を超えていてまだまだ成長期真っ只中。

しかも責任感が割と強くて、一年の先輩方が急に退部してしまつ
てから、慶が副主将として男子軟式テニス部を上手に引っ張つてい
る。見た目はしつかり者。部員の中には個性的な田村くんや、彼と
は仲がもの凄く悪い幽霊部員のハ神くん達が居るのに、それでも慶
は主将の浅井先輩を立てて毎日練習に励んでいる。

そんな慶の姿からは、あたしよりも気弱だった幼稚園の頃の面影
は微塵も無い。

練習中の慶はいつも真剣そのもので、時々見掛ける普段の府抜けた表情は窺えない。中学生になつて、たつた一年も経たないうちに副主将に選ばれてしまったのだもの。それだけ同じ学年の部員とは一線を画し、気を張り詰めて練習をしているのには違いないのだけれど……

慶の眼に見えない努力に気付かずに『名前を聞いて知っているから』とか、『見た目がカッコ良いから』だなんて、そんな上っ面だけに惑わされてファンになる女の子達の多い事。

さつと、今年のバレンタインは女子から沢山チョコを貰うのだわ……そう思いながら、あたしは姫香と亜紀に付き合つて、デパートの一角に設置された、有名菓子店が主催している手作りチョコのコンクールへと足を運んでいた。

「UJのマカダミアナッツとカシューなッツ、アキバケイはどうちが好きかな？」

「ふ〜ん、で、今年はナツツを入れてプレゼント?」

「うん、そう!」

「じゃあ、あたしは生クリームにしちゃおうつかな〜」

嬉しそうな姫香の弾んだ声に、亜紀が陽気に答えた。

一人とも、今年も慶に渡す心算なのね？ だけど、普通ならお互いライバル同士になるような雰囲気なのに、毎回そつならないのはどうしてなのかしら？ しかも姫香は田村くんだけでもう良いのでは？ と思わず言いたくなってしまう。

「ねえ、香代はどっちのナッシュが良いこと悪いつへ。」

「ど、どっちでも同じでしょ?」

「えー? 同じ豆でも微妙に味が違うんだからー。好みだつてあるんだしい~」

姫香はもう上機嫌。チョコに入れようとしている豆のサンプルを何種類も両手一杯に持つて、あたし達との遣り取りの合間に、あれこれ店員さんと情報を交換している。

そりやあそぶよね。三人の中で、姫香が一番先に『カレシ』が出来ちゃったんだもの。だけど、まさか恋愛相談相手だった田村くんと、いつの間にか『そんな仲』になつていただなんて……ちょっと羨ましいな。

「ねー、香代もアキバケイに作つてあげるんでしょう?」

『う娅紀から言われたのだけれど……』「うん。今年は自分に作るの』だなんて言つてしまつた。

* *

全く……なんで毎年毎年バレンタインなんか在るのよ? いつも思つ事なのだけど、お菓子屋さんの企みに世の中の女の子みんなが踊らされちゃつたりなんか……しないんだからねつ。

湯せんで溶かした甘いチョコの香りに撲^{くすぐ}られながら、台所に立つたあたしは多少なり自分の意味不明な行動に腹を立て……そしてちょっぴり、何故か慶にもハツ当たりみたいな感情を覚えて腹を立てた。自分にチョコを作っているのに、どうして慶の事を思い出してしまったのだろうかと悩みながら。

「香代、なにこの買い物は？　お菓子屋さんでもする心算？」

会社から戻つて来たお母さんが、家に着くなり開口一番にそう言った。

「えっ？」

「まあ、今年も慶ちゃんにあげるの？」

「あっ、違つてー！」^ハこれはあたしに……じ、自分に作つて

……

あたしはすぐに否定して、思わず顔を背けてしまった。だつて、その後で物凄く顔が熱くなつて、笑つたお母さんの顔を見詰める事が出来なかつたから。

気が付けば、あたしの眼の前には大きさが違う『トリュフ』らしいチョコ固体が一杯転がっている。

今まで型に流し込んでいただけのチョコを作っていたのだけれど、今回は、姫香達と見に行つた手作りチョコのコーナーで遭つていたのを、見よう見ま似で作つている。元々あたしは不器用な方。だから作り慣れない方法に、あたしの顔や手にはチョコが付いていたみたい。

「せう？ 頑張つてね。後片付けはおまかせにしておこなへ。」

「う……うん……」

あたしの奮闘振りを察したのか、クスクス笑いながらお母さんは台所から出て行つた。

何だかお母さんに、あたしが氣付いていない自分の心の中を見透かされたみたいな氣がして、妙な気持ちになつてしまひ。

「お母さん？ これは、あたしのだからねつー。」

「はいはー」

「ねえ、ちやんと聞いてる？」

「聞いているわよ？ 番代のチヨ ハドショウヘー。」

「うん」

自分に言ふに聞かせる心算と、お母さんへのダメ出しの心算で、自分の部屋に行つたお母さんへ声を掛けたのに、あたしの心は晴れる処か薄曇りになつて來た。

『今年一じゃ自分へ』……だなんて、何だか〇の姉さんになつた気分で居れたのに、言葉に出してしまつと、それはちょっとぴり切ない響きだと感じてしまった。

今まで慶にあげていたけど、今年からはもう必要なんか無い。き

つと他の女の子達がチョコをプレゼントしてくれるわよ。

やして、あたしは出来上がったチョコを市販の容器にラッピングすると、そのまま台所のテーブルの上にわざと置いて、学校へ持つて行かないようにした。手元に持つていれば、あれこれと余計な想いを抱いて悩んでしまいそうだったし、このチョコはあたしへのプレゼントなのよ、硬く自分に言い聞かせる心算で。

小学校の『あの時』から、あたしは慶よりも遅れて登校するようしている。先に家を出てしまえば、あたしや自分の立場といった『傍田』を意識する処か、全く考えていない慶が追い掛けて来るからだ。

しかも、バレンタインのこの日は、いつもよりゆっくりと家を出て行つたのに、何故か慶の足に追い付いてしまったみたい。ううん、慶が自分の靴箱の所で立ち往生していたから、あたしが追い付いてしまつたのだ。

「げつー！」

「ーー！」

正門に入るなり、慶の聞きたくない奇声を耳にしてしまい、朝つぱらから煩いわねと言わんばかりにあたしは顔を躊躇める。

見ると、慶の下駄箱の丁度真下に、宛名付きのA-3用紙大の段ボール箱が置かれていて、その中にはチョコレートが堆く積まれている。

「あ？ か、香代……」

登校して来たあたしに気付いた慶が、照れくさそうに段ボール箱の前に突っ立つてもじもじしながら、何かあたしに言ひそうにして

いたけれど、あたしはそんな慶を見た途端、急に不快感に煽られた。

「おはよ。早く退いて。邪魔だわ」

あたしは慶の縋る様な視線を横顔に感じながら、それでもプレイッとそっぽを向き、チヨコの山の一切を無視して、自分でも驚くくらい冷たく慶に言い放つた。そして自分の上靴用シューズに履き替えると、それにつき慶に背中を向けてしまう。

「はよう～っす。すっげーなオイ。さすがはアキバケイ。去年までは全く違つた。後で俺に分けてくれよ」

「あ？…………あ、ああ…………」

「はあ？ どしたい？ 元気、ねーなあ。こんなにチヨコ貰える一年の奴なんてそんなには居ないぜ？」

「う……うそ……」

「なにシケてンだよー」

背後から、門田くんの声がした。

あたしが来た時は、確かに困惑っていたみたいだったけど、こんなに元気が無かつたかしら……？

「うい～っす。おっ！ アキバケイ様。そのチヨコの『おパンボレ』を是非良しな～」

「おー、田村あ、おまこもか！」

「いやー、これで暫くはオヤツにあり付けるつてモンだよ」

「全くだ」

「ついで、そういつの門田ーーて前え自分の靴箱にあんだけよー！」

「ああ?」

門田くんは、会話の最中に靴箱を開けたらしく。田村くんが調子に乗って話している途中に、ドサドサと何かが床に落ちた音がして、田村くんが突っ込みを入れていた。

「これだからよー。つたく。自分があるつてーのに、ナ二人様の分を横取りしようつてンだか……つて、うわっ！」

ブツクサ言つている田村くんも自分の靴箱を開けたみたいで、門田くんの時みたいに複数の何かが勢い良く落ちる音が聞こえた。

「いっ痛みーー足に角があ！ ダレだよこんなに重いチョコを遣して来やがるのはー！」

「どれ？ うわっ！ 重つ！ 板チョコ何枚分だコレ？」

全く……馬鹿ばつか。そづやつて女の子からチョコレートを貰つて、浮かれて騒いで居れば良いのよ。

何かが落下した音に反応してちらりと振り返ると、落した複数のチョコを拾おうとして背を屈めた門田くんと、それを一緒に拾つて

あげている慶の姿が映つた。けれども、あたしは慶の姿を見まことして、ポニー・テールを翻して再び正面へと向き直る。

もじもじしていた慶は、あの時何を言いたかったのだろう。普通なら『凄いだろ?』って言つて血漫してもいいんぢやないの? : 「一度はそう考えたあたしだけど、慶の性格から考えると逆に『貰つてしまつて困つたな』って所でしちうね。変な所で妙に几帳面な性格だから、送り主へのお返しどか。律儀に考えたりしているのじやないのかしら?」

「……」

そこまで考へて、あたしは自分の顔が熱くなるのを感じた。

なつ、なに慶の事なんか考へているのよ。大体、あれだけのチョコを貰つておいて、男の子の癖に、堂々としていなつてどうづ言つ事?

あたしの予測していた通り、慶は今回初めて複数の女子からチョコレートを貰つていた。なのに、貰つた本人は何処かオドオドとしていて……見ているところちが苛々するわ。

「おはよー、香代」

「はよー」

教室の入り口前の廊下で、姫香と亜紀があたしの登校を待つてい

た。

「ねーねー、見た？　あの『箱』」

にやにせしながら早速姫香が口にする。

「え？　何の事？」

「嫌だなあ～、惚けちやつて。『箱』って言えば、靴箱の所に置いてあつたアキバケイのチョコの事じゃ無い」

「あたし達もあの箱の中に入れて置いたのよー。だから、香代も入
れているかなあ～って」

二人とも、あたしが素直にその箱の中にチョコを入れたと思つて
いるのね？　でも、残念でした。そんな事は遣りません。

「え？　そんなのあつたっけ？」

「え？　無かつたの？」

「あ、もしかしたら、香代が着く頃には秋庭くんが部室か何処かに持つて行つてしまつたのかも知れないわね」

惚けて嘘の返事をしたら、意表を突かれたのか二人とも驚いていた。

誰が慶のチョコの話なんかしたりするもんですか。あんな不愉快なモノをあたしに見せ付けておいて、本人は『どうしよう……』だなんて氣弱な態度を見せたりするんだもの。

「香代はもう渡したの？」

亞紀の言葉に、あたしは首を横に振った。

「ううん。今年は誰にも渡す心算は無いもの」

「本当?」

姫香の疑り深い視線が突き刺さる。

「うん。だって、学校に持つて来てないモン」

そう言つてあたしは自分の鞄を開けて見せると、一人は頭をくつ
つける様にしてあたしの鞄を覗き込む。

「ふうん。その言葉は本当みたいね。でも、そつなるとなんで香代
は怒つているの?」

「え?」

怒つている? あたしが?

「うん。顔……真つ赤だから」

「……」

指摘されると尚の事、自分の顔が熱く火照つ^{ほて}ている様に感じた。
ついでに胸のドキドキが早くなる。

きつと二人に『箱』の事で嘘を吐いてしまったからだわ。 そう自分で納得出来たと思ったのに、姫香から意外な一言が……

「ああ、香代ってば、本当はあの『箱』を見たんでしょう？　あんなにたくさんの女子から想われているんだものね。そつかあ。それでヤキモチかあ……」

「ええっ！　だつ……誰が『ヤキモチ』なんか妬くのよつ……あ！」

勢いに任せて喋つたら、反応しちゃいけない筈の言葉に釣られてしまつた。

ハツと我に返つたあたしは、思いつ切り振り上げてしまつた右腕をどうすればいいのか判らなくなつて、しゅんとする。勢いを失くしてしまつたあたしの腕は、肩から力が萎えてしまつて、へなへなと元の位置に落ち付く。

「……やつぱり、惚けていたのね」

「そんな事だらうとは思つていたのよ。大体、香代の態度はバレバレだわ。別に長い付き合つだもの。香代の考えそうな事は読めるわよ」

「そうやつ。気にする事なんか無いわ」

クスクス笑う一人。あたしが嘘を吐いたのに、怒つていらないの？
それに姫香は慶にあげたチョコが義理チョコだとしても、亜紀に
とつては本命くんでしょつこ……

そう言いたかったのだけれども、あたしはその言葉を口にはしなかつた。どうして言い出せなかつたのかは自分でも判らない。ただ、慶についてそれ以上の事を聞こうとすれば、あたし達三人の仲が壊れてしまいそうな……そんな気がしたから。

* *

一年に一度だけ、朝からチョコ話題で女の子達が盛り上がる日は、一時間目の授業からずつと慶の視線が気になっていた。別にあたしが意識して慶の事を見詰めた訳じゃ無くて、その逆。慶の方からあたしに視線を遣して來るのだ。

始めは自分の氣のせいだと思っていたのに……視線を感じる度に意識してそっちを見ると、そこには必ず慶が居て、あたしに向かって笑い掛けて來る。

それってあたしへのチョコの催促なの？ それとも今更だけど、貰ったチョコの数を自慢しているのかしら？ もの言わぬ視線がそうとも取れて、あたしは不快感に煽られてしまい、慶と視線を合わせる事さえ億劫になり、何度も無視を決め付けていた。

お昼休みになると、姫香が機嫌を損ねてあたしの席に遣つて來た。

「どうしたの？」

「あたし、もう一度と『あんな奴』にチョコなんかあげないわ」

口を尖らせた姫香の言葉が一瞬理解出来なくて、あたしは眼をパ

チパチと瞬く。『あんな奴』て誰の事？ 姫香がそう言っているのだから、相手は田村くんの事かしら？ だけど、チョコの事で田村くんと喧嘩になりそうになるかしら？ 田村くんも慶よりは少なかつたけれども他の女の子からチョコを貰っていたし、そもそも姫香は『自分が想つている男の子が、他の女の子からチョコを貰えない様じやカツコ付かない』って豪語しているくらいだもの。

「『あんな奴』って？」

「もう。名前を呼ぶのも嫌になっちゃう」

珍しく姫香は不愉快全開で、それがあたしに対しても向けられている様な、そんな空気を読んでしまった。

それって、まさか慶の事？ そう尋ねてみようかと思つた時、丁度日直だった亜紀がクラスの提出物を職員室へ届けて戻つて來た。

「あ、亜紀！ ちょっと聞いてよー。」

「なに？」

教室へ戻るなり呼ばれた亜紀は、何事かと小走りにあたし達の許へと遭つて来る。

「もう……信じられる？あのアキバケイ、今朝貰つたチョコ全部を先生に渡しちゃつたのよ」

「ええ～～～」

流石にこれにはあたしも退いてしまつた。普段、学内にはお菓子

類の持ち込みは禁止されている。だからこそ女子はこのバレンタインのイベントに、見付かれば叱られて取り上げられるのを覚悟でこつそりと持ち込んでいたのに。そんな事をすれば、来年から益々持ち込み難くなっちゃうじゃないの。

「いきなり箱単位で貰つちゃつたからビックリしたのかしらね。あの馬鹿、本当に融通が利かないんだから」

姫香が鼻息を荒くすると、亜紀は少しだけ悲しそうな眼をした。そして、微かな声で『そつなの……』と呟く。

がつがりと肩を落として力無く俯いてしまった亜紀を見たあたしは、彼女とは正反対に頭にカツと血が昇つて熱くなつた。

慶はなんて酷い事をするの？ 亜紀がせっかく勇気を奮つてあげたチョコを……女の子の気持ちを無視するだなんて。

そこで初めてあたしの頭の中で、今朝からの慶の挙動不審な視線が、姫香の話に結び付いた。

何かを訴えたいと言う雰囲気はあたしにだつて読み取れた。後ろめたい事をしちゃつたから、慶はあたしに視線を遣して問い合わせたかったの？ でも、残念だけどあたしは慶の相談役なんかじゃない。チョコの持ち込みを先生にばらしてしまつた慶なんかもう知らないわ。

* *

「そり。それは慶ちゃん大変だったわね」

シチューをお皿に盛りながら、お母さんはあたしの話を聞いて困った顔をした。

「誰が『大変』ですか？　あんな血口の中なのを、お母さんは味方するの？」

お母さんの意外な言葉に多少なりショックを受けたあたしは、自分の考えが正論だと訴えたくて食い下がつた。

「そりやあ香代……今まで数人からしか貰えなかつたチョコが急に沢山増えちやうのよ。それもどこの誰とも判らない女の子から貰つて……単純に嬉しいって思える？　第一、お返しだつて考えなくちやいけないでしちう？　慶ちゃんのお母さんが大変だつて事、この前話したわよね？　入院しないといけないのなら、それなりに大きなお金が必要なのよ。慶ちゃんのお小遣いで如何いつ出来る金額じやなかつたのでしちう？　香代、貴方が慶ちゃんの立場ならどう？」

「え？　そ、それは……」

あたしはそれつきり口を噤んでしまつた。

お金の問題を出されてしまつては何も言えないけれど……だけど、あたしは……

あたしは慶に、そんな事……して欲しくは無かつたな。

「きっと、切羽詰まつてしまつたのね。あの慶ちゃんの事だもの。チヨコを貰つた女の子達には、全部お返ししなことineaと考へてしまつたのじやないかしらね?」

確かに、箱一杯に貰つたチヨコのお返しとなると、かなりの金額が必要になる。今まであたしの『義理チヨコ』にだつてお返しをしてくれていた慶だもの。返せりと思つても半端じやない今回の分は返しきれやしないわ。

「え……お母さんも慶に甘迺いわよ」

お母さんの理屈は判る。だけど『して欲しくなかつた』と言つて持ちがどひつても先に立つてしまつて、あたしは簡単に同感する事が出来ず、尙も反論してしまつた。

「やうかしら? でも、『あの』慶ちゃんがねー。男の子つて、背が高くなつたりカツコ良くなつたりして、急にモテたりするのね。お母さんも、慶ちゃんが自分の子供みたいに思えて嬉しいわ

やうかしら? お母さんも話題を微妙にずらし、照れたような笑みを浮かべながら、温かい湯気が立ち昇るシチューをあたしの眼の前へ差し出した。

「急にモテただなんて……そんなのじゃ無いわ。慶は新人戦で校長先生から名前を呼んで貰つたから……校内で有名になっちゃったからよ」

「まあ、そんな理由なの？ なら尚更かも知れないわね」

ムスッとなつてあたしが何気なく言つた言葉に、お母さんは反応した。

「どう言つ事?」

「興味本位に面白がつて慶ちゃんにプレゼントしても、された方は迷惑つて事なのよ。だったら慶ちゃんは凄く勇氣があるわ」

「どうして?」

「慶ちゃんは、学校で禁止されている事を報告した事になるのよ？ それつて今まで慶ちゃんの味方になつてくれていた子達を、在る意味裏切つちゃつたつて事よね」

「だから勇氣があるつて……」

「そう」

あたしはその時、ちらりと脳裏に怒つた姫香の顔が過つた。

慶の遣つた事は、新人戦からの有名人から一転して、好意を寄せていた女の子達から逆に嫌われてしまつたんだ。

「でも……」

あたしは再び言葉を飲んだ。

その箱の中には、ずっと慶を想い続けていた亜紀のチョコも入っていたのに……

そこまで思つと、何だか胸が痞^{つか}えてモヤモヤして来た。

あたしは本当に……本当に亜紀と慶が付き合つて欲しいって思つているの?

以前、新人戦の個人練習の時、あたしは慶に亜紀とは付き合つて欲しく無いなと思つてしまつた。それは、あたしの心の貪しさから來た嫉妬みたいなものかなと思つていたけれど……亜紀はとても可愛くて頭が良くて純粋で……姫香やあたしよりも何倍も素敵な娘だなと思つてゐる。だけど、どうしても亜紀と慶とが頭の中で結び付かない……と言つよりも、結び付いては欲しく無いの。

どうしてそんな意地悪みたいな事を考えてしまつのかしら……それは、あたしの心が醜くて貧しいからなの?

でも……

「なに考え込んでいるの? 早く食べなさい。せっかく温めたシチューが冷めてしまうのに」「元のう? あ、うん……熱づ!」

「えつ? あ、うん……熱づ!」

「驚かなくとも良いじゃない。どうせ自分を作ったものでしょう?」

「慌てなくて……ほら、お水」

「ん、んん」

涙目で冷たい水が入ったグラスを受け取り、一気に飲み干した。

「ああ、そうだ。香代、自分で作っていたチョコがあつたわよね?」

「え? あ、うん」

「あれ、お母さんが一個貰つたから」

「ええーー!」

「あつたわよね。そいつすれば……別に誰にあげる心算の無いチョコが。」

あたしは頭を巡らして、自分が作っておいたチョコを捲した。チョコはあたしが置いていた対面式のキッチンカウンターの隅に、ちよこんと置いてあつた。中身を一個貰つたとお母さんは言つたけれども、きれいに元通りにラッピングされていて、とても中身を出しだとは思えないくらいの器用さだった。

「う……うん」

「なが
促された条件反射で、まだ熱の籠つているシチューを口にしてしまい、熱さに思わず飛び上がった。」

「だつたら一個くじこ、お母さんに頂戴」

「つて、事後承諾なの？」

「うわい！」

「お、美味しかった？」

あたしの質問には答へず、「お母さんはふふっと笑つた。その笑顔があたしの心の裏を読み取つてゐるみたいで、余りに意地悪に思えてしまひ。

「食べないの？」

「ん~」

「食べないのなら、それ頂戴」

「うえ……」

『食後のデザート』とでも言いたげなお母さんの声に、あたしは一層肩を落とした。せつかく箱に詰めて見た可憐くラッピングが出来たのに……なんだかガッカリ。

だけど、むづこの中にほー個足りなくなっちゃつてこるのよね？

そう思つと、少しだけ寂しくなつた。自分に向けて作つたものなのに、どうしてこんな気持ちになつてしまつたのかは判らない。ただ、中身が足りなくなつているだけなのに、無性に寂しい想いを抱

いでしょ！

どうしてなのかな？ 自分へのチョコなのに……誰にもあげたりする心算なんて……無かったのに……

手持無沙汰になつてチョコの箱を弄んではいるが、インターフォンが鳴つた。

「はーーー！」

お母さんが応対に出ると、返事をしたのは回覧板を持って来た慶だつた。

「慶ちゃんんだわ。丁度良いじゃない。香代、あんたそのチョコ食べないのなら慶ちゃんにあげたらどう？」

『あげたらどう？』だなんて、か、簡単に言つたりしないでよ。あたしは慶にあげる心算なんか……あげる心算なんか……

お母さんが慶を迎えて玄関へ足早に去つて行つた。

ほぼ同時に、あたしの手の中から忽然とチョコの箱が消えている。

「…………？」

ん、ないっ！

「まーまー、慶ちゃん御苦労様。はい、これあげるね

「あ……ありがと。」

玄関からお母さんのやけに明るくて弾んだ声がして、それから慶の照れた様な声がした。

「お、お母さん……遣つたわねっ！」

慶が帰つた後、顔から火が出るくらい恥ずかしい気持ちで一杯になつたあたしは、暫くお母さんと口論になつた。

「香代からだと云つていしないし、別にあんたが食べないのならあげても良いでしょう？」

「んな……なによその理屈はあああ～～」

またかお母さんが「んなに強引な態度に出るだなんて思わなかつた。貰つたチヨンを全部手放した不憫な慶に同情したのか、それとも『自分チヨン』をしてウジウジしているあたしに同情したのかは判らなかつたけど。

『香代からだと云つていらないし、別にあなたが食べないのならあげても良いでしょつて。』

頭の中で、お母さんの言葉が繰り返し何度もぐるぐると廻っていく。

確かにその通りなのだけれど……でもあのチョコは大きさが全然違つていて、どう McConnell に見てもお手製チョコ。しかもこの家でそんな事を遣りそなのは、このあたししか居ないじゃないの。

慶だつて、あのチョコを作ったのはこのあたしだつて、きっと気が付いている筈だわ。

どうしよう……今更慶の後を追い掛けて行つて『返して』なんて言えないじゃない。

他の子達のチョコを手放した慶に、チョコをあげてしまつただなんて……亞紀や姫香達に気付かれてしまつ前に、早くなんとかしなくつちや。

それ以来、あたしは慶の事が気になつて仕方無かつた。まさかとは思つけれども、いつ慶がクラスでチョコの話をするかも知れないと思うと、それだけであたしは生きた心地がない。だから、少しでも時間があれば自然と眼が慶を捜して泳いでしまう。

ところが、慶の馬鹿はそんなあたしと視線が合ひ度に、何を想つてだかにっこりと笑顔を返して来るのだ。

んな、何勘違いしているのよ？ べつ、別に慶に氣があるとか、そつ言ひのじや無いんだからね？ き、期待なんかしたりしないでよ。あ、あたしは、慶があたしのチョコの事を口にしゃしないか、み、見張っているだけなんだから。

慶にチョコの事を言われちや困るのよ。その為の……だからこそ監視なのに……

気持ちは焦つているのに、自分の心の何処かで何故だかホツとしている部分がある。どうしてのかしら……なんでホツとしたりしているの？ あたしは自分の気持ちがよく判らなくなつて、凄く不思議だった。

* * *

あたしからの慶への監視は、いつの間にか『無意識の日常』となつてしまつた。慶と視線が合う度に慶はあたしに笑い掛け、あたしは慶の視線を振り払つように、ふいとそっぽを向いてしまう。そんな毎日の繰り返しが一ヶ月近く続いたある日の出来事だった。

今日も部活の練習時間に慶と視線が合つてしまい、グラウンドストローク中にも関わらず、思わず顔を逸らして、みんなの前で見事な空振りを披露してしまつた。

あたしが慶の視線を意識して嫌つていい……？

その事に最初に気が付いていたのは、他でもない姫香だった。

「あ？ 今アキバケイと眼が合つたの？」

「え？ あ、ああ……」

言われてハツと我に帰る。

「香代もアキバケイの事が嫌いになつた？ あたしはねえー『嫌い』つてトコまでは行つていないんだ。でも、流石に『あの日』の事だけは許せないんだけどねえー」

その言葉に、姫香の後ろで順番を待つていた亜紀が反応する。

「仕方無いわ。そもそも、学校にチョコを持ち込んだりした私達女子が悪かったのだもの。秋庭くん、本当に困つたのだとと思うわ。私も少し反省しているの。手渡しせずにみんなと同じに箱に入れたりしたから……『ばち』が当たったのよね」

「つて……そー?」

微妙に焦点がずれているように思える亜紀の発言に、姫香が少々呆れて軽く突っ込む。尤も、あたしだつて一人には内緒の隠し事で、慶の事を見張つている。それぞれが微妙に違う理由で慶の事を想つているのね……そう思つと、姫香の突っ込みに素直に笑えなかつたあたしなのに、タイミング良くクスリと笑つてしまつた。

「あ、あのう私、何か違っていたかしら？ 香代までビリして笑うの？」

「い？ いやあ、別にそんなに深い意味は無いのよ。あんな事されたのに、亞紀は優しいなって……」

「わうなの？ んー、そつなかなあ……」

イマイチあたしの言葉が納得出来ていないような亞紀の反応で、あたしと姫香はお互いの顔を見合って苦笑した。

「はあ～暑つ！ 香代、先に自販機に行つていいから

「あ？ うん」

練習が終わり、「一ート整備に走り回つたあたし達一年生は、グラウンド脇にある対面式の手洗い場で、順番に顔を洗つて帰り支度を始めていた。

「……う」

「？」

「一ートに背を向けて顔を洗つていたあたしは、誰かに呼ばれたような気がして手を停めた。

「……」

氣のせいだつたのかしら？ そう思つたけれども念の為に水道の蛇口を捻つて水音を止める。

「香代？」

あたしを呼んだ声……それは消え入りそうな小さな声だったけれど、確かに聞こえた。

「誰？」

「俺だよ」

声の相手はそう言いつと、反対側の手洗い場からヌシと姿を露わした。

「け……」

……慶？

「うん」

対面式の洗い場の壁は、あたしが軽く屈むと反対側が見えなくなる程度の高さがある。立ち上がった慶はまた少し背が高くなつたみたいで、あたしの視線からは伸び上がつたように見えた。その身長に気圧されて、思わず委縮してしまつ。

慶は、顔を洗つていたあたしの廻りをキヨロキヨロと見渡して、姫香達が居ないのを確認していたみたいだつた。

「な、何か用？」

「あ、あのわ……！」、これ……」

てつまつ、今まで無視を決め付けていたあたしに對しての苦情かイヤミでも言ひうのかと思つて身構えると、慶は氣の抜けてしまいそうな弱々しい声で何かを言い難そうにモジモジしている。

拍子抜けしたあたしは、相変わらずの慶のそんな態度に妙に苛立つてしまい、強い口調で言い放つた。

「なによ？」

「あの……」、『この前の『お返』……』

背後に廻つて何かを隠していた慶の大きな手が、あたしの眼の前へ、何かの包みを持つて差し出してきた。

その瞬間、あたしはその日がホワイトデーだったのだと気付き、カツと頭に血が昇る様な厭な感じを覚えた。

「要らぬこいつ！」

慶の言葉に被せる様にびしゃりと言つて撥ね付けると、あたしは慶にくるじと背を向けて、その場から逃げる様にして一田散に、正門の道路向かいに置いてある自販機へと走り出す。

あたしの周りに姫香や亜紀が居なくとも、まだ一葉や他の女子や先輩達だつて居る。そんな場所で堂々と……『お返し』だなんて言われたくないし、言つて欲しいとは思わないもの。むしろその逆！慶には、あたしのお母さんから貰つたチョコの事をそつとしてお

いて欲しかったの！」……「ハハホト……ハハホト！ こんな時！」

慶の『お返し』ホワイトマーの日は散々だった。

小さい頃から融通が利かなくて、不器用で、空気が読めなくて……なんて相変わらずなの？ 義理チョコのお返しなら、家が隣同士なんだから直接渡せば済む事じゃないの。それをどうして学校でなんか……しかも他の女子が居たのに渡さうとなんかするのよ？

許せないわ！

帰宅後、あたしは勝手にチョコをあげてしまつたお母さんにハッパ当たりをしてしまつた。

「お母さんもお母さんだわ！ 總ら慶にチョコが無いからと言つたつて、本人が勝手に持て余して手放したチョコじゃないの。同情しちゃ。甘過ぎただわ！」

「お母さんは『頂戴』と言つたのよ？ 貰つたチョコを別に慶ちゃんにあげても良いでしょ？」

「やうやく理屈じゃないのー！」

「なにを怒つてこるのよ？」

あたしは慶が律儀に『お返し』を他の女の子の前でしきりとした事。迷惑だと思つたあたしは逃げ出した事を、興奮しながらお母さま

んに打ち明けた。

「慶のせいでこんなに恥ずかしい想いをしなくちゃいけないだなんて、小学校の修学旅行以来だわっ！ 大体、あの時だつてお母さんが慶に頼んだりせずに直接持つて来てくれれば良かったのに」

「やうね。でも、あの時は凄く急いでいて……お母さんだつて遅刻しちゃだつたの」

「だつたらパートなんて止めれば良いじゃ……」

「香代つー！」

あたしが喋れたのはそこまでだつた。

いきなりお母さんの右手が素早く伸びたかと思つた瞬間、あたしの左頬が音を立てた。お母さんから叩かれた頬は鋭い痛みを伴つて、たちまち熱を帯びて熱くなる。

「痛つー！」

驚いて眼を見張るあたしを見て、お母さんは一瞬ハッとしたみたいだつたけれども、すぐに口元をあゆつと引き締めて、強い眼力で以つて見返して來た。

「少し我儘過ぎやしない？」

「……」

お母さんはそれだけ言つと、あたし一人を置いてリビングから出

て行った。

「……」

『なんでだろ？』、胸が痛いよ。どうして？ 視界が揺らいで見えるの？

お母さんは今、地元銀行のパート勤務。本当は、あたしが生まれる前までは、そこの中堅企業の正社員で、かなり上の役職に就いていたらしい。あたしを身ごもつて四ヶ月だった時に、流産をしそうになつて急に入院をしてしまい、会社に迷惑は掛けられないと、一旦は辞表を出したそうだ。けれども、会社からのお母さんへの評価が高く、無事出産して育児にひと段落着けば、また復帰して欲しいとの連絡を貰っていた。

子供を育てながらの会社勤務は、今時ならそんなに珍しい事では無いらしいけれども、あたしが小さかった頃は、なかなか会社側からの理解を得られない場合が多くたのに、お母さんの努めている銀行はそうでは無かつた。

『そんな会社だからこそ、パートでも頑張つて働いているの』、それがお母さんの口癖であり、あたしから見れば一種の『誇り』みたいなものだった。

『人にはそれぞれ事情があつて、他の人には判らない。理解出来ないかも知れないけれど、譲れない部分があるの』、そうも言つていたつけ……

だけが、『うじてお母さんと関わって来るのが『慶』なの?

お隣さんだから? 小さい頃から知っているから?

* *

次の日の朝、あたしは学校へは行きたくなかった。だつて慶との『あんな所』を一葉や先輩方に見られてしまつたんだもの。

きつと姫香や亜紀の耳にも届いている筈よ。そして『香代がズルをして抜け駆けした』だなんて、言いふらされているんだわ。

『誰とも今日は話したくない』だなんて思いながら重い足取りで教室へ入ると、あたしの斜め後ろの席で、先に登校していた慶が門田くん達数人で朝から和氣あいあいと盛り上がっている。

好い気なものね。まったくもつ……慶のお陰で昨日はお母さんに叱られちゃつたんだから。

あたしは話に夢中になつている慶の背中に向けて、キツイ視線を送つてやつた。

「あ、香代おはよう」

「おはよう」

あたしを見付けて声を掛けて来た亜紀に小さく驚き、そしていつ慶の事を言い出されやしないかと怯えて小さく縮こまつてしまつ。

ああ、もうそれ以上は何も言わないで……だなんて思っていたのに、着席したあたしを追いかけて早速亜紀が這つて来た。

「はい、これ

「え？」

亜紀が嬉しそうにあたしの机の上に出して来た物は、見覚えのある包み紙。しかもこれって昨日慶があたしに向かって差し出した包み紙じゃないの！

どうしてこれが此処にあるのよ？

あたしの身体の何処からか、すりすりと血の気が音を立てて引いて行つた。

「あ、あ、亜紀？」

「なに？」

「これ……ど、どしたの？」

「だつ、誰から？」

「ああ、秋庭くんからよ」

亜紀の何気ない一言であたしの髪が逆立つた。

あたしが素直に受け取らなかつたから、今度は亜紀に押し付けた

の
?

『秋庭くんからよ』そつと笑顔を浮かべながら、慶から預かつた包みをあたしに差し出して来た亜紀の何気ない表情がどうしても頭の中で繋がらず、納得出来なかつた。

慶の事を一途に想い続け、あたしや他の女子みたいに気軽に慶と言葉を交わしたりする事さえ儘ならない亜紀にしてみれば、慶と幼馴染であるあたしはライバル的存在になるだろう。なのに、どうしてそんな笑顔であたしに慶からの預かり物を手渡せるの？

「どうしたの？」

「う……うん……」

あたしは亜紀の反応に怯えて警戒しつつ、彼女の顔と差し出された包みと何度も交互に見比べて、中々手を伸ばそうとはしなかった。

差し出された平べつたい包みは、淡い水色に白い水玉 少し皺になつちやつって、中の物がくたくたになつているものか、それとも他に柔らかい素材を包んでいるものなのかも知れないと判る。

とにかく、バレンタインの『お返し』にしては少しばかり不格好なものだった。

「これ、なに？」

思い切つて聞いてみた。

「嫌だ。だつてこれ香代の『忘れ物』でしょ？ 秋庭くんがそう言つていたの」

「は？」

「あ？ ああ、ラッピングしているから判らなかつた？ 西門に近い水飲み場にあつた忘れ物を秋庭くんが見付けて、香代の名前が書いてあつたからつて。昨日部活の帰りに渡そうとしたのに、香代が無視して帰つちゃつたからつて」

「あ？ あ……ああ、あれ？ な、失くしちやつたかと思つてたわ」

「忘れ……物？ そんなもの、あつたかしら？」

あたしの頭の中で、疑問符が乱舞する。

あたしには全く心当たりが無かつた。だけど、亜紀がそう思つてくれているのなら、受け取つても大丈夫。ううん、むしろ否定して受け取らなかつたら、それこそあたしだけじゃなくて、慶の事さえ怪しまれる。

あたしはしじどりもどりになりながら、何とか慶と口裏を合わせることにして、改めて亜紀から包みを受け取つた。

「秋庭くんが見付けてくれて良かつたよね」

「う、うん……？？？」

亜紀から受け取つた包みには、ラッピングの紙を通して軽い布の
様なふんわり感が掌てのひらに感じ取れる。

何？ 慶はあたしに何を遣して來たの？

あたしは小さなドキドキを覚えながら、それでも亜紀の視線を氣にしつつ慶が『忘れ物』だと言つていた紙包みを開けてみた。

軽いカサカサという音を立てて、あたしは中に入っているものを覗き込む。

「……わ」

思わず『可愛い！』と口走りそうになつて、あたしは大きく息を飲んだ。

そこには、淡いピンク色のふんわりとしたぶ厚いスポーツタオルが一枚入つていた。あたしはそのタオルを引き出して拡げてみると、隅つこに黄色いヒョコのキャラクター アップリケがされている。

あたしがヒョコのキャラクターを集めていたの、慶は知つていたんだわ……

あたしの胸がどきんと大きく波打ち、次いで頬が熱くなつた。

これが慶の『お返し』だと言つ事くらい、あたしには判る。だけど、あたしは素直に慶から受け取る事が出来なかつた。だつて、他の女子がいる眼の前で、慶が渡そうとなんかするから…… 聞き取り辛い程の小声で『お返し』と言つたから、あたしから未だに廻りの空気が読めない馬鹿つて勘違いつされたりするのよ。

あたしは必死になつて、慶を見下していた自分を心の中で弁護した。でも、幾ら弁護したって、あたしは慶に對して酷い思い込みをしちゃつたのだわ。そう思つと何だか居心地が悪くて、自分が情けなくなつて来る。

「へえ～、香代、こんなの持つてたんだ」

「う、うん。可愛いでしょ？」

「うん」

あたしにおでこをくつ付ける様にして覗き込んで来た亜紀に、タオルにあたしの名前が無いのを気付かれてはと、さつ氣無く半分に折り畳む。

「買つて貰つたばかりだったのに、何処かへ失くしちゃつたと思つていたの」

誰から買つて貰つたのかを伏せて、あたしは再び亜紀に会わせる。

「見付かつて良かつたね」

黙つてこくんと頷くあたしを全く疑つていらない亜紀の純真な笑顔に、良心がチクリと痛んだ。

丁度その時、一時間目の授業のチャイムが鳴り、あたしはホッと胸を撫で下ります。

亜紀はあたしの席から離れ、他のみんなも自分達の席に座った。

彼女の視線から解放されたあたしは、黙つて斜め前に座っている慶の広い背中を見詰めた。

慶が成長していなくて昔のままで居るのは、あたしの心の中だけに住んで居る慶なのだわ……と、この時強く思った。

な、なによ……変に気を利かせた心算なんでしょうけど、あたしには却つて迷惑だったって事、慶はどうして判つてくれないの？

そ、そりゃあ、プレゼントは嬉しいけれど……だからと言つてこんな渡し方をして欲しくは無かったのに……

慶の事を独りで誤解していたあたしは、結局自分の執つた酷い行動を理屈で正当化してしまい、素直に慶に謝る事が出来ないままだつた。

* * *

あたし達は一年生に進級し、学年で七クラスあつたにも関わらず、やつぱりと言うか、お約束通りと言つべきなのか、それとも神様の氣まぐれだったのか……あたしと慶はまたしても同じクラスになつた。

そして軟式テニス部も新入生を迎えて、ひと段落したかしらと思えるようになつたゴールデン・ウイーク明けの最初の週末。

穏やかな春の日差しが降り注ぐ朝だったけれども、その日はいつもの朝だとは思えなかつた。

何がそつをせるのだろうかと不思議な胸騒ぎを覚えたあたしは、

それがお隣である慶の家がいつもの空気と違っているのだと気付き、そつと一階の窓辺から慶の家の庭先を見下ろした。

小学生になつた記念にと慶のお母さんが庭に植えた八重桜が、明るい日差しを浴びて濃いピンク色の花弁を綻ばせている。慶はその桜の木陰に美咲姉さんと並んで立ち、出掛けで行こうとする慶のお母さんとおばさんを見送つてゐる所だった。

「行ってらっしゃい」

けれども、明るくそう言つた慶にはいつもの元気が無く……それどころか少しだけ心配そうに送り出しているような声をあたしは聞いてしまつた。

お母さんが慶達に何か話掛けている最中、タクシーの運転手さんと付き添いの人らしいおばさんが、一緒に大きな荷物をタクシーの後部トランクに載せてくる。

あたしはそこで、あたしのお母さんが話していた通り、慶のお母さんがとうとう入院してしまつたのだと知つた。

おばさんが検査入院じゃなくて、本当に手術が必要で入院すると言つ事を慶だけには知らせていないらしい。だから、あたしは絶対に慶にその事を言つては駄目よとお母さんから釘を刺されている。当事者である慶が知らない事を、どうしてあたしが知らなくちゃいけないの？　お隣同士だからって、お互いの家庭事情を知つておく必要があるのかしから？　それともお母さん達は、あたしがまだ慶のお守役を買つていても思つてゐるのかしら？　大人達はどうしてそんな廻りくどい事をしないといけないのかしら？

そう疑問に思つたけれども、逆にあたしが慶の立場だつたらと考えた時、そのワケがなんとなく判つたよつた気がした。

だつて、あたしが慶の立場であつたら、絶対に知りたく無いもの。知つてしまえば気になつて、勉強どころじゃなくなつてしまふし、心配ばかりして駄目になつちゃいそう。不安に押し潰されてしまいそんなんだもの。

でも、だからと云つて、あたしにそんな大切な事を伝える必要があつたの？

『昔はよく慶ちゃんのお世話をあげていたじゃない。香代はしつかりしているから……』お母さんはそつまついていたけれど……

あたしだつて、おばさんが大変な事になつていると知つて平氣で居られる筈なんか無いじゃない。本当は、まだ脆くて崩れ易い心しか持つていなのに……

慶のお母さんがタクシーに乗る間、慶は美咲姉さんと何やら小競り合いをしていたみたいだつたけれど、お母さんがタクシーに乗つてしまつた途端、慶は『母さんは自分の心配だけをしていなよ。僕達は大丈夫だから!』と、大きな声で叫んだ。

氣追い込んでしまつたのか、それとも車のドアが閉じられてしまつたからか、突然大きな声を出した慶の後ろ姿を、あたしはハツとして見詰め直す。

成長して大きくなつた慶の広い背中が、小学生だつた当時の小さ

な背中と一緒にダブつて見えてしまった。

やう言えば……あれは慶が小学四年生になった春　慶は今と同じように、自分の気持ちを抑えて単身赴任になつた自分のお父さんを見送っていた。慶のお母さんと美咲姉さんが家の中へ入つてしまつた後、慶は独りで泣きながらいつまでも手を振つていたのを、あたしはこの窓から今と同じように見ていたのだわ。

あれから数年が経つたけれど、今でも慶が家族へ必要以上の心配を掛けさせまいとして気を遣つてするのが判る。慶の『氣遣い』……と言つか、優しさは昔も今も変わつてはいない気がした。

むしろ、変わつてしまつたのは……

変な息苦しさを感じて、あたしは思わず窓辺に背を向けると、そのまま座り込んでしまつた。

「や、やだ。あたしつたら、なんでストーカーみたいな事しているのかしら?」

お隣を覗き見している自分に気が付いて、思わず独りで呟いてしまつた。幾ら気になるからって、こんなのはいけないわと反省して恥ずかしくなつてしまつ。

あたしが心配しなくとも、慶は独りじゃない。慶には美咲姉さんが居るんだもの。きっと美咲姉さんが……

「……あれ？」

美咲姉さんつて、確かに家事が大の苦手だつて言つていなかつたつ

け
?

「こつまで寝てるんだよー。起きるよ美咲つー。」

「つたぐ、つるわこわねえー。頭に響くからそんなに怒鳴らないでよおーー」

「遅刻したって知らないからな。大体なんでいつも毎日毎日、夜遅くに帰つて来るんだよ」

「付き合いであるんだから仕方無いでしょ」

「『仕方無い』じゃあないよつーじゃあ付き合いで十歩譲るとしても、朝ぐらじ自分でわざわざ起きたよー。」

「あああ、もつー。つるわああーいー。」

「だつたら起きるーつー。」

「……」

まさかとは思つたけれど……。がーた今日も始まつたわ。お隣。

慶のお母さんが入院した次の日から、慶と美咲姉さんとの遣り取りが一日連続で続いている。

あたしはお隣から聞こえて来る喧嘩腰の遣り取りにつきぞりしな

がら、制服のブラウスに袖を通してベストを羽織った。

それにしても、慶が取った美咲姉さんへの起し方は疑問だわ。朝っぱらからあんな風に起しあれちや、誰だって堪らなくなつちやう。

あたしは慶の強引な起し方に対し、少なからず腹を立ててしまった。美咲姉さんが逆ギレするのも頷けるし、可哀想じゃない。第一、その遣り取りを嫌でも聞かされてしまつたりの事だつて考えて欲しいわ。

スリッパのぱたぱたと言う軽い音を立てながら、あたしは機嫌を損ないつつ階下のキッチンへ向かつた。

キッチンの入口にある暖簾を潜ると、既にお父さんは会社に出勤した後で、お母さんも自分の会社へ出掛けるために、先にトーストを食べてこる。

「香代、おはよー」

「おはよー」

あたしはお母さんの向かいにある、二つの椅子を引いて座つた。

「今日も慶ちゃんが美咲ちゃんを起しこるのね」

「みたいね。でも、美咲姉さん可哀想。だって、あんな起し方をするんだもの」

お母さんの言葉にあたしは素つ気なく言い返すと、お母さんはク

スクスクと笑つた。

テーブルの端に置いていたトースターから可愛らしい音がして、中からアシアンのトーストがポン！ と飛び出した。あたしは左手にお目を持つと、そのトーストへ空いている右手を伸ばす。

「男の子うらしくて良こじやない？」

「冗談。怒鳴られて起しこられるだなんて迷惑だわ」

焼きたてのトーストにバターを塗りながら、あたしはお母さんからそれ以上慶達お隣の話は止めて欲しいと思つて、わざと興味無さそうな素振りをした。

だつて、お母さんつてば何かあるとすぐに慶達の事を話の引き合いで出して来て、『香代も姉妹が欲しかった？』だなんて言い出すんだもの。そりゃあ姉妹が居れば今とは違つた生活があるだらうけれど、今更つて感じだわ。あたしは今の生活で十分なんだかい。

「やう？ でも慶ちゃん偉いわあ。ちゃんと朝起きて美咲ちゃんを起しこるんだから」

「だから、その起しこ方に問題があるって言つてるの」

ああ……昨日もだつたけど、なんだか朝から苛々する。

自分の言葉に合わせるよつて、あたしは眼の前に置かれていたサラダの中のトマトを、フォークで無造作にぶつりと刺した。

お母さんはそんなあたしの心を読んだのか、『やう？』とだけ言

つて軽く笑いながら、あたしの反論を受け流した。そして、食べ終わつたお皿と『コーヒーカップを流しへ持つて行く。

「ねえ、香代」

「ん~なに?」

「慶ちゃんのお母さんが戻つて来るまで……少しだけでいいから、慶ちゃんの事を見てあげて?」

「なんで?」

咄嗟にそんな言葉が口を突いた。言葉の響きの冷たせに、言つてしまつたあたし自身が驚いてしまう。お母さんもあたしの返事が意外だつたらしくて怯んでしまつたのか、少しだけ『聞』があつた。

「やうね……『見る』のじゃなくて、時々で構わないから『気に掛けてあげて』欲しいの」

その時、あたしはお母さんの言葉の意味が良く判らなかつた。でも、先に言つた自分の冷たい言葉に退いていたあたしは、迷わず『うん』と囁ひつて頷いてしまう。

だけど……慶の事を『気に掛けてあげる』……って、ビリすればいいの?

お母さんから滅多に受けない頼み事を聞いてしまつたような気がして、その日からあたしは無意識に慶の事を眼で追いかけてしまつようになった。

* *

「土橋イ。お前さつきから、アキバケイの事ばつか見てね?」

「えつ?」

「あいつになんか用か?」

三時限目理科の授業中に、あたしは隣の席に座っていた藤田くんから囁かれて、飛び上がつてしまつほど驚いてしまつた。

だけど、あたしが慶の事を見ていたなんて認めれば、また昔の頃の……小学校の時と同じように、クラスのみんなから誤解されちゃかわれてしまうかも知れない。

あたしはそんな幼稚な誤解をされまいとして、精一杯冷静さを保つて小声で冷たく言い返した。

「別に氣のせいでしょ? なんであたしが『あんなの』を見てなくちやいけないのよ?」

「お? お、おお……」

「うへえ~、土橋つてキツツウ~」

あたしの強烈な拒絶を喰らつた藤田くんは息を飲み、それまで黙つて彼の隣であたし達の遣り取りを聞いていた森くんが、あたしの言葉を混ぜ返した。

「そこ」、私語は止めなさい

「すみません」

先生からの注意を受けて、あたしは素直に謝つて頭を下げる。その間、隣に並んでいる一人の男子をじろりと睨んで遣つたら、一人は居心地が悪そうにしてそれがあさつての方を向く。

ついでに視線を泳がせたら、偶然こっちを見ている慶と視線がぶつかってしまい、どきり！ と心臓が大きく音を立てた気がした。あたしは胸のドキドキを廻りに聞かれてはと、思わずふいとそっぽを向いてしまう。

あ、あたしは別にあんたの事を気になんか……していないんだから……

そう強氣で想い込もうとすればするほど、あたしの気持ちは……本当の気持ち、慶の事が気になつて仕方が無かつた。

お母さんが入院して家にいないのに、慶は昨日も今日も特別変わったような素振りは見受けられない。それどころか、かなり雑で乱暴だけれど、美咲姉さんのお世話をだつて出来ているじゃない。もし、あたしが慶だつたなら、きっと落ち込んでしまつて何も出来ないでしょうね。

小さかった頃は、あたしが慶の傍を離れただけで泣き出していたくらいなのに。人に頼つてばかりいた小さな男の子だったのに

一体、いつからそんなに強くなつたの？ どうすればそんなに……

慶の事を気に掛ければ掛けるほど、あたしは慶が判らなくなつて來た。お隣で幼馴染だと言つのに……

どうしてなのかな？ 口先では慶に対しても興味が無いように言つているのに、その実、慶に惹き付けられているみたいな気がする。

そんなちばばぐな気持ちを他の子達には知られたくないて、あたしは自分の気持ちを隠そつとして、慶に対し今まで以上に、冷たい素振りをしてしまつよつになつて行つた。

「慶ちゃん、今日はやけに遅かったのね。今さつき帰つて来たみたいだわ。香代、なにか知つている?」

時計の針は、既に十時を過ぎていて。

戸締りをしていたお母さんが、リビングに戻つて来るなりあたしに聞いて来た。

「ああ……別に部活はいつもの時間に終わつて解散したけど」

「確かに、昨日は病院に行くと聞いていたの。でも、まさか今日も行つたのかしら?」

「そうじゃないの?」

それまで雑誌を読んで窓^{まど}を開いていたあたしは、お母さんの問い掛けが少しだけ面倒になつて、いい加減な生返事をする。

慶がどこへ行つて遅くなつたのかは、別に聞かなくても想像出来る。そりゃあこんなに遅くなつて心配するのも判るけど、本人がもう無事に帰つて来ているのだし、別に騒ぐほどの事は無いと思つただけれど?

「偉いわね。慶ちゃん」

「『偉い』? 慶が?」

「そうよ。お母さんの病院へ通つて……美咲ちゃんが遅く帰つてい
るみたいだから、あの調子だと家の事も慶ちゃんが遣つているのじ
やないかしら？」

「……ふうふ」

もう言われば……

あたしはお母さんの言葉に共感して雑誌から視線を外し、リビングの入り口に立つて居るお母さんを見上げながら、慶が自分のお母さんが居る病院へと辿り着くまでの道のりを想像した。

慶のお母さんが入院しているのは、隣の市にある県立の大学病院だそう。家からは車で行けば一時間くらいだけれど、公共の乗り物を利用すれば、バスや電車なら一旦市内中心部にあるターミナルへ行つてから、郊外行きの便へと乗り換える。大きく迂回する事になるから、時間的には車と殆ど変わらない。

運転免許を持つて居て、なお且つ車を持つている美咲姉さんが一緒なら、あたしのお母さんだつてここまで心配なんかしなかつたと思う。でも、最近美咲姉さんの姿を見掛けてはいない。大学が忙しいのか、デートで忙しいのかよく判らないけれども、あたしが眠りにつく頃になると、お隣から美咲姉さんの乗る軽四自動車が、車庫入れをしているエンジン音が聞こえて来る。時には夜中の二時、三時頃、ご近所に申し訳なさそうに帰つて来たりする。

そして、次の朝には慶が美咲姉さんを叩き起しにして……

「あ……」

そこまで記憶を辿ると、あたしはびつして慶が毎朝美咲姉さんの事を酷い遣り方で叩き起ししたりするのかが、判つたような気がした。

美咲姉さんが帰つて来るまでの間、慶は自宅ですつと独りきり。部活で疲れて帰つて来ても、家には誰も居ないから、御飯はお弁当を買って来るか、自分で作らないといけないし、洗濯だつて遣つておかなくちゃいけない。

もう中学生なんだから、料理や洗濯と言つた家事は一通り習つているし、頭では判つているけれども、それをいきなり独りで遣るとなると……

もし、あたしが慶の立場だったら、あたしには……無理だし、長続きなんかしないだろうなと思った。慶みたいに姉弟が居れば、お互いに協力して家事を分担出来る事も考えられるけれども、美咲姉さんがあの調子じや頼る事も出来ないわよね。

そして慶は、家事を独りで四日間も続けていた。美咲姉さんに對しての多少の不平や不満は出ちやうかも知れないわよね。だからと言つて、あんな酷い起こし方をしても良いつて事にはならないと思うのだけど……

あたしが慶の生活を真剣に心配し始めた六日目の夕方、自宅の駐車場には、珍しくお父さんの車が停まっていた。いつもなら八時や九時頃に帰つて來るのに、今日はあたしよりも先に帰つて來るだなんて。

「ただいま」

どうしたのかなと思ひながら玄関のドアを開けた途端、男の人の豪快な笑い声に迎え入れられて驚いてしまい、思わずビクンと肩を跳ね上げてしまった。そして、その笑い声に交じつて聞き慣れたお父さんの陽気な話声がする。

「誰？」この品の無もそつた笑い声は？ 一体誰が来たのかしら？ お父さんの寬いだ様子から、かなり氣の置けない人が来ているみたいだけど。

不審に思いつつ玄関先に視線を落とすと、お父さんの大きな黒い革靴と、その隣にはお父さんの靴よりももっと大きい革靴が、きちんと揃えられていた。

「あら、香代お帰り」

お母さんはたつた今台所から出て來た所だった。手にしている御盆には、温かいお酒が入っているらしい『徳利』^{とくり}が数本載せられている。

「ただいま。誰が来ているの？」

「ああ、お隣のおじちゃんよ。名古屋からわざわざ着いたのですって」

「慶のお父さんが？」

「そうよ。懐かしいでしょ？ もう何年振りになるのかしらね？」

「おーい、母さん。^{あつかん}熱燄はまだかい？」

「はいはい。今行きますから」

奥のリビングから、お父さんがお酒の催促をする声が聞こえた。

お母さんはリビングの方へ顔を向けると嬉しそうに応える。そしてわたしの方へ向き直ると『香代も着替えて後から来なさい』と言つた。

久し振りに会つ慶のお父さん。名古屋にずっと単身赴任で中々此方へは帰つて来られず、もう三年以上も会つていなかつたせいか、会つのが少し恥ずかしくて嫌だつた。

だけど、じれで慶の苦労が軽くなるのだと思つた。きっと慶のお父さんが、慶の今までの負担を軽くしてくれるだらうから。

リビングに行つてみると、一人は顔を赤くしていて緋りが無く、すっかり『出来上がつた』状態だつた。一人のどちらかが並べて置いていた空いたビール瓶を倒したらしく、散らかつた瓶をお母さんが片付けている。それでも久し振りにお互いが会えたせいか、みんな嬉しそうににこにこしていた。

「おお、香代ちゃん？　ええと……香代ちゃん……だよね？　覚えてこる？　おじさんの事」

「や、そうです。」
「んばんば」

『機嫌で話掛けに来るおじさんに、あたしは何故だか数十年後の慶の姿を妄想してしまい、思わず退いてしまつた。

「いやー、大きくなつたねー。おじさん知つていい香代ちゃんは、まだこのくらいの小学生だったから」

おじさんは右手を軽く挙げて、少し膨れた自分のお腹の前にかざして見せた。

あたしは思いつ切り愛想笑いを浮かべる。

おじさん、少し太つた？ それともそのお腹はビール腹？

「香代ちゃん、お母さんに似て美人になつたじゃないですか」

「いやいや、秋庭さん言つてくれますね」

「本当じゃないですか。なあ、香代ちゃん」

「は、はあ……」

そこまで言つと、二人とも何がおかしいのか再び陽気に笑い出した。そして、お互にお母さんの褒め合いになつた。しかも普通に話せば良いものを、「近所に聞こえるのじゃないかしらと心配してしまつから」との大聲で。

「嫌ですよ、お父さん」

手放しで褒められたお母さんは流石に恥ずかしくなつたのか、お父さんに軽く眉を顰めて見せる。

「じ、じゃあ、あたしは宿題があるから……」ゆづくつ

あたしはおじさんへ「一つと一礼をして、それをと一階へ逃げた。

慶のお父さん帰つて来て良かったと思つた。だけど、幾ら久し振りに会つたからつて、お父さんまでお酒に呑まれちゃつて……ショックだわ。あんなに酔つたお父さんを見るのは初めてだつたし、正直、あたしは見たくない姿だつたから。

あたしは一人のだらしない姿を眼にしてしまい、奇妙な嫌悪感を抱いてしまつた。

そもそも、なんで慶のお父さんが帰省するなり、着替えもせずにスース姿で家に居るのよ？ とは思つたけれど、考えてみれば慶の家にはまだ誰も帰つて来ていなかつたから、家に入れないんだわ。

おじさん慶達に帰つて来る事を知らせていなかつたのかしら？ それとも慶達が聞いていたのに忘れているの？

早く慶が帰つてくれれば良いのに。おじさんだつて疲れているだろうし、あたしだつて酔つ払いの声なんか聞きたくない。

一階に引き籠つてしまつたのに、二人の開け透けない笑い声が嫌でも耳に入つて来て不快だつた。こうなつちやうと宿題もなにも手に着かないじゃないの。

苛々していると、間もなく階下でインターフォンの音が聞こえた。そして『こんばんは』と重つ慶の声がする。

まつたくもひ……もひと早く迎えに来てよつ！

> 24270 | 316 <

「じんばんは」

「はあーい」

お母さんが返事をした時だった。

リビングで会話が盛り上がり、大笑いをしていたお父さん達が、酔った弾みでテーブルに置いていたグラスか何かを倒した音が聞こえた。

慌てたお父さんがお母さんに雑巾を持って来るよつこと声を張り上げる。

「香代？ お母さん、今手が放せないからちょっと出でくれない？」

「ええ？」

やつと宿題に集中出来る様になつた所だったのに……

机に向かっていたあたしは、嫌な顔をしてシャーペンを乱暴に置いた。

声の主が慶だつて事は判つている。きっとお父さんを迎えてきたのだろうから、わざわざ出迎えなくつたつて、勝手に上がつて貰えば良いじゃないの。

「香代？」

「はーー」

宿題の邪魔をされてテンションが低くなつたあたしは、のろのろと椅子から立ち上がつた。

階段を下りると、丁度玄関で立つて居た慶と眼が合つた。

「やあ、香代」

「……」

慶の声に何故か委縮してしまい、あたしは返事もしないで立ち尽くす。

「……」最近、あたしはお母さんから頼まれたせいもあつたけれども、自分のお母さんが入院してしまつた慶の事が気になつてしまい、気が付けば慶を捜して見詰めていた。

慶は、あたしが慶のお母さんの入院の事を知らないのだと、今でも思つている筈。そのせいか、自分を見詰めるあたしの視線に気付く度に、慶はふと表情を和らげて軽く笑顔を浮かべてくれていた。

あたしは、慶にひとつは知らせたく無いお母さんの入院の事を知つてゐる。そんな後ろめたさがあつたせいか、どんな顔をすれば良いのか判らなくて言葉に詰まり、あたしは慶と視線が合う度に、

慌ててそっぽを向いていた。もちろん、慶の事を見てここと同じ事が実を他の子達に知られて、冷やかされたく無いって言つ気持ちはあった。

でも、ここは学校じゃない。視線を合わせて困る事も無ければ、そっぽを向いて逸らせる必要も無い……と嘆くよりも、訪ねて来た慶に対し無視は出来ないもの。

ぎこちないあたしの様子に気付いた慶は、まるで腫れものに触るみたいにそっと話掛けて来る。

「あの…… も、うひの父さん…… 囁るへ..」

「……」

「あ、上がつても…… 良こかな?」

あたしが「ぐんと頷くと、慶は『了解』とばかりに皿配せを送つて来た。

「お邪魔しまーす」

奥に居るお母さん達へ聞こえる様に声を張り上げた慶は、脱いだサンダルを揃えると、階段下で立ちはじめているあたしを置いて、お父さん達が居るコビングへと急いでいた。

「「んばんは。すみませんおじさん、おばさん」

「やあ、慶くん大きくなつたね。何処のお兄さんがと思つたよ」

あたしの両親に謝る慶の言葉に、一人とも笑いながら『遠慮しないで』と温かく迎え入れる。

朝が早くて夜が遅いうちのお父さんにしてみれば、幾らお隣に住んでいるからと言つても、慶と会つ事は滅多に無い。

「父さん！ なにお邪魔してンだよ」

「慶か。久し振りだな～。ビーツだ？ お前も一杯付き合わんか？」

「なに言つてんの？ 僕、未成年なんだよ？ も、帰るよ」

「お？ むむ……」

「慶ちゃん、お父さん少し酔つてゐるみたいだから、暫く酔いを醒ましてからでも構わないのよ？」

「いえ、大丈夫ですから」

そんな遣り取りが聞こえて間もなく、慶は自分のお父さんに肩を貸して玄関先まで遣つて來た。

慶のお父さんは背が高くて、百八十一センチもあるがつしりした体形だけど、そのお父さんに肩を貸している慶も、もうすぐお父さんの背に追いつてしまいそうだった。

「お隣だし、もつとゆづくつして行けば良いのこ

見送りに出て来たあたしの両親に向かって、慶はぺこりと頭を下げる。

「お邪魔しました」

「ああ、またいつでもいらっしゃい」

酔つて顔が真っ赤になつているお父さんが答える。

ג' יטנ'ו, ע' ו' יטנ'

「機嫌になつて酔つている慶のお父さんが、お礼を言つて頭を下げた。その拍子にバランスを崩して倒れそうになつたけれども、肩を貸していた慶がお父さんをしっかりと支えて事なきを得る。

「しかし、歩かる？」

「ああ」

「靴、ちゃんと履いて？」

「あ、ああ……」

酔つてしまつたお父さんに対し、しつかりとした態度で接している慶の姿を初めて見てしまい、あたしは何故だか自分の顔が熱くなつて行くのを感じた。

「ありがとう香代。また明日」

「ああ、香代ちゃん。お邪魔しました」

「え？ あ、ああ……」

突然声を掛けられて驚いてしまったあたしは、つられて思わず手を小さく振ってしまった。

『ありがとう香代』慶のその言葉が、あたしの熱くなつた顔を一層熱くする。

みんなで慶達を見送った後、あたしはリビングの片付けを手伝おうと思つて、一人の後に付いて行つた。

「いやー、慶くん頼もしくなつたなあー

「本当ね」

久し振りに会つた慶の姿に、お父さんは驚いていたみたい。だって、同じクラスで毎日一緒に居るあたしでさえ、慶の成長を感じてしまうんだもの。滅多に会えないお父さんなら尚更そう感じちゃうわよ。

「良いなあ。あと何年かすれば、一緒に酒が飲めるんだよな

そういうふうにお父さんと、慶のお父さんを羨ましがつた。

「あー、香代だつてそうやつよ

「うふ。でもちよつと違つんだよ」

「なにが？」

あたしは片付いたテーブルを拭きながら、お父さんの妙な拘りを感じて眉を顰めた。

テーブルを片付けながらくすくすと笑つお母さんに向かって、慶のおじさんが使用したグラスを手渡すお父さんが微笑する。

「息子と酒を酌み交わす事と、花嫁の父で居られるつて事は、その家庭だけの父親の特権だからなあー」

「はあ？ なにそれ

「香代がもつと大きくなつたら……判るかも知れないな

それ以上は何も言わず、ソファに座り直したお父さんは嬉しそうな顔をして、自分で御猪口おけいこにお酒を注ぐ。

「……？ 変な拘り」

なにその答えにもの凄く時間が掛るクイズみたいな言い方は。なんだか心に引っ掛かっているみたいで、居心地が悪くなっちゃうじゃないの。

あたしは不満を残しつつ、『機嫌なお父さんをリビングに残して、一階の自分の部屋に戻った。

二十歳が来れば、女人でもお酒は飲めるようになるし、もちろんあたしだってその年になればお酒だって飲める……飲める……の

かな？

宿題の続きを書こうと、シャーペンを握ったあたしの頭の中には、全くお酒が飲めないお母さんの顔が浮かんだ。

第74話 人見知り

慶のお父さんが帰つて來た。

慶のお父さん おじさんと会つのは、本当に久し振りだつた。新聞記者をしているおじさんが名古屋へ単身赴任する事になり、最後に会つたのは……確かあたし達が小学四年生になる年の春休みだった事を覚えている。

うちのお父さんよりも身体が大きいおじさんは、昔はいつも優しく二口二口笑つていて、傍にいるあたしまで笑顔にさせてくれていた。あたしはそんな笑顔のおじさんがとっても大好きだつた。

大好きだつた筈なのに……

お酒を飲んでうちのお父さんと笑つていたおじさんは、あたしが大好きだつた昔のおじさんとは、何だか少し違つていた。もちろん、帰省の長旅の疲れが滲み出ていたのは判るのだけれど……

おじさんは慶のお父さんであり、同じ人なのに……

それは、あたしがおじさんと何年も会つていなかつたせいなのか
も知れないとも思った。

『大きくなつたね……』

笑つてそう言つてくれたおじさん。だけど、あたしにはそんな自覚は無かつたから、おじさんの言葉にどう反応すれば良いのか判らなくて、つい、愛想笑いしか浮かべられなかつた。

「香代も人見知りしちゃつたのかしら？」

「え？　『ひとみしり』？」

お風呂に入るようにと呼ばれて下へ降りたあたしに、お母さんは微笑しながらあたしに向かつてそう言つた。

「『人見知り』……って、赤ちゃんがするものじゃないの？」

「そうね」

失礼しちやう。

「あたしは赤ちゃんなんかじゃないわよ」

「そうよ」

「んな、なにが『そうよ』なのよ」

頬を膨らませてムツとなつたあたしを見て、お母さんは眉を寄せて苦笑した。

赤ちゃんの『人見知り』については、三年生になれば家庭科の授業で習うそうだし、まだ詳しくは知らないのだけれど、産まれたばかりの赤ちゃんは、眼が明いていてもまだ視力が無くて物がまだ見えてはいないらしい。その後、数か月して見えるようになり、自分のお母さんやお父さんの顔と、他の人の顔の区別が見分けられるようになる。その頃に、頻繁に外出して赤ちゃんを人と会わせている

と、見慣れない人と会つても急に拒絶して泣き出したりするような『人見知り』のサインは出ないけれど、逆に家に閉じこもっていると『人見知り』の行動が出るのだと聞いた事がある。

だけど、それはあくまで『赤ちゃん』の行動であつて、あたしは何もおじさんを見て泣いたり、あからさまな拒絶なんて遣つてはないのだけど？

「あんたくらいの年頃になると、今まで余所の人へ挨拶出来て居たのに、急に恥しくなっちゃって、今まで通りに出来なくなつたりするものなの」

「で、でも、あたしはちゃんとおじさんに挨拶出来たわよ？」

「その時、少し恥ずかしく無かつた？」

「つえ？」

「慶ちゃんのお父さんが引っ越して行く前の時と同じ様に、挨拶出来た？」

「や、それは……」

言い当てられて、ドキッとする。確かに、おじさんと久し振りに会つのは気が引けて、何だか恥ずかしくて嫌だったもの。

「別に気にしなくて、香代だけと訳つていいのよ？」慶ちゃんが恥ずかしそうにしていたし

「つて、それはおじさんが……うちに来ていたからじゃないの？」

「それだけだと思つ?」

「……」

何だかお母さんからかわかれているみたいで嫌な気持ちになつた。

「心配しなくても大丈夫。お母さんもそうこう時があつたから。『お年頃』って言つのかしらね?」

「あ、……『お年頃』?」

『やう言つ次期』……つて『思春期』の事……なのかなあ?

あたしは脱衣所の中にある鏡の前に立つて、自分の顔を見詰めた。

おじさんの記憶に残つているだらうあたしの小学生の時の顔と、今の顔は少しばかり違つてゐる。目線だつて、背が伸びたからあの頃よりも高くなつた。視線を下げれば……Tシャツに黒いジャージ姿だけれども、その下はそれなりに……あたしだつて成長している……と思つ。

見た目、慶が大きくなつて成長しているのと同じ様に。

そして『心』も……

いつの間にか、その場の雰囲気や面合させたメンバーによつて、思つた事をストレートに言えなくなつたりして、言葉に詰まつてしまふ場合が多くなつて來たみたい。

『大きくなつたね』

おじさんの言葉がまたしても聞こえたような気がした。

* *

慶のお父さんが帰つて来てくれたから、もう大丈夫よね？

そう思つて安心していた。

ところが、次の日の五時限目。古文の授業の最中に、慶は居眠りをしてしまい、普段から授業を面白くないと思っていた連中からからかわれて、授業を中断してしまつ騒ぎを起こし先生から注意されてしまった。

もしかして、お父さんが帰つて来てくれて、嬉しさのあまり眠れなかつたのかしら？

そう思つと、何だか慶がもの凄く単純で子供っぽく思えた。

授業が終わつた後で、職員室へ来るよつと先生から言われた慶は、肩を落として教室から出て行く。

「意外だわ。秋庭くんでも、居眠りなんかしたりするのね」

慶の後ろ姿を見詰めて首を傾げながら、亜紀があたしに向かって聞いて来た。

「まあ……ね」

「あれ、香代は何か知っているの?」

「え? ううん。知らない。っていつか、なんであたしがあんなの
の事を知っていないといけないのよ?」

亜紀の問い掛けに、思わず誤解されてしまつのような微妙な合槌を
打つてしまつた。

危うく誘導尋問に引っ掛かりそうになつてしまつたあたしは慌て
てしまい、慶に対して反抗モードに切り替える。

「や、そりだよね。変な事聞こいやつで『メン』

「う、ううう。良こよ別に……」

心穢やかではなくなつたあたしは、亜紀から視線を逸らせる。

危なかつたあ……慶のお母さんが入院している事を、思わず口に
してしまいそうになつたんだもの。

第75話 サービス

どうしてなのかな。咄嗟に慶の事を『あんなの』だなんて言っちゃつたりして。

亜紀の探る様な視線から逃れたあたしは、言い表し様の無いモヤモヤ感に襲われた。

慶の事を聞かれる度に、いつの間にかあたしは慶の事をこんなに悪く言ってしまう様になっている。酷い言葉を口にする度に、自分が汚れて行く気がして嫌になる。そうして慶の事を訊かれる度に、あたしは顔を強張らせてしまつ……

なんなの？ この嫌な気持ちは……

一呼吸置くと、逸らせた視線を亜紀へ戻した。今のおたしの動揺を亜紀に見られまいと、わざと余裕があるみたいに腕組みをして、浅く首を傾げて見せる。

「居眠りしたから心配になつた？」

「うん……」

「夜ふかししたり疲れてたりすれば、居眠りくらい誰だつてするでしょう？ 別に珍しくもなんともないじゃない」

「そ、それはそちかも知れないけれど、で、でも……でも、秋庭くんはそんな事……するような人じやないわ」

「わあ、それほどひつかしさ」

昨日は久しぶりにお父さんが帰つて来たんだもの。積もる話に、つい夜更かしをしちやつた……なんて、ありそつだもの。

「う、ごめんね。香代は秋庭くんの事が……そ、そのう……き、嫌い……だつたんだよね？」

「え？ いや『嫌い』とまでは……」

ん？ ナンか誤解してない？ べつ……別に『嫌い』とまでは行かないんだけど……

余程あたしの受け答えが好ましく思えなかつたのか、亜紀は少し困惑した顔をして、いつもの『遠慮がち』な言い方をした。

「でも、最近の秋庭くんの様子がなんだかおかしくて……お隣の香代なら何か家での事を知つているかもと思つたの」

「あたしが？」

あたしはいこやと首を横に振る。

「だつて秋庭くん、昨日も練習中に田村くんと話をしていく、キャラテンから叱られていたもの」

「はあ？」

練習中に田村くんと外周を走つていたから、何か遣らかしたのかなーと思つたら、そう言つ口トだつたのね。

「あの練習熱心な秋庭くんが、私語でキャプテンから叱られるだなんて……それに、何だかここ最近、元気が無いみたいに見えるから……」

「…………う？　あ、あたしには変わり無いように思えていたけどな」

亜紀の言葉にドキリとさせられてしまった。

慶のお母さんが入院して、昨日お父さんが帰つて来るまで独りで大変だったみたいだもの。だけど、その事を亜紀は全く知らないハズ。なのに、どうしてそこまで読み取つて心配出来るの？

あたしは亜紀が慶の事を、今でも本気で想つているのだと知つた。亜紀は真剣に想つているのだわ。でないと、事情を知つていても、しでさえ気付かなかつた慶の些細な変わり様を、こんなに敏感に感じ取れるはずが無いじやない。

そう思つたら、何故だか急に胸が熱くなり、眼の前がぼやけて見えた。

やつぱりあたしは……慶の単なる『幼馴染のお隣さん』でしか……ないのかなあ……

そんなもやもや感に囚われてしまつたあたしは、それ以上慶の事で亜紀と会話を続ける事が出来なくなつてしまつた。

後に続く授業も全然頭の中に入つて来ない。早く気分を切り替えてしまつかりしなくつちゃと思つのに、焦れば焦るほど亜紀の想いが

読み取れて余計に授業に集中出来ず、あたしは気分が晴れないまま授業を終えて、部室へと向かつた。

* *

♪・エ25543 | 316 ♪

「香代良い? 亜紀、準備出来た?」

手際が早い姫香が、ラケットを握つて立ち上がり、いつもの様に声を掛ける。

「うん」

「あ……うん」

あたしはテニスシューズを履き終え、亜紀はロッカーの扉を締めながら返事をした。

「でも、なんだか今日は静かだね」

「まだ誰もコートに来ていないのかな?」

亜紀の言葉に、姫香が答える。

普段は誰かが先に来て練習を始めているのに、この日は珍しくボールの弾む軽快な音も、コートを整備する一年生の声も聞こえては来なかつた。

「あたし達が一番乗りかな?」

「かもね？」

『一番乗つ』あたしが口にしたその言葉が受けたのが、姫香がふふっと含み笑いすると、つられてあたしも由紀もくすくす笑ってしまう。

そんなに早い時間でも無かったのに、まだ誰も来ていない午後のテニスコートに遭つて来るのは久し振りで、沈みがちだったあたしの気持ちをほんの少しだけ上向きにさせてくれた。

そのまま少しずつでも良いから、気持ちが晴れて行つてくれれば良いのにな……

そう思つていたのに、コートであたし達に背を向けてラケットを握つている独りの男子部員の姿を見付けてしまった。

相手側テニスコートのコーナー一か所には、サービスの練習の時に使用される赤いカラーボーンが置いてある。

「誰？」

「あ……」

姫香も由紀も、その誰かさんに気が付いたみたい。

『慶だわ』その言葉を口にせず、言い淀んでいると、由紀が『秋庭くんだわ』と小声で言った。

誰よりも一番乗りでコートに現れた慶は、独りでサービスの練習

をしている。

左手に軽く握ったボールを数回、手毬の様に突きながら相手コートを見詰め、これから放つサービスに集中しているらしく、グラウンドに現れたあたし達には気付いてはいないみたいだった。

ゆっくりとした慶の動作が弾んだボールを手にして、青い空へ小鳥を放つ様に投げ上げた瞬間、右手に握っていたラケットが大きく振り降ろされた。

ボールは鋭い音を立てて、相手側コートに置かれている赤いカラーコーン目掛けて、矢の様に吸い込まれる。

狙い澄ました慶のサービスは、見事サービスエリアの左側に置かれたカラーコーンを直撃した。

「……」

慶の正確且つ攻撃的なサービスを眼にして、あたしは思わず息を飲む。

男子部員の中でも『練習バカ』と言われているだけあって、慶のサービスは本当に模範的で綺麗なサービスだった。

暫く慶のサービスをじっくりと見る機会が無かつたけれど、少なくとも去年の新人戦の頃よりも、狙いもボールの速度も格段に上手くなっている。

「っしゃー！」

慶が今のサービスに満足したのか、左手を握つて小さく胸前でガツツポーズをした。

「ナイス・サーブ！」

亜紀のその一声で、あたしはハツと我に帰つた。

じつらを振り返つた慶の顔は、得意満面の笑みだった。

「遠藤わん、サンキュー。」

「あ、あのう……」

笑顔で応じた慶の返事に、亜紀は頬を赤らめる。

何か気の利いた言葉を掛けようとしているのか、それとも見詰められて頭の中が真っ白になつていいのか、亜紀は慶の視線に何か言いたそろにもじもじして、一層顔を赤らめて俯いてしまつた。

第76話 不機嫌な香代

『遠藤さん、サンキュー。』

慶の言葉に真っ赤になつて俯いていた亜紀は、少し『聞』を置いてから「ぐりと浅く頷いた。肩に掛けた亜紀の艶やかな黒髪がさらりと流れ、慶の言葉に対し快い返事をしたように見える。

「……」

二人の何気ない遣り取りが、急に羨ましく思えた。慶と亜紀の二人だけの世界が出来てしまい、あたしと姫香の存在が慶達から焼き消されてしまったように思えて切なくなる。

もしも……もしもあたしが、亜紀と同じ言葉を彼女より先に掛けたとしたら……慶は亜紀と同様、あたしにも笑つて応えてくれたのかしら？

会心の出来だつたサービスをあたし達に披露し、褒めてくれた亜紀に向かつて、自信満々の笑みを浮かべている慶に対し、あたしは何故だか素直に認める事が出来なかつた。

そうして次の瞬間、あたしは自分の存在を主張しようと焦る余り、剥きになつてどんな言葉を口にしてしまつ。

「なつ、なによ。あの程度のサービスぐりいで……ち、調子になんか乗らないでよね」

「ホント。なーにが『サンキュー』よ！ 格好付けちゃつてナルシ（

だわ。カラー「ーンに当たつたのつて偶然でしょ？」

ほのぼのとした二人の空氣を微塵に碎くよつな容赦の無い鋭い突つ込みを入れてしまい、俯いていた亜紀がそのままの姿勢で固まつたみたいに見えた。しかも、バレンタインの出来事以来『アンチ慶』に傾いている姫香が、あたしの肩を持つて追い討ちを掛けてくれたのだ。

けれども、そんなの……本当はちつとも嬉しくなんか……無い。
自分でも、どうしてそんな事を口走つてしまつたのか、そして、どうしてこんなに切なくなつて胸がきゅっと痛くなるのが判らなかつた。

「なーんだ。川村に香代。居たの？」

無愛想な慶の言葉に神経を逆撫でされてしまい、カツとなつたあたしは、荒れた心に火を灯されたみたいな気分になる。

「んな、ナニヨつ！ 影が薄いアンタから無視される覚えなんかな
いわつ！」

「はあ？ よく言つよ」

あたしの行き当たりばつたりの棄てゼリフに、慶が肩を聳やかして（軽く吹いた。そして右手に持つて居たラケットを大きく振りかざすと、慶はビシッと正面からあたしを指して、不敵に口端を歪めてニヤリと笑つた。

「香代、お前今、何も考えずに言つただろ？」

「な……」

「十分影が濃くって困っていますが……なにか?」

今まで思いも寄らなかつた慶の強い態度に、あたしは怯んで息を飲んだ。

まさか『あの』慶が言い返して来るだなんて……この、あたしに向かつて……

泣き虫で、いつもあたしの後ろを着いていた男の子だったのに、今の慶は、そんな昔の面影なんか全く無い。寧ろ、自信に満ち溢れて自分の意見をちゃんと口に出来る、少しばかり生意氣そつた男の子になつていた。

「う、うひひひひ！　あ、ああアンタなんか黙つてオタしてりゃいいのよー。」

「香代？　なに真っ赤になつてんだ？　ヘンだぞ？」

「んな、なな何言つてるのよー。アンタこそ変態だよー。」

「はあ？　『変態』つて……ナニ言つて……」

「馬鹿つー。」

興奮が限界を超えたのか、あたしは慶の言葉を鋭く遮ると、涙眼になつてキッと睨んだ。

あたし……どうしてこんなに怒っているの？ 慶だつて……なに冷静になつているのよ。普通、ここまで言われたら怒つて当然じゃないの？

なのに、慶は少しも怒つている様子を見せない。それが何故だか悔しかつた。

「行こう？ 香代、亜紀。アキバケイなんか放つておいて」

「……」

姫香があたしを宥めながら、慶の事を肩越しからジロリと睨む。

違う……違うのよ姫香。

おかしいのはあたしの方。だけど、慶と亜紀との雰囲気が良過ぎて、息が詰まりそうだった。友達としてなら一人の光景を微笑ましく思えるのかも知れない。なのにどうしても胸の中にモヤモヤとした『痞え』^{つか}が不快で、仕方無かつたんだもの。

『何しに来たんだよ？』……見上げた慶の顔は、あたしにやつてたげな表情を浮かべていたように見えた。

ああ、あたしつてば自己嫌悪……どうしてあんな事を言つちやつたのかしら。これで慶はあたしの事を、余計に嫌いになっちゃつたかも知れないわ……

どんよりと落ち込んでいたら、一階の教室の窓から、田直の松原さんが亜紀を呼び、亜紀はそのまま教室へ戻つて行つた。

亜紀の後ろ姿が校舎の陰で見えなくなつたのを見計りいつまつじて、姫香が徐に口を開く。

「香代、あなたも言つわねえ」

「え？」

「アキバケイの事、本当はやつぱり好きなんじょ？」

「そ、そんな……」

核心を突かれてしまい、あたしはどうすれば良いのか迷つて視線を左右に彷徨わせた。

「『そんな事無い』って言いたい？ ねえ、亜紀は今此処には居ないんだし、別にあたしが聞いたからって、後から亜紀に言つたりなんかしないわよ。だから正直に言つても大丈夫だよ」

「う……」

思わず自分の顔が強張つてしまつ。

姫香はあたし達三人の中で一番先に、田村くんと言つ男子と付き合つてゐる。此処で姫香が口にした『好き』という言葉は、もちろん恋愛感情での『好き』を意味している事くらい判る。

だけど、本当に慶の事が好きなのか判らない。幼馴染のあたしは、慶のお守役として見守つていたはずなのに……

「判らない」

「は？」

「よく……判らないの。自分の事なのに……おかしいよね？」

「うひうひ、またそりやつてはぐらかす」

「姫香！」アリヤだつたの？』

「うえい？』

矛先ほじなきを向けられて、今度は姫香が上擦あおりつた返事をする。

第76話 不機嫌な香代（後書き）

）ナルシ・・・ナルシスト。地域限定でしかこいつ言つ言つ方はしないかも知れません。（現在、中学生の息子達が使っています）

）聳^{そび}やかす・・・そびえるように、肩を高くいからせる。

第77話 きつかけ

> 26389 — 316 <

「ねえ、姫香は田村くんとのきつかけって……どんなの？」

クラス内だけじゃなく、部内でも姫香と田村くんとの仲は結構有名で、気が付いたらいつの間にかくつづいて居たって感じだった。

あたしも田村くんの事が気になっていたから、尚の事、親友の姫香に先を越されてしまったって言う感が強い。しかも、同じ部活で顔を突き合わせていたにも関わらず、このあたしが一人の仲を直ぐには気付けなかつたと言つ、悔しい想いをしちやつたんだから、今度は姫香が少しばかり困つちゃつても良いじゃない。

「きつかけ？」

「うん。 うう」

「きつかけ……ねえ……」

姫香は眼を細くして遠くを見詰め、田村くんと出逢つた頃の事を思い出していくように見えた。

でも、あたしが真剣な顔で姫香の顔を覗き込んでいる事に直ぐに気が付くと、いつも悪戯つ子みたいな眼をクリクリとさせてあたしを見詰めたかと思つたら……急に『ふー』って噴き出して笑い始める。

「な、なに？」

姫香の言葉をワクワクしながら待っていたせいか、彼女の笑顔に釣られてしまい、あたしもクスクスと笑い出す。

「あ、あのねえ、ふふつ、香代はきっとかけが無いと彼氏が出来ないつて思つてる？」

「え？ やうじやないの？」

「くくく……ふふつ、無いわよお。そんなの」

「ええ～？」

何だかガツカリ……だけビ、じゃあどうして姫香は田村くんと部内でも公認になつて居るワケ？ 絶対におかしいわよ。

「くすくす……な、なに笑いながら『ええ～？』なんていつによくすつ……器用な子ね」

「ふふふ……あによう。姫香だつて笑つてゐるじやない」

「うひ、これはあんたが……くくつ……真剣になつて……」

「うわあ～～～ん！ 人のせいにして笑いに巻き込まないでよ、もおーー お、お腹イタイ……」

「あやはは……」

姫香の笑いに誘われてしまい、あたしは真剣に話が出来なくなつ

てしまつた。眞面目に訊いているのに、どうして笑つて」まかそうとするのよ？ それとも本当に面白い質問をあたしがしちゃつたつて事なかしら？

「一人で一頃ひとときり笑うと、やがて姫香が口を割つた。

「でもまあ、きつかけって言われてみれば、そんな感じのシチュエーションはあつたのかなー？」

「あつたの？ なーんだ。やっぱりあるじゃない。んねえ、ねえ、教えて？」

「ん~、どうしようつかなあー」

「つて、そんな意地悪しないで教えてよお~」

思わず姫香の両肩を掴んで揺さぶる。

「そんな大袈裟な事じや無いのよ。話したつて詰まらないくらいの」

「でも訊きたあ~い」

「あたしも恭介（田村くん）と似た様な家庭環境だからね。なんとなく、他の子よりも空気が読めるつて
言つか……去年の夏休みの終わり頃、恭介が五日間連続で部活を休んだ日があつたでしょ？」

「ああ、確か弟くんが熱を出して、田村くんが看病していたんだよ
ね」

あたしは去年の夏休みの事を思い出した。

あの日……初日は連絡が無かったけど『暑いからサボったんだろう』ってみんなから言われて、誰も田村くんの事を心配してはいなかつた。事実、他にも両親の実家に遊びに行ったりして連絡が取れなかつた部員は何人も居たし、夏休み中に無断で部活を休んだからと言つて、それを酷く咎めるほど顧問の先生は厳しくは無かつた。

男子・女子ともに顧問の先生方は、どちらかと言えば部員の自発的な取り組みを評価するタイプだつたから。だから幽霊部員になつてしまつた八神くんの事も、除籍したりはしなかつたし、その事で男子部員との関係がぎこちなくなつてしまつたのだけれど……

「それまで恭介はずつと眞面目に練習来てたし、本人は前の日まで元気だつたからね。家で何かあつたのかな……つて」

「それで田村くんの家へ行つたの？」

「うんうう。で、恭介ん家へ様子を見に行つたら、やつぱり駿介くんが熱を出して寝込んでて、おまけに看病していた恭介もなんだか具合が悪そつだつたから」

「や、そう……」

田村くんの家庭が父子家庭なのは知つていた。弟さんが少しだけ病弱なのも。だけど、田村くん自身料理は得意だと自慢していたし、弟さんが寝込む事だつて今までに何度もあつたそつだから、別にあたし達が心配しなくても田村くんなら何とか乗り切れると思つていた。

でも、姫香は……そりじゃなかつたのね？

「最初あたしが来たのを知つて、恭介はびっくりしてや。『何で來たんだ？』って。でも、気になつて仕方が無かつたから……それにあたし、こう見えても料理は得意だから、恭介が治るまで勝手にご飯作りに行つてたの」

「勝手に……つて……」

「そう。勝手にね。でも、口では『迷惑を掛けのからしなくて良い』って言つていたけど、本心から言つてはいなかつたから、一人が元氣になるまで通つちやつた」

「はあ……お見舞い？ つて、それが……きつかけ？」

あたしには、姫香が強引に田村くんの自宅へ押し掛けて行つたみたいにしか聞こえなかつたんだけど……？

「うーん、だからつてワケじや無いわ。お見舞いに行つたから付き合い始めたとか、彼氏・彼女の間柄になれたつて『してくれた感』が強過ぎて、そんなの嬉しくないわよ」

姫香は、恩着せがましい事がきっかけで付き合い始めたのじや無いと言つた。確かにそれつて交換条件みたいで嫌だし、第一そんなの長続きなんかしないと思つ。

「じゃあ何よ？」

「放つて置けなくつて……なんとなく……かな？」

姫香はあたしから視線を逸らせると、頬をほつと紅くさせた。

「……」

『なんとなく』って、なに? 一体どういった意味なの?

あたしは、今まで見た事も無かつた姫香の照れた表情に、呆然としてしまった。

姫香、綺麗……

姫香って、普段ボーイッシュな感じが強いのだけど……。『みんなに女の子っぽくて綺麗だったかしら?』

「ねえ、香代は赤い糸って信じてる?」

姫香の横顔に見惚れいたら、にっこりと姫香が微笑みながら、左手を軽く握つて小指を立てて見せる。

「あ、赤い……糸?」

頭の中で何故か慶の顔がちらついて来て、自然と頬が熱くなるのが判る。

「うんそう。『この人ね』って、運命を感じる赤い糸。だからと言つて、別にその相手が自分の一生の結婚相手だ……なんて信じ込まない方が良いんだけどね」

「はあ？」

『運命の赤い糸』って、そもそも『やつひ言ひ相手』の事を差すのじやないの？

「だからさあ、『結婚相手』だとかつてそういう信じ込んでいたと、相手が重荷に感じて逃げちゃうって事なの。まあ、香代にはまだ判らなくて良いけど」

「えー、なにそれー？」

「自分と向かい合つて素直になれない口にせ、まだまだ『お子様』で居て貰いましょうねってコトなのよ～」

そう言つて、姫香は悪戯つ子みたいな笑顔を浮かべた。

第78話 香代の決心

「別にあたしと恭介が、お互いに『付き合おう』だなんて言ってなんかないわよ?」

「だったら……」

『どうしてみんなから認められているの?』と言いたかったけれども、姫香の穏やかな表情を見ていたら、聞くのがなんだか億劫おっくうに……と嘆なげつか、聞いちやいけないような気がした。

「今は『気が合っている』って言ひておくわ。恭介の考えそつな事がなんとなくだけど判るから」

「……」

相手の事がなんとなく判ると嘆なげのなら、あたしだって……と思つた。

だけどそれは昔の話。泣き虫で弱々しくて、いつもあたしの後ろを追いかけて付いていた、小さかつた頃の慶との話だわ。でもあたしはそんな慶との仲を、自分から断ち切つた。あの時は、どうしてあんな事をしてしまったのか、自分でもよく判らなかつたけれども……時間が経つた今のあたしなら、判るような気がする。

慶は友達から冷やかされても、何も言ひ返さず勝手に言わせていた。でも、あたしは慶とは違つていた。姫香達やクラスメイト……

周りから冷やかされたり、からかわれたりして、自分が辛くなってしまったから。

お隣で幼馴染だと叫うだけで……ただ、慶と気が合ひながらと叫うだけで、からかわれたりするのが恥ずかしくて嫌になつて……だからあたしは……

なのに、今のあたしは田村くんと仲が良い姫香がとても羨ましく思える。そして、もしも望みが叶うのならば、もう一度……慶と何の気負いも気兼ねもしないで、あたしらしく自然に振舞えるようになりたいと思つた。

あたしが余程思い詰めた顔をしていたように見えたのか、姫香が心配そうにあたしの顔を覗き込む。

「あのね？ 難しく考えてちゃダメだつて」

「え？」

「アキバケイ、お母さんが家に居るのに自炊していろらしくじやない。この前にキョウがアキバケイと一緒に外周ランさせられていたじゃない？ あれって、アキバケイから卵の調理方法を訊かれて、それに答えていてキャプテンに叱られたのだつて」

「……」

『「うん。お母さんは今入院していて、昨日お父さんが帰つて來たよ』と言いたかったけれど、慶のお父さんの事を話せば入院の事も話さなくつちやいけなくなると思つて、ぐつと言葉を飲み込んだ。

「アキバケイが料理に田覚めたのがどうかは知らないけど、晩御飯はカレーに肉じゃが、シチューのローテーションなんだって」

「それって……」

「わ、お肉に玉ねぎ、ジャガイモにニンジンって言ひ、お、んなじ食材。なんかさあ、メニューを聞いた時、あたしは呆れたわ。彼ら野菜が旬だからって、よくも飽きたりしないわよね」

「へ、へえ……わ、」

確かに、慶のお母さんが入院してからは、風向きの関係で慶の家の晩御飯の匂いがしていて、姫香が言っていた三品の匂いが口替わりで香っていた。

てっきり美咲姉さんが作り置きでもしているのかと思っていたのだけど、まさか慶が本当に自炊していただなんて……

想像していた以上に慶が苦労していた事実を聞かされて、あたしは何だか自分が情けなくなつた。お隣に住んでいるのに、こんなに近くに居るのに、慶の事を知らない……知らうともしなかつただなんて。

そんなのじゃダメに決まっているじゃない。仲の良かつた頃に戻りたいと思っていても、ただ想つているだけじゃ、そこから先へは絶対に進めない。だつたら、今なにをすれば良いのか……なにをすべきなのかが見えて来た気がした。

「でまあ、日頃のおかずには自由して飢えているアキバケイに、」

「で香代がちよつとした手作り料理を出す……つてどう？」

「あ、あたしが？」

「でなれや、誰が？ 三つを戻したいのじゃなかつたの？」

「あ……あたしは、そつ、そんな事……」

「『面つら無い』だなんて言わたくないわよ？ 照れないの。いやあんと顔に書いてあるんだからあ」

嬉しそうな姫香の言葉に、あたしは自分の顔がもの凄く熱くなつて行くのを感じ取つた。

* * *

『手作りの』……つて、一体どんなおかずを作れば良いのかな？

家に帰ると、早速あたしは自分の家の台所へ立つた。だけど何を作れば良いのか判らない。

あたしはお母さんが台所に置いている料理の本をパラパラと捲つてみた。料理の本に出ている出来上がりの写真は、どれもすくなく美味しそうだけど、上手に出来るかどうかの自信もえ無かつた。

恥ずかしいけれども、あたしの調理の腕はまだまだ未熟で、姫香や田村くんにはとうに及ばない。

姫香から、簡単なおかずなら慶が試しているはずだからと言われ、少し変わった食材や、特に季節の露地物が良いと言われたけど、冷蔵庫を開けてみても、中には特別これといった食材は見当たらなかつた。

そんなあたしが何気なく視線を移した先で眼にしたものは、昨日お母さんがご近所のおばさんから貰つた大きな筍が、勝手口の傍に置かれた新聞紙に包まれていた。

お母さんも、今日か明日には煮物にするのだと言つていたし、これなら旬の季節の野菜だわ。冷蔵庫には油揚げも入つてゐるし、丁度煮干しの良いのが手に入つたわつて言つていたから、お出汁の問題もクリア出来るわよね。

「えつと、確か筍の煮物は二十五ペーページ……なになに？ 筍は一・三枚皮を取り除き、縦に包丁で切れ目を入れて米ぬかと一緒に茹でます……『米ぬか』って、もしかしてこの袋の中身？」

新聞紙の中に筍と一緒に入つていた、小さなビニール袋を手に取つた。中には明るい黄土色をした粉みたいなものが入つている。

あたしは帰宅直後の疲れも忘れて、戴き物の筍を調理するのに夢中になつた。

「出来た……」

あたしは両手を後ろへ廻して、着馴れないエプロンの紐を解いた。

お鍋でコトコトと煮込んだ筍は、ほんのつとお醤油の色が染み込んで、良い色合いで出来上がったみたい。……だけど、筍の煮物だけでこんなにキッキンが汚れるものなのかしら？

あたしは雑然と散らかった台所から、思わず眼をそむけてしまった。

出来たての筍を小鍋に取り分けていると、立ち昇る湯気からは、甘いお醤油の香りがしてとても美味しそう。

なに？ あたしだって、やれば出来るじゃないの。

思っていた以上の出来栄えに満更でも無いあたしは、自然と頬がゆるんでしまう。

後は、顧問の先生に呼び出されて居残った慶が、家に帰つて来るのを待つばかりだわ。そう思つて、窓邊でお隣の慶の家を眺めたら、お隣のキッキンから明かりがこぼれているのに気が付いた。

誰かが帰つている。

きつと慶が帰つて来たのだわ。

お母さんが作ったキルト製の鍋掴みを手にすると、あたしは落さない様に小鍋の取つ手の部分をしつかりと握つた。

* * *

慶の家の門まで来ると、ドアに取り付けられているウエルカムベルの、金属特有の涼しそうな音が聞こえて、あたしに家の誰かが出て来た事を知らせてくれた。

訪ねて行つてゐるのに、向こうから出迎えられたような気がした。そして出て来た人影を眼にしたあたしの心臓が、ドキリと大きく脈打つ。

玄関の明かりに照らされて現れたのは、白いTシャツに着替えた慶の姿だった。だけど、今から何処かに出掛けのみたい。ドアに鍵を掛けると、鍵がきちんと掛かっているかどうかを、ノブを何度も捻つて確認している。

帰宅直後の慶の外出を予想していなかつたあたしは怯み、気後れしてしまつた。

慶は門の所で立ち止まつてゐるあたしに、まだ気が付いてはいなみたいで、自転車を出す心算なのか、あたしに背を向けて奥の倉

庫の方へさつと歩いて行く。

早く声を掛けないと、慶が何処かへ出掛けてしまつ……早く引き留めなくちゃ……

やう思えば思ひほど、焦つて声が出せなかつた。

だつて、周りにはあたしと慶しか居なかつたから。不思議な事に、二人つきりだと思うと、余計に足が竦んで身体が強張つてしまつ。以前は何でも気兼ね無くお互に話し掛けられる仲だつたのに。

落ち付けあたし！

自分に言い聞かせよつとすればするほど逆効果で、体中が熱くなつてしまつ。きっと、顔だつて凄く熱くなつてゐるから、真つ赤になつてゐるのだわ。相手はお隣の慶なのよ？ なのに、どうしてこんなに慶の事を強く意識してしまうのかしら？

立ち竦んだあたしは、慶の後ろ姿をじつと見詰めてしまつ。

そのまま慶が出て行つて、渡せ無くなつても良いの？

慶が出て行つても、家には美咲姉さんが居るかも知れないし、別に慶に直接渡せ無くとも……そう思いながら、慶が歩いて行く先にある空いた倉庫の中を覗くと、美咲姉さんの車は無かつた。

美咲姉さん、まだ帰つて来ていないのだわ。

選べる選択肢の中の一つが消えてしまい、あたしは更に焦つてしまつた。

また。

「ど、どう行くの？」

思い切って声を掛ける。

「え？ そりゃあコンビニへみりんを買ひに……ってええつ？」

いきなり背後から呼び止められた慶は、驚いて飛び上がった。そうして恐々肩越しに振り向く。

「か……香代？」

「んなつ、なによ？ も、そんなに驚かなくつたつて……い、いいじゃない」

慶の大袈裟過ぎる程のリアクションに、思わず吹き出しちゃうとなる。

「どうしたの？」

「あ、相変わらずアンタってＫＹだよね？」

お鍋を持って来ているのに、慶は気付いていないのかしら？ 急に今日の部活での出来事を思い出してしまい、あたしは少しだけ機嫌を損ねてつい、憎まれ口を叩いてしまう。

「悪かつたな。ＫＹで」

「……」

言い返して来た慶の声は、疲れのせいか少し掠れているように聞こえた。

無理も無いわ。今まで、家族を支えていたお母さんが入院して、急に居なくなっちゃったんだもの。家の事を任されていろんな眼に遭つた慶が、疲れていて当然なのかも知れないわ。

「何か用？」

慶がそう聞いて来た途端に、タイミング良く慶のお腹が自己主張して鳴つた。

もしかしたら、あたしが持つている小鍋に気が付いたのかも知れないわ。

「あっ、あの……」、「コレね……」

「それって『ウチ』へ『おばさんから』の差し入れ？」

「……」

慶の思わず一言に、あたしは小さく息を飲んだ。

軽い眩暈を起したのか、あたしはよろめきそうになつて左足を浅く引いた。

一瞬、慶の言葉が理解出来なかつたから。

だつて……」のお鍋の中には、あたしが……あたしが作った……

返事をしなかつたあたしを慶は訝り、顔を覗き込んで来る。

「あれ？ 違つたの？」

「あ？ エフ？ あ、ああ違わないわよ。そ、そう。これは家のお母さんから……だから……」

後は言葉にはならなかつた。胸に何かが込み上げて来て、息をするのが辛くなる。

慶の言葉を否定出来ずに、あたしは思わず調子を合わせて嘘を吐いてしまつた。

『あたしから……』っていつのは無し……なの？

残念だけど慶の頭の中には、差し入れイコール『うちのお母さんから』なのだと真っ直ぐ選択肢しか浮かんではくれなかつたみたい。で

も、今まであたしが慶に對して執つた態度を振り返れば……そう考
えてしまつのが当然なのかも知れないわ。

昔のように仲好くなれたとしても、『んな調子だつたら……他の
男子が慶と同じだったとしても、あたしあきつと平氣で許せると思
う。でも、慶は……慶がこのままなら、それはそれで辛い氣がする。
姫香の助言もあつて、勇氣を出してこんなことをしてみたけれど
も……やっぱり、今更……なのかなあ。

手にした小鍋の持ち手を、あたしは両手できゅうと強く握り締め
た。なんだか自分の努力が無になつてしまつたように思えて、悲し
くなつてしまつ。

やだ……なんだか涙が出て来そつ……

「？」

浅く俯いてしまつたあたしは、その様子を見て戸惑つてしまつた
慶の氣配が、肌を通して感じ取れた。

どうしよう……

慶があたしを見詰めていた……そつ意識してしまつと、頬がちり
ちりと火照つて来て、この場から逃げ出してしまつたくなつた。

「あははっ、や、やだなあ。ホントに……お母さんからなんだつて
努めて明るくそう言つと、あたしは自分でも不自然だと判るぐら
いにぎこちなく笑つた。

あたしが鍋のフタを取り、中身を慶に見せて『まうね？』と呟くと、それが筍の煮物だと知るや、慶の顔が明るくなる。

「うわあ、久し振りに別のおかずだあー」

「そっ、わうなの？」

慶はびっくり筍の煮物に感動してくれたみたい。毎日がカレーとシチューと肉じゃがと言っていた姫香の言葉は、どうやら本当だつたらしいわね。

「貰えるのなら遠慮無く貰つておくれよ。ありがと。後でおばさんにお礼を言つておくれよ。鍋は明日返したのでいいかな？」

「あ？ うん。それで……いいよ」

「よっしゃあー！ オカズ一品GEEトおー！」

差し出した小鍋をあたしのお母さんからの差し入れだと思つている慶は、慶は嬉しそうに受け取り、昔の面影が残つている無邪気な笑顔を浮かべた。

あたしとしては少々納得出来ないのだけれど……慶の笑顔を見ついて、否定して怒る気も、訂正する気さえも起こらないのは、それだけ慶が素直に喜んでくれたから……なのかな？

「なあ、香代はもういじ飯食べた？」

「え？」

思いも寄らない慶の言葉に、再び胸がドキリと脈打つた。

だけど、慶はそんなあたしの想いなんか、これっぽっちも気付いてはくれていみたい。

「まだだつたら、僕ン家で食べてく？ 在り合わせのものしか無いけど」

「あ、ああ、アンタ買い物に行くのじゃなかつたの？」

「すぐに戻つて来るよ。こここの所ずっと独りでご飯なんだ。話し相手になつてよ」

「は、話し……相手つて……」

いきなりな慶の提案に、あたしは大きく動搖した。こんな所をこの近所の誰かや通りすがりの人見られたりはしまいかと、急にソワソワと落ち着かなくなる。

『お、落ち着くのよ番代……廻りはもう真っ暗だし、顔なんか判るわけないんだから……ってなに考えているのよ。こんなに暗くなつてからの方が、他人から見られた時に誤解され易いのだつて』 そう自分に言い聞かせると、深深呼吸をしてみる。

慶が『ナニ遣つてんの？』と言わんばかりに首を捻る。拳動不審なあたしを見て、きっと今の慶の頭の中には、大きな疑問符が一杯飛び交っているのだわ。

「若しくは聞きたいことがあるつて言つか……この前、古典の授業

中に居眠りして失敗した僕を見て、泣きそうになつていなかつた？』

その言葉にハッとしたあたしは、息を詰めて慶を見上げた。そして少しだけ緊張してあたしの様子を窺つている慶と、視線が合う。

外灯に照らされた慶の顔には、泣き虫であたしの後ろをくつ付いていた頃の情けない面影は無かつた。もちろん、優しいおばさんの面影は今まで通りちゃんと引き継いでいたけれども。試合数も少なくて、馴れ合い状態だつたと言つても過言ではない小学校でのテニス部から一転。喻えペアでもライバル同士になり、他校との試合数も断然増えている中学校での練習は、甘えなんか微塵も見せずに真剣に取り組んで居た慶の表情を、良い意味でとても精悍な顔つきに変えていた。

『どうして僕を避けるんだ？

以前はそうじゃなかつた。何でも気兼ねなく話すことが出来ていたのに

どうして？』

言葉に出して言わなくとも、慶の澄んだ瞳があたしにさう問い合わせている。慶はあたしにその理由を聞きたがつていて。

だけど、今ここで喋る気にはならなかつた。第一、どうして慶に對して冷たくしてしまうのか、どうして慶と視線を合わせられなくなってしまったのか、あたし自分がよく判らないし、説明のしよう

が無いんだもの。

「僕、香代からシカトされたくないんだけどな」

「な、なんであたし?」

「え? ええと……それは……」

問い合わせ返したあたしに、今度は慶が口籠る。

『判り易くて『嘘』が吐けない娘……』

不意にあたしの頭の中には、去年の夏祭りに慶が口にした言葉が浮かぶ。そして、いつも慶を見守る様にして見詰めている暁紀の姿を思い出してしまう。

あたしは慶に対しても『嘘』を吐いてくる。なのに『こんなあたしに』『無視されたくない』……って……どうして?

慶は暁紀の事をもう何とも想つていらないのか?

「……なんですか?」

自分から言い出しておいて、その答えを有耶無耶にして問い合わせて来た慶にがっかりしてしまつ。その答えがあたしだって知りたかったのに……自分の気持ちの整理くらいちゃんとしてから言いなさいよ。

その……あたしもそり……なんだけど。

慶との会話から、これ以上一緒に居ても無駄のよつた気がした。やつぱり、あたし自身の心の整理が着かないし、居辛くなりそうな雰囲気を感じてしまつ。

あたしは持つて居た小鍋を、慶に向かつて無愛想に突き出した。

「はーっー、お鍋ー、明日家に持つて来て」

「香代?」

「や……氣安く呼ばないでよ。アンタなんか重いと仲良くなれないばいいじゃない! アタシ帰るー!」

あたしはやつぱりと、シンとしてソッポを向いた。

それがなけなしの強がりだって、判っていたのに。

「集合 つ！」

長谷川キャプテンの凜とした声がコートに響き、給水タイムを取つていたあたし達は急いで、キャプテンが立つて居るベンチ前へと駆け寄る。

キャプテンの隣には、顧問の岡先生が黒いクリップボードを手にして、なにかを書き込んでいる最中だった。

「先生、全員集まりました」

キャプテンの声を聞いた先生が、ボードから眼を上げると、集まつたあたし達を見廻した。

「今日から混合ダブルスの練習が入ります。グループを作るから、みんな、男子のコートへ移動して」

「ええ つ？」

『混合』と言う言葉を聞いて、大半の女子部員がざわめく。中には嬉しそうな顔をした部員もいたけれども、殆どの部員が嫌だと言わんばかりの表情を浮かべた。

もちろんあたしも不満組の中の一人。

「ふうん。先生も考えたわね」

「なにが？」

「もうすぐ県大会じゃない。他校との練習試合なんて中々都合がつかないからしきし。レベルアップを図りたいんでしょ？」「

「やうなの？」

「やつとやつだよ。だつて、男子には秋庭くんが居るんだもの」

姫香の推理に口を挟んだあたしは、亜紀の言葉にねじ伏せられる。

予想外の展開で上機嫌の亜紀とは対照的に、煩わしくなるくらい重いと感じる足を引き摺りながら、あたしはのろのろと男子コートへ向かった。

男子軟式テニス部は、女子部の去年の成績を照らし合わせると、残念ながらレベルが低い。女子は県大会総合で三位だけれど、男子は六位。去年、新人戦で強豪の東雲中学と善戦したけれども及ばなかつた慶の成績を含めたとしても……だ。

レベルが同等か、若しくは自分達よりも上ならば対戦する愉しみもあるのだろうけれど、成績上、明らかに差がついている男子部との練習だなんて、そもそも何のメリットがあるのかしらと思つてしまつ。

「ううん。これはもしかしながら、男子部員のメリットであつて、あたし達は単に男子の練習台になつてているのかも知れないわ……そういう思ひと、尚の事合同練習だなんて参加したくない。

何より、慶が居るんだもの。

あたしはこの時ほど自分が慶と同じテニス部員だと叫び事を後悔した事は無かつた。

だつて、昨日の煮物の件があつたばかりの……ようにもよつて次の日なんだもの。暫くは慶と顔を合わせたくないと思つていたのに。

慶に誤解されたまま、解く事さえしないで逃げ出す様に家へ帰つたあたし。誤解されて悔しかつたわけじゃない。慶の心に近付きそう……届きそうだとと思う度に、親友の亜紀の顔が浮かんで……どうしてもそれ以上近寄れなくなつてしまい、悲しくなつてしまつ。

あたし達が男子マートに向かつたのを合図に、男子の浅井キャプテンが部員を集める。

「えー、今日から混合ダブルスの練習をする。今日から時間の半分はその練習だ」

「え　　？」「？」

「混合マッチ？」

「ヤツタア！」

顧問の藤野先生がさう言つと、男子部員それぞれが贊否両論の反応を示す。

「女子だからって甘く見ていたら痛い田を見るぞ。練習でもトーナメント形式。試合だからその心算でいろよ?」

「ハイ!」

霸氣のある短い返事が帰つて来る。

女子部員の最後の方から付いて来たあたしなのに、男子部員の最前列に居た慶と視線が合つてしまい、あたしは思わずそっぽを向いた。

「お~お、男子はもつその気になっちゃってるのね」

拍子に、隣に居た姫香の横顔を見る事になったのだけど、姫香は自信ありげな眼力でもって、男子部員を挑発的に睨み付けながらそう言い、姫香の向こうで垂紀が恥ずかしそうに浅く俯いていた。

「いいなあ。俺も入りたかったなあ」

先週、自転車の事故で怪我をしてベンチ入りになってしまった門田くんが、羨ましそうにボソリと呟いた。

左足の靱帯を痛めたらしく、ぐるぐる巻きにされた白い包帯が痛々しい。

そう言えば、門田くんは慶のダブルスのペアだった事を思い出し

た。だけど、怪我の状態から、とてもじゃないけど県大会までに完治して、試合に参加出来そうには見えない。

必然的に、慶のペアが居なくなるのだけれど、先生はどうする心算なのかしら？

そんな事を考えていたら、名前を呼ばれた。

「土橋？ 居ないの？ 土橋？」

「あっ、ハイ！」

「呼ばれたら、すぐに返事をする」

「すみません」

イタタ……岡先生に怒られちゃったわ。

肩を竦めると、既に別のグループに行つた姫香から『ドンマイー』^{四.}と声を掛けられてしまつた。

「土橋はBチームに入つて……次、遠藤」

「はい」

「同じくBチーム。次、金子……」

先生の指す場所へ移動すると、すぐ後ろから亜紀が付いて來た。

「香代、同じチームだね？ 頑張りう」

「う、うん……」

嬉しそうな亜紀に対して、端っから気乗りしないあたしは、曖昧に言葉を濁してしまった。

「じゃあ、次は男子のグループ分けだ。浅井」

「ハイ！」

「Aチームだ。次、秋庭……」

「……」

慶に対する藤野先生の指示を聞いたあたしは、一瞬、自分の耳を疑つた。

頭の中が真っ白になつて時間が停まつてしまつ。

第82話 ダブルス…2

神様、あんまりだわ……よりこもよつてどうじてなの?

自分のグループに歩み寄った男子部員を見て、あたしは胸が張り裂けそうになつた。

「さやーー もうこれで勝つたも同然だよねー！」

自分達のグループに遣つて来た一年生の男子を見るなり、一年の女子一人が嬉しさを隠せずに、黄色い悲鳴を上げてその場でぴょんぴょん跳ねた。

亜紀も嬉しそうに微笑んでいる。

だけど、あたしは自分達のグループに遣つて来た慶と、眼を合わす事が出来ずに、ついそっぽを向いてしまつた。

慶も、あたしの様子を察したのか、努めて穏やかに『宜しく』と手短に挨拶をする。

「よろしくお願ひしますーー！」

「……します」

「……」

一年の女子一人の弾けるような明るい挨拶の後、続いて亜紀が恥

ずかしいのか慶と眼を合わせらず、ペニシリと大きくお時儀をする。

だけど、あたしはこの時、慶とは挨拶が出来なかつた。

自分でもカソジ悪いって事くらい判つてゐる。でも、今はどうしてもダメ。慶と視線を合わせたくないの。

慶はそんなあたしの態度に、少しばかり弱つていたみたいだつた。

あたしと慶はお互に居辛い空気になつてしまつてゐるのに、顧問の藤野先生はそんな事はお構いなしで、次々にメンバー割りを続けて行つた。

「Bチームつて、ここですよね？」

「あ？ うん。ここだよ」

「ヨツシャー！ アキバセンパイのグループ！」

「……」

彼のはしゃぎ様に、慶が言葉を失つてゐる。

あたし達のグループには、三人の一年生男子部員が振り分けられて來た。そして三人とも慶のグループだと知るや、優勝したも同然のような浮かれ方をした。

「僕が一番強いわけじゃないんだけどなあ……」

強いプレッシャーを感じたのか、慶が溜め息混じりに弱音を漏ら

した。

「ナニ言つてんすか。センパイ」

「そりですよ」

「センパイ、ガツツつすー！」

三人とも、慶の弱氣発言には全く退いてはいない。

なかなか心強い後輩が来てくれているじゃないの。

そう思つて感心してたら、偶然慶と視線が合つてしまつた。安心していた時だつたから、あたしは飛び上がりそうになり、慌ててそっぽを向いた。

「じゃあ、早速だけビペアを決めようか。先生が言つていたけど、ジャンケンでもアミダでもいいって事だし……」

グループでの自己紹介が先じゃないの？と思つたけれども、それはあたしの態度から紹介を見合わせてしまつたのかしら？

「はあーい！ アミダがイイでえーす」

「あ、じゃあ僕もソレで」

「うん、いいよ」

「俺も」

一年の鈴音ちゃんが片手を上げて発言すると、一年の男子はそれが異存なしだと同意する。

「一年の女子は？」

慶があたしと亜紀に振ったけれど、あたしはこんなし、亜紀だつて慶から呼び掛けられて恥ずかしいのか、俯いて黙つている。

それであつさりと決まつてしまつた。

地面に人数分の線を引き、男子と女子の名前を上下に分けて書く。そして各自がランダムに横棒を引いて、クジを完成させた。

一年生同士、二組が簡単に決まつてしまい、残つたのは、一年男子一人に、あたし達一年生の女子一人。そして最後に残つている慶だ。

「残つたのはこの四人だから、ワンペア決まればすぐだね」

「あ、ああ、アタシまだもう一本線を入れてなかつたわ！」

「え？」

あたしは素早く踵で、クジの中に一本の横棒を引いた。

慶は『何をするんだよ』とばかり、あたしを、見上げる。

だつて……仕方が無かったの。このまま何もしないでいれば、あたしは……あたしは慶とペアを組む事になつてしまふんだもの。

慶の事を想つてゐる亜紀が居るこのチームで、彼女を差し置いてあたしが慶と組むだなんて……そんなの、あたしが平氣で居られるハズが無いぢやない。それに……昨日の事だつてある。とにかく、今は慶とは顔を合わせたくないし、口だつて利きたくないの。

胸の中に大きな鉛の塊が入つてゐるみたいだつた。苦しくて、苦しくて……出来る事ならこのまま体調が優れないからとも先生に言つて、早退しようかとまで考えた。

「香代、香代が最後に引いた線のお陰で、あたし秋庭くんと組む事になつちゃつた」

「良かつたね」

「……うん」

慶とペアが組めると知つた亜紀は、もの凄く嬉しそう。彼女のその無邪気な笑顔のお陰で、あたしは早退案を頭の中で却下する事にした。

* * *

「あれ？ アキバケイ？ なんでお前が遠藤とくつ付いてンだ？」

「え？」

アウトゴートに現れた慶と亜紀の姿に、初戦の対戦相手になつた

田村くんが呆れて言った。

「お前なあー、なんで先生達が全員いじりや混ぜでダブルスをさせたのか判つてんのか?」

「え……?」

「お前なア、空氣読めよ。そんなに俺に勝ちたいのかよ?」

「い、いやそんなん心算じや……」

田村くんは、亜紀が慶の事を想つているのを知つてゐるのじゃ無かつたの? 彼が言つ『「いぢりや混ぜ』チームには、一年生同士がペアになつてはいけないだなんて、一言も言つていないので。

戸惑つている慶の傍で、亜紀がどんどん暗くなり、沈んで行くのが判つた。

田村くんは、黙つて俯いてしまつた亜紀をチラリと横目で盗み見ると、今度は慶に向かって不敵な顔をして笑つ。

「ま、けど……そのままでもいいぜ? 俺が軽く討ち取つて遣るからよ」

「あ、あの……わ、私……」

「遠藤さん、別に先生は同じ学年同士が駄目だつて言つていなから、気にする事は無いよ?」

慶の声に、亜紀が顔を上げる。

田村くんの挑発宣言に恐れを成したのか、亜紀の顔は今にも泣き出しそうだった。

「す……すみません。一年の後輩と……チョンジさせてください…」

「…」

『いつの亜紀は慶を独りコートに残して、すぐ傍の校舎に逃げ込んでしまった。

その場に居合わせた誰もが唖然とする。亜紀が交代をと言つたけど、ペアはもう既に決まっているし、慶だって今更他の子に換わって欲しいとは言い難いでしょうね。

「…」

『めんね……亜紀。』

あたし……あたし、もしかしたら余計な事をしちゃったのかな?

亜紀の直ぐ後を追い掛けようと思つた。けれども、こうなつてしまつた原因を作つてしまつたのはあたしなのだと畠負い目が在つて、この場から逃げ出す事も、亜紀を追い掛ける事も出来なくなつた。

「おー！ アキバケイ！ こちちはダブルスで、お前はシングルスつて……ど？」

「コートに独り取り残されてしまった慶に、田村くんが強気の発言をする。』

慶は少し迷つたみたいだつたけれども、黙つて事の成り行きを見守つていた藤野先生と視線を交わして、びくじしたものかとお伺いを立てているみたいだつた。

藤野先生が軽く頷くのを見た慶は、「一歩大きく踏み出した。

「うしやあー 田村あー」この勝負……受けて立つー

「おひー もうひなへつちやなー」

一人の遣り取りに興奮した部員全員が沸き立ち、大きなどよめきがコートを取り囲んだ。

第83話 シングルス VS ダブルス…1

三人がネットを挟んで中央に向かい合つて、慶と田村くんが一斉にあたしを見詰めた。

突然の視線に、あたしはドキリとせられる。

「土橋、審判して」

「ええ？ あ、あたし？」

「当たり前だろ？ 一年に審判させる気か？」

「う……わ、判つたわよ……」

慶の『』指名に驚いてあたしが訊き返すと、田村くんが『当然だ』とばかり強気で畳み込んだ。

亜紀が抜け出してしまった後、Bチームに残つた一年生はあたしと慶だけになつてしまい、あたしは審判を受け持つ事になつた。けれども、田村くんのチームには他に一年の男子も女子も居るのに…なんで二人とも揃つてあたしを指名してくるのよ？

ダブルス対シングルス……そもそもこのふざけた対戦に、審判が必要だなんて思わなかつたわ。

しかも、この異例のゲームは慶と田村くんの一組のチームだけじゃなく、コート空きで控えている他のチームや、試合を始めてしま

つたチームのメンバーまでが、興味津々であたし達に熱い視線を注いでいる。

遣り辛いったら……無いわ。

不満一杯のあたしは、三人が並んでいるネット傍にのろのろと歩み寄る。

来るのが遅かつたせいか、あたしの指示を待たずに、慶と田村くんの二人が勝手に先攻・後攻を決めるトスを行い、田村くんのチームが先攻になつた。

「サービスサイド、田村・川島組。レシーブサイド、秋庭。ファイブゲームマッチ、プレイボール」

あたしのコールに、どこからともなく拍手が起こり、拍手の連鎖が次々と起ころ。

慶も田村くんも、まさか本氣でこのゲームをする心算なのかしら

……？

あたしはコールしながら、三人の表情を見比べた。

二人の実力はそれほど大きく差があるわけじゃないけれど、やはり試合を冷静にこなして行く慶の方が、田村くんよりも強い。その実力は、去年の新人戦を前に怪我を負傷したにも拘らず『自主トレ』と称して、あたしと姫香が一人に呼び出された時に見て知っている。

だけど、幾ら慶の実力があるからと言つても、田村くんには地元のジュニアテニススクールに通つてている川島さんがペアでいるのに。

あたしは少しだけ不安を覚えて、軽快にスプリットステップを踏んでレシーブ体勢を構える、真剣な表情をした慶を見詰めた。

一年生の中では上位入賞を十分狙える実力の持ち主である川島さん。彼女はもしかしたら、二年生の女子よりも強いかも知れない。だけど、まだ彼女は気弱な面が残っていて、あと一息の押ししが出来ないでいる。亜紀とタイプが少し似ているかも知れないわと思った。彼女が目覚めて本気を出せば、かなりの戦力が期待出来る訳だけど……

田村くんの左手から白いボールが放たれる。

長身とパワーで力強く打ち込むサービスは速い。何度見ても迫力があつて凄いと思う。だけど慶は、その重くて速いボールが一旦コートでバウンドして、まだ十分に上がり切らない状態を狙い澄まして振り抜いた。

田村くんと並んで構えていた川田さんがセオリー通りに、彼のサービス直後前衛へ駆け寄ったけれども、彼女がそのポジションへ辿り着くよりも先に、慶の返球が彼女のすぐ右を抜き去った。

「さやー！」

堂々と二人の間を抜いたパツシングショットに、不意を衝かれた彼女が驚いて小さく悲鳴を上げる。

強烈なサービスを打った田村くんは、体勢を立て直すのが不十分だったせいか、慶の返球速度に追いつけない。

「ゼロ、ワン」

「いいぞー！ アキバ！」

「ホールを遠巻きに囲んだ部員達が歓声を上げる。

「ゼロ、ツー」

立て続けにリターンヒースを取つた慶は、田村くんペアをたちまちゼロ、スリーに追い込んだ。

「何だア、しつかりしろよ田村アー！」

「良いじト見せりよなー」

「情けねーぞー！」

たつた一人の慶に早くも追い込まれてしまつた田村くんペアへ、一年の男子達からヤジが飛ぶ。

「遣るな、アキバケイ」

田村くんの表情が強張つた。だけど直ぐに気を取り直したのか、先手を取られているにも関わらず、不敵な笑みを浮かべる。

慶は通常のペースでゲームをすれば、自分が不利になるとでも思つたのかしら。難しいタイミングのライジング返球で、田村くん達のタイミングを狂わせる戦術みたい。闇雲に田村くんの挑発に乗つ

たわけじゃなさそうだわ。慶なりに勝算があったから、このふざけたゲームを受けたのね。あたしが心配するまでも無かつたかしら…

…？

そう思つたのも束の間だつた。

川島さんが、早くも慶のタイミングを捕らえてポーチに出た。

球威に競り負けてしまい、青い空に向かつて高いロープが上がる。

「いいぞ！」

彼女のポーチに、周囲から歓声が起つた。

慶はボールをしっかりと眼で追いながら、素早く落下地点へ向かって走る。

ボールは左コートの隅を突いて落下して来るが、そこには既に慶がスマッシュの体勢で待ち受けている。

「あつ！ 止めてっ」

慶のスマッシュ姿勢を嫌つた田村くんが、情けない声を出した。

「田村くん、ふざけないで！」

「ヘイヘイ。今のは冗談……だつて」

審判として注意すると、田村くんがふざけた受け答えをする。

「来るぞー！」

「ー。」

慶がラケットを素早く振り抜くと、ボールは身構えている田村くんへ向かって、矢の様に飛んで行く。

だけど詰めが甘かったのか、それとも田村くん達を侮ってしまったのか……慶のスマッシュは、当たりが少し弱かった。

素早く反応したのはやはり川島さんだった。

さつきのリターンと同じくらい球足が速い慶のスマッシュを、積極的にポーチに出た彼女は、何とかラケットに当てる事が出来た。

ボールは彼女の差し出したフレームに当たって弾かれる。

再び高いロブが天に向かつて上がった。

第84話 シングルス VS ダブルス…2

ところが、慶はネット際まで詰めていて、このイレギュラーは予想外だつたみたい。

再びサービスラインまでダッシュで後退して、やつと追い付くけれども返球が甘くなる。

「戴きツ…」

余裕で待ち構えていた田村くんが一声吠えた。

ネットよりも高い打点位置で地面と平行にレベルスイングをして、素早く振り抜いた。

田村くんのリターンが、慶の左側を一直線に通過する。

殆ど回転^{ドライブ}を掛けずに強打した球足は速い。慶はボールに追い付けず、田村くん達への初ポイントを許してしまった。

「よつしゃあー！ ワンポイント！」

「ワン、スリー」

田村くんがラケットのシャフト部分を左手で握り締めて両手を上げた。自分達のゲームを見守っているみんなに向かって、気合を込めたガツツポーズを取つて見せる。

けれども、慶のシングルス対田村くん達のダブルスとでは、周囲

の応援エキサイト度もなんだか温度差があつたみたいだった。

ぱりぱりとしか出無い拍手に、田村くんは不満一杯の顔をした。

「はあ？ ナンだよこの応援は？ 士気が下がつまつだろ」

「まあまあ……」

文句を言ひ田村くんへ、対戦相手の慶が宥める。

ところが、この言動が田村くんは気に入らなかつたらしく、直情型の彼の闘争心を掻き立て、火を灯させてしまつたみたいだつた。

元々田村くんは身体が大きくて力が強い。彼のプレースタイルは、パワーで相手を打ち負かそうとするタイプ。

ライジングでのリターンを見切つた川島さんの援護もあつて、田村くんは慶を打ち負かそうと直球を仕掛けて挑んで来るけれど、慶だってみすみすポイントを落とす様な事はしない。

田村くんが何度もパワーで押し切つたとしても、慶は粘り強くボールを拾つてリターンする。

何度もネットの上を白いボールが矢の様に行き来して、息詰まる力強いラリーが続いたけれども、何度もかのインパクトの瞬間、ボールを腰の辺りまで引き寄せた慶が、ラケットを水平方向じゃなくて、やや上に向かつて振り抜くような変わつた打ち方をした。丁度飛行機が離陸するイメージに似ている。

勢いを殺されたボールがふんわりとしたロブになつたように見え

た。

待ち受けていた田村くんがリターンしようと大きくラケットをテイクバックして振り被つた時、ボールは彼の予測していた落下地点よりもネット寄りに急激な角度を付けて落ち、その次の瞬間、ボールは勢い良く高く跳ね上がる。

ボールがラケットのフェース面に当たったインパクトの瞬間に、慶がドライブを掛けたのが判つた。

「こーのー！」

前へダッシュした田村くんは、走り込みながらラケットを大きく薙ぎ払おうとしたけれども、ボールが地面を蹴るように高速バウンドした為か、彼のスイングは空振りする。

「あら？」

田村くんは勢いの余りコートに引っ繰り返つた。

「ゲーム・チエンジ・サイズ」

あたしはサイドとサーブスを交代するよつ、コールした。

「タイムー！」

川島さんが審判を務めているあたしに向かつてタイムを求める、あたしは両手を上げてコールする。

彼女はペアの田村くんの居る後衛へと駆け足で走り、彼に何かを

伝える。

あたしは、ワンゲームでもう息が上がってしまったらしい慶と田村くんとを交互に観察した。

二人とも凄い汗を搔いて肩で大きく息を弾ませているけれども、どちらかと言えばダブルスの田村くんの方が、シングルスで戦っている慶よりも消耗が激しいように見える。

田村くんには川島さんと言つペアが居るにも拘らず、彼女に任せるべきボールも自分一人が拾いに行つている。慶への返球も単調で、真っ直ぐのパワーショットしか返していなかつた。

どんなに力強いパワーショットでも、相手が返球出来る場所へ打てば、彼の力に打ち負かされない程度の返球力さえあれば、必ずリターン出来る。

噂で田村くんは試合ではなかなか決勝に残れないと聞いていたけれど、こんな戦術なら自分からスタミナ切れして自滅するでしょうに。

あたしは心の中でそつ眩いでしまつた。

ところが、次のゲームが始まつた途端、田村くんのプレイに変化が起つた。

さつきの川島さんが取つたタイムの時に、彼女から何かアドバイスを貰つたであろう事は、眼に見えて明らかだつた。

田村くんが川島さんと声を出し合つて、連携するよになつたのだ。しかも、返球はことじく慶の裏を搔くように見事に決まり始め、慶はシングルスの自分のコートを前後左右、余すところなく走らされてしまい、たちまちソーゲームを落としてしまつた。

「アキバー！ 根性出せ！」

「先輩！ ファイトおー！」

応援は自然と慶に集中し、大きな渦となつて試合中である他のチームや、近くで練習していた吹奏楽部、陸上部と言つた他の部からも注目を集め、彼等を巻き込む。

だけど、最初のゲームで田村くんとのパワー・ショット攻防戦が後を引いたらしく、シングルスで立ち向かう慶には、集中力が残つていなかつたみたいだつた。

田村くんの力強いランニングショットが、『決まれ！』とばかりに慶の足元すぐ後ろへ突き刺さり、慶は身動きさえ出来なかつた。

「ゲーム・セット。三対一で田村・川島ペアの勝ちです」

あたしのコールに、ゲームを見守っていたみんなから溜め息が漏れた。

初回の慶の善戦に期待していただけに、一方的な流れを絶つて自分の流れへと立て直せなかつた慶に軽く失望したみたい。

ネット越しに向かい合つた慶と田村くんペアがお互に頭を下げる。

「うひしゃー！　一回戦貰つたー！　アキバケイ、あんがとな」

「あ？　ああ……」

どんな試合でも勝ちは勝ち。慶に勝てたのが余程嬉しかったのか、田村くんは陽気に笑つてそう言つと、慶に握手を求めた。慶も田村くんのはつちゃけた喜びように多少退きはしたもの、少しだけ引き攣つた笑顔を浮かべて彼と握手する。

「良く遭つたぞー！」

「アキバケイ、ガンバー！」

ぱらぱらと周囲から拍手が起こり、その拍手はだんだん大きくなつて行く。

第85話 勇気をください！

「そつち、居た？」

「ううん、図書室には居なかつたよ」

慶と田村・川島ペアの大一番が始まる前、ゲームに出撃かつた姫香や一葉達一年の女子が先に手分けをして、居なくなつた亞紀を捜していた。

あたしは審判の務めを終えると、急いで姫香達が居る亞紀の捜索グループに合流する。

「おかしいわね……家にもまだ帰つていないし、居そうな所は他に思い付かないんだけど……」

「もう一度家の人に連絡してみたら？ もしかして、行き違いになつているかも知れないし……」

「もう一回も電話を掛けているのよ？ これ以上掛けたら、家の人もっと心配させちゃう」先に彼女を捜していた姫香は、苛々しながらあたしの提案を遮った。「大体、何が原因だったの？ 亞紀がどうして逃げ出したりしたの？」

「そ、それは……」

ゲームの審判をしていて、居なくなつた亞紀を直ぐに探し出せなかつたあたしは、姫香からきつい眼差しで睨まれて、思わず言葉を詰まらせた。

「最初のグループ分けからして、何か起こりそうだとは思つていたのよ。アキバケイに亜紀と香代。他にもグループがあるのに、よくもまあ一つのグループに三人が集まつてしまつたわね」

それはあたし達の責任じゃないし、一つのグループになつてしまつたあたし達の方が驚いていたくらいだもの。

「そうね。だけど文句ならグループ分けした先生に言つて欲しいわ」

取り敢えずの相槌を打つたけれど、姫香の言い様にムッとなつたあたしは、口を尖らせる。

「ねえ、何があつたの？」

首を巡らせて、周囲にあたし達一人しか居ない事を確認した姫香は、声を潜めて問い合わせた。

「実は……」

あたしはゲーム前のペアを決める時に遡り、姫香にはあたしが遭つたクジ引き操作の事は伏せて、事實を正直に話した。だけど、話し終えた後も姫香は釈然としない様子で、眉間に寄せてあたしの眼を見詰めた。

「本当に……それだけ？」

「え？…………う、うん…………」

在りのままを話したけれども、肝心な部分はあたしの胸の奥にし

まっている。それで負い目を感じたのか、あたしは姫香の眼を直視する事が出来なかつた。

だつて、みんなで一人一本ずつ線を引くルールだつたし、あたしは遅れて後から引いただけだから、誰もあたしを怪しいと疑つていなかつたもの。

誰もが慶とペアになりたいと思つていたみたいだつたし、クジに後から線を引いた後でも、あたしは慶とは組めなかつた。これが、あたしが線を後から引いた事であたしと慶がペアになつたのなら、みんながあたしの事を怪しいと疑うでしようけれど、慶とペアになつたのは亞紀だもの。誰もあたしが不正をしただなんて思つてなんかいないわよ。

クジ引き操作の件を話すのは余計だと思つた。けれども、姫香と二人つきりで向かい合つていると、何故かあたしの良心がチクチクと痛む。

きっとそれは、姫香があたしの本当の気持ちに、あたしよりも先に早く気が付いていたからだと思つた。

自分の本当の気持ちに整理が付いていないだなんて……あたしつて、なんでこう……情けないのかな。

同じ年なのに、お姉さんみたいに頼り甲斐がある姫香が羨ましく思えた。

「香代？」いや、ちゃんとあたしの眼を見なさいよ

「う、うん……」

居心地の悪さを感じたあたしに、姫香は落ち着いて……だけでも強制力のある強い口調でそう言って、あたしの顔を覗き込む。

「ほら、香代」いつ見て？」

「ん……」

姫香の顔を見上げたら、急に眼の廻りが熱くなつて、彼女の顔がぼやけて見えた。

試合中は審判に夢中だつたけど、今は亜紀に遭つてしまつた自分の行動が気になつて仕方が無い。

あたし、やっぱりあんな事……遣らなきゃ良かつたのかな？ 亜紀にとつて、あたしが遣つた事は、『大きなお世話』でしか無かつたのかしら？

あのまま線を引かず、あたしが慶とペアを組んでいたとしても、対戦相手の田村くんから指摘されていた筈。そして多分、あたしも亜紀と同様に慶とペアは組めないからと言い出して、辞退するに決まっているわ。もしかしたら冷やかされて、亜紀みたいに逃げ出してしまつたかも知れない。

あたしは自分の身代わりを亜紀にさせてしまつたのかも知れない。

亜紀に嫌な思いをさせてしまったのは……あたしなのだわ。

本当の事を話せば、姫香は怒り出すかも知れない。

『それで良いの?』……姫香は何度もあたしに助言してくれていたけれど、こんな事を話せば、絶交されてしまつかも知れない……そう思ひつと、怖くて足が震える。

自分に不利になる余計な事だから、話す必要なんか無いのよと言う気持ちと、たとえ嫌われる様な事になつたとしても、素直に話さなきやいけないと違う気持ちの板挟みになつてしまい、あたしの心は大きく揺れた。

「どうしたの?」

決められないと思つた時、姫香が優しい声で諭す様に声を掛けて来た。

姫香の声で、揺らいでいたあたしの心が大きく傾く。

他の子には話せ無くとも、姫香ならあたしの気持ちをあたしよりも理解してくれているもの。正直に話して胸の痞つがえを取り除きたかったし、話した事で姫香から非難されて嫌われても、仕方の無い状況なのだから諦めようと思つた。何より、友達に話せない事を、これから先ずっと背負つて行かなくてはならなくなる方が、あたしには重荷に感じる。

『香代? 嘘は吐いては駄目よ? 一つ吐くと、その嘘を隠そつとして、また嘘を吐いてしまつ。お母さんは、香代が嘘を吐くような子になつて欲しくはないわ……』姫香の優しい声を聞いて、小さかつた頃にお母さんからよく言われていた言葉を思い出した。

「うん?」

「姫香、あのね……」

もしかしたらこの事が原因で、一人の親友を失ってしまうかも知
れない。

神様、あたしに……勇気をください！

第86話 心の枷

「姫香、あのね……」

言えない……

それつきり、あたしの時間が停まってしまった。実際には、そんな事なんか在り得ないのだけれども……もしかしたら、小学生の頃からの友達を、この一瞬で一人も失つてしまつかもしないと思うと、口元が強張つてしまい言い出せない。

心の中で、どんなに神様にお願いしても、あと一歩を踏み出す勇気が湧いて来ない。

「どうしたの？ 香代？」

「……」

急に口を閉ざし俯いてしまったあたしを訝り、姫香があたしの顔に自分の顔を近付けて来た。姫香の澄んだ黒い瞳が、真っ直ぐにあたしの眼を見詰める。

「何か……あつたの？ ううん。あつたんだよね？ それって香代も関係してるんでしょ？ それで言い出せないの？」

「う……」

「怒らないから話してくれる？ もしかしたら、あたしの予想が当たっているかも知れないから」

「姫香……」

「大体、何年香代と付き合っていると思つているのよ。大丈夫。何が在つても絶対に怒らないから言つてみて？」

姫香から優しく諭されて、急に心中で堅く縛っていた紐が緩んだ気がした。

姫香は慶の事をずっと今でも想つている。その事を知つてゐるわたしは、自分が慶とペアになりそうだったから、亜紀と慶が組めるようにクジを操作したけれども、田村くんから指摘されて試合を放棄してしまったのだと素直に話した。

「そう……それで亜紀が居なくなっちゃったのね」

低いトーンでそつと話すあたしの言葉に、姫香は静かに耳を傾けてくれる。だけども、姫香の表情は、困つてゐるのか怒つてゐるのか、あたしにはよく判らなかつた。

彼女を信頼して總てを正直に話したあたしは、それでもまだ自分が喋つてしまつた事を、これで本当に良かつたのだろうか、言つてはいけなかつたのぢやないかしらと、寄せては返す波の様に揺れ動いてゐる。そして、あの時、もつと他に遭り様が無かつたのかしらとも思つた。冷静になつて考えれば、もう一度クジを引き直す方法だつてあつたかも知れないのに。

「あたし、大きなお世話を遣つちゃつたのかなあ……」

姫香に問い合わせたけれども、彼女からの即答は帰つて来なかつた。

彼女の沈黙が息苦しく感じられ、せつかく動き始めたあたしの時間が、再び止まりそうになる。

姫香の沈黙が、あたしには彼女の肯定に思えて……それが彼女から無言の非難を受けてしまつた気がして辛くなる。

だけど、本当の事なんだもの。

暫く姫香は黙り込み、遠い目をして何かを考え込んでいた様子だつたけれども、やがて縋る様なあたしの視線に気付いたのか、ふと表情を和らげた。

「香代……もう自分の気持ちに嘘を吐くの、止めない？」

「え？ 何のこ……」

「今までだつて、もう何度もあたしは言つているのよ？ 少しは成長しなさいよ」

「……」

言い掛けたあたしの言葉に被る様に、姫香は少し強い口調でそう言つた。

彼女が何を言いたいのかが直ぐに判り、あたしは軽く息を飲み、言葉を失う。

「あ？『ゴメン。言い方が悪かったわね。自分の気持ちにもっと素直になりなよ……って言えば良いのかな」

「す……素直だよ？」

だから、亜紀と慶がペアになる様に細工したんだもの。

「それは亜紀の気持ちを香代が知っていたからでしょ？ そうじやなくつて、香代の本当の気持ちなの。この先ずっと、亜紀の顔色を窺つて行く心算なの？」

「窺うだなんて、そんな……」

「あたしが亜紀だったら、そんな気を遣つてくれる方が却つて迷惑だわ」

「姫……香？」

「だつてそういうじゃない？ あたしにはモノ判りだもの。好きなんでしょう？ アキバケイの事」

「んな……」

身構える余裕も無い直球ストライクの姫香の言葉に、あたしは驚いて反論さえ出来ない。

「確かに、小学生の頃の『好き』と、今の『好き』は意味が少し違っているんだけど……ね。それでも香代はアキバケイが好きなんでしょう？ 隠したつて無駄なんだからね」

「なんで……？」

「そりゃあ友達だもの。ずっと傍に付いていれば、香代の考へている事くらい判るわよ。つこでに、あの単純鈍感なアキバケイも、亜紀じやなくて香代を見ているつて」。香代よりもブレてないよ。アキバケイは

「……」

「良い？ もうこれ以上あたしに語らせないでよねッ！ 親友想いはありがたいけど、自分の気持ちを抑えちゃって……最初はそんな心算じや無かつたのかも知れないでしそうけど、iji最近の香代を見ると……ああもう！ 傍から見ていて苛々するのよ。香代？ そんなのじやいつまで経つてもアンタは変われないよ？ 自分が幸せになれないのに、他人に幸せを押しつけようとしたりしないでよ」

勢いで一気に畳み掛けて来た姫香は、そう言つた後であたしに聞こえる様に『あ～スッキリした』と付け加える。

確かに、今のあたしは自分でも変だと思つ。だから、昔の頃のあたしに戻りたいと想つたりしたのかしら……？

「亜紀だつて、香代がアキバケイの事を好きだと知つている筈よ？ あの子、一見おつとりしてるけど、そんなに馬鹿じやないもの」

「姫香……」

「あたしを誰だと思っているの？』

姫香はそう言つて自分の胸をポンと叩いた。

姫香の言葉に励まされたあたしは、思わず心が緩んでしまった。めそめそする心算は無かつたのに、急に眼頭が熱くなつたと思つたら、顔を顰めていないのに大粒の涙がぽろぽろと毀れて、乾いた膝の上に滴り落ちる。

「まあ……最初は自分達の事ばかり考えて、香代の気持ちを踏み躡るような事をしちやつたから、こうなつちやつたんだよね。あたし達が悪いのもあつたんだけどさ」そして姫香は少し照れた。「……べつ、別に『鞍替え』したワケじゃないわよ？　たつ、たまたま恭介と気が合つちゃつたから。でも恭介と一緒にいると、なんだか香代と亜紀に申し訳ない気がしちやつてわ」

「どうして？　姫香は田村くんと上手く行つてゐるじゃない？」

「そりゃあまあ……でも『自分達だけが上手く行つてゐる』のつて、居心地が悪いものなのよ。しかも昔はあたしだつてアキバケイの事を想つていたんだし、他人事じやなかつたもの」

「やうなの？」

「『やうなの？』つて、香代、あんたねー」あたしの問い掛けるような視線を意識した姫香は、肩を落として呟いた。「まあ、確かに義理チヨンを多量に撒いて、本命を隠していたから、印象薄いのかもだけどねー」

姫香はやう言つて、手当たりしだいに男子を物色していた事を反

省するみたいに照れ笑いをする。

うん。知つてたよ。

口では知らなかつたような言い方をしたけれども、姫香が慶の事を意識していた事くらい判つてた。だけど、あたしは慶との……男の子との友情よりも、女の子同士の友情を大切にしたかつたの。いつまでもみんなと仲良じでいたかつたんだもの。

慶と距離を置いてしまつたきつかけは、姫香と重紀に冷やかされた感が強くて、つい反発して慶に冷たくしてしまつたから。けど、女の子同士なら、男の子には話せない事だつて相談出来るし……

そこまで考えると、あたしは何か違和感みたいなものを感じてしまった。だつて、今は慶と少し距離を置いてしまつたから喋れなくなつちやつたけれども、そうじやなかつたら……慶と距離を置かずには、昔のままの友達付き合いを続けていれば、心強い異性の相談相手になつてくれていたのかしら？ そんな疑問が湧き起つる。

あたしの中で、幼い慶との思い出がどんどん掘り起こされ、膨れ上がつて来た。

利き手を注意されて泣き出した慶を庇つて、先生に言い返したあたし。お遊戯会で突然台詞を忘れて半ベソを搔いてしまつた慶に、舞台の裾からすそ小声で教えてあげた事。夜店でヨーヨー風船や、金魚すくいが上手に出来なくて、一つも獲れなかつた慶の代わりに、慶の分まで獲つてあげた事……

て、どれを思い出しても、結局あたしが慶のフォローばかり遣つ

ていたのだったわ。

その慶が、暫く見ないうちに見違えるくらいしつかりして、今じや後輩から頼りにされちゃっているんだもの。

あたしは、少しだけ損な役を必然的にさせられちゃったのかしら？ そう思つと、なんだかガツカリしてしまつけれども、今のしつかり者の慶が居るのは、もしかしたら、あたしが慶と距離を置いたからなのかも知れないわ……とも思つのよね。

「ねえ、姫香」

「なに？」

「小さい頃の『好き』って、違つて来るものなの？」

「よく判らないけど、少なくともその『好き』が成長して行くに連れて細かく分かれてい行くでしょ？ だから男子の友達や、友達以上だけど彼氏未満の存在になつたり、彼氏になつたりするのじやないの？」

「彼氏……未満」

姫香の言葉が妙にあたしの心の中に響く。

「ああ、気にしなくても人それぞれだから

オウム返しに言つたあたしの言葉に、姫香は慌てて言葉を足した。

「『彼氏』って言えるのは、これは片一方だけがそう想つても駄目なのよ。相手の気持ちが在つての事だから……だから、アキバケイの事を亞紀がどんなに好きでも、あやつはちつとも亞紀に靡いていないでしょ？」

「慶の気持ちが……それがたしに向かつて言つの？」

「そうよ。だつて、アイツ、部活で暇さえあれば香代の事見ているんだもの。大バレだわ。単純つて言つか……判り易いのよ」

「ちょー！」

視界に映つた人の姿に、慌てて姫香の口を塞ごうとしたけれど、遅かつた。

偶然、あたし達が居た第三校舎の一階フロアへと階段を降りて来たのは、試合放棄して逃げ出した亞紀。何人もの部員が手分けして探していたのに中々探し出せなかつたのは、どうやら校舎の屋上に隠れていたらしい。

泣き腫らして真っ赤になつた亞紀の顔が痛々しく見える。

「……」

姫香も亞紀の姿を見て、しまつたと言つ顔をした。

亞紀は一言も喋らずにあたし達から顔を逸らせると、女子の部室へ向かつて走り去る。

「どうしようつ……こ、今の話、聞かれちゃつた

「仕方が無いわよ。遅かれ早かれ、こうなる事は判っていたんだもの。亞紀だつてもつと前から判つていたはずよ？」

「そんな……」

慌てるあたしとは対照的に、姫香は意外と冷静に落ち着いている。

「香代、待つて！」

追い掛けようとしたあたしを、姫香が腕を掴んで引き戻す。
「だからって……」

「香代、あんたね、その八方美人なトコロは止しなさいって言つて
るの」

「そんな事ない！」

あたしはきつぱりと言ひ捨てて、姫香の手を振り払つた。

姫香に言われなくとも……他の誰かから言われなくとも、あたし
はもう自分の気持ちに気付いていた。

以前の様に、慶と普通と一緒に居られて、普通に会話をしたいと
そう願つていた事に気付いた時点で。

今更どうして慶の事が気になつて仕方が無いのかを考えれば、答
えはたつた一つに行き当たるもの。だけど、友達の亞紀の切ない想
いを知つていたあたしには、彼女の気持ちを踏み付けるような事は

出来なかつた。亞紀だつて、大切なあたしの友達なんだもの。

「亜紀……」

彼女は体操服姿のまま、慌ただしくロッカーの中に入れていた制服と荷物を引き出し、それを両腕で抱えると、入り口ドアの所で突つ立つていたあたしを無視して、逃げるよう部室から出て行こうとした。

「亜紀、待つて！」

彼女を引き留めようとしたけれど、続く言葉が出て来ない。

一瞬、呼ばれた亜紀が踏みどどまつて顔を上げ、あたしと視線が合つた。

つぶらな眼に今にも溢れてしまいそうな涙を一杯に溜め込んだ、そんな亜紀の顔を見た瞬間、あたしはハッと息を飲み、言葉を失くしてしまった。

『アイツ、部活で暇さえあれば香代の事見ているんだもの』

頭の中で、姫香がわざと言つた言葉が鮮明に蘇る。

姫香からあんな事を言われてしまったのだもの。あたしだって予期していなかつた言葉だつたし、『靡かない』だなんて言われた亜紀にどうては尚更ショックだつたと思つ。必死になつて涙を堪えているのに、それをあたしが引き留めるのは気が引けたし、今はそつ

とじてあげなくちゃいけないのだと思った。

「……」めん、亜紀……あの……

あああ、そりじゃないわよ。なんでこんな時にあたしは謝つたりしているの？

彼女の涙を見た瞬間、勝手に口が動いた。それは今まであたしが薄々自分の本当の気持ちを知りながら自分にずっと嘘を吐いて、亜紀や姫香達を騙していたからなのかも知れない。

だけど、仲良くしてくれている彼女達から、進んで笑顔を奪う様な真似はしたくなかった。結果としていつまでもウジウジしてしまい、姫香や亜紀を混乱させてしまったけど……

『もひ、終わりなんかじや……ないよね？　だつて、あたし達……あたし達友達なんだもん！』そう口に出して言えれば良かつたのかも知れない。でも、あたしは何も言えなかつた。何か気の利いた言葉を掛けてあげたいと思つたのに、何も……

「……」

亜紀はあたしの縋る様な視線を振り切ると、そのまま部屋から走つて出て行つてしまつた。

「香代？　亜紀は？」

遅ればせながら姫香があたしに追い付いた。

姫香は何も起こらなかつたように、努めて冷静に声を掛けてくれる。だけど、それは姫香が気を利かせてわざとそんな態度を取つてくれていたのだと判つた。遅れて来たのも、多分あたしと亞紀を二人っきりにする為に時間を稼いでくれていたからなのだわと思つた。

「……」

肩を落として頃垂れたあたしは、姫香の声に反応してゆっくじと首を横に振る。

「帰っちゃつたのかあ……まあ、聞かれちゃつたのはマズかつたし、本人はショックだらうから仕方無いわよね」

「そんな言い方止めてよ

「いめん」

あたしは亞紀を引き留める事が出来なくて、自分でもどうしようも無いくらい苛々していた。彼女はあたしに氣を遣つてそう言つてくれたのに。姫香に当たるだなんてお門違いだつて判つてる。

判つてるのに……

悪いのはあたしだ。

姫香が慶の事をあんな所で言い出したから、偶然亞紀に聞かれてしまつた。だけどその話題だつて、大元を連れれば……いい加減で曖昧な態度を取つていたあたしがいつまでも自分の気持ちをはぐらかしていたからなんだもの。

いつもは二人で一緒に居たけれど、さつきは亜紀が丁度居なくて二人っきりになれたから、それとなく姫香が忠告してくれていたのに、あたしが気付かない振りをしていたから……ううん、それはもつとずっと前からだつた。だけどあたしは素直になれなくて……

どうしよう。亜紀、きっと怒っているんだろうな。

今まで慶の事を一筋に想い続けていたんだもの。それをあんな風に姫香から言い切られて……あんな事を聞かされれば、誰だつて自分が引き立て役だわと思つてしまふわよ。あたしが亜紀の立場だったら、その場で怒り出すかも知れないわ。

亜紀が先に帰つてしまつた後、あたしと姫香は亜紀を捜してくれていた他の子達と「一トベ戻り、いつも通りのメニューを淡々となしてその日の練習は終つた。

ああ、明日から亜紀にどんな顔をして会えば良いのか判らなくなつたわ。

あたしは沈んでしまつた気持ちと同じく、重い足取りで帰宅の途に就いた。途中まで姫香や一葉達と一緒にたけれど、みんな亜紀の事を心配しているみたいで、誰もが重く口を開かてしまい沈んだ気持ちが益々沈んでしまつた。

ふと空を見上げると、明るい空に霞みが掛かつた白い月がぼんやり

* *

りと浮かんでいる。

お天気予報のテレビでは、日本列島に梅雨前線が近付いて来ていると言つていただけあって、流石に今日は湿度が高くて蒸し暑い。

見上げた視線を左下に落とすと、もつお隣の慶の家が眼の前に見える所まで帰つて来ていた。

あたしの家は、住宅街を地区別けされる広い通りから一軒飛ばしてその奥に建つていて、飛ばして通り過ぎた一軒が慶の家で、あたしは家に辿り着く為には必然的に慶の家を廻り込まないと帰れない。

慶のお母さんが入院してからと言うもの、美咲姉さんが早く帰宅する事は無かつたらしくて、うちと同じく慶の家もいつも電気が消えて暗くなつっていた。

あたしにはそれが凄く不自然に思えて仕方なかつた。慶の家の明かりは点いているのが当たり前。慶のお母さんが居て、それが当たり前だと思つていたから。

ところが、今日はもう明かりが灯つていた。

確か慶は先生に呼ばれて居残つていたから、あたしよりも先に帰つたりするはずは無いのだけれど……と思つたら、駐車場に大きな黒いバイクが停めてある。

そのバイクは、普段あたしが眼にする『原付バイク』とは大きさもデザインも全く違つていた。

慶のお父さんも美咲姉さんも車だし、一体誰がこんな大きなバイクに乗つて来たのかしら？

見慣れないバイクを眼にして、あたしは少しだけ不安になり怖くなってしまった。

慶の家からいつもとは違う雰囲気を感じたあたしは、自宅に辿り着いた時も驚いてしまった。だって、いつもならあたしが一番最初に家に帰つて来るのに、慶の家と同様に家の電気が点いているるもの。

「ただいまー」

「お帰り」

「どうしたの？ 今日」

あたしを迎えてくれたお母さんは、余所行きのスース姿に着替えていた。

「会社の人人が事故に遭つたの。カブでお得意様を廻つていて、その
帰りにね」

悩んでいたあたしは、事故の話を聞いてしまい悪い予感に襲われ
た。

これは良く無い前兆かもしけないわと思つて顔を強張らせると、
あたしの顔を見たお母さんが、ふと表情を和らげる。

「大丈夫よ。カブは酷く壊れちゃつたらしいけど、本人の意識はし
っかりあるそうだから。会社へ『心配しないで』って連絡があつた
そうだもの。でも、お母さんはその人にいつもお世話になつて
る。だから、これからお見舞いに行くね」

「カブつて？」

「ああ、銀行や郵便局の人人が乗つているビジネスバイクよ。お得意
様を訪ねて行くには必要だから。でもね、乗る人がどんなに安全運
転をしていても、事故に巻き込まれてしまう事だつてあるわ。それ
は車やバイクだけじゃなくて、徒步で登下校している香代だつてそ
うなのよ。お母さん、本当はいつも香代が無事に学校から帰つて來
るように、心の中で祈つているんだから」

「あ、あたしなら大丈夫よ」

急にあたしに話を振られて、気恥しくなつた。

無事に学校から帰つて来ているのかを、毎日心配してお祈りしてくれているだなんて……そんな事、あたしは思い付きさえしなかつたもの。毎日無事に帰つて来るのが当たり前だと想っていたし、お母さんだってそれが当然だと思つていていたから。

普段口にしない言葉をお母さんが言つた事で、得体の知れない不安に汹んでいたあたしの心が少しだけ温かくなつた気がした。

「どうかしたの？」

「え？　「へ、ひひ」と。それでいつもより早く帰つたのね？」

本当はお母さんに、姫紀との事を相談に乗つて貰いたかった。だけど、お母さんだって今は大変なんだからと、自分に言い聞かせる事にする。

「そうよ。だからお留守番宜しくね。九時頃にはお父さんが帰るそうだから」

「判つた」

出掛けの為の身支度をしているお母さんを一階に残して、あたしは一階の自分の部屋へ階段をのそのそと上がつて行つた。

あたしの事を気遣つてくれているお母さんの心を知つて嬉しくなり、あたしの気持ちが少しだけ軽くなつても、それだけでは気分が晴れたりはしなかつた。

やつぱりあたしは姫紀の事が気になつて仕方が無い。でも、どん

なに心から謝つても、きっと亜紀は許してはくれないだろ?と思つた。もしかしたら、テニス部も辞めてしまうかも知れない。

だつて、亜紀は表向きには『積極性を持ちたいから』って言つていたけど、本当は慶が軟式テニスをしているから、慶に少しでも近付きたいと思つて入部したんだもの。

元々肌の色が白くて、他の女の子よりも運動オーナーな所があつた亜紀だつたけれども、一生懸命練習には参加したし、地元の短期間テニススクールがあると聞けば、可能な限り参加していくそう。その甲斐あって、今では部員の女の子とほぼ同じレベルになつていて。日焼け止めでも庇い切れない日差しのお陰で、白い肌は真っ赤に日焼けしていくいつも痛そうだつたけれども、それだけ亜紀が熱心に練習していたからなのだと判る。

反射神経は他の子達より少しばかり^{おぼつか}覚束なくとも、彼女は常に冷静に試合の流れと対戦相手の癖や性格を素早く読み取り、分析する力が優れている。どちらかと言えば心理戦に強い。ミニゲームを遣つても、相手に簡単には勝ちを譲らない粘り強いゲームをするタイプで、見習つべき所が沢山ある。あたし達女子部に居て貰いたいタイプの部員だし、もちろんあたしにはかけがえの無い大切な友達。

なのに、なのに……

あたしは亜紀に部活を辞めるよう、仕向けてしまつたのかも知れない……

どうしよう……大切な友達を、傷付けちゃつた……

居た堪れないほどの罪悪感を覚えて、苦しい想いが込み上げて来

る。

あたしは手にしていたカバンをベッドの上に放り投げると、そのまま自分の身体をベッドの上に投げ出して、何も無い天井を見詰めた。

「ああ、それから、慶ちゃんのお母さん、明日の午後に手術をするやつよ」

一階に上がったあたしに聞こえた通り、お母さんは声を張り上げる。

あたしは驚いて半身をがばっと起しきす。

「連絡、あつたの？」

「ええ。明日は仕事を抜けられない用があつて、どうしても休めない。仕事が終わればその足で慶ちゃんのお母さんの所へ行く心算だから、遅くなるわ」

その後でお母さんは『一日も続けて帰りが遅くなつて悪いわね』と付け加えた。でも場合が場合だもの。お母さんがお世話になつていた人のお見舞いに行くのも、慶のお母さんの様子が気になつて遅くなるのも仕方が無いわ。

「判つた」

いつもなら『遅くなる』イコールあたしの不満や文句だったのに、素直に返事をしたあたしに対して、お母さんは少し驚いていたみた

いだつた。

「お所に番代とお父さんの分のお弁当を貰つて来ているから……それで良い?」

「うん」

だつて、もう貰つて来てこらのじょう? 良いも悪いも無いわ。お母さんだつて、自分の支度で忙しいのに。『飯を作つている暇なんて無いでしょ?』、ちゃんとした理由があるのなら、あたしだつて晩ご飯くらいい……もう小学生じゃないんだから。うつとしたおかげだつて出来るし、電子レンジのお世話やコンベーのお弁当の世話だつて仕方ないもの。平氣よ。

……慶にあげた筈の煮物は失敗しちやつたけど……ね。

「じゃあ、行くね」

その声は、あたしの返事に安心してくれたみたいだつた。

お母さんが玄関で靴を履いている配がする。

「あ、お母さん」

ふと、慶の庭の駐車場に停めてあつたバイクの事が気になつて、先に帰つていたお母さんがお隣の事で何か知つていなかと思つ、急いで階段を駆け降りた。

「どうしたの? 急に降りて来て」

「あ、ねえ、お隣に停めているバイクって、美咲姉さんの？」

「違うわよ。美咲ちゃんの彼氏のでしょ？ なに言っているの。美咲ちゃんはあんな大きなバイクの免許は持っていないわよ」

「あ……そなんだ」

「じゃあ、今度こそ行くから」

「うん。行つてらっしゃい」

お母さんから、お隣の大きなバイクの持ち主が美咲姉さんの彼氏だと聞かされて、内心ホッとした。同時に、お母さんが口にした『彼氏』と言つ言葉が妙に心の奥に引っ掛かる。

「おととし、昨年、美咲姉さんから好きな男の人が出来たのだと聞いていた。でも、あの時は確かまだ、美咲姉さんの一方的な片想いだつて言つていたけれど、その片想いのお相手が、もしかしてあのバイクの持ち主のかしら……？」

あたしとしては、そつであつて欲しいなと思つた。

第90話 お隣の窓

一階にあるあたしの部屋の窓を開けると、眼の前には美咲姉さんの部屋があつて、その奥に慶の部屋がある。でも、確かすつと前：お隣の慶の家族が引っ越して来てまだ間もなかつた頃、今の美咲姉さんの部屋が慶の部屋だつた。

新しく出来たお隣さんのお友達に、お互いが嬉しくなつて、いつまでも窓を開けて話し込んでいたつけ……

幼稚園の先生が、先生の集まる部屋にあるストーブで焼き芋をwoffて食べていた事とか、園内の小さな池に園長先生が落つこちそうになつたのを見てしまつたとか、『近所で飼われている三毛猫が赤ちゃんを産んだとか……同じ組なのに、あたしが知らなかつた事や、慶が知らなかつた事……そんな他愛もない発見や出来事を、毎日飽きもせずにこの窓を通して話していたのだわ。

だけど、いつの間にかお隣の部屋には見慣れた青いカーテンからピンク色のカーテンに 美咲姉さんの部屋に変わつていた。いつもなら窓を開けてあたしが声を掛ければ、慶が自分の部屋から顔を出してくれていたのに。

あたしが亜紀や姫香と出逢つて慶に冷たくし始めたのも、確かに頃だつたと思つ。

気になつてお母さんに尋ねたら、慶が自分から部屋を交換して欲しいと美咲姉さんに頼んだのだそつ。お母さんは、直接慶から部屋を替えて貰つた理由を聞いたわけじゃないけれども、慶は男の子だから、そんなにいつまでもお隣同士で居るのが嫌と言つたが、気恥し

くなってしまったのじゃないかしりと言っていた。

確かに、あたしだって慶と付き合っていると誤解されて妙な噂をされたし、嫌な想いも一杯した。今思えば、そんな嫌な想いをしていたのは本当にあたし一人だったのかしら？ もしかしたら、慶だって男子からあたしと同じ眼に遭わされていたのかも知れない。もし、そうだったとしたら、嫌な眼に遭うのがこの世の中にあたし一人つきりで、あたしはなんて不幸なんだろう……だなんて、独りで悲劇のヒロインを演じてしまった。

だつて、慶は何にも言わなかつたし……

「……」

「うん。慶は『言わなかつた』のじゃない。『言えなかつた』んだ。あたしよりも内氣で大人しい慶が、廻りから冷やかされて嫌な想いをしたつて事を直接あたしに言つて傷付けるような事なんか……するような子じやないもの。

何気なく落した視線の先には、白いシャツと学生ズボンを穿いた慶が家の門の外に立つていて、こちらを見上げていた。

辺りはもう薄暗くなつていて、そこに居るのが慶だと判るのに数分掛つた。いつから慶がそこに居てあたしを見ていたのか、それさえも判らない。ただ、慶があたしを見ていた事実だけは理解出来た。

「や……やあ、香代早かつたね」

「な、なに言つてるの？ 先に女子が帰つたの知つてるでしょ？」

慶の事を想つていった時に現れた本人と、予想以上に噛み合わなくて余所々しい慶の会話に居心地が悪くなつてしまい、あたしは思わずその場から逃げ出そつとして、開けていた窓の縁に手を掛けた。

「あ、待つて！」

「？」

急に声を上げた慶に驚いて、あたしの動きが止まる。

「あの、そつその……」

「なに？ 言いたい事があるのならハツキリ言つて

「……その……」

引き留めておきながら、もじもじして煮え切らない慶を見ているうちに、あたしの苛々が大きくなる。

『もつこれ以上引き留めないで』と口にしようとした時だった。

「あのひ、ひひ、ひの間の箇……あつ、ありがとひ」

「……」

『箇』と聞いた瞬間、あたしの時間が止まつた。

慶はあたしの様子を気遣つてか、妙にじりもつている。それでも何とかあたしにお礼を伝えようと努力してくれているのが痛いくらいあたしには判つた。

一生懸命作つた心算だったのに、あの後家で食べた筍の煮物はお母さんから特に不評で調理方法を厳重に注意されてしまった……あたしにとつては失敗作。汚点だと言つても過言じや無いモノなのよ？

なのに、それを『ありがと』だなんて……言つてくれるだなんて。

「まだお礼を香代に言つてなかつたから……あれ、香代が作つてくれたんだよね？あの時は『おばさんが作った』ってこっちが勝手に誤解しちゃつて……その……』めん」

「な……な……なにを言い出すのよ」

「でも、嬉しかつたよ。ありがと」

やつとお礼が言えて肩の荷が降りたらしい。それまで言い難そつた慶がにっこりと微笑んだ。そして自宅の門を開けて家の中へと消えて行く。途中、あたしと同じく庭に停めてある黒いバイクを眼にして少し驚いた様子だつた。

『ありがと』

そう言って笑つた慶の笑顔が、あたしの脳裏に蘇つた幼かつた頃の慶の笑顔とダブつて見えた。

身体は大きくなつてしまつたけれども、慶の心は昔と変わつてい

ないわと思つた。素直で不器用で何かが付きそうなくらいに正直で

……

慶にあたしが作ったって事がばれてしまつた。つて言つよりも、その日のうちに慶が勝手に誤解しかやつたって事を知つちやつたでしょ？」。

失敗作をあげた事を再び思い出してしまい、その上お礼を言われてしまつたあたしは、猛烈に恥ずかしくなつた。両頬から火が出そなぐらいもの凄く熱い。

この恥ずかしい気持ちは、失敗作の出来事を思い出してしまつたから？ それとも慶からお礼を言つて貰えたから？ どっちなのかしら？

その日、お隣に停めてあつたバイクが帰る事はなかつた。次の日の朝、起きてお隣の庭を覗き込んだあたしは、一晩中停まつていた黒いバイクの事が気になつて仕方が無い。

ああ、亞紀の事だつてまだ全然解決出来ていないし、今日は慶のお母さんの手術が午後にあるつて言つのに……考えが纏まらないわ。

第91話 誤解

あたしは亜紀ひびんな顔をして会えば良いのか判らないまま、と
いつ次の日の朝を迎ってしまった。

一晩中、亜紀の事が気になり、そしてお隣の慶や手術を受ける慶
のお母さんの事や、お隣の駐車場に停めていた黒いバイクの事が気
になつて、夢現ゆめうつにあれこれと浮かんでは消え、消えては浮かびして
しまい、あたしは殆ど眠る事が出来なかつた。

昨日の出来事が、本当はみんな夢だったのなら良かつたのにとさ
え願つてしまつ。そうだったのなら、あたしはいつもと変わらない
穏やかな日々を迎える事が出来るの。

だけど、その望みは儘く消えてしまった。

「おはよう……」

「おはよう。びづいたの？ 元気、無いわね……ああ、遠藤さんが
まだ来ていないから？」

沈んだ声で挨拶をしたあたしに、先に来て他の子と楽しそうに話に話
をしていた一葉が不思議そうな顔をして声を掛けて來たけれども、
彼女は直ぐにその理由を見付けたのかそつ言つた。

「え？ 亜紀、まだ来ていないの？」

いつもなら、あたしよりも先に登校している亜紀が居るはずなの
……

「まあ、部員のみんなに多少の迷惑を掛けちゃつた『あの後』の次の日だし、来れ無くなつても仕方ないわよね」

「……」

一葉は、亜紀が昨日の部活で逃げ出した事を言つてゐるのだと判つた。でも、あたしは返す言葉が出て来ない。

彼女を捜す為に、一年の女子の殆どが練習を中断させられた。中々見付からぬ亜紀を、もう先に帰つたのだと決め付けて、時間の無駄だと迷惑がつていた子達も何人か居たもの。

まだ登校して来ない亜紀の心中を察したあたしは、急に胸に大きな石を詰まらせたみたいに塞がつて、苦しくなつた。

何も言えなくなつたあたしは、思わず一葉達から視線を逸らせて俯いてしまう。

「どうしたの？ 何かあったの？ 元気だけじゃなくて、顔色も良くないわよ」

「う……ううん。何でも……昨夜よく眠れなかつたから……」

曖昧な笑みを無理矢理浮かべる。

いつもと違うあたしを見て、一葉が心配してくれる。彼女の心配りは嬉しいけれども、亜紀を追い詰めてしまったのは、余計なお節介をしてしまつたあたしだ。あたしがあんな事を遣らなければ、彼女に辛い想いをさせたりはしなかつたのに……だけど、あのままで

あたしがクジに『余計な操作』を加えなければ、あたしは慶とペアになつて田村くんから……

本当は、あの時結果がどちらに傾いたとしても、恥ずかしくて嫌だつたんだもの。

「あのや、あたしは別のグループだつたから詳しきは知らないんだけど、遠藤さんがアキバケイとペアつたのを、田村のアホが冷やかしたからあんな事になつちゃつたんだよね？」

「う、うん……」

思ひ出しちゃも無い昨日の出来事を彼女の方から切り出されて、居心地が悪くなつたあたしは直ぐにこの場から逃げ出そうかと真剣に考えてしまつた。

「全く。昨日の組み合わせは昨日だけの限定だつたの。あの馬鹿つたら……本つ当に子供なんだから」

「え？」

『限……定』？

一葉の言葉に驚いたあたしは、思わず顔を上げて彼女を見詰めます。

「『期間中、グループ内の全員とペアになるよう一巡する』って藤野先生が言つていたわよ。まあ、あの時はグループ分け直後でみんながざわざわしていたから、藤野先生の声が届いていなかつたグループもあつたみたいだけね。だから、別に一年どうしでペアにな

るうが、三年ぶりでペアにならうが、男女ペアの練習期間が続く限り関係無かつたのに……」

「そんな……」

「じゃあ、あたしが遺つた事は……」

「あれ？ 香代は藤野先生の説明が聞こえなかつたの？」

「うん」

「ああそりなんだ。じゃああの田村にも聞こえていなかつたって可能性が高いわね。だけど一年生にもなつて、田村つてば考えるコトが幼稚なのよ。冷やかされた遠藤さんにも同情しちゃうし、アキバケイだつて迷惑な話よね。無理矢理シングルス対ダブルスをさせられちゃつてさ。外野は結構盛り上がりがつちやつて楽しかつたらしいけど、アキバケイ本人は堪らないわよ。帰り、ボロボロだつたわよ。今日はまだ来ていないみたいだけど……」

一葉はそう言つて、ぐるっと教室内を見廻して慶の姿を捜した。

「変ね。いつもならもうつべつべて來ていろの」

慶は来ないだろつと思つた。だつて、今日はお母さんの手術がある大切な日なんだもの。

そう思つていたあたしは、聞き覚えのある男子の声に驚いて、声が聞こえた教室の入り口へと振り返つた。

「おー、はよッス！ なんだ？ オマ、昨日のゲームが応えた

のか？「元気がねーぞ」

教室で先に席に着いていた門田くんが、慶の姿を見付けて声を掛けると、慶はくたびれた笑顔を浮かべた。

「はあ？ なんなの？ 誰かさんと同じじやない？」

一葉があたしと同じだと黙つて、苦笑する。

慶が学校に来た事自体、あたしにとつては意外だった。てっきり慶はお母さんの手術に付き合つて、学校を休む心算だらうと思つていたのに。だけど……ああ、確か午後からの手術だとお母さんが言つていたから、午前中は授業に出る事にしたのかな。

慶が学校に来た事に納得出来ても、あたしの心は少しも晴れたりはしなかつた。だつて、亜紀がまだ遣つて来ないんだもの。

昨日の混合ペアの事で、一葉達が亜紀を可哀想だと同情していても、彼女はきっと今日は来ないと思つた。彼女を傷付けたのは田村くんじゃなくて、本当はあたしが傷付けてしまつたのだから。

「こんな時、あたしはどうすれば……どうしたら良いの？」

あの時一緒に居た姫香は別のクラス。今から彼女の居る一組に行つたとしても、話している時間がもう無いし、他のクラスの事だから、一時限目から教室移動して会えない可能性だつてある。

それに、姫香ともしも話せたとしても……それでなくても以前から、姫香はあたしの態度に苛々していたのは判つてゐる。だから昨日あんなにハッキリとあたしに注意と言つた……警告をしてくれたの

に。それが原因で、亜紀を傷付けてしまったんだもの。今更どうじょうだなんて、相談なんか出来やしないわ。

> 33771 — 316 <

姫香と言つ頼れる相談相手を失つてしまつたと思い込んだあたしは、自分でどうする事も出来ないくらいの堪らない不安感を抱え込んでしまつた。

あたしの嫌な予感は的中して、始業時間が来ても亜紀は教室へ姿を見せなかつたのだ。

彼女の事をホームルームの時に、先生から『遠藤さんはお休みです』と言つ短い言葉で片付けられてしまい、堪らない不安感は益々現実のものとなつてあたしの心を締め付ける。

心配になつたあたしは、職員室まで足を運んでクラス担任の石田先生を訪ねて行くと、亜紀は昨夜遅く、強い腹痛を訴えて救急病院へ行つたのだと聞かされた。

「遠藤さんね、一度さつときお母さんが病院から連絡があつたそりよ。どうやら急性虫垂炎になつたらしいわ」

教室に居た先生の代わりに、亜紀のお母さんからの連絡を誰かが受けていたらしい。きちんと片付けられている先生のデスクマットの上には、風で飛ばされない様に伝言メモがテープで貼り付けられていた。

「先生、虫垂炎つて？」

「ああ、盲腸の事よ」

「 もう……ひょいへ、」

聞き慣れない病名を耳にして、思わずあたしは眉を顰めて小首を傾げる。

「右手で自分の右側の骨盤に手を当てるんだなさー」

「 いりへ……ですか?」

あたしはわけが判らないまま、先生の言われた通りに右手で自分の腰に手を当てる。

「 あら。それで指を伸ばした状態。指先の辺りが『盲腸』になるの。その部分が炎症を起こして痛むのよ。薬で痛みを散らしたり、炎症を抑えたりも出来るけど、遠藤さんの場合はどうやら手術になるらしいわ。これからじ両親が主治医の先生と今後の予定を相談するのですつて。予定が判つたら先生に連絡してくれるそうだから」

「 ……はい」

伝言のメモを手にした先生からそう言われて、あたしは仕方なく頷いた。

こつもの元氣を失くしてしまったあたしを見て、先生は氣の毒だと思ったのか、ふと表情を和らげて言葉を続ける。

「仲良しの遠藤さんが入院してしまって貴方も心配でしちゃうナビ、

もう少し待つて居て。『両親から連絡があつたら、貴方に教えてあげるから』

『仲良しの……』先生が口にした言葉が頭の中で何度も響く。

こんな状態になってしまったけれども、それでもあたしにとつて亜紀はクラスメイトであり、部活の仲間であり、そして……大切な友達。親友なの。あたしの中の亜紀の立ち位置は全く変わつてはいなければ、亜紀は……

きっと、亜紀はあたしの事をもう友達だなんて思つてはくれてはいないんだろうな。それどころか酷い子だって……きっと思つているんだろうな。

あたしは切なくなつて、心の中で何度も亜紀に『『ごめんね』と謝つた。けれども、自分の心の中で何度も彼女に謝つてみても、この想いは亜紀へは届いてはくれないのだ。

「先生、盲腸って何が原因なの？」

「盲腸の原因はまだよく判つていらないらしいのだけど、食べ過ぎと言つた生活環境やウイルスから発症する事もあるし、時には心因性などからも来るわよ」

「……」

『心因性』……心が原因になる病気……

やつぱり、あたしが原因なのだわ。

昨夜、どんな顔で亜紀と会えれば良いのかとすこし悩んでいたのに、もうつらうなつたらそんな次元で悩んでいる場合じやなくなつちゃつてしまつた。

どうしよう……あたしのせいだ、亜紀が病気になつて学校を休んじゃつたんだ。

いつも二口二口笑っていた亜紀から、あたしが彼女の笑顔を奪つたのだと思うと、居ても経つても居られない。授業だつてちつとも身に入らなくて、ただ悪戯に時間が過ぎていくばかりだつた。時間が経つにつれて彼女への罪の意識から、あたしはどんどん息苦しさを覚え始める。

「ねえ、香代。遠藤さん、何があつたの？」

そう言つてクラスの女子の何人かがあたしに訊ねて來たけれど、あたしにはその理由が判ついていても、答える事が出来なくて『判らない』としか言えなかつた。

誰かに相談したい……

そう思いながらふと斜め前を見へ視線を移すと、学校指定のポロシャツを着た慶の白くて大きな背中が眼に留つた。

丁度、前から配られて來たプリントを後ろの門田くんに渡そうとして慶が振り返り、偶然だけどあたしとしつかり眼が合つてしまい、そしてあるつゝとか慶はあたしに向かつて愛想良く微笑んだのだ。

「……」

あたしはドキリとして瞬間的に慶の笑顔へ引き寄せられてしまつたけれども、すぐに我に返つた。

慌ててそっぽを向いて、慶の視線から逃げ出す。

なに? ピッタリの事なの?

慶は今日、お母さんの手術がある。あたしは自分のお母さんから大変な病気だと聞いていたのだけれど、今の慶の様子からは少しも不安や苛立ちなんか感じ取る事が出来なかつた。

でも、どうしてそんな顔が出来るの? 今まであたしは慶に対して随分な事をしちやつたのに。どうしてこんな時に、そんな優しい表情を浮かべられるの?

お願いだから……優しくしないでよ……

あたしには、慶の優しさを受け留められる資格なんて……無いのよ。

あたしは心の中で泣きそうになつた。ううん、もしかしたらもううつぐに泣き出しているのかも知れない……何故だかそう思った。

慶の笑顔が堪らなくて辛いと感じてしまった筈なのに……

不思議とそれからは、薄いベールを剥がして行くみたいに重苦しい胸の痞つかえが取れて、どんどん軽くなつて行つた。どうしてそうな

つたのかは自分でもよく判らないし、説明出来ないのだけれども…
：少なくとも、慶の顔を見た時に、あたしの心の中で何かが癒され
たみたいな気がする。

前向きに考えられるようになったあたしは、とにかく今日の授業
が終わったら亜紀の居る病院を訪ねてみようと思った。たとえ亜紀
に嫌われていても、一言でも良いうから謝りせて貰おうと心に誓つて。

心の整理が付いた気がして、少しだけ余裕が出来たあたしは授業
に集中出来るようにまで回復した。

ところが、運命の女神様は慶の様に優しくはしてくれなかつたみ
たい。

その日の三時限目になる前の休憩時間。理科の実験教室へと移動
していた時に事件が起こった。

「わ？」

始業五分前にクラスでひと塊りになつて教室移動をしていた時、後から付いて来ていた男子生徒の何かに驚いた声が聞こえた瞬間、筆記用具が床へとばら撒かれる大きな音がした。同時に傍に居たらしい女子の短い悲鳴と、男子の怒鳴り声が被る。

「何すんだよ！ ちゃんと前を向いてろアキバ系！」

「……」

何？ 筆記用具を落としたのって……慶なの？

慶の名前を耳にしたあたしの心臓がドキリと嫌な音を立てた。驚いて振り返ると、数人居るクラスメイトの向こう側に、通路の真ん中で慶が尻餅を着いている姿がチラリと見えた。

男子生徒の小競り合いが何やら険悪になりそうな空気を読み取つて、傍に居た誰もが巻き込まれないよう慶達数人をぐるりと遠巻きに囲み、慶に絡んでいる数人の男子達を、口々に誰だと尋ねてざわめいた。

「オイ！ 何言つてるー！ そっちがぶつかって来たんじゃねーかよ！」

「謝れ！」

慶といつも一緒に居る田村くんと門田くんが、ぶつかった相手の男子を睨み付け、喧嘩腰で言い返した。

「ンだとワケ！ ふざけんな！ 因縁付けんのかよ。上等だ」

「言い掛かりだ！」

相手の男子も、「三人の友達が居て、一人の気迫に負けまいと、もの凄い剣幕で食つて掛る。

「大体、優勝したワケでも無いのに、ちょっとセン公からチヤホヤされたくらいで天狗になつてンじゃねーよ。クソうぜーアキバ系の癖に！」

「！」

彼等から慶の名前を呼ばれて、お互に知っている奴かと眼で合図を送つているけれど、慶も、慶を庇ってくれている田村くんや門田くんも、彼等には全く見覚えが無いらしく首を横に振つている。

慶はわざと他人にぶつかつて喧嘩を売るような子じゃ無いし、万が一自分からぶつかつてしまつても、咄嗟に自分から謝る筈だわ。それに口が悪くてガラも悪そうに見える田村くんや門田くんだって、自分から騒ぎの種を蒔くような事はしない。そもそも、テニス部員なのだから喧嘩や不祥事が学校側に通報されれば、その部は廃部になつてしまつるもの。

「いやーね。アイツ、二組の不良達じやん」

「シッ！ 聞かれたらマズイって」

「でもさあ、あの男子、アキバ系ってあだ名でしょ？」

「あれ、本名じゃなかつたつけ？」

「本名？ 变な名前。でも見た目イケてない？」

「知らないの？ 彼、今年のバレンタインに女子から一杯貰つたチヨンフを全部捨てちゃつたんだって」

「うわ、勿体無～い。馬鹿じゃない？ どんだけナルシなのよ」

丁度通り掛かった別のクラスの女子数人が、ひそひそと囁いているのを偶然耳にした。そして彼女達の遣り取りを聞いて、クスクスと小さく含み笑いをする生徒達。

『慶は人から貰つたものを意味も無く捨てたりするような人じゃないわ。貰つた数の多さに困つてしまつたから、職員室に持つて行つただけよ。捨てたのじゃないわ。人から聞いた噂を勝手に信じて決め付けないで！』 そう言いだしそうになつたあたしは、ぐつと奥歯を噛み締めた。どうして急に慶を庇^{かば}おうと思ったのかは判らない。けれども、本当の事を知らない彼女達が噂話で勝手に慶の事を誤解しているのを見るのが、とても不愉快で腹立たしく思えた。

彼女達の心無いひそひそ話の声は意外と大きかつたらしく、慶本人の耳にも入つてしまつたようだつた。

俯いたまま慶はゆつくりと力無く立ち上がると、文句を言う男子へも、勝手に噂話をして盛り上がつてゐる女子へも何の抗議もせずに、のろのろとした鈍い動作で廊下にばら撒いてしまつた筆記用具

や教科書を拾い始める。

「お……お？ アキバケイ？」

「……」

リアクションが全く無い慶の反応に、傍に居た田村くんや門田くん達も何かおかしいと気付いているみたい。もちろん、あたしはいつも慶じゃないわととっくに気付いている。それは、このフロアの中でただ一人。あたしだけが、今日と言う日が慶にとっても大切な一日だつて知つていてるから。

慶のお母さんの手術は、そんなに大袈裟に考えなくても大丈夫だし、今の医学技術は昔と比べると格段に上がって来ているから心配する事はないわと聞いていたけれども、お母さんが入院する事自体、慶にとっては初めてなんだものね。やっぱり不安で心配なのよ。

そう思つて慶を見ていたら、もう一度慶と視線が合つてしまつた。

「……」

慶は何かを思い詰めているよつな……そんな表情をあたしに見られて恥ずかしかったのか、わざ無くゆっくりと視線をあたしから逸らせる。

「お？ ぶつかつておいてシカトするなよー。」

「喧嘩売つてんのかよー。」

「お前には言つてない！ 関係ねーだろが！ 邪魔すんなー。」

慶とぶつかった男子は、慶に謝りせよと剥きになり顔を真っ赤にして怒り出すけれども、慶は彼とは視線を合わせようとしなかつた。

代わって田村くんが彼の挑発に乗せられて、声を荒らげる。

熱くなつて今にも大乱闘になりそうな……一触即発の空氣なのに、無関心を装っている慶の周囲だけ特別な温度差を感じられた。

「おい田村、もう止めようや……」

やつ門田くんが言い出した途端に、慶は拾つた筆記用具を再び足元に落としてしまつた。誰もが慶の行動を訝り、どうしたのだろうかと慶を窺い注目する。

「……」

今度は落した筆記用具を拾おうともせずに、慶は身を翻したかと思つと、急にその場から逃げ出した。

「あ、おい、アキバ！」

門田くんが呼び戻そうと声を掛けるのに、慶はその声を完全振り切るようになつて一目散に廊下を走つた。

「アリーチー！ 廊下を走るなー！」

廊下を走る足音を聞き付けて、余所の教室に居た先生が顔だけ出して大声で注意する。

その場に居た誰もが、慶の突然の行動に驚いて呆気に取られて彼の背中を見送る。一番肩透かしを食らったのは、慶とぶつかって絡んで来た連中だった。納まりが着かなくなつて、それぞれが捨てゼリフを吐いて引き上げて行く。

いきり立つて居た田村くんはまだ遣り足らなかつたみたいで、彼等に咬み付こうとしていたけれども、それを門田くんが必死になつて背後から羽交い締めにして取り押えていた。

予測出来なかつた慶の今の行動から、それよりも少し前にあたしに向けた微笑みの理由がなんとなく判つたような気がした。あの時、あたしはどうしようも無いくらい不安だつた。誰かに話を聞いて欲しいと思つてあれこれと悩んでいたら、偶然慶と眼が合つてしまい微笑まれてしまつたけれども、たつたそれだけで何かが通じ合えた気がした。

今のおたしが落ち着いて居られるのは慶が微笑んでくれたからなのだと思う。そして、あの時微笑んでくれた慶も、自分自身の不安に押し潰されそうになつていたのかも知れないわと思つた。

三時限目の授業が始まつても、慶は教室へは戻つては来なかつた。

今まで真面目一本だつた慶が突然授業を放棄した事で、授業が始まつた直後にクラスは騒然としてしまう。

「芳賀、秋庭は戻つて來た?」

「いいえ。まだです」

理科の実験中に、職員室から担任の石田先生が遣つて来て、委員長の芳賀くんに声を掛けた。慶の失踪は早くも先生の耳へと届いていたらしく、先生の後ろには学年主任の先生や教頭先生も控えていて、何だか物々しい空気を感じてしまう。

亜紀の時とは違つて大袈裟だなと思ったのはそこまでだつた。きっと、校内のどこかに隠れているのじゃないのかしらと思っていた。慶の気持ちが落ち着けば、また教室へ戻つて来れば良いのよ。と、軽くあたしは考えていたのだけど……先生方の浮かない表情を見ると、どうやらそうじや無かつたみたい。

教頭先生の姿を見た数人の生徒が更に騒ぎ出した為、石田先生は慌てて理科の河野先生から時間を貰つて、授業は急きょホームルームになつた。

「はい、みんな静かに!」

石田先生は生徒が注目するように数回大きく手を叩くと、蜂の巣を叩いたみたいに騒々しかった実験室は、驚くべしに……と静まり返った。

「知っている人も居ると思うけど、クラスの秋庭さんが早退しました」

「え？」

想いも寄らない先生の言葉に、クラス全員は一瞬意表を衝かれて驚いた。

『早退』って……慶が？　あの状況で？

何度思い返しても、慶が早退をするよう予定を立てていたらしいと言つ素振りは一切無かった。一組の不良らしい男子に絡まれて、心中にも無い噂話をされてしまったから慶は逃げ出したのだと思つていたのに。

あたしが不思議に思つていたら、他の生徒も同じだつたみたい。特に、すぐ傍に居た田村くんや門田くんは、一人で顔を見合させて『納得出来ない』と言わんばかりだもの。

「センセ、アキバケイは早退するなんて何も言つてなかつたです」

右手を中途半端に挙げて、田村くんが反論した。隣に座つている門田くんも、同意だと大きく頷いて見せる。

「『家族からの呼び出しがあつたそうです。ですから、みんなは授業に集中するように』

田村くんの意見に、先生は少し怯んだけれども、すぐに強い口調でそう答えた。

だけど、あたしから見れば……

「うん、もう止もう。きっとみんなだつて先生が、何らかの事情があつて事実を捻じ曲げなきゃいけなかつたのだと思つてるわ。

先生方が出て来た事で、あたしは慶が学校から逃げ出してしまつたのだと知つた。逃げ出した原因が嫌がらせかどうかは別として、他のクラスの男子に意地悪されたくらいで逃げ出すだなんて……と、今までのあたしなら慶に対して見下した想いを抱いてしまうかも知れない。けれども、今は全く違つている。このクラスの中であたしあき慶の事情を　お母さんが……誰よりも大切な人が手術するのに。

あたしはどうすれば良い?

何をすれば良いの?

だけど、学校から居なくなつてしまつた慶に、あたしがしてあげられることなんて無いんだもの。

石田先生が理科の先生と少しだけ言葉を交わすと、先生は待つて居た教頭先生方と一緒に引き揚げて授業が再開された。

「香代?　どうしたの?」

「え？」

授業が始まって暫く経つと、あたしは実験班のメンバーで隣に座っていた輝から声を掛けられた。

「気分でも悪いの？ 頬、蒼いよ？」

「う……ううん、大丈夫」

「無理しないで保健室に行けば？」

「ありがと。でも、本当に大丈夫だから」

そう言つて愛想笑いを浮かべると輝に『心配させないでゴメンね』と小声で謝る。

それでも、輝はまだ心配そうに小首を傾げて、あたしの様子をちらちらと窺ってくれている。

「ダイジョウブだから」

彼女と視線が合い、あたしは思わず小声でそう言って実験机の下で軽く手を振った。自分では自覚していなかつたけれど、彼女の態度から、自分がどれだけ具合が悪そうに見えているのかが判つた。そして彼女の気持ちが嬉しくて……反面、あたしには人から心配して貰えるような、そんな資格なんて無いのだわと思えて、本当に申し訳ない気持ちで一杯になる。

駄目だあ……

あたしは輝達に気付かれないように、小さく溜め息を吐いてしつと肩を落とす。

慶の事を心配してあげられる余裕なんて、今のあたしには無い筈なのに……なのに、どうしてこんなに気になってしまうの？

暫くの間あれこれと悩んでいたけれども、独りで悩んでこるよりも、事の始終を知っている姫香を頼つて相談してみようと思った。

授業の終了を告げるチャイムが校内に響き渡る。

「起立　　！　礼！」

クラスのみんなが一斉に席を立つ。

慶が居ない三時限目の理科の授業が終わった直後、ざわざわと騒がしくなった教室から出て行こうとしたあたしは、理科の山崎先生から呼び止められて、担任の石田先生が居る職員室へ行くよう指示された。

授業中、ずっと慶の事を考えていて上の授業を受けているから、ついつい注意されるものだと思つて覚悟していたのに、一体何の用かしら？

「失礼します」

入り口で一礼すると、教室よりも広い職員室へと踏み込んだあたしは、五、六人の先生方と話をしている石田先生を見付けた。足早に近寄ると、先生もあたしに気が付いてくれる。

「ちょっと失礼します。土橋さん、良い？」

「はい……？」

先生は他の先生方との話の輪から抜けると、職員室の横にあるカウンセリングルームへ移動するようにあたしを促した。

カウンセリングルームへは、今まで入った事がなかつたけれども、職員室とは打つて変わり、狭い部屋の中央に生徒用の机がぽつんと置いてある、割りと殺風景な部屋だと思つた。しかも、ここへは不登校になつた生徒や生活指導を受ける生徒が案内される部屋だと判つていたせいか、中へ一歩踏み出した瞬間に、室内の重息苦しい空気が纏わり付いて来る気がする。

まるでドラマで見た刑事物の取調室みたいで、あたしは良い気分にはなれなかつた。

「先生の都合で来て貰つたのだけど、気分でも悪いの？」

「いえ……」

先生も輝と同じ事を言つてゐる……気分はそんなに悪いとは思わないのだけれども、あれこれと悩み事を抱え過ぎちゃつていいせいかしら?

心配してくれる石田先生へ、あたしは少し表情を緩めて笑顔を作つた。だけど、今の先生の浮かない表情の方が、具合が悪そうに見えるのだけれど……どうしたの?

「さう? ジャあ少し話をわせて貰うけど、構わないかしら?」

「はい」

「クラスの子達にはああ言つたけど、あの授業が始まる前に秋庭さんが学校から出て行つてしまつたらしいの」

「……はい」

あたしは俯いて小さく頷いた。

やつぱり、慶は学校から出て行つちやつたのだわ。些細な事で絡からまれてしまつて……

いつものあたしなら、情けない慶の行動を批判したでしようけれども、今は全く違つていた。

きっとあの時の慶は大きく膨らみ過ぎた風船みたいになつていたのよ。余裕が無くて、我慢出来なかつたのだと思つた。

そして、慶が学校から逃げ出した事を口外せずに、様子を見に来

ていた先生方の言動に、何か引っ掛かりを覚えた。

「他の子に事情を聞こうかと思ったのだけど、先生、少し前に秋庭くんのお母さんから、日は未定だけれど入院する事になりそうだと連絡を貰っていたの。土橋さん、知っていた？」

「それで私を呼び出したのですか？」

「秋庭さんの事で、何か聞いていない？」

「……」

「さつき、実験室へ行つたのはね、実は校門から秋庭くんが走つて出て行つたのを、偶然先生が見てしまつたの。丁度休憩時間だつたから、何か忘れ物でも取りに家へ帰つたのかなと思っていたら、すぐによく学校へ一般の人からの通報が入つたらしいの」

押し黙つてしまつたあたしの心の中を探つてゐる様に、先生は真っ直ぐにあたしの眼を見てゆっくりと話掛ける。

「『通報』つて……どんな内容なのですか？」

その言葉に良くな無い響きを感じ取つたあたしは、浮かない顔で先生を見詰めた。

「短時間の間に数件の通報が入つたの。一つは学校を抜け出した生徒が居ると言う連絡が二件。これは先生が確認していいるから恐らく秋庭さんの事だと思うの。先生、ちゃんと理科室まで秋庭さんの事を確認しに行つたでしょ？」

「はい」

「それと前後して、中学生らしい生徒が万引きをしたと書つてお店からの通報も入っていたの」

「そんな！」

「ええ。これは不確かな情報で、どこの学校の生徒かも判らないらしいの。秋庭さんなら制服のままだから、人違いだと思うのだけど、一応ね……」

「先生疑つて……」

「形式だけよ。秋庭さんじやないって事は、先生も信じているわ。でも念の為なの。土橋さん、秋庭さんが学校から出て行つた理由……何か知つていなかしら？　何か心当たりになるような事は無い？」

心当たりなら、すぐに頭に浮かんだ。

慶は普段、口に出しては言わないけれど、本当は『アキバケイ』と呼ばれるのが好きじゃない。その事はずつと前に……小学生の頃、あたしだけに聞かせてくれた内緒話で教えてくれた事がある。

* *

『本当は、自分の名前が好きじゃないんだ』

『どうして？ 前に、慶の名前はお父さんが付けてくれたんだって
言つていたじゃない』

前に聞いた時は、自分の名前をお父さんが付けてくれたのだと誇らしく胸を張つて自慢していたのに、今は反対の事を言つ慶が不思議でならなかつた。

『「慶」って漢字が難しくて書けないから…』

『違うよ。ちゃんと書けるよ』

もう言つた後小声で『不格好だけど……』と呟いた。

『難しい字だものね』

『違つよ。そんなのじゃないんだ』

『じゃあ、なによ？』

『だつてみんなが……「アキバ系」ってみんなが呼ぶんだ』

『「アキバ系」？ 慶の苗字は「あきこわ」でしょう？』

『うそ……でも、みんなそう呼ぶんだ』

間違えた呼び方をされたら訂正して教えれば良いのに、慶はそれをしなかつた。だから友達からは間違えられたままになってしまつた。

* *

あの頃は『アキバ系』と言つて言葉が一つの文化を示す言葉だなんて、慶もあたしも知らなかつた。慶が名前でからかわれるようになつてから、あたし達はその言葉の意味を知つたのだから。

呼ばれ方が気に入らなければ、そう言えれば良いでしょうに……そう思つたけれども、慶は今更な気がしたのか、結局自分の呼び名をそのままにしてしまつた。

物心付いた頃から、お父さん子だつた慶。けれど慶のお父さんが単身赴任で行つてしまつと、慶は自分のお父さんの事を全く話さなくなつてしまい、あたしも亜紀と姫香と出逢つてから、慶との距離を置いてしまつた。

今、慶のお母さんの入院で慶のお父さんが帰つて来ているけれども、長い間離れて暮らしていたのだから、もしかしたらお父さんと何かあつたのかも知れない。

あたしは今日の午後から行われるお母さんの手術があると言ひ事を伝えた後、教室移動の時に慶を中心にして起こった生徒同士の小競り合いで名前を皮肉られた事を話した。

急に慶の様子がおかしくなったのはその頃だ。

「そう。秋庭さんのお母さん、今日が手術の日だったの」

「昨日、私の母が言ひていました。なんでも急に決まつたらしいそうです」

「まあ、そりだつたの。それは秋庭さん心配でしきう」

慶の不安と焦りを察したのか、先生はそれ以上聞かなかつた。

自分の大切なお母さんが手術をすると言ひ口に、慶は病院ではなく学校へ来ていた。あたしは事前にお母さんから慶のお母さんが手術する日だと聞いていたけれども、今朝の慶の様子は普段と何にも変わつていなかつた……と言うか、慶が何を考えているのかあたしには読めなかつた。平氣そうで居られたのは、午後から早退するからだと思つていた。

でも、実際に慶は早退する準備はしていなかつたし、あのまま一組の男子に絡まれたりしなければ、今日一日を平穩に過ごせてしまいそうな雰囲気だつた……この矛盾は何なの?

慶のお父さんが帰つて来ても、慶は以前と何ら変わらなかつた。昔は話をすればお父さんとの自慢話だったのに……もしかしたらお父さんと上手く行つていなかつたの？

「失礼しました」

廊下へ出ると、生活指導の先生や体育の先生数人が携帯電話を片手に集まっていた。

人を威圧しているような先生方の厳しい表情から、これから慶を連れ戻しに外出するのだろうなと思った。

「石川先生、お電話です」

「あ、はい」

あたしの後に続いてカウンセリングルームから出て来た石川先生が呼び止められた。先生が再び職員室へと引き返すと、間も無く廊下に集まっていた先生方も職員室へと呼び戻される。

あたしは教室へ戻るようになつて言っていたにも関わらず、この物々しい空気が気になつてしまい動くに動けなくなつてしまつた。立ち竦んだまま訝つていると、石川先生がドアから顔を出した。

「土橋さん、もう心配しなくて良いわよ」

「え？」

「今ね、秋庭さんのお姉さんから連絡があつたの。秋庭さん、見付かつてご家族の方に保護されたそうよ」

「そ、そうですか」

ほつと胸を撫で下ろすと、あたしは職員室の中にある大きな壁掛け時計へと視線を向ける。

慶が居なくなつてから、もう一時間が経過していた。

亜紀の事も、慶の事も……どちらも気になつて仕方が無い。だけど、今のあたしが優先して遣らなくてはいけない事を考えれば、慶には悪いけれどもあたしは亜紀を選ぶべきなのだと思う。だからこの日、あたしは自分の体調が優れないのを理由に放課後の部活を休んで、気になつていた亜紀のお見舞いへ行つて、一言でも良いから謝ろうと思つて予定を立てていた。

なのに、予定つて思う様には行かないものなのね。

放課後、帰宅しようと準備していたあたしは、石川先生に再び呼ばれて慶のカバンを持つて帰つて欲しいと頼まれてしまった。カバンを持つて帰るだけなら、亜紀のお見舞いへ行くのに十分時間があつたかもと思ったのに……

自分のカバンと慶のカバン。教科書とノートが入つている二人分だとかなり重くなる。クラスの女子の中で、あたしはどうやらかと言うと普段ラケットを振つている分、力持ちなのだけど、自宅まで一キロ弱の距離を、どうやって二人分持つて帰れば良いのかしらと悩んでいたら、クラスの男子から声を掛けられた。

「土橋、アキバケイのカバン、俺が自宅まで持つて行つて遣るよ」

「いいの? つて、田村くんが?」

ラッキーと思いつつ声の主を捜して振り向くと、教室の後ろの出口に田村くんが立っていた。

最初、クラスの男子の誰が言ったのか判らなかつたけれども、とにかく重労働を買つてくれた男子の出現をありがたく思つたのだけれど、田村くんイコール姫香の式が頭に焼き付いていたあたしは、素直に喜ぶ事が出来なかつた。

だつて、二人で帰つているのを誰かに見られて誤解されたくは無かつたし、第一、姫香に対しても悪いと思つた。誤解されないよう他の帰宅組の女子と一緒に帰れば良いかなとも思つたけれど、仲の良い子はみんなそれぞれ部活をしているし、帰宅組で普段仲良くしてくれる女子は帰る方向が逆だつた。それに、一緒に帰つてくれる女子を見付けたとしても、田村くんの性格から予想すると、今度は彼が一緒に帰つてくれないような気がするし……

あたしが返事に迷つてゐるのに気付いた田村くんは、少し表情を曇らせる。

「ああ、俺じやワルイ? 何か問題でもあんの?」

機嫌、損ねさせちやつた。『悪い』とか、そんな心算じやないんだけど……

「部活はどうするの?」

「カバン持つて行くだけだろ？　すぐに戻れば間に合ひつゝ

「でも……あ！」

今日は部活を休むからと、もう姫香へ言つておいたのだけれど、もう一度彼女へ一言伝えてから帰つた方が良いかしらと迷つてゐるが、田村くんからやや強引に慶のカバンを持たれてしまつた。

「具合、良くないんだろ？　早く帰つた方が良い」

「え……う、うん……」

「ほれ、帰るんだろ？　つて一か、早く行かないと俺が時間に間に合わなくなつて、藤野にゲンコツがまされる」

そう言つて、田村くんは情けなさそうに肩を竦めて苦笑いを浮かべた。

優しいのね……

自分が遅刻すれば顧問の先生から叱られるつて判つてゐるのに、それでも慶のカバンを届けてくれるだなんて。

けれども、その優しさはあたしへ向けられたものじゃなくて、学校を抜け出して居なくなつてしまつた慶への気遣いなのだわと思つた。

部活の時間を気にしているのか、それとも元々なのが判らなかつたけれど、田村くんはあたしよりも歩幅のコンパスも違えば歩く速度も違っていて、断然速い。

だからあたしは彼に遅れないようにと、時折小走りになりながら頑張つて彼について行こうと早歩きをした。

慶のカバンが重いだろうと気遣つてくれる優しさはあるのに、一緒に歩いて居る時あたしへの配慮つて、在りても良いのじや無いつて思うのだけれど……してはくれないのね。

でも、田村くんは姫香の彼氏だし。慶のカバンを持つてくれているだけでも助かるのだから、時間に追われている彼に、もつと歩くペースを落として欲しいだなんて贅沢なんか言えないわ。

あたしはさり気無く、面倒を買つて出てくれた田村くんに感謝しつつ、歩きながらちらりと彼の横顔を盗み見た。

彼と初めて会ったのは、去年の部活申請をどうしようかと悩みながら姫香達に半ば引き摺られるようにして、軟式テニス部のコートへ遣つて来た時だった。既に男子の中でも慶と同じくらい背が高くて大きかつたから、彼へのイメージはさして去年の頃と変わらない。背が高くて、色黒で、眉がちょっと太いから『我』と言うか『芯』が強そうに見える外見は、見た目そのまんま。男子の部員の仲間内では、氣に入らなければ直ぐに咬みつく彼の性格を『瞬間湯沸かし器』なんて言われている。

特に、公式試合になると何故か現れる幽霊部員の八神くんとペアを組まれて、嘘みたいな約束で予選敗退。小柄で時々女の子に間違えられてしまう八神くんと険悪になつて、男子部員が喧嘩を止めに入ると『う、救いようの無い繰り返しをしている。顧問の先生からの指示だそただれども、毎度々の事なので、もういい加減にペアを替えてあげれば良いのと思つてしまつほど気の毒な彼。

確かに部活では協調性がどうしても求められるから、ある程度の妥協は必要なのじゃないのかなとも思うけれども、ちゃんと『自分』を持つている田村くんは頼れそうで素敵だと思った。

去年の新人戦前に慶のリハビリと称して集まつた自主トレの時、あたしは田村くんに惹かれていた。彼から練習の誘いがあつた時、あたしは本当に嬉しかつたんだもの。

そんな彼の『カノジョ』になつた姫香つて……少しだけ妬いちゃうな。

一緒に歩いていて特に話題が無かつたものだから、それとなく姫香との仲を探つてみる。

「姫香と上手く行つてる?」

「は? なんで?」

意外な返事に返す言葉が無かつた。あたしはてっきり田村くんが姫香の彼氏なのだと思っていたのに……

「で、でも、付き合つてているんでしょう? 姫香と」

「別に『付き合っている』ってホドじやないよ。お互い片親だし、苦労してるから話易いだけだよ」

「そっ、ううかなあ……そんな風には見えないけど?」

あたしは自分の振った話題が、なんだかとつもなく良く無い前触れのように感じて、振ったりするのじやなかつたと内心大いに後悔してしまつた。

「あのなあ……俺、別に告つたワケでもないし、アイツに『付き合おう』だなんて言つた覚えもないぞ」

「だつて……」

傍田からほ十分付き合つているように見えるのよ、田村くんは気付いてないの?

あたしは、聞いてはいけない事を聞いてしまつた気がした。

「ンだよ。土橋の方!」そどーなんだよ? アキバのコト、諦めたのか?」

「あ、あたしは……あたしだつてそんな……慶に告白した覚えなんか……な、無いわよ!」

急に慶の事へと振られたために、心の準備が全く出来ていなかつたあたしは機嫌を損ねて言い返した。

少々剥きになつたあたしを見て、田村くんはふうんと鼻を鳴らした。

「意外だな。けど、あんまり高いトロはつか理想にしていると、そのうちアキバの方から見向きもされなくなつまつんじやね？」

「よ、余計なお世話……」

彼の言葉が癪に障つたあたしは、ぴたりと歩を止めると彼を見上げて睨み付けようとした。途端に、あたしは思わず息を飲む。

田村くんは姫香から、あたしと重紀の事を聞いている筈よ。わかつて、馬鹿な女の子だつて思つていてるに違いないわと思つたのに、見上げた彼の表情には、あたしを馬鹿にしたよつた素振りは一切無かつた。

それどころか、澄んだ瞳の奥に意志の強そつな眼力を感じてあたしは思わず後退つて、右足を一步後ろへ引いてしまつ。

つて言つた、心臓が……

「ちよ、ちよっと顔、近過ぎるわよ」

「やうやく。」

「そ、そりよ」

あたしは反射的に顔を背ける。

な……なこ？　このドキドキは。えーい、静まれ心臓つー！

口では偉そうな言い方をしたけれども、あたしの心臓はそりじゅ

なかつた。あたしが見上げた時、同時に田村くんも立ち止まり、あたしを見下ろすように浅く腰を折つて屈んだものだから、お互の息が顔に掛りそうになるくらい近付き過ぎたのだ。

「理想を持つのは良い事なんだろうけど……ジヨシの高いレベルの理想を聞いて凹む男って多いんだぜ。『俺はお呼びじゃねーんだな』つて」

「……」

お互の顔が近付き過ぎているのに、田村くんは少しも慌ててなんかいなかつた。それどころか諭すよつ穩やかに話しあげて来たりして、いつもの活発で強気な彼のイメージじゃない。

彼の言葉が意味深に取れてしまい、あたしの動悸はなかなか治まつてはくれない。もし田村くんに姫香と言う、本人非公認らしいけれども彼女が居なかつたと仮定したら、あたしは……

「……」

あたしは酸欠になつたみたいな感覚に襲われて、息苦しさから迷れようとも深く息を吸い込んだ。

駄目。今があたし……最低だわ。少しばかり優しくして貰つたからつて、田村くんがあたしの『彼氏』だったら……だなんて妄想したりして。なんて恥ずかしい事を考えたりしちゃうんだろう。

「お？ オイ、土橋？」

あたしは両頬に手を当てるとい、田村くんの眼の前で妄想を追い払おうとして乱暴に頭を振った。急に首を振つたりしたものだから、田村くんが驚いて思わず声を掛けた。

なに？ あたしつたら、少し優しくして貰つたからって、ときめいたりなんかしちゃって……なんて図々しいんだろ。

「ね、ね、今、俺の事カッコイイって思わなかつた？」

あたしの心の中を読んだのか、田村くんはにやつと笑つて表情を崩した。

「何が？」

「はああ？『何が？』つて……つて……チクシショ～、決まつたと思つたんだけどなー」

「何自分に酔つてゐの？？」

「……そつ思ひつ？」

「うそ」

彼はあたしの返事を聞いて、がつくりと頃垂れた。

慶も判り易いけれども、田村くんは慶以上に表情が出易くて判り易いタイプだわと思った。そしてさつきまでの微妙な態度は、あたしに精神的動搖を誘つてからかっていたのだと判つた瞬間、そんな事を思い付く彼が妙に幼く見えてしまい、あたしの彼へ対する関心はたちまち色褪せてしまった。

あたしはこれ以上慶の事で田村くんから余計なチョッカイを出されたくないで、本人へ話題を振る。

「あたし、てっきり田村くんか姫香のどちらかが告白したんだと思つてた」

「別に。告つてから付き合いで出す奴も居るけど……まあ、川村とはフツーで居られるつーか、気兼ねしなくて良いから」

「そうなんだ」

「馬が命つけて言つのかな？ なんか、思考回路が似てるんだよ」

一緒に居ても平氣なんだ……お互いに告白こそ無かつたらしいけれども、田村くんと姫香との関係は、どうやらあたしが心配する程、危なつかしい仲じゃ無さそうだわ。

あたしは改めて二人の仲の良さを彼の様子から読み取り、ホツとした。そして、彼の挑発に乗らなくて良かつたと思う。

「なあ、土橋。異性の友情と、同性の友情って違つて一の判る？」

「え？」

突然何を言い出すのかと思えば……」れどもの。男子つてどうしてそういう突拍子も脈絡も無い事を思い付いたりするのかしら。

あたしがそう思つても、姫香は田村くんと思考回路が似ているらしいし、あたしだけが特別に男の子を理解出来ていなかつたら?

「小さい頃つて、男とか女とかつて、それ程気にしなかつただろ?」

「う、うん」

「でもな、お互いに性別を意識し始めて、相手が異性だと一緒に居辛くなる時期が来るんだよ。自分とは違つて線引きしちまつて、同性の中だと居心地が良い様に思えて来る。一度、今の土橋みたいにな」

「な……」

「しかも男同士の友情つて長続きするモンだけど、女同士つて……男が絡むと案外呆氣なく終わつちまつものだからなー」

「そんな……」

本当は『そんな事無い』つて、ハッキリと言いたかつた。

だけど、田村くんの理論も一理あるのかも知れないわと思つてしまふのは、姫香と言う親友が田村くんの彼女じやなかつたら……とあたしが考えてしまつたからなのだと思つた。

姫香や田村くんが、どれだけあたしの恋愛の先輩になるのかは知

らないけれども、一人の『自然に振舞える』仲の良さとが見習える所は見習えれば良いし、あたしにだつてきつといつか素敵な人にめぐり逢えるって信じてるもの。

ただ、その日がいつ来るのかは判らないけれど……

「なあ、土橋は告られなきや駄目な方？ それとも自分から告る？」

「ううへ、『告る』だなんて……そんなの急に聞かれても困るわ」

軽いノリで訊かれてしまい、あたしは眼の前に居る田村くんと、あたしの脳内に浮かんだ慶の顔とが二重にダブつて見えて、うろたえてしまった。

こんな話を田村くんと……あたしが親友の姫香の彼氏だと思つている男の子としているだなんて……勘弁して欲しいわ。だけど意識していないこんな時でも、慶の顔が自然に浮かんで来るのはどうしてなのかな？

「別にそんな深刻に考え込まなくっちゃなんねーモンか？」

「わ……判らないわよ。その時が来ないと」

そんな気軽に考え方のものなかひり？

あたしの返答が気に入らなかつたのか、田村くんは軽くふうんと相槌を打つと、それつきり黙り込んでしまつた。

「ん、じゃコレ頼むわ」

「うん、助かつたわ。ありがとう」

あたしの家の前まで辿り着くと、田村くんはそう言って慶のカバンを差し出した。そしてあたしに背を向けようとして、急に立ち止まる。

「ああ、言い忘れていたけど……」

「なに?」

「さつきの事だけど……余計な事言つて悪かったよ。人を好きになるのも嫌いになるのも本人次第だしな。他人がそうだからって、何も自分も同じにしなくっちゃいけないなんて無いし、土橋は土橋で良いんだから」

「……?」

「ま、何でも自分のペースで頑張れって」ト。気にすんな。じゃあな

慶のカバンを届ける役目を果たした田村くんは、そう言って駆け足で学校へと戻つて行つた。

田村くんが慶のカバンを届ける役を買って出たのは、何かをあたしに伝えたかったのじゃないのかしら?

思わず振りな彼の態度が、姫香の言動と何気にも頭の中でリンクしてしまう。それって、あたしへ慶の事を応援してくれているって思つても良いのかしら?

小さくなる田村くんの背中を見送りながら、あたしは胸の中で、寄せては返す波のように不安と期待が交互に入り乱れていた。

お隣の慶の家には、まだ誰も帰っていないらしくて、人の気配が全くしていない。あたしは届けて貰った慶のカバンと自分のカバンを手にすると、一田家へと引っ込んだ。

本当は、このまま亜紀のお見舞いへ行こうと予定を立てていたのに……カバンのお陰で、予定が狂ってしまった。

あたしは自宅に持つて帰った慶のカバンを、恨めしく見詰めてしまった。

「……」

あたしつてば、何考えてるの？ 亜紀のお見舞いに行こうと思えば行けられるのに……

幾ら頼まれたからと言つても、慶の家はお隣なんだから、カバンを返すのなんていつだって出来ると思った。だけど気分が優れなかつたせいもあって、この時は慶の事を棚上げしてまで亜紀のお見舞いを優先する気にはなれなかつた。

どうしてなのかな？ 親友の亜紀が入院しているのに、何故か慶の事を放つておくのを躊躇ためらつてしまつ。

慶の帰りを待ちながら、あたしは机に向かって宿題に取り組んでみたけれど、田村くんとのやり取りが気になってしまい中々集中出来なかつた。

人を好きになる感情と恋愛感情とは、どうして区別されているの？ 告白しなくても『付き合つている事になる』だなんて……そんな事つてあるのかしら？

姫香と田村くんは、いつの間にかクラスや部内で公認のカップルになつていて。一人がどんな魔法を掛けたのか不思議だわ。廻りから認められれば良いのかな？ でも、告白無しでどうやって付き合つていると思われているの？

なんだか難しい方程式を解いているような気分だわ。「うん、難しくても方程式の答えは必ず出て来るもの。『恋愛』と言つ響きに憧れていらるけれども、その答えの導けない問題はとてもなく難しいように思える。

……止もう。

あたしはシャーペンを持ち直して、ぼんやりとしてしまつた自分の気持ちを引き締める。

独りであれこれと考えてみても、次から次へと湧き上がつて来る疑問が何一つ解決出来る術^{すべ}が見当たらないんだもの。

机の眼の前に置いているデジタル時計に視線を移したら、時刻はもう四時半を過ぎていた。

「の時間なら、部活が始まっている。今頃は準備体操を終えた後くらいか、声を掛けながら校庭をランニングしている頃だ。

田村くんは部活の時間に間に合ったかしら？

慶はもう病院に行つたのかな？

おばさん的手術はどうなつたのかしら？

亜紀の様子はどうかしら？

盲腸つて痛いのかなあ？

「は？ 駄目々。集中しなくっちゃ」

気を許してしまつと、すぐに気が掛かりな事が頭に次々と浮かんで来る。ここに姫香や亜紀が居てくれれば、悩み事の解決の糸口になるヒントをくれたり、解決出来なくても共感してくれたりするだけで、胸の痞えや不安な気持ちが軽くなるのに。独りだと悩み事を多く抱え込んでしまつて辛くなっちゃうわ。

数学の問題をほんの数問解いた所で、携帯から呼び出された。誰からだらうと思つて相手の番号を見てみると、美咲姉さんからだ。「もしもし？」

「あ、香代ちゃん?」

「美咲姉さん?」

「うん。今日は慶が迷惑を掛けちゃつたらしくて……『ごめんね』

「ううん、良いんです。迷惑なんてそんな……」

確かに心配はしているのだけれども、あたしは何もしていないもの。慶のカバンだって、田村くんが持つて来てくれたし。

ただ、亜紀の事も重なつちやつて自分的にちょっと辛くなつちやつたりしたけれども。

その電話から聞こえて来た声は、いつものハキハキした美咲姉さんの声じやなかつた。風邪をひいて喉を痛めたのか、それとも疲れているのかは判らなかつたけれども、声が掠れている。

「香代ちゃんは知つてゐると思つんだけど、実は今日がウチのお母さんの手術日だつたの。本当は慶も病院に行きたがつていたんだけど、お父さんが学校を休むのを許してくれなかつたらしくつてね。ホント、香代ちゃん達には悪いと思つてゐるわ」

「美咲姉さん、今どこのなの? 慶が見付かつたつて、学校で先生から聞いたけど……」

「今? 病院に居るわよ。慶はまだこつちへは来ていないけどね。それを手術が……あ、はい……」

話の途中、電話の向こうで誰かが美咲姉さんを呼んだみたいだつた。呼び出しを受けた美咲姉さんは、返事をしてちょっと『間』を空けると、急に慌てて話し掛けて来た。

「「ゴメン、また連絡するね」

「美咲姉さん……待つて！」

通話を一方的に切られてしまい、あたしの不安は大きくなつた。

慶がまだ病院に行つていないつて……どう言つ事？　学校へは慶を保護したつて連絡があつたつて先生が言つていたのに、慶は美咲姉さん達と一緒にそこへ行つている筈じやなかつたの？　慶が学校から出て行つてから随分時間が経つてゐるのに、どうして慶が病院に居ないのよ？

優しくて大好きな慶のお母さんの手術と聞いて、あたしは居ても経つても居られなかつた。出来る事なら、あたしもおばさんの近くに居させて欲しい。

美咲姉さんの方から掛けて来てくれたのに、あたしとの会話を中断しなくっちゃいけない大切な用事が……何かがあつたのだと思つた。

もう、どうしてこんな時に慶が居ないの？　自分のお母さんの手術なのに、一体何処へ行つているのよ？

中途半端な電話をされてしまい、あたしは一層落ち着きを失つてしまつた。

眼の前で開いている真っ白なノートへ、ぽとぽとと雫が落ちる。

「やだ……なんで涙が……」

堪らないほどの不安な想いは、とうとうあたしの心の限界を超えてしまったみたい。顔を顰しかめているわけでもないのに、眼の前がぼやけて、鼻の奥が熱くなる。

あたしは咄嗟に両手で顔を覆つた。

独りつて……こんなに辛いものだつたのかしら？

暫くすると、近所の犬が一斉に吠えて、遠くから聞き慣れないバイクの大きなエンジン音が近付いて来た。

何故だか判らないけれども、そのバイクが昨夜お隣に停めてあつた黒くて大きなバイクなのだと直感したあたしは、涙目を片手で乱暴に拭うと、部屋のガラス越しからお隣の方を見下ろした。

あたしの思った通り、そのバイクはお隣の門の前で一旦停まり、誰かを降ろした様子だった。そして一際大きくエンジン音をさせると、元来た道へと引き返して行つた。

慶が帰つて來たのだわ！

そう思つたあたしは、急いで自分の部屋を飛び出して、玄関先に置いてあつた慶のカバンを引っ手繩るように持つと、サンダルを履

くのももどかしくて転びそうになりながら、玄関のドアを開けた。

遠ざかって行くバイクの音に負けないように、慶が大きな声『あ
りがとう』とお礼を言って、手を振っている後ろ姿が眼に飛び込ん
で来る。

「慶！」

「あれ、香代？ 部活は？」

あたしの声に気が付いて振り返った慶の顔は、腹立たしくなるく
らい爽やかな笑顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4764i/>

あたしの中の ア・イ・ツ

2011年11月20日14時03分発行